鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（86）

主要地方道鹿児島加世田線改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

白糸原（しらいとばる）遺跡

（日置郡金峰町）

2005年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

丹塗りの施された土器

青磁（双魚文）

序　文

白糸原遺跡は，日置郡金峰町に所在し，主要地方道鹿児島・加世田線の道路改良工事に伴い，平成6年度から8年度にかけて4次にわたって調査を行いました。

本遺跡は，古墳時代の集落と中世の墓地を中心とした遺跡です。発掘調査は道路部分だけではありましたが，全部で19基の古墳時代の竪穴住居跡が見つかりました。また，中世の土壙墓が24基見つかり，九州本島では2例目となる素材としての夜光貝が出土しました。海外との交流を示す大陸（中国・朝鮮）製の陶磁器も見つかっております。これらは，地域の歴史を考えるうえで重要な資料となることでしょう。

本報告書が十分に活用され，地域の歴史を解明する一助となることを期待しています。

最後になりましたが，調査にご協力をいただいた県土木部をはじめ，金峰町の関係部局，そして発掘調査に従事された地域の方々に対し，厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　木　原　俊　孝

報告書抄録

ふりがな	しらいとばるいせき
書名	白糸原遺跡
副書名	主要地方道鹿児島加世田線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	86
編著者名	寺原徹
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1
発行年月日	平成17年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
白糸原遺跡 (しろいとばるいせき)	鹿児島県 (かごしまけん) 日置郡 (ひおきぐん) 金峰町 (きんぽうちょう) 宮崎 (みやざき)	46368	35-111	31° 26′	130° 20′	1994.10.03 ～12.16 1995.02.20 ～03.15 1995.05.21 ～10.27 1996.08.05 ～10.08	5,200㎡	県道改良事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白糸原遺跡	散布地	縄文			中心となる時代は古墳と中世
		草創期	落とし穴1基		
		早期	集石2基	前平式土器，石坂式土器 下剥峯式土器，桑ノ丸Ⅲ類 楕円・山形押型文土器	
		前期		曽畑式土器	
	集落跡	古墳	竪穴住居跡19基	成川式土器，U字形鍬・鋤先	
	墓地	中世	土壙墓24基 掘立柱建物跡3棟分	青磁，白磁，陶器，夜光貝	

第１図　遺跡位置図（１：50,000）

例　　言

1　本報告書は，平成6年度から平成8年度にかけて鹿児島県教育委員会が実施した主要地方道鹿児島加世田線改良工事に伴う白糸原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県日置郡金峰町宮崎字白糸原に所在する。

3　発掘調査は，鹿児島県土木部道路建設課（伊集院土木事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査の任にあたった。

4　発掘調査事業は，平成6年度から平成8年度にかけて4次にわたって行い，報告書作成事業は平成16年度に実施した。

5　遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・図版の番号は一致する。

6　本書に掲載した遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に掲示してある。

7　本書に用いたレベル数値は，全て海抜高である。

8　現地調査に関する実測及び写真撮影は主として，井ノ上秀文・大久保浩二（平成6年度・1次），倉元良文・中原一成（平成6年度・2次），青崎和憲・湯之前尚（平成7年度・3次），栗林文夫・有馬孝一（平成8年度・4次）が行った。

9　整理作業に関する遺物の実測，遺構・遺物のトレース等は主として，寺原徹・中村ひろみ・辻田由美が行った。

10　遺物の写真撮影は，鶴田静彦・吉岡康弘・横手浩二郎が行った。

11　本遺跡出土の夜光貝について，熊本大学の木下尚子教授に分析を依頼し，結果を執筆していただいた。

12　本書の執筆・編集は，寺原が行った。

13　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。

目　　次

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… 1
　第1節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第2節　調査の組織 …… 1
　第3節　調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第1節　遺跡の位置及び地理的環境 …… 5
　第2節　遺跡周辺の史的環境 …… 5
　第3節　周辺遺跡図 …… 6
　第4節　周辺遺跡地名表 …… 7

第Ⅲ章　発掘調査の概要 …… 9
　第1節　発掘調査の方法 …… 9
　第2節　遺跡の層序 …… 9
　第3節　発掘調査の成果 …… 17
　　1　縄文時代（Ⅶ層・Ⅳ層・Ⅲ層）の調査 …… 17
　　(1)　遺構 …… 17
　　(2)　遺物（土器） …… 18
　　(3)　遺物（石器） …… 20
　　2　弥生時代の調査 …… 24
　　(1)　遺物 …… 24
　　3　古墳時代（Ⅱ層）の調査 …… 24
　　(1)　遺構・遺構内出土遺物 …… 24
　　(2)　接合痕のわかる高坏 …… 80
　　(3)　線刻が施された遺物 …… 80
　　(4)　遺構外出土遺物 …… 81
　　4　古代の調査 …… 86
　　(5)　遺物 …… 86
　　5　中世の調査 …… 87
　　(1)　遺構・遺構内出土遺物 …… 87
　　(2)　遺物 …… 99
　　6　近世の調査 …… 105
　　(1)　遺物 …… 105
　　7　時期不詳の遺構・遺物 …… 105
　　(1)　遺物 …… 105
　　8　科学分析（赤色顔料） …… 106
　　9　出土遺物観察表 …… 107
　　10　白糸原遺跡出土のヤコウガイ（木下尚子） …… 118

第Ⅳ章　調査のまとめ …… 120

写真図版 …… 123

あとがき

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡位置図 …… 6
第３図　グリッド配置図及び調査区 …… 10
第４図　土層断面位置図 …… 11
第５図　土層断面(1) …… 11
第６図　土層断面(2) …… 12
第７図　土層断面(3) …… 13
第８図　土層断面(4) …… 14
第９図　土層断面(5) …… 15
第10図　土層断面(6) …… 16
第11図　縄文時代草創期落とし穴位置図 …… 17
第12図　縄文時代草創期落とし穴実測図 …… 17
第13図　縄文時代早期集石１号・２号位置図 …… 18
第14図　集石１号実測図 …… 18
第15図　集石２号実測図 …… 18
第16図　Ａ地点縄文時代遺物出土状況 …… 19
第17図　縄文時代出土遺物（土器） …… 20
第18図　縄文時代出土遺物（石器１） …… 21
第19図　縄文時代出土遺物（石器２） …… 22
第20図　縄文時代出土遺物（石器３） …… 23
第21図　弥生時代出土遺物 …… 24
第22図　竪穴住居跡１号実測図 …… 24
第23図　竪穴住居跡１号内出土遺物 …… 24
第24図　遺構配置図（古墳時代） …… 25
第25図　竪穴住居跡２号実測図 …… 26
第26図　竪穴住居跡２号内出土遺物 …… 27
第27図　竪穴住居跡３号実測図 …… 28
第28図　竪穴住居跡４号実測図 …… 29
第29図　竪穴住居跡３・４号内出土遺物 …… 30
第30図　竪穴住居跡５号実測図 …… 31
第31図　竪穴住居跡５号内出土遺物 …… 32
第32図　竪穴住居跡６号実測図 …… 33
第33図　竪穴住居跡７号実測図 …… 33
第34図　竪穴住居跡６・７号内出土遺物 …… 34
第35図　竪穴住居跡８号実測図 …… 35
第36図　竪穴住居跡８号内出土遺物 …… 36
第37図　竪穴住居跡９号実測図 …… 37
第38図　竪穴住居跡９号遺物出土状況 …… 38
第39図　竪穴住居跡９号内出土遺物(1) …… 40
第40図　竪穴住居跡９号内出土遺物(2) …… 41
第41図　竪穴住居跡10号実測図 …… 42
第42図　竪穴住居跡10号内出土遺物 …… 43
第43図　竪穴住居跡11号実測図 …… 44
第44図　竪穴住居跡11号遺物出土状況 …… 45
第45図　竪穴住居跡11号内出土遺物(1) …… 46
第46図　竪穴住居跡11号内出土遺物(2) …… 47
第47図　竪穴住居跡11号内出土遺物(3) …… 48
第48図　竪穴住居跡12号実測図 …… 49
第49図　竪穴住居跡13号実測図 …… 49
第50図　竪穴住居跡12・13号内出土遺物 …… 50
第51図　竪穴住居跡14号実測図 …… 51
第52図　竪穴住居跡14号遺物出土状況 …… 52
第53図　竪穴住居跡14号内出土遺物(1) …… 53
第54図　竪穴住居跡14号内出土遺物(2) …… 54
第55図　竪穴住居跡15号実測図 …… 55
第56図　竪穴住居跡15号内出土遺物 …… 56
第57図　竪穴住居跡16号実測図 …… 57
第58図　竪穴住居跡16号内出土遺物(1) …… 58
第59図　竪穴住居跡16号内出土遺物(2) …… 59
第60図　竪穴住居跡16号内出土遺物(3) …… 60
第61図　竪穴住居跡16号内出土遺物(4) …… 61
第62図　竪穴住居跡16号内出土遺物(5) …… 62
第63図　竪穴住居跡17号実測図 …… 63
第64図　竪穴住居跡17号内出土遺物 …… 64
第65図　竪穴住居跡18号実測図 …… 65
第66図　竪穴住居跡18号遺物出土状況 …… 66
第67図　竪穴住居跡18号内出土遺物(1) …… 68
第68図　竪穴住居跡18号内出土遺物(2) …… 69
第69図　竪穴住居跡18号内出土遺物(3) …… 70
第70図　竪穴住居跡18号内出土遺物(4) …… 71
第71図　竪穴住居跡18号内出土遺物(5) …… 72
第72図　竪穴住居跡18号内出土遺物(6) …… 73
第73図　竪穴住居跡18号内出土遺物(7) …… 74
第74図　竪穴住居跡18号内出土遺物(8) …… 75
第75図　竪穴住居跡18号内出土遺物(9) …… 76
第76図　竪穴住居跡18号内出土遺物(10) …… 77
第77図　竪穴住居跡19号実測図 …… 78
第78図　竪穴住居跡19号内出土遺物(1) …… 79

第79図　竪穴住居跡19号内出土遺物(2) …… 80
第80図　接合痕のわかる高坏 …… 80
第81図　線刻が施された遺物 …… 81
第82図　遺構外出土遺物(1) …… 83
第83図　遺構外出土遺物(2) …… 84
第84図　遺構外出土遺物(3) …… 85
第85図　古代出土遺物 …… 86
第86図　遺構配置図（中世・Ａ地点１） …… 88
第87図　遺構配置図（中世・Ａ地点２） …… 88
第88図　遺構配置図（中世・Ａ地点３） …… 89
第89図　遺構配置図（中世・Ｂ地点） …… 89
第90図　掘立柱建物跡１号実測図 …… 90
第91図　掘立柱建物跡２号実測図 …… 91
第92図　掘立柱建物跡３号実測図 …… 92
第93図　竪穴建物跡実測図 …… 93
第94図　中世土壙墓位置図 …… 94
第95図　土壙墓実測図(1) …… 95
第96図　土壙墓実測図(2) …… 96
第97図　土壙墓実測図(3) …… 97
第98図　夜光貝入りの土坑 …… 97
第99図　土壙内出土遺物 …… 97
第100図 古道実測図 …… 98
第101図 古道内出土遺物 …… 98
第102図 溝状遺構１実測図 …… 99
第103図 溝状遺構２・３・４実測図 …… 101
第104図 溝状遺構３内出土遺物 …… 101
第105図 遺構外出土遺物(1) …… 102
第106図 遺構外出土遺物(2) …… 103
第107図 遺構外出土遺物(3) …… 104
第108図 近世出土遺物 …… 105
第109図 時期不詳出土遺物 …… 105
第110図 ヤコウガイ各部名称 …… 118
第111図 ヤコウガイ残存部位模式図 …… 119

遺物観察表目次

1　縄文時代出土遺物（土器） …… 108
2　縄文時代出土遺物（石器） …… 108
3　弥生時代出土遺物 …… 108
4　竪穴住居跡１号内出土遺物 …… 108
5　竪穴住居跡２号内出土遺物 …… 108
6　竪穴住居跡３・４号内出土遺物 …… 109
7　竪穴住居跡５号内出土遺物 …… 109
8　竪穴住居跡６・７号内出土遺物 …… 109
9　竪穴住居跡８号内出土遺物 …… 109
10　竪穴住居跡９号内出土遺物 …… 110
11　竪穴住居跡10号内出土遺物 …… 110
12　竪穴住居跡11号内出土遺物 …… 110
13　竪穴住居跡12・13号内出土遺物 …… 111
14　竪穴住居跡14号内出土遺物 …… 111
15　竪穴住居跡15号内出土遺物 …… 111
16　竪穴住居跡16号内出土遺物 …… 112
17　竪穴住居跡17号内出土遺物 …… 112
18　竪穴住居跡18号内出土遺物 …… 113
19　竪穴住居跡19号内出土遺物 …… 114
20　接合痕のわかる高坏 …… 115
21　線刻が施された遺物 …… 115
22　遺構外出土遺物 …… 115
23　古代出土遺物 …… 116
24　遺構内出土遺物 …… 116
25　遺構外出土遺物 …… 116
26　近世・時期不詳出土遺物 …… 117

図 版 目 次

巻頭カラー
1　遺跡近景，発掘調査風景
2　土層断面，集石１号
3　集石２号，遺物出土状況
4　竪穴住居跡１号・２号
5　竪穴住居跡２号・４号
6　竪穴住居跡３号
7　竪穴住居跡３号内遺物出土状況，竪穴住居跡５号
8　竪穴住居跡６号・７号
9　竪穴住居跡８号・12号
10　竪穴住居跡９・10号検出状況，竪穴住居跡９号
11　竪穴住居跡10号・13号
12　竪穴住居跡11号，11号内遺物出土状況
13　竪穴住居跡11号・15号
14　竪穴住居跡14号
15　竪穴住居跡16号・17号
16　竪穴住居跡18号・19号
17　竪穴建物跡，ピット群（１次）
18　掘立柱建物跡１号・２号
19　夜光貝入りの土坑
20　遺構検出状況（土壙墓等），土壙墓５号
21　土壙墓８号・９号
22　出土遺物１
23　出土遺物２
24　出土遺物３
25　出土遺物４
26　出土遺物５
27　出土遺物６
28　出土遺物７
29　出土遺物８
30　出土遺物９
31　出土遺物（縄文時代１）
32　出土遺物（縄文時代２）
33　出土遺物（弥生時代，竪穴住居跡１・２・３号）
34　出土遺物（竪穴住居跡３・４・５号）
35　出土遺物（竪穴住居跡６・７・８号）
36　出土遺物（竪穴住居跡９号）
37　出土遺物（竪穴住居跡９・10・11号）
38　出土遺物（竪穴住居跡11号）
39　出土遺物（竪穴住居跡12・13・14号）
40　出土遺物（竪穴住居跡14・15号）
41　出土遺物（竪穴住居跡16号）
42　出土遺物（竪穴住居跡17・18号）
43　出土遺物（竪穴住居跡18号）
44　出土遺物（竪穴住居跡18号）
45　出土遺物（竪穴住居跡19号）
46　出土遺物（古墳時代）
47　出土遺物（須恵器，上：古墳時代，下：古代）
47　出土遺物（中世）

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部道路建設課（伊集院土木事務所）は，日置郡金峰町宮崎地内において，主要地方道鹿児島・加世田線改良工事を計画し，事業予定地内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会文化課（平成８年４月以降，文化財課，以下文化財課）に照会した。

平成３年５月文化財課が現地の分布調査を行ったところ，工事計画区域内に白糸原遺跡が所在していることが判明した。

そこで，文化財課，土木部道路建設課，伊集院土木事務所道路建設課で協議を行った結果，埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るため，緊急発掘調査を行うこととなった。発掘調査は，平成４年４月に発足した鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当することとなった。

本調査は，用地買収等の関係から４次にわたって行われた。それぞれの調査期間は以下のとおりである。

１次　平成６年10月３日～12月16日
２次　平成７年２月20日～３月15日
３次　平成７年８月21日～10月27日
４次　平成８年８月５日～10月８日

整理作業・報告書作成業務は，平成16年度に行った。

第２節　調査の組織

平成６年度（本調査１次・２次）
事　業　主　体　鹿児島県土木部道路建設課
調　査　主　体　鹿児島県教育委員会
企　画　・　調　整　鹿児島県教育庁文化課
調　査　責　任　者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所　長　内村正弘
調査企画担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　次長兼総務課長　川原信義
　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑勝洋
　主任文化財主事　新東晃一
発掘調査担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　井ノ上秀文（１次）
　文化財研究員　大久保浩二（１次）
　文化財主事　倉元良文（２次）
　文化財研究員　中原一成（２次）
調査事務担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　主　査　成尾雅明
　主　事　中村和代

平成７年度（本調査３次）
事　業　主　体　鹿児島県土木部道路建設課
調　査　主　体　鹿児島県教育委員会
企　画　・　調　整　鹿児島県教育庁文化課
調　査　責　任　者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所　長　内村正弘
調査企画担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　次長兼総務課長　川原信義
　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑勝洋
　主任文化財主事　新東晃一
発掘調査担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　青﨑和憲(文化課兼務)
　文化財研究員　湯之前尚
調査事務担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　主　査　成尾雅明
　主　事　追立ひとみ

平成８年度（本調査４次）
事　業　主　体　鹿児島県土木部道路建設課
調　査　主　体　鹿児島県教育委員会
企　画　・　調　整　鹿児島県教育庁文化財課
調　査　責　任　者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所　長　吉元正幸
調査企画担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　次長兼総務課長　尾﨑　進
　主任文化財主事兼調査課長　戸﨑勝洋
　調査課長補佐　新東晃一
主任文化財主事兼第二調査係長　立神次郎
発掘調査担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財研究員　栗林文夫
　文化財研究員　有馬孝一
調査事務担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　主　査　成尾雅明
　主　査　前屋敷裕徳
　主　事　追立ひとみ

平成16年度（整理作業・報告書作成）
事　業　主　体　鹿児島県土木部道路建設課
作　成　主　体　鹿児島県教育委員会
企　画　・　調　整　鹿児島県教育庁文化財課
作　成　責　任　者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所　長　木原俊孝
作成企画担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　次長兼総務課長　賞雅　彰
　調　査　課　長　新東晃一
　調査課長補佐　立神次郎
主任文化財主事兼第一調査係長　池畑耕一
作成担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　寺原　徹
作成事務担当者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　総　務　係　長　平野浩二

主　　査　脇田清幸
主　　事　福山恵一郎
主　　事　竹之内有里
報告書作成検討委員会　平成16年12月27日
所長ほか　9名
報告書作成指導委員会　平成16年12月21日
調査課長ほか　4名
企画担当者　中村耕治・西園勝彦

〈発掘調査指導者〉
河口貞徳先生（鹿児島県考古学会会長）3次・4次

〈発掘調査作業員〉
平成6年度（1次）
前田盛重，有元キミエ，平山美恵子，川口留夫，原口マサ子，伊野通夫，新川次雄，南シヅ子，東小薗テル子，上薗光子，前野克昭，南ヨツエ，福留洋子，堂薗タエ子，前薗和子，上堂薗サツキ，下堂薗みち，有薗洋子，下堂薗キミ子，諏訪薗チエ子，栄国シナエ，坂元愛子，上大田五月子，鶴東イツエ，宮本サツ子，上堂薗フサ，掛越タネ，辺木薗昭男，馬場アキエ，東上床ミエ，北薗エイ子
平成6年度（2次）
有元キミエ，平山美恵子，川口留夫，原口マサ子，伊野通夫，新川次雄，南シヅコ，東小薗テル子，上薗光子，前野克昭，南ヨツエ，福留洋子，前薗和子，上堂薗サツキ，下堂薗ミチ，有薗洋子，下堂薗キミ子，諏訪薗チエ子，栄国シナエ，坂元愛子，上大田五月子，鶴東イツエ，宮本サツ子，上堂薗フサ，掛越タネ，辺木薗昭男，馬場アキエ，東上床ミエ，倉内麻子

平成8年度（4次）
大福一子，井手ヶ原政美，原口シズ子，柚木近男，宮園スミ子，藤原和代，新徳チエ，畠中茂孝，鮫島ミヨ子，内門みどり，西野茂，藤田昭，東小薗テル子，東上床ミエ，中江イツ子，宇治野ミカ，大堀サダ子，橋口亘，宮園武男，松崎國忠，鮎川小夜子，神野アキ子，田原好子，末吉ユキエ，池田まり子
〈整理作業員〉
中村ひろみ，辻田由美

第3節　調査の経過

調査の経過については，日誌抄をもってこれにあてる。

なお，1次調査と2次調査の調査地点は，遺跡の両端にあたり，調査起因の道路が中央部で屈曲している。このため，グリッドをそれぞれ独自に設定していた。これを3次調査の際，調査区のほぼ中央を南北に走る農道を境に，西側をA地点，東側をB地点とすることとした。また，A地点に含まれる1次調査の際にはグリッドの呼称を，東から西に向かって1，2，…，12区としていたが，これを逆向きに西から東に向かって，25区とすることにした。したがって，旧12区→新1区，旧11区→新2区，…，旧1区→新12区と呼称が変更された。この日誌抄では旧称を用いているため，1次調査のグリッド呼称は読み替えてもらいたい。

〈平成6年度1次・平成6年10月3日～12月16日〉
10月1週（10月3日～7日）
調査内容・方法等を作業員へ説明。B－1～7区，C－5・6区，表土剥ぎ。グリッド設定（道路センター杭のNo.43とNo.41を結ぶ線を基準としている。このとき設定されたグリッドは，3次・4次調査の調査区域を考慮して設定されていないため，3次調査の際にグリッド名の変更が行われている）。B－2～4区，遺構面精査。B－2区，竪穴住居跡2基検出。B－3区，溝状遺構3条検出。
10月2週（10月12日～14日）
A－7・8区，B・C－6～8区，表土剥ぎ。B－4～6区，Ⅱ層掘下げ。A～C－4～8区，精査，ピット検出。
10月3週（10月17日～21日）
A－1～8区，B－1～8区，C－1～8区，精査。B－2・3区，溝状遺構の調査（掘下げ）。A～C－4～7区，ピットの調査（半裁，掘下げ）。B・C－4・5区，住居跡と思われる遺構の調査（ミニトレンチを設定）。A区北側を拡張する。
5区と6区の境界の土層断面図作成，ベルトをはずす。
中原一成（埋蔵文化財センター）来跡。
10月4週（10月25日～28日）
A～C－8・9区，遺構検出状況写真撮影。A～C－6～9区，B・C－4・5区，ピットの調査（半分掘下げ，実測，完掘）。B－2・3区，溝状遺構1～3の調査（掘下げ，断面実測，写真撮影）。A・B－7・8区，焼土遺構の調査（掘下げ，写真撮影）。7区と8区の境界の土層断面図作成，ベルトをはずす。
宮下貴浩氏（金峰町教育委員会）来跡。
10月5週・11月1週（10月31日～11月4日）
4区～9区，精査（再度ピットを検出するため）。B－2区，竪穴住居跡の調査（掘下げ）。A・B－9区，表土剥ぎ。A－8区，B－5・6・8区，ピットの調査（掘下げ，実測）。B－2区，竪穴住居跡1号・2号の調査（掘下げ，写真撮影）。B－2・3区，溝状遺構の調査（実測）。調査区全体の遺構掘下げ状況，写真撮影。A－7区，B－8区，A・B－5区，下層確認トレンチ設定，掘下げ。B－8区のトレンチから押型文土器が数点出土。
川畑氏（伊集院土木事務所）来跡。

11月５日（土）現地説明会を実施
内村所長以下，戸崎，新東，井ノ上，湯之前，森田，大久保，中原，西園で対応。参加者133名。

11月２週（11月８日～11日）

Ａ・Ｂ－４・５区，竪穴住居跡３号の調査（掘下げ，高坏や坩が出土，写真撮影）。Ｂ－２区，竪穴住居跡２号の調査（遺物出土状況実測，掘下げ）Ａ・Ｂ－６・７区，焼土遺構１・２号の調査（断面実測，写真撮影）。Ａ～Ｃ－６区，Ｂ－６・７・９区，ピットの調査（実測）。Ｂ－５区，掘立柱建物跡（２間３間）の調査（写真撮影）。Ａ～Ｃ－８区，Ｂ－４・５・８区，下層確認トレンチ掘下げ。Ａ・Ｂ－９区，拡張。４～８区，コンタ図作成。
万世中学校３年生20名来跡。

11月３週（11月14日～18日）

Ｂ－２区，竪穴住居跡２号の調査（遺物出土状況実測，壁面掘下げ，写真撮影，実測）。Ｂ－４区，竪穴住居跡３号の調査（遺物出土状況実測，壁面掘下げ，写真撮影，実測）。Ａ・Ｂ－６区，中世の竪穴建物跡の調査（写真撮影，実測）。Ｂ－６区，焼土遺構１号の調査（柱穴掘下げ，断面図作成）。Ｂ－６区，掘り込み３号の調査（掘下げ）。Ｂ・Ｃ－５・６区，ピットの調査（実測）。２～９区，Ⅲ層上面コンタ図作成。８区，東壁土層断面図作成。

11月４週（11月21日～25日）

Ａ・Ｂ－９～12区，表土剥ぎ。竪穴住居跡２・３号の調査（掘下げ，遺物出土状況実測，写真撮影，実測）。竪穴住居跡５・６号の調査（掘下げ，遺物出土状況実測）。Ｂ－６区，掘り込み３号の調査（遺物出土状況実測，掘下げ，写真撮影）。溝状遺構４の調査（掘下げ，写真撮影）。８～12区，遺構検出状況写真撮影。Ａ－９・11・12区，下層確認トレンチ掘下げ。

11月５週・12月１週（11月29日～12月２日）

竪穴住居跡２・３・５～８号の調査。Ｂ－10，Ａ－８・11区，確認トレンチ掘下げ。Ａ・Ｂ－５・６区，Ⅱb層掘下げ。Ｂ－６区，土壙（近世）の調査（写真撮影，実測）。溝状（道路状）遺構４号の調査。夜光貝入りの土坑の調査。
甲元眞之氏（熊本大学），本田道輝氏（鹿児島大学），前村真次氏（枕崎市教育委員会），堂込秀人（埋蔵文化財センター）来跡。

12月２週（12月５日～９日）

竪穴住居跡１～３・５～８号の調査。溝状遺構４号の調査。Ｂ－９区，下層確認。Ａ・Ｂ－９区，Ⅲ～Ⅴ層掘下げ。Ｂ－４・５区，ピット（中世）の調査。吉村氏（橿原考古学研究所），池畑耕一（埋蔵文化財センター）来跡。

12月３週（12月13日～16日）

竪穴住居跡の実測。Ｂ－９・10区，掘下げ。調査終了。撤収作業。
永山修一氏（ラ・サール学園教諭）来跡。

〈平成６年度２次・平成７年２月20日～３月15日〉

２月１週（２月20日～24日）

調査用器材・ベルトコンベアー等搬入。注意・案内板設置。表土剥ぎ（重機による）。Ⅱ・Ⅲ層，掘下げ。Ｂ・Ｃ－８～11区，遺構（ピット）検出。Ｃ－９区，下層確認トレンチ設定，掘下げ。
鶴田静彦（埋蔵文化財センター）来跡。

２月２週・３月１週（２月28日～３月３日）

Ｃ－８～11・Ｂ－11区，下層確認トレンチ，掘下げ。Ⅲ層上面，掘下げ。Ⅱ層出土遺物，平板実測。
宮下貴浩氏ほか（金峰町教育委員会）来跡。

３月２週（３月６日～10日）

Ｂ－10～12区，Ⅲ層上面まで掘下げ。Ｂ－12区，溝状遺構検出。Ｂ－11・Ｃ－８～11区，下層確認トレンチ，掘下げ（Ⅶ層以下）。Ｃ－11区，落とし穴検出（Ⅶ層上面，３次調査の際に再検討されて遺構ではないと判断された。）。Ｂ－11・12区，ピット検出。Ｃ－９～11区，土層断面，写真撮影及び実測。
宮下貴浩氏ほか（金峰町教育委員会），川原信義・成尾雅明（埋蔵文化財センター）来跡。

３月３週（３月13日～15日）

Ⅱ・Ⅲ層，掘下げ。遺構（ピット・溝）写真撮影。遺構配置図作成。調査終了。

〈平成７年度３次・平成７年８月21日～10月27日〉

８月１週（８月21日～25日）

グリッド杭設定。表土剥ぎ。精査，竪穴住居跡及び溝，検出。竪穴住居跡９～11号の調査。
倉元良文・中村耕治・桑波田武志（埋蔵文化財センター）調査支援。川原信義（埋蔵文化財センター）来跡。

８月２週・９月１週（８月29日～９月１日）

【A地点】Ｃ・Ｄ－１・２区，Ⅱ層掘下げ。Ｃ・Ｄ－２区，溝状遺構検出。竪穴住居跡10号の調査。
【B地点】Ｂ－11・12区，Ⅵ層掘下げ，遺構・遺物は検出されず。Ｂ・Ｃ－４～11区，Ⅱ層掘下げ。ピット群検出。
上東氏・福永氏（加世田市教育委員会），新東晃一（埋蔵文化財センター）来跡。

９月２週（９月４日～８日）

【A地点】竪穴住居跡９・10・11号の調査。Ｂ－13区土層断面図作成。表土剥ぎ。
【B地点】Ⅲ層上面精査。掘立柱建物跡検出。

９月３週（９月11日～14日）

【A地点】Ｂ－20区，掘下げ。竪穴住居跡11号の調査。
【B地点】Ｂ・Ｃ－５・６区，精査。Ｂ・Ｃ－１～４区，コンター図作成。Ｃ－11区，2～４トレンチ掘下げ。
河口貞徳先生（鹿児島県考古学会会長），現地指導。
内村正弘・川原信義・宮田栄二・成尾雅明（埋蔵文化財センター）来跡。

９月４週（９月18日～21日）

【A地点】竪穴住居跡９・11号の調査。

【B地点】B・C－４～６区，C・D－２区，ピット群の調査。C・D－２区，溝状遺構の調査。B・C－７・８区，B－９区，表土剥ぎ，掘下げ，古道検出。

９月５週（９月25日～29日）

【A地点】竪穴住居跡９～12号の調査。

【B地点】B・C－７～９区，掘下げ。表土剥ぎ。古道検出。B－８区，Ⅱc層から曽畑式土器出土。土層断面図作成。溝状遺構７の調査。コンター図作成。ピット群実測。

10月１週（10月２日～６日）

【A地点】竪穴住居跡９・11・12号の調査。全体写真撮影。確認トレンチ設定，掘下げ。

【B地点】B－７～９区・C－８・９区，掘下げ。土層断面図作成。B地点終了。

10月２週（９日～13日）

【A地点】竪穴住居跡13号の調査。A－24区，掘下げ。溝状遺構８の調査。土層断面図作成。試掘トレンチ設定，掘下げ。

10月３週（16日～19日）

【A地点】現道下の調査開始。B－20区・C－20・21区，掘下げ・精査。竪穴住居跡14号の調査。溝状遺構９号の調査。

10月４週（23日～27日）

【A地点】B－20区・C－20・21区の調査。竪穴住居跡14号の調査。溝状遺構９号の調査。ピット群の調査。下層確認トレンチ設定，掘下げ。土層断面図作成。撤去作業。調査終了。

〈平成８年度４次・平成８年８月５日～10月８日〉

８月１週（８月５日～９日）

調査器材搬入。住宅の浄化槽の掘下げ，遺構検出。表土剥ぎ。グリッド設定。車庫の掘下げ，ピット検出，完掘。A地区（４次調査は未買収地等の関係で調査区を分割して調査を行った）の調査。

文化財少年団（阿多小学校６年生）20名来跡。

８月２週（８月16日）

台風12号接近のため調査不能日があった。台風の後片付け。

【A地区】Ⅱ層掘下げ。

常田氏（吹上町教育委員会）来跡。

８月３週（８月19日～23日）

【A地区】Ⅱ層掘下げ。先行トレンチ掘下げ。グリッド設定。竪穴住居跡15・16号の調査。溝状遺構１～３号の調査。

倉元良文・中村耕治（埋蔵文化財センター）来跡。

８月４週（８月26日～29日）

【A地区】溝状遺構１～３号の調査。竪穴住居跡15・16号の調査。先行トレンチ掘下げ。土層断面図作成。

宮下貴浩氏（金峰町教育委員会），戸崎勝洋・立神次郎・倉元良文・肱岡・前屋敷祐徳（埋蔵文化財センター）来跡。

９月１週（９月２日～６日）

【A地区】拡張部分の調査。遺構検出。

【B地区】表土剥ぎ。Ⅱ層掘下げ。竪穴住居跡17・18号の調査。土壙１～７号の調査。

福永氏・上東氏（加世田市教育委員会），倉元良文・湯之前尚（埋蔵文化財センター）来跡。

９月２週（９月９日～13日）

【B地区】竪穴住居跡17・18号の調査。土壙１～７号の調査。ピット群の調査。先行トレンチ掘下げ。

河口貞徳先生（鹿児島県考古学会会長），平美典氏（金峰町教育委員会），相美伊久雄氏（鹿児島大学学生），鹿児島大学埋蔵文化財調査室の方々（４名），青崎和憲・倉元良文・冨田・中村和美（埋蔵文化財センター）来跡。

９月３週（９月17日～20日）

【B地区】竪穴住居跡17・18号の調査。調査終了。

【C地区】表土剥ぎ。Ⅱ層掘下げ。Ⅲ層上面精査。竪穴住居跡19号の調査。土壙８号の調査。溝状遺構の調査。

吉元正幸・尾崎進・立神次郎・青崎和憲・八木澤一郎（埋蔵文化財センター）来跡。

９月４週（９月24日～27日）

【C地区】竪穴住居跡19号の調査。ピット群，土壙９・10号の調査。先行トレンチ掘下げ。

上村俊雄氏・本田道輝氏（鹿児島大学），上東氏（加世田市教育委員会）来跡。

10月１週（10月１日～４日）

【D地点】表土剥ぎ。掘下げ。先行トレンチ掘下げ。土層断面図作成。調査終了。

【E地点】表土剥ぎ。先行トレンチ掘下げ。土層断面図作成。調査終了。

河口貞徳先生（鹿児島県考古学会会長）現地指導。

前屋敷祐徳（埋蔵文化財センター）来跡。

10月２週（10月７日～８日）

発掘器材搬出。伊集院土木事務所へ遺跡を引き渡す。調査終了。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置及び地理的環境

本遺跡の所在する金峰町は，九州島南端，薩摩半島の中央部にある日置郡南端の町である。

西には日本三大砂丘のひとつともいわれる吹上浜を擁し，東シナ海に面している。

薩摩半島は，南北に縦断する形で大小の山が連なっている。金峰町においても金峰山（636.3m）をはじめ，中岳（287.5m）などがあり，町の東部は，標高200mを越える山系が連なる。北に隣接する吹上町十郎田を源とする万之瀬川水系の長谷川が，北東から東部の山系を貫いて南流し，町南部で万之瀬川と合流する。万之瀬川は，南に隣接する加世田市との境をなしつつ西流し，吹上浜南端で東シナ海に注ぐ。

吹上浜と山系にはさまれた中央部は平野で，万之瀬川の支流である堀川流域が水田地帯となっている。北部は，台地を形成し畑作が行われている。

本遺跡は，金峰町宮崎字白糸原に所在する。本遺跡が所在する宮崎台地は，中岳（須恵器の窯跡・荒平古窯跡がある）から田布施平野に約２㎞突き出した幅約１㎞，標高20m前後の舌状台地である。本遺跡は宮崎台地の先端よりに位置し，東シナ海からの距離は約３㎞，大きく蛇行している万之瀬川の西岸にあたる。

第２節　遺跡周辺の史的環境

本遺跡の所在する宮崎台地には「阿多」の地名が残る。「阿多」の歴史は古く，日本書紀の天武天皇11年（682年）の条に「秋七月壬辰朔甲午，隼人多来，貢方物。是日，大隅隼人与阿多隼人，相撲於朝庭。大隅隼人勝之。」とある。この頃の阿多は，薩摩半島全体を表していたらしい。930年ごろに書かれたとされる「和名類聚抄」によると薩摩国には阿多郡を含めて13郡35郷が設置されている。阿多郡には鷹屋・葛例・田水・阿多の４郷があり，鷹屋は今の加世田，葛例は勝目，田水は田布施が比定されている。

本遺跡周辺には，多くの遺跡が所在している。宮崎台地上の遺跡や本遺跡と関連する遺跡を中心に紹介する。

24の高橋貝塚は，昭和37年に河口貞徳氏によって調査が行われた。弥生時代前期を主体とする貝塚である。夜臼式土器と高橋Ⅰ式土器が共伴している。南海産の貝を素材にした貝輪や南海産の貝も出土しており，白糸原遺跡出土の夜光貝の源流ともいえる交易が行われていたことを示している。

27の上焼田遺跡は，昭和50年に調査が行われ，縄文時代の人骨２体を検出し，縄文前期の轟式土器を主体として塞ノ神式・春日式・黒川式・夜臼式土器などが出土している。平成11年から14年にかけて，隣接する上焼田Ａ・Ｂ遺跡の調査を金峰町教育委員会が行い，縄文時代早期から中世にかけての遺構・遺物を検出している。特に縄文時代後期・晩期を主体として，吉田式・石坂式・轟Ｂ式・深浦式系・春日式・並木式・阿高式・出水式・指宿式・市来式・南島系・納曽式・入佐式・黒川式・夜臼式・高橋式・入来式・黒髪式・松木薗式などが出土している。また，白糸原遺跡でも検出されている中世の方形竪穴遺構を検出している。

29の阿多貝塚は，昭和初期に寺師見國氏などにより調査が行われた貝塚である。昭和52年に国の史跡に指定されるのに伴って金峰町教育委員会が調査を行った。縄文時代前期を主とする貝塚で，阿多Ｖ式土器や塞ノ神式・轟式・曽畑式などが出土している。

50の小中原遺跡では，古代の掘立柱建物跡が12棟検出されており，「阿多」とヘラ書きされた土師器や青銅製の帯金具，焼塩壺，多量の黒色土器などが出土し，郡衙である可能性が高いことが指摘されている。

59持躰松遺跡・60渡畑遺跡・61芝原遺跡は，万之瀬川の河川改修に伴って調査が行われた。現在整理中であるので詳細は報告書の刊行を待ちたいが，簡単に触れると，持躰松遺跡では中国陶器が大量に出土している。渡畑遺跡では中世の建物群が検出されている。芝原遺跡では，古代の多口瓶が出土している。

引用文献

青﨑和憲・戸崎勝洋「阿多貝塚」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）金峰町教育委員会1978年

牛ノ濵修「小中原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（57）鹿児島県教育委員会1991年

河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」考古学集刊３－２　1965年

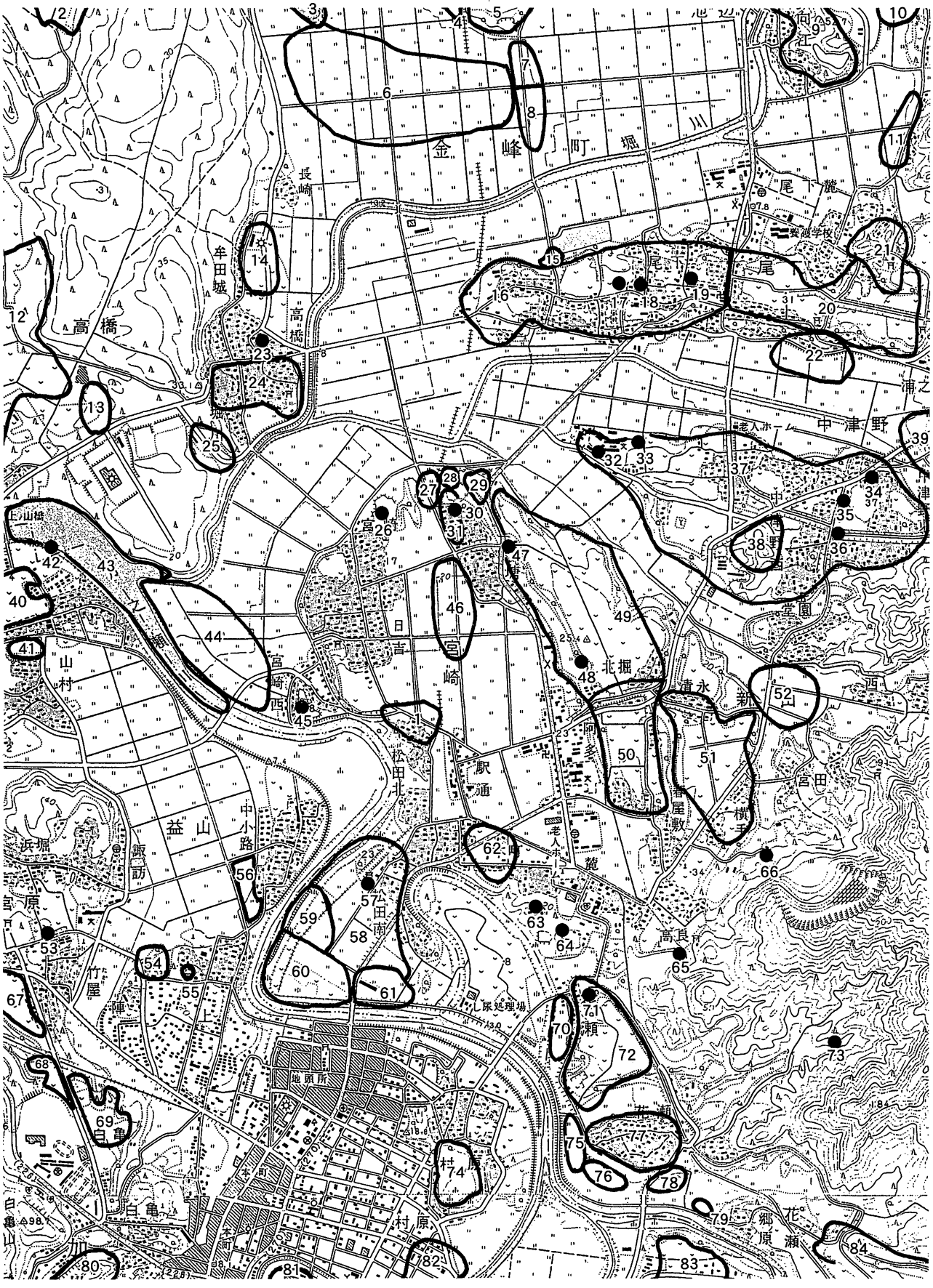
中村明蔵「隼人・南島関係文献資料」『東アジアの古代文化・特集西南日本の古代文化』大和書房1977年

中村明蔵「隼人の考古学」長期研修講座資料　鹿児島県立埋蔵文化財センター2003年

宮下貴浩「平畑遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（８）金峰町教育委員会1996年

宮下貴浩・藤崎周太郎・相美伊久雄・北村勇人「上焼田Ａ遺跡・上焼田Ｂ遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）金峰町教育委員会2003年

宮下貴浩「筆付遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)　金峰町教育委員会2004年



第２図　周辺遺跡位置図（１：25,000）

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	地形	時代	備考
1	白糸原	35－111	金峰町宮崎	台地	縄文～中世	平成７・８年発掘調査
2	浜潟	35－72	金峰町高橋 浜潟	砂丘	古墳・古代	平成６年サン・オーシャン・ リゾート分布調査
3	萩ノ上	35－123	金峰町池辺	台地	古墳	平成11年農政分布調査
4	地頭堀	35－126	金峰町池辺	台地	古墳・古代	平成11年農政分布調査
5	玄同掘	35－104	金峰町池辺		古墳・中世	平成10年農政分布調査
6	主水掘	35－122	金峰町池辺	台地	弥生・古墳	平成11年農政分布調査
7	稲葉下	35－103	金峰町池辺		古墳	平成10年農政分布調査
8	島田	35－102	金峰町池辺		古墳	平成10年農政分布調査
9	牟礼ヶ城跡	35－24	金峰町池辺 向江	丘陵	中世（鎌倉）	二階堂氏の居城跡 平成４年発掘調査
10	古城田	35－117	金峰町池辺	低地	縄文	平成11年農政分布調査
11	宮の前	35－116	金峰町池辺	低地	縄文・古代	平成11年農政分布調査
12	上ノ山後	35－71	金峰町高橋 上ノ山後	砂丘	弥生～中世	平成６年サン・オーシャン・ リゾート分布調査
13	上ノ山	35－８	金峰町上ノ山	砂丘	弥生（後）	
14	牟田城跡	35－38	金峰町高橋 字真門砂入	低地	中世	中世城館跡・二階堂氏
15	篠田	35－101	金峰町尾下	台地	古代	平成10年農政分布調査
16	尾下	35－12	金峰町尾下	丘陵	弥生（後）	
17	松木薗	35－13	金峰町尾下松木薗	台地	弥生（後）	昭和53年発掘調査
18	山野原	35－７	金峰町尾下字山野原	台地	縄文～近世	
19	鳥追薗	35－36	金峰町尾下 鳥追薗	台地	縄文・弥生（後） 古代	平成11年発掘調査
20	田布施	35－53	金峰町野首他５	台地	縄文・古墳・中世	平成２年分布調査
21	亀ヶ城跡	35－25	金峰町尾下 麓	台地	中世（室町）	相州島津家友久・運久・忠良 ３代の居城跡
22	筆付	35－14	金峰町尾下 筆付	低地	縄文（後） 弥生（後）・古代	平成12年発掘調査
23	下小路	35－11	金峰町高橋下小路	台地	弥生（中）	
24	高橋貝塚	35－９	金峰町高橋	台地 丘陵	弥生	「九州考古学」18 昭和37年８月１～12日発掘調査
25	草原町	35－121	金峰町宮崎	段丘	古墳	平成11年農政分布調査
26	天神原	35－５	金峰町宮崎天神原	台地	縄文～古墳	
27	上焼田	35－６	金峰町宮崎 上焼田	台地	縄文～中世	昭和50年５月 平成12年発掘調査
28	堀川貝塚	35－45	金峰町宮崎	台地	縄文（中～晩）	「鹿児島考古」10号
29	阿多貝塚	35－１	金峰町宮崎 上焼田	台地	縄文（前） 弥生・古墳	「人類学史講座」第１巻 昭和53年発掘調査
30	下堀	35－４	金峰町宮崎下堀	台地	縄文～古墳	工事中弥生完形土器発見
31	立石原	35－76	金峰町宮崎		古墳	平成７年農政分布調査
32	中津野下原	35－22	金峰町中津野 下原	台地	縄文（前・晩）	昭和53年発掘調査
33	平畑	35－43	金峰町中津野	台地	縄文（後）・弥生 古墳・中世	平成10年発掘調査
34	江田城跡	35－44	金峰町中津野	台地	中世	平山城跡報
35	上山野	35－37	金峰町中津野上山野	台地	縄文・古代	平成11年発掘調査
36	加治屋坂	35－20	金峰町加治屋坂	台地	弥生	道路建設の際出土・やや消滅
37	中津野	35－15	金峰町中津野1119	台地	弥生（後）	昭和25年発掘調査
38	中津野城跡	35－30	金峰町新山	台地	中世（室町）	別称「江田城」
39	貝曲り	35－114	金峰町浦ノ名	段丘	古墳・古代	平成11年農政分布調査
40	川ノ畑	４－85	加世田市益山川ノ畑	低地	弥生・古墳	
41	上山野	４－84	加世田市益山上山野	低地	弥生・古墳	平成７年８月分布調査
42	万之瀬川	４－15	加世田市万之瀬川川床	河川	弥生	
43	万之瀬川床	35－42	金峰町益山万之瀬川	川床	弥生・古墳	「鹿児島考古」12号

44	上川原	35－66	金峰町宮崎上川原	低地	弥生・古墳	平成８年発掘調査
45	古城跡	35－29	金峰町宮崎西	台地	中世（室町）	別称「古ノ城」
46	上花立	35－64	金峰町			
47	塘	35－10	金峰町塘	台地	弥生（中）	
48	新山北の堀	35－16	金峰町新山2113	台地	弥生（後）・古代	
49	野村原	35－74	金峰町中津野		古墳	平成７年農政分布調査
50	小中原	35－41	金峰町新山 小中原	台地	旧石器～古代 中世	平成元・２年発掘調査
51	立野原	35－112	金峰町新山		古墳	平成11年農政分布調査
52	三反田	35－113	金峰町新山		弥生・古墳	平成11年農政分布調査
53	竹屋	4 －17	加世田市宮原萬一畑	台地	弥生	竹屋の字名はない
54	陣跡	4 －48	加世田市益山陣	低地	中世	
55	内ノ田	4 －90	加世田市益山内ノ田	台地	旧石器・古墳 中世・近世	平成11年７月分布調査
56	中小路	4 －16	加世田市益山	低地	弥生・古墳	平成元年５～６・10～11月
			中小路・屋郷		中世・近世	発掘調査・市埋文報（19）
57	上宮寺跡	35－34	金峰町松田南	台地	中世（鎌倉）	坊津一乗院の末寺
58	松田南	35－50	金峰町花瀬	台地	縄文（早） 古墳・中世	上加世田遺跡 平成５年７月範囲拡大
59	持躰松	35－130	金峰町松田南	低地	縄文～中世	平成６年発掘調査・万之瀬川改修
60	渡畑	35－80	金峰町松田南	低地	縄文・古墳 古代・中世	万之瀬川改修
61	芝原	35－81	金峰町松田南	低地	縄文・古墳 古代・中世	万之瀬川改修
62	市薗	35－75	金峰町宮崎	台地	縄文・中世	
63	阿多城跡	35－26	金峰町阿多	低地	中世（室町）	阿多平四郎忠景
64	鶴之城跡	35－33	金峰町花瀬鶴之城	台地	中世（室町）	阿多城の出城か
65	大年寺跡	35－35	金峰町花瀬	丘陵	中世（室町）	池辺常珠寺の末寺
66	新山南	35－17	金峰町新山南	台地	弥生（後）	
67	西荒田	4 －51	加世田市益山西荒田	台地	縄文～古代	平成元年５月分布調査・平成２年 ５～６月発掘調査・市埋文報（７）
68	田武平	4 －52	加世田市益山田武	台地	縄文・古墳	平成元年５月分布調査
69	下東堀	4 －45	加世田市宮原 下東堀	台地	旧石器 縄文(草･早)･古墳	平成12年９月発掘調査
70	大迫田	35－100	金峰町花瀬	低地	中世	平成10年農政分布調査
71	今城跡	35－32	金峰町花瀬今城	台地	弥生・中世	花瀬付近か
72	花瀬今城原	35－47	金峰町花瀬今城原	台地	縄文・弥生・古墳	上加世田遺跡
73	荒平古窯跡	35－23	金峰町花瀬荒平	山腹	平安（前）	「古文化談叢」14・15号
74	尾守城跡	4 －97	加世田市村原 榕ノ原	台地	中世	別称「大森城」 昭和51・61年発掘調査・消滅
75	森山	35－99	金峰町花瀬	低地	縄文～中世	平成12年発掘調査
76	上水流	35－98	金峰町花瀬	低地	縄文～近世	平成７年発掘調査
77	花瀬	35－48	金峰町花瀬	台地	古墳・近世	上加世田遺跡
78	上水流Ｂ	35－97	金峰町花瀬	河岸段丘	旧石器・縄文（早） 古代・近世	平成10年農政分布調査
79	弥ナ山	35－96	金峰町花瀬	河岸段丘	縄文	平成10年農政分布調査
80	内田城跡	4 －43	加世田市	丘陵	中世	
81	杉本寺	4 －18	加世田市川畑杉本寺	低地	弥生	消滅
82	永田	4 －49	加世田市川畑永田	低地	古墳	
83	加治屋	4 －12	加世田市川畑岩山	丘陵	縄文・弥生 古墳・古代	
84	郷ノ原	35－49	金峰町花瀬	台地	古墳	上加世田遺跡・平成５年 ７月範囲拡大

第Ⅲ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の方法

県道の工事用基準杭を元に10m×10mのグリッドを調査区内に設定したが，調査区内で道路計画路線が大きくカーブをなすことから，平成７年度に実施された３次調査の際に，調査区の中程を南北に走る農道を境として，西側をＡ地点，東側をＢ地点とした。

Ａ地点の調査は，１次調査（平成６年度）・３次調査（平成７年度）・４次調査（平成８年度）の際に実施し，Ｂ地点の調査は，２次調査（平成６年度）・３次調査（平成７年度）の際に実施した。

各調査に共通して現耕作土を重機によって除去してみると，遺物包含層であるⅡ層は調査区のほぼ全面に渡って削平され，ごく一部に残存しているのみであった。そこで発掘作業員によってⅢ層上面での精査を行うとすぐに遺構が検出された。このために遺構数に比して遺物量は少なく，パンケース110箱（約50,000点）であった。

Ａ地点の調査では，縄文時代早期・前期・古墳時代・古代・中世・近世の遺構・遺物が検出され，多時期に渡る複合遺跡であることが判明した。

特に古墳時代と中世が主体的な時期である。

古墳時代では，竪穴住居跡が１次調査８基，３次調査６基，４次調査５基の計19基検出され，パンケース約100箱分（約45,000点）の遺物が出土している。注目される遺物として鉄製鍬・鋤先や須恵器が竪穴住居跡内から出土した。丹塗りの高坏や鉢が多く出土しているのも特徴である。その中には線刻が施されたものもみられた。高坏の製作技法の一端を示す坏部と脚部の接合資料も得られた。成川式の中の終末期である笹貫式を主体とする集落跡である。

中世では，１次調査で土壙墓が13基検出された。そのうちの１基から製品を切り取ったあとの残滓と思われる夜光貝が出土した。その他に形状からは積極的に土壙墓と認定することができない土坑３基から夜光貝が出土した。４次調査の際にも土壙墓を11基検出した。掘立柱建物跡１棟，竪穴建物跡１基なども検出している。注目される遺物として，双魚文が貼付された青磁の坏が１点出土している。

近世の遺物になるが，土瓶の巻口の注口が出土している。土瓶の注口の初期形態を示している可能性があり注目される。

Ｂ地点の調査では，縄文時代早期・前期・古墳時代・中世の遺構・遺物が検出された。

主体となる時期は中世で，掘立柱建物跡２棟や溝状遺構などが検出されている。注目される遺物として朝鮮白磁の皿が１点出土している。

第２節　遺跡の層序

遺跡の基本層序については，調査区の長さが400m近いため場所によりやや変動があるが，１次調査の際に作成された基本土層の中のⅢ層（鬼界・アカホヤ火山灰，約6,300年前）とⅥ層（桜島・薩摩火山灰，約11,500年前）を鍵層として各調査で土層を対応させて，同一の数字を用いている。４次調査ではⅣ層以下に独自の数字を当てているが，当該層中に遺構・遺物が検出されていないため支障は生じない。

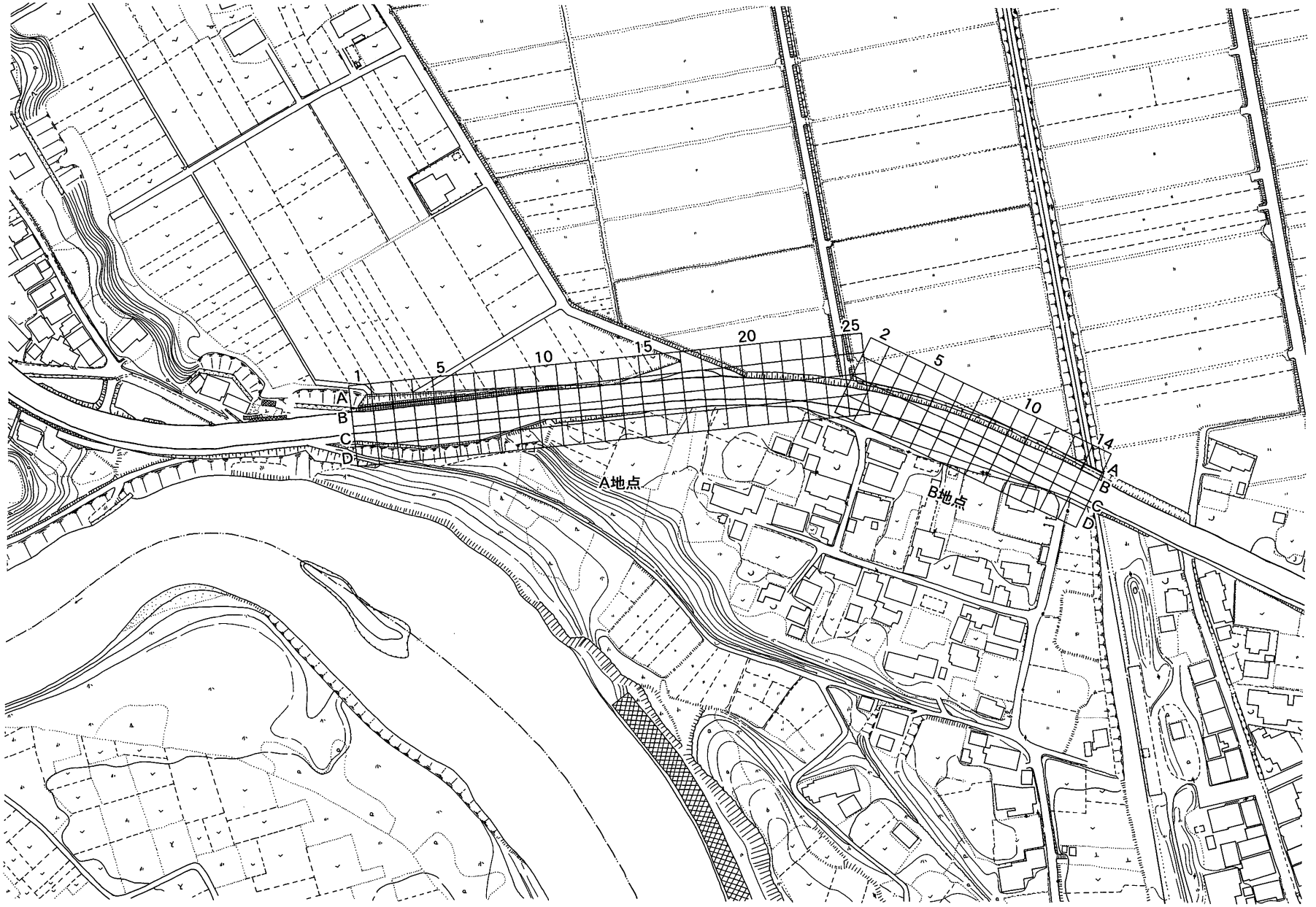
以下に基本土層について説明する。

層序	色調等	備　　考
Ⅰ層	表層	旧水田・盛土を含む
Ⅱａ層	淡黒褐色	Ⅱ層は古墳時代から近世にかけての遺物包含層であるが，一部しか残存していない。
Ⅱｂ層	灰黒色	
Ⅱｃ層	黒色	
Ⅲａ層	明黄褐色	アカホヤ火山灰の２次堆積。橙色のパミスを多く含む。縄文時代前期の遺物包含層。
Ⅲｂ層	暗黄橙色	アカホヤ火山灰
Ⅳ層	灰褐色	縄文時代早期の遺物包含層
Ⅴ層	黒褐色	
Ⅵ層	橙色	薩摩火山灰，Ⅴ層下部にブロック状に入る。残存しない地点もある。
Ⅶａ層	明黄褐色	粘質土層，粘質がやや弱い。
Ⅶｂ層	茶褐色	強粘質土
Ⅶｃ層	暗茶褐色	粘質土，Ⅶ層には，径２～３㎝の小礫が混入している。
Ⅷ層	明黄色	砂礫層。ＡＴ（姶良丹沢）火山灰の２次堆積。別名シラス。

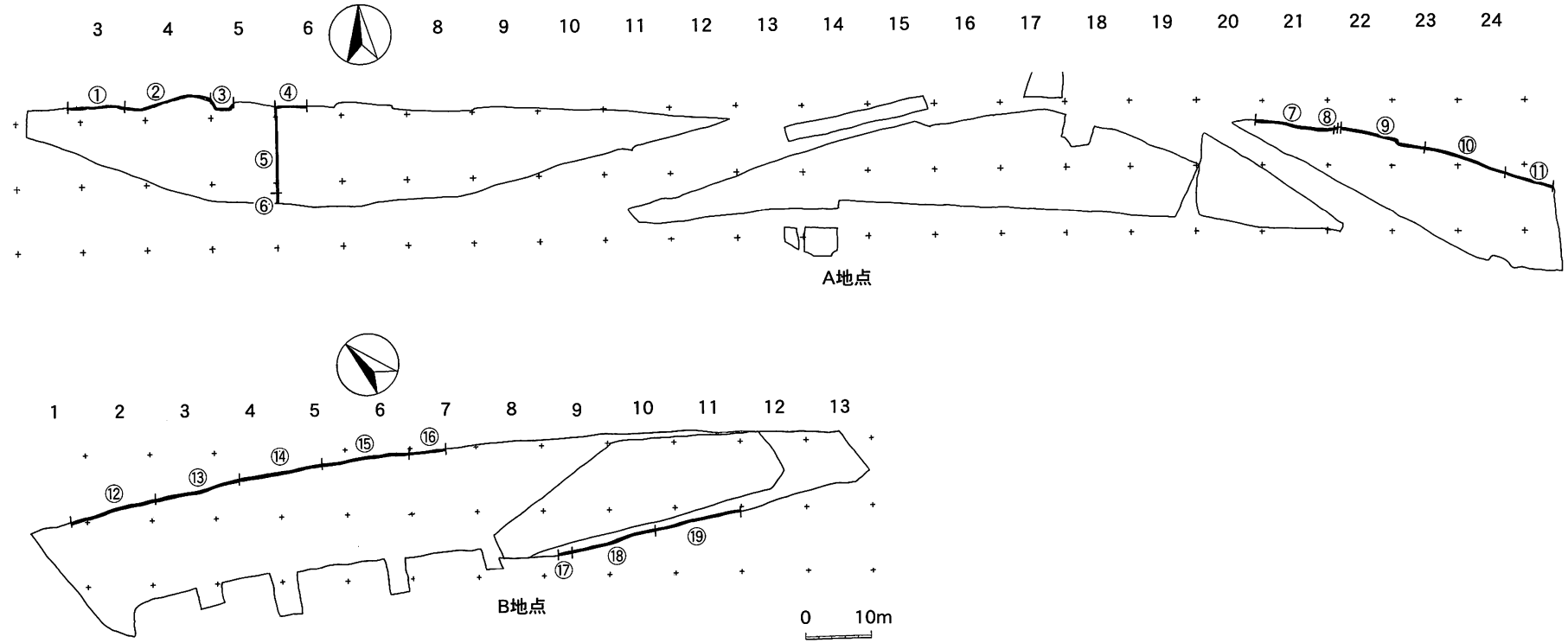
引用文献

乗畑光博・東和幸「南九州の火山灰と考古遺物」『南九州の火山噴火と遺跡の年代』月刊地球通巻214号海洋出版社1997

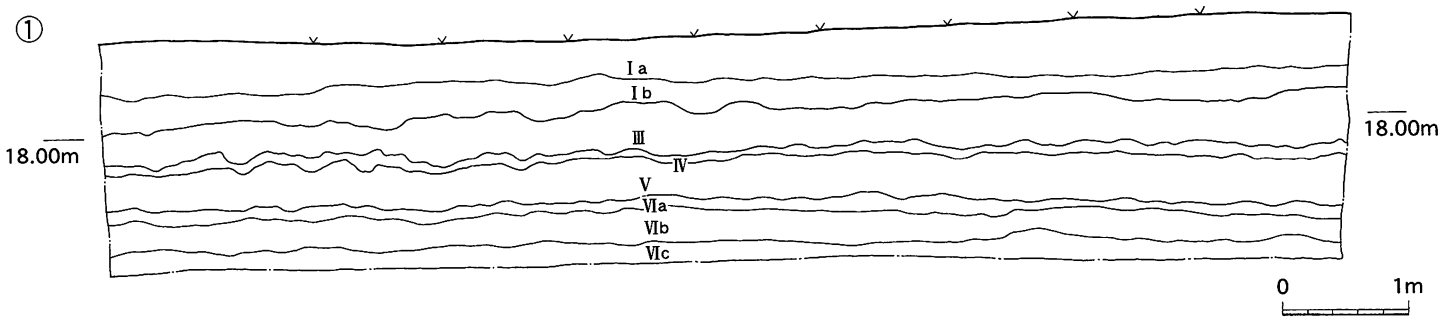
森脇　広「姶良カルデラ周辺における最終氷期最盛期遺構の海水準変化に伴う古環境変化と火山噴火」『南九州の火山噴火と遺跡の年代』月刊地球通巻214号海洋出版社1997



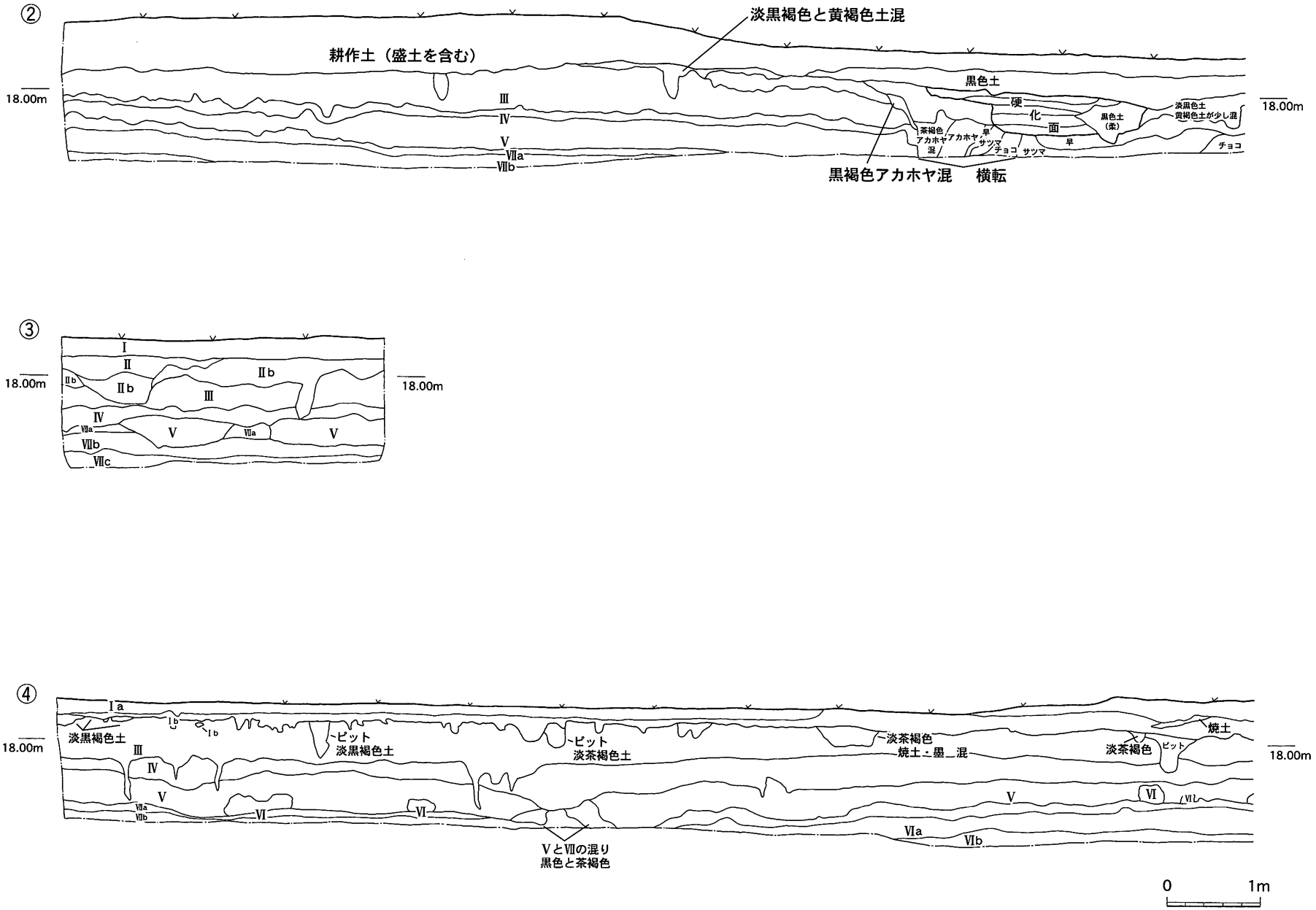
第３図　グリッド配置図及び調査区（10mグリッド）



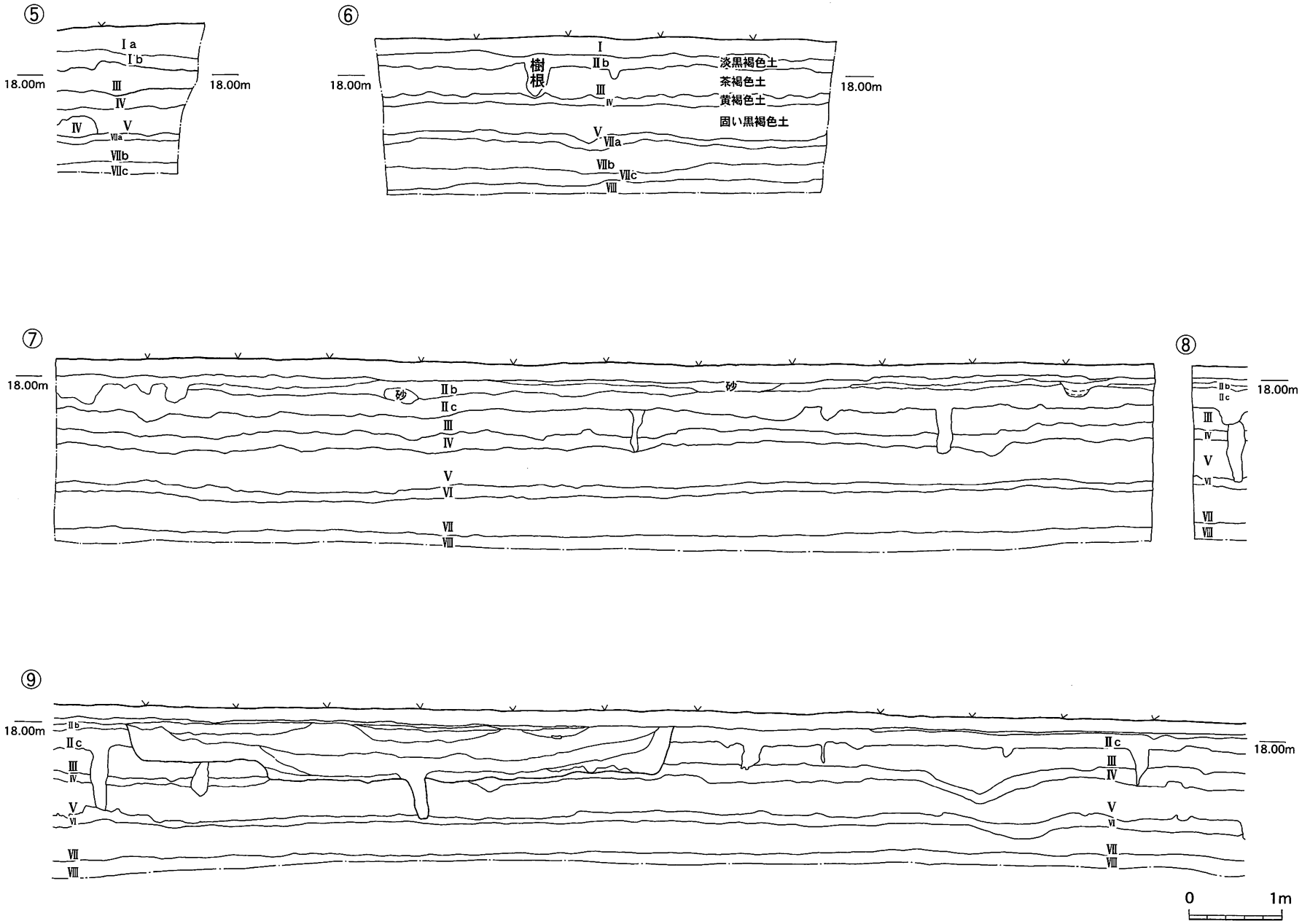
第４図　土層断面位置図



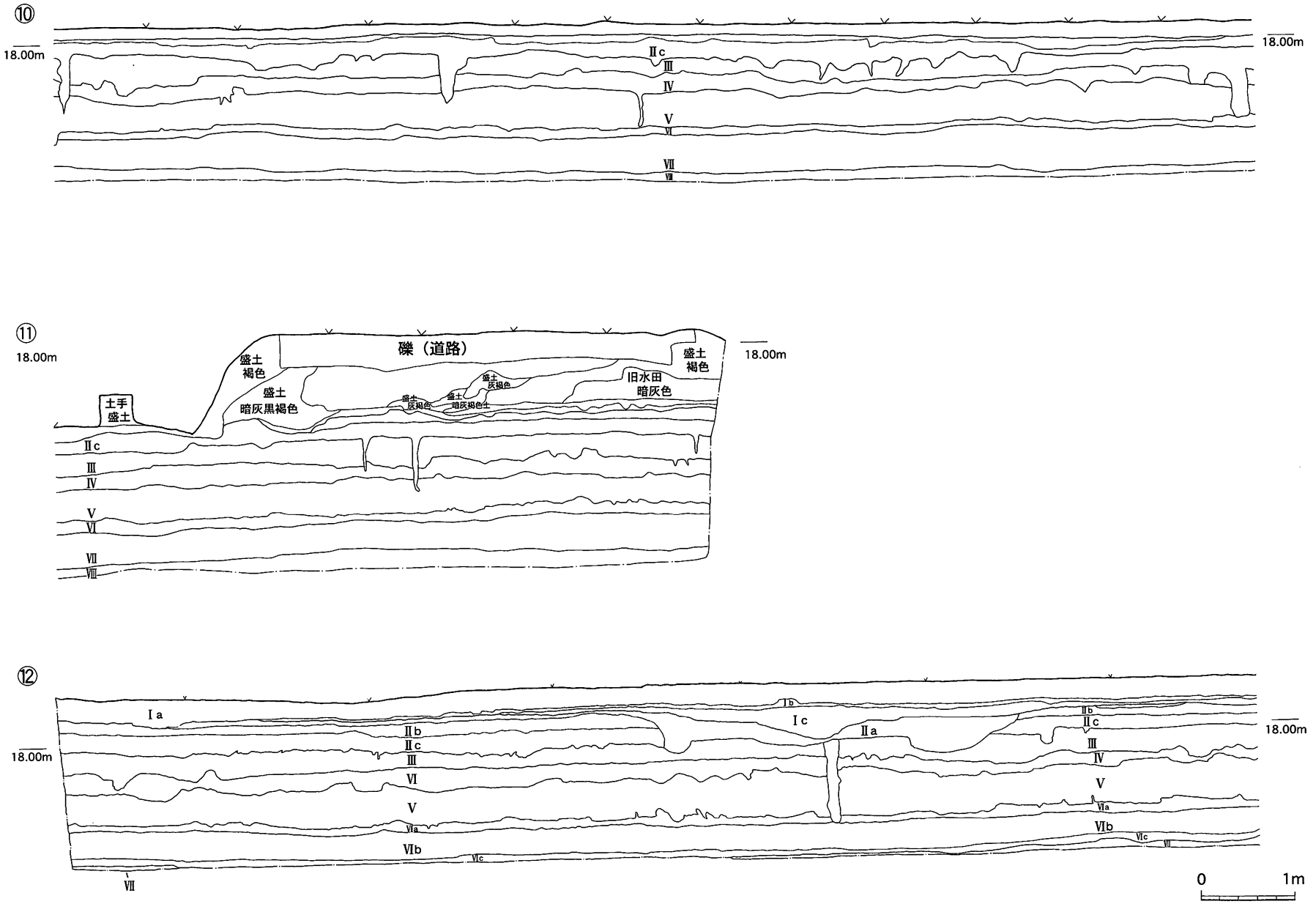
第５図　土層断面(1)


②
淡黒褐色と黄褐色土混
耕作土（盛土を含む）
18.00m
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅶa
Ⅶb
黒色土
硬
化
面
黒色土
(柔)
淡黒色土
黄褐色土が少し混
茶褐色
アカホヤ
混
アカホヤ
早
サツマ
チョコ
サツマ
早
チョコ
18.00m
黒褐色アカホヤ混　横転
③
Ⅰ
Ⅱ
Ⅱb
Ⅱb
Ⅱb
Ⅲ
Ⅳ
Ⅶa
Ⅴ
Ⅶa
Ⅴ
Ⅶb
Ⅶc
18.00m
18.00m
④
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰb
淡黒褐色土
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅵ
Ⅵ
ピット
淡黒褐色土
ピット
淡茶褐色土
淡茶褐色
焼土・墨　混
Ⅴ
Ⅵ
Ⅵa
Ⅵb
Ⅴ と Ⅶ の混り
黒色と茶褐色
焼土
淡茶褐色
ピット
Ⅵ
Ⅵ
18.00m
18.00m
0
1m

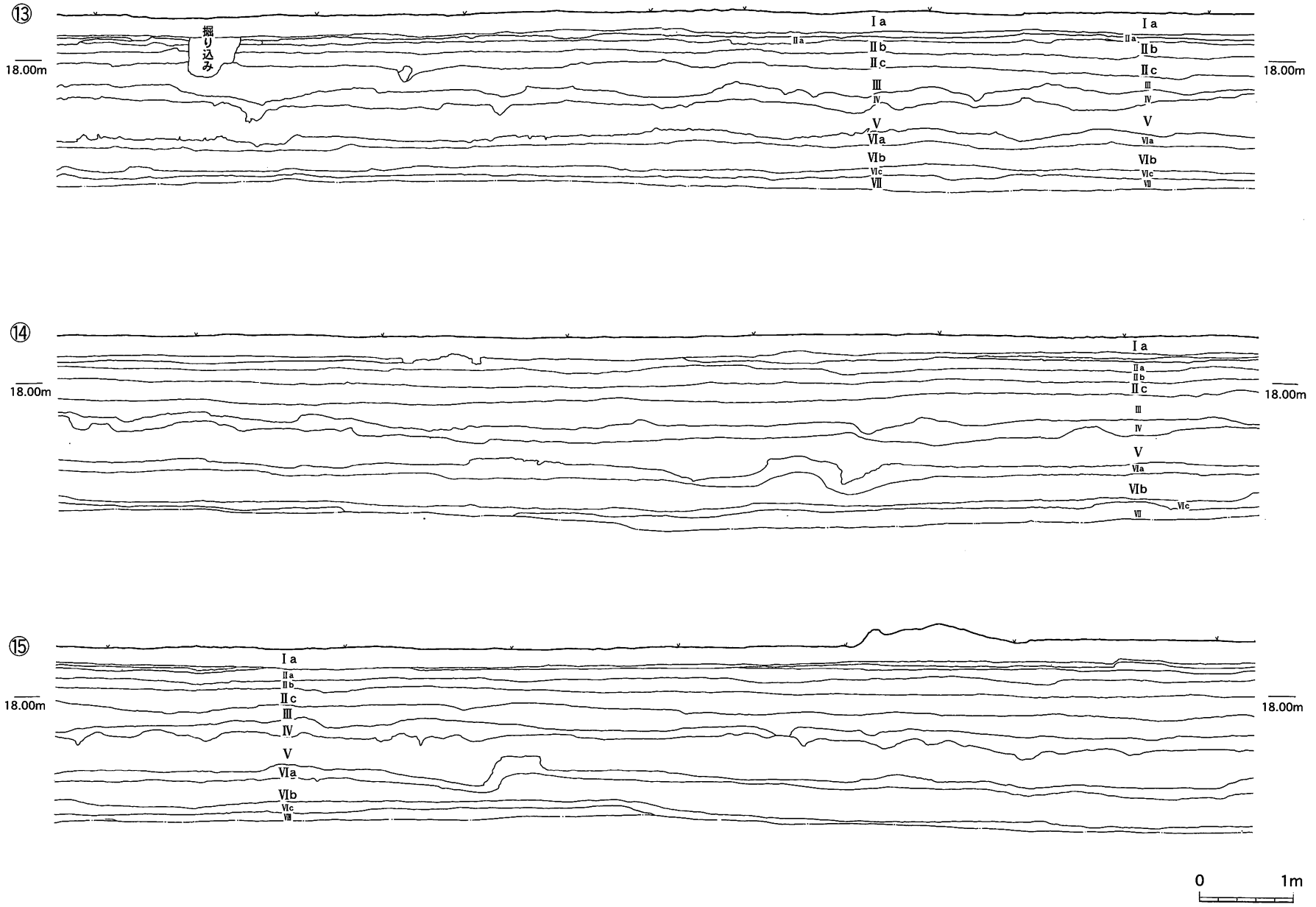
第６図　土層断面(2)


⑤
18.00m
Ⅰa
Ⅰb
Ⅲ
Ⅳ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅶc
18.00m
⑥
18.00m
Ⅰ
樹根
Ⅱb
Ⅲ
Ⅳ
淡黒褐色土
茶褐色土
黄褐色土
固い黒褐色土
Ⅴ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅶc
Ⅷ
18.00m
⑦
18.00m
砂
砂
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
⑧
Ⅱb
Ⅱc
18.00m
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
⑨
18.00m
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅱc
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
18.00m
0
1m

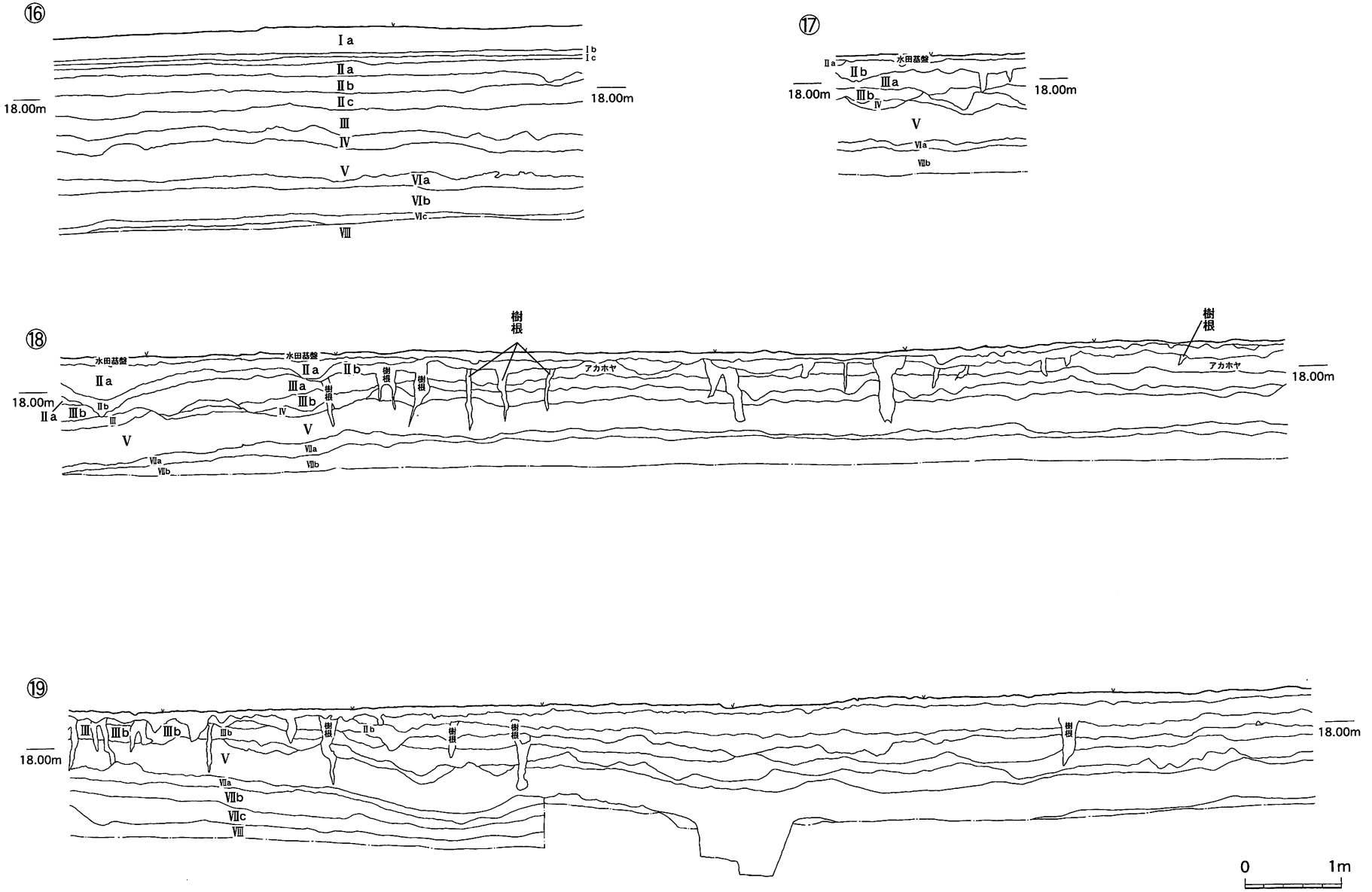
第７図　土層断面(3)


⑩
18.00m
18.00m
Ⅱc
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
⑪
18.00m
礫（道路）
盛土
褐色
盛土
暗灰黒褐色
土手
盛土
盛土
灰褐色
盛土
暗灰褐色土
盛土
灰褐色
旧水田
暗灰色
盛土
褐色
18.00m
Ⅱc
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
⑫
18.00m
Ⅰa
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲ
Ⅵ
Ⅴ
Ⅵa
Ⅵb
Ⅵc
Ⅶ
Ⅰb
Ⅰc
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵa
Ⅵb
Ⅵc
Ⅶ
18.00m
0
1m

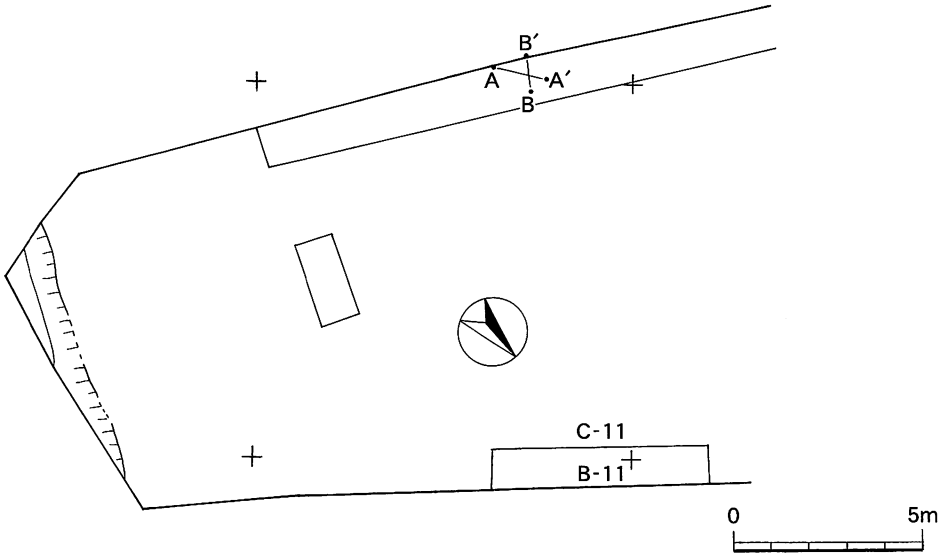
第８図　土層断面(4)



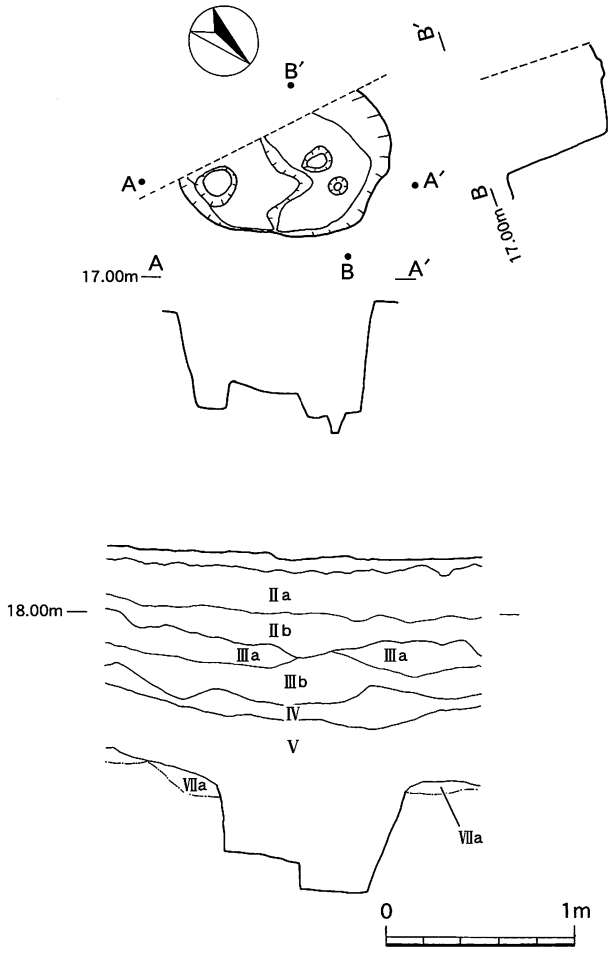
第９図　土層断面(5)


⑯
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰc
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵa
Ⅵb
Ⅵc
Ⅷ
18.00m
18.00m
⑰
水田基盤
Ⅱa
Ⅱb
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵa
Ⅶb
18.00m
18.00m
⑱
樹根
水田基盤
Ⅱa
Ⅱb
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
Ⅶa
Ⅶb
アカホヤ
18.00m
⑲
Ⅲ
Ⅲb
Ⅱb
Ⅴ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅶc
Ⅷ
18.00m
0
1m

第10図　土層断面(6)



第11図　縄文時代草創期落とし穴位置図（Ｂ地点）



第12図　縄文時代草創期落とし穴実測図

第３節　発掘調査の成果

１　縄文時代（Ⅶ層・Ⅳ層・Ⅲ層）の調査

縄文時代の遺構･遺物は，基本的にはⅦ層（草創期）・Ⅳ層（早期）とⅢ層（前期）から検出・出土した。一部の遺物については，Ⅱ層・Ⅰ層中から出土しているが，一括して縄文時代のものとして掲載する。

(1)　遺構

縄文時代草創期の遺構として落とし穴を１基検出した。２次調査の際に検出し，3次調査では遺構である可能性に疑問も提示されたが，2次調査に携わった調査員の認定に従う。

【落とし穴】（第12図）

Ｃ・Ｄ－11区で検出した。逆茂木の跡と思われるピットが床面に３か所残る。全掘していないため詳細は不明であるが長径約1.15ｍを測る。断面は土層断面にかかっているもので，図の長軸とは一致しない。Ⅶａ層の上面から掘り込まれている。埋土はＶ層に類似するが，径２㎝ほどの薩摩火山灰のパミスがＶ層中より多く観察され，床面にもパミスが入る。類似の遺構が周辺では検出されていないが，トレンチで調査したためと思われる。落とし穴の検出には全面を剥ぐ調査が必要である。

縄文時代早期の遺構として，集石を２基検出した。いずれもＡ地点Ｂ－４区のⅣ層下部，Ｖ層直上で検出した。

【集石１号】（第14図）

70㎝×45㎝ほどの範囲に散布し，25個の角礫で構成されている。被熱した痕跡は見られず，炭化物もみられなかった。掘り込みは確認されていない。

【集石２号】（第15図）

70㎝×55㎝ほどの範囲に散布し，39個の角礫で構成されている。掘り込みは確認されていない。

(2) 遺物（土器）

縄文時代早期と前期の遺物は出土量が少ないため，一括して掲載することとした。Ⅰ類～Ⅴ類がⅣ層（早期）に属し，Ⅵ類土器がⅢ層（前期）に属する。出土位置については，１次調査の図面しか残されていないため，全てを網羅することはできなかった。

【Ⅰ類土器】（第17図，１）

器形は円筒形を呈する。外面に横位の貝殻条痕を施し，その後斜位の６～８㎜の条痕が横方向に並んで施される。内面は丁寧なナデ調整が施されている。胎土に１～２㎜大の白い粒と角閃石を多く含む。

【Ⅱ類土器】（第17図，２）

器形は口縁部が外反する。口唇部にキザミ目を施し，口縁部に貝殻刺突文が斜位に施される。内面は丁寧なナデ調整が施される。

【Ⅲａ類土器】（第17図，３）

器形は円筒形を呈する。外面には２本を１組とした羽状の条痕文が施される。内面は荒いケズリ状のナデ調整が施されるが，口唇部は，丁寧なナデ調整が施されている。

【Ⅲｂ類土器】（第17図，４）

器形は不明。外面には羽状の貝殻刺突文が施される。内面はナデ調整が施されている。

【Ⅲｃ類土器】（第17図，５・６）

器形は円筒形を呈する。口縁部にややふくらんだ部分を有する。口縁部に文様帯を有し，２個を１組とした円形の回転刺突文が，器面に対して斜めの方角から横位に３～４段施されているが，上部は配置の規則性がくずれており，形状も半円形ほどで回転を止めている。胴部には貝殻刺突文が施される。内面は丁寧なナデ調整が施される。

【Ⅳ類土器】（第17図，７）

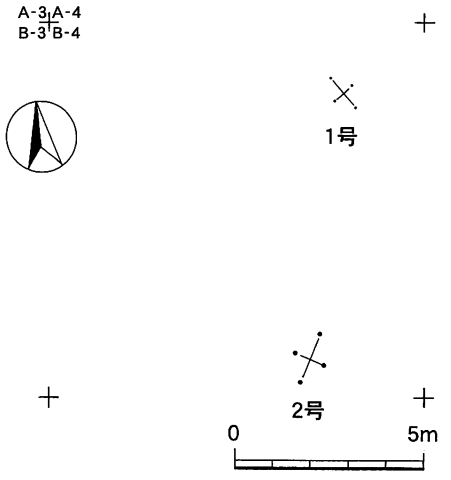
器形は円筒形を呈する。口縁部がやや内湾する。口縁部に５条の横位の流水文を施し，胴部には縦位の流水文を施す。口唇部と内面には，非常に丁寧なナデ調整が施される。

【Ⅴａ類土器】（第17図，８～16）

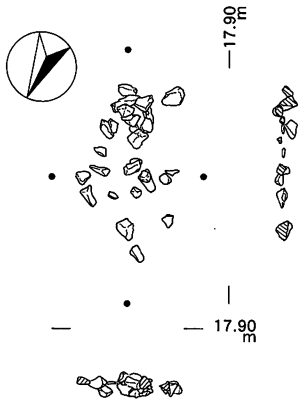
器形は口縁部が外反し，平底を呈する。口縁部内面から口唇部，外面の全体に長軸５㎜短軸２㎜程の楕円押型文を施すが，一部を磨り消している。内面には，丁寧なナデ調整が施される。

８・９・10・13・14は，同一の原体を使用しており，原体の円周は約12㎜である。したがって直径約3.8㎜の原体を使用していることが分かる。８と９はどちらも口縁部であるが，原体の向きが逆になっている。

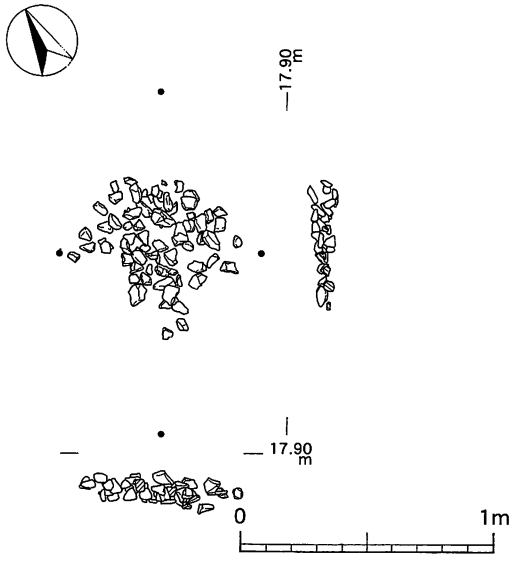
【Ⅴｂ類土器】（第17図，17～19）



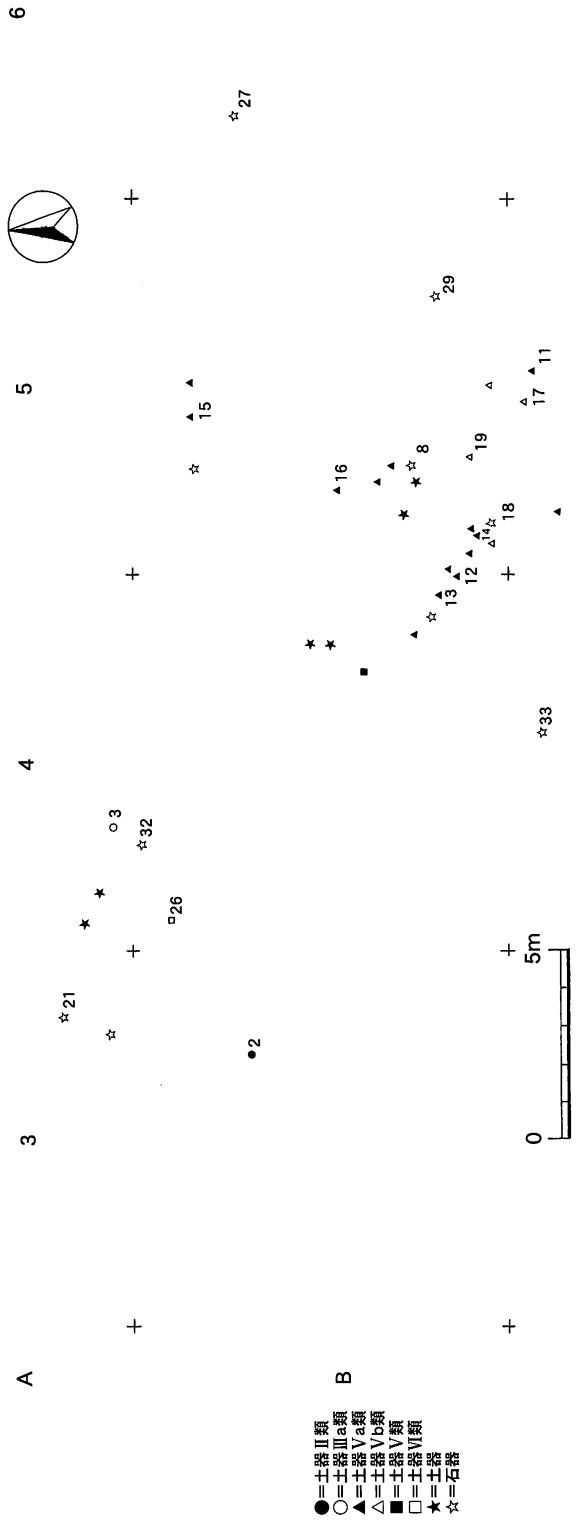
第13図　縄文時代早期集石１号・２号位置図（Ａ地点）



第14図　集石１号実測図



第15図　集石２号実測図



第16図　A地点縄文時代遺物出土状況

胴部片のみの出土で詳細な器形は不明であるが，出土している部分は円筒形を呈している。外面に山形押型文を施す。内面には，ナデ調整が施される。

【Ⅵ類土器】（第17図，20）

Ⅲ層中からの出土であり，前期の土器片である。

器形は丸底である。底部の最突起部を中心として蜘蛛の巣状の条痕文が施される。一つの角度が116°を測ったので，6角形を呈していたと思われる。内面には，丁寧なナデ調整が施される。

(3)　遺物（石器）

縄文時代の石器については，層位が不安定なものが多く，Ⅳ層以下の早期の遺物包含層で出土した石器はなかった。全てⅢ～Ⅰ層での出土である。このため，器種による分類のみで，早期と前期に分けていない。

【石鏃】（第18図，21～25）

21～24は，黒曜石製の石鏃である。21は西北九州産，22は鹿児島県薩摩川内市（旧樋脇町）上牛鼻産，23・24は県外産（西北九州か）の黒曜石を石材として使用している。25は，鉄石英製である。

21は，浅い凹基式の石鏃で正三角形に近い形状を呈している。やや灰色を帯びた黒曜石製である。

22は，Ｖ字形の凹基式石鏃で二等辺三角形を呈している。主剥離面を残しており，粗い二次加工が施されている。最大厚6㎜を測る。基部の右側を欠損している。漆黒の黒曜石製である。

23は，Ｖ字形の凹基式石鏃で二等辺三角形を呈している。基部の右側を欠損している。透明感のあるやや灰色を帯びた黒曜石製である。

24は，Ｕ字形の凹基式石鏃で二等辺三角形を呈している。透明感のあるやや灰色を帯びた黒曜石製である。

25は，Ｕ字形の凹基式石鏃で二等辺三角形を呈している。両側縁に約1㎜おきに約0.3㎜ほどの鋸歯状の抉りをいれて仕上げている。先端が欠損している。鉄石英製である。

【スクレイパー】（第18図，26・27）

26・27は，スクレイパーである。26は針尾系の黒曜石製，27は安山岩（サヌカイト）製である。

いずれも，幅広の剥片を素材として，両面から丹念な二次加工が施されている。

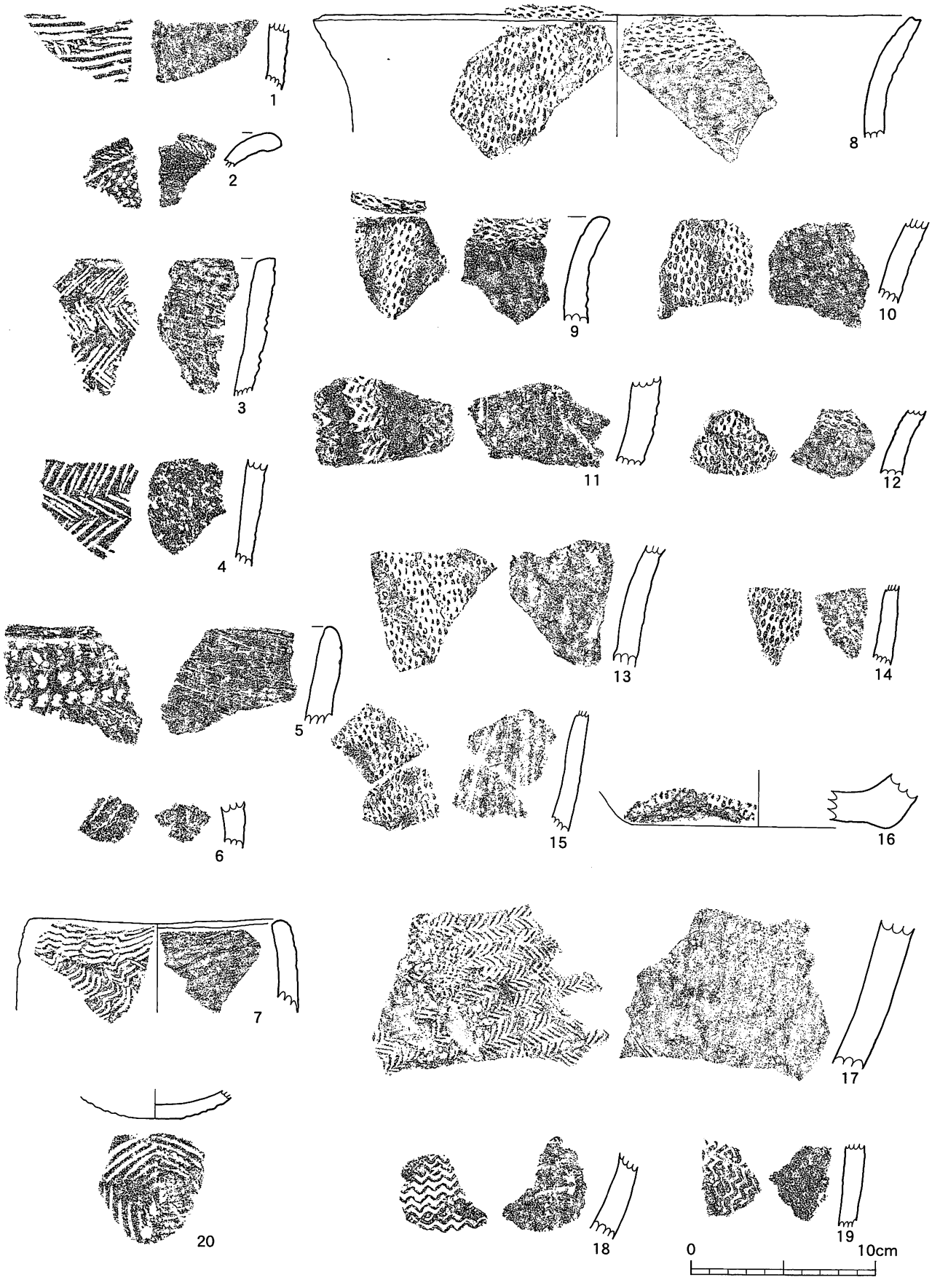
【磨製石斧】（第19図，28～30）

28～30は磨製石斧である。28と29は砂岩製，30は頁岩製である。

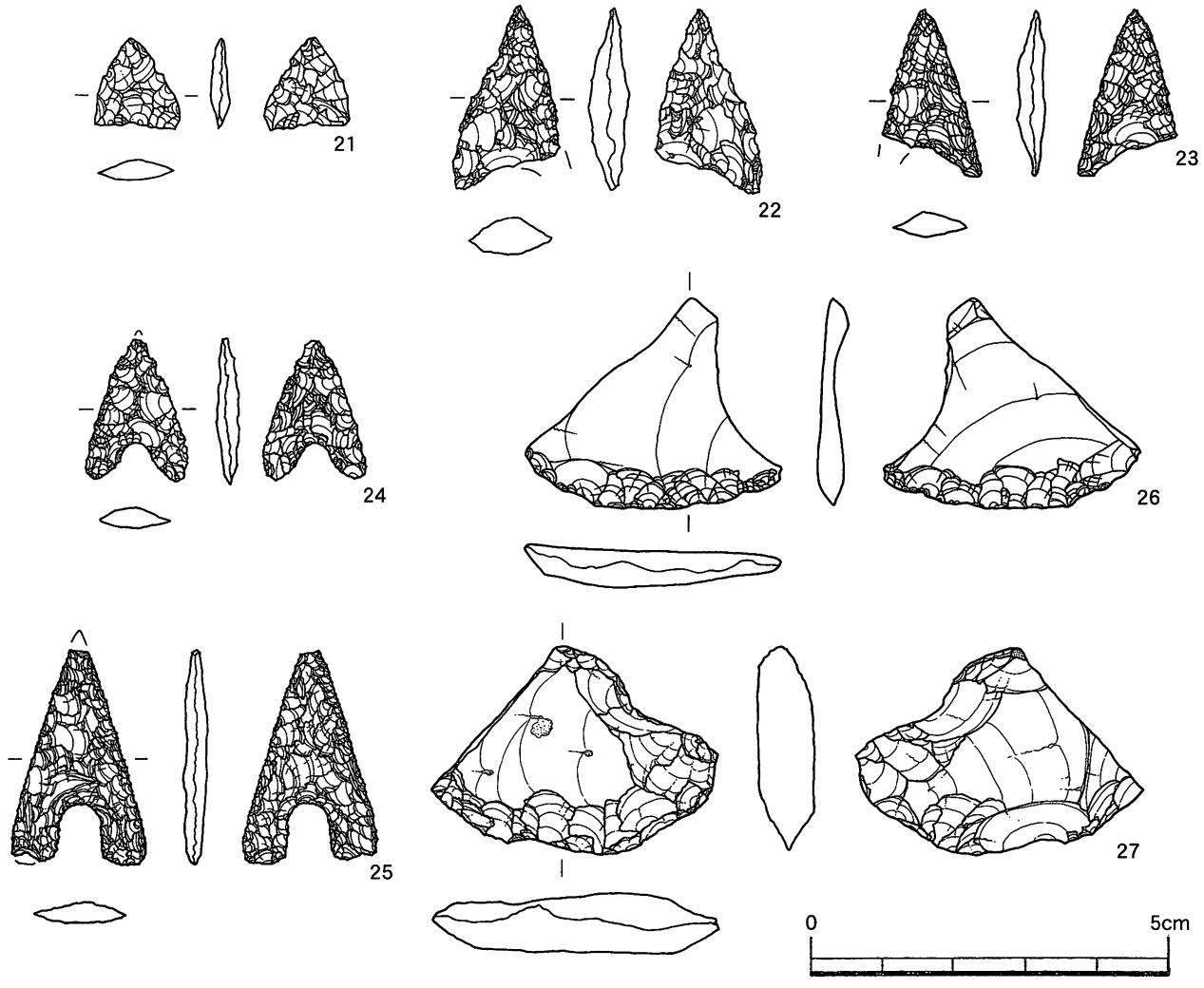
28は，側面を中心に敲打痕が残る。被熱しており，表面から3㎜ほどが赤化している。刃部と基部の一部が欠損している。

29は，扁平な片刃の石斧である。刃部近くで欠損している。

30は，欠損後にクサビとして転用されている。図は，



第17図　縄文時代出土遺物（土器）



第18図　縄文時代出土遺物（石器１）

クサビとしての置き方で作図してある。

【磨石・叩石・凹石】（第19～20図，31～35）

31～35は，磨石・叩石・凹石である。いずれか，一つの機能しか有していないものもあるが，一括して掲載する。31・33～35は，砂岩製，32は花崗岩製である。

31は，磨石である。

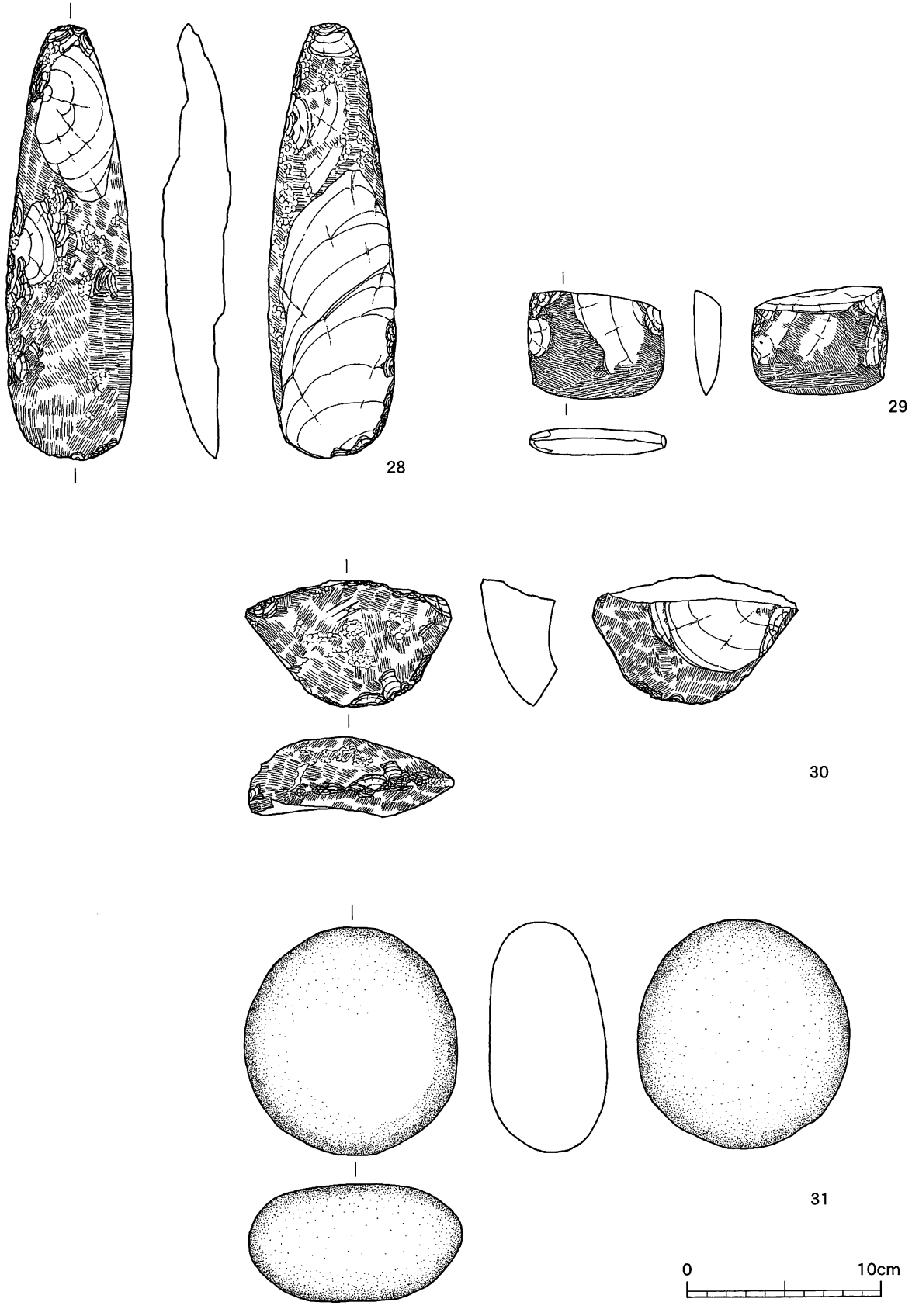
32は，叩石である。側面を中心に敲打されており，上面にも敲打痕が残る。

33は，叩石・凹石である。側面に擦痕と細かい敲打痕が残り，上面・下面がくぼんでいる。

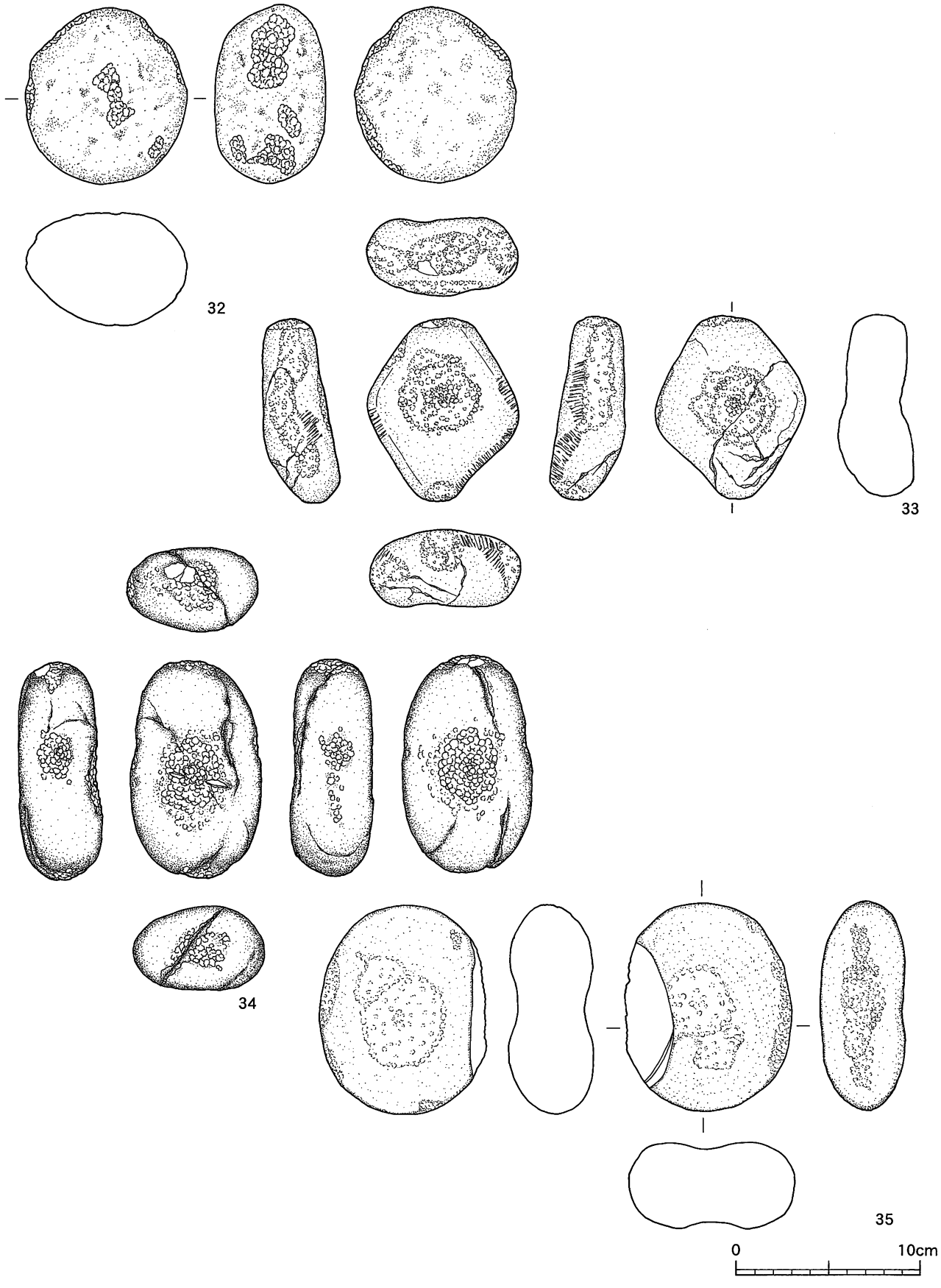
34・35は，磨石・叩石・凹石である。35は，一部欠損しており，その部分も含めて赤化している。

引用・参考文献

黒川忠広「南九州貝殻文系土器１～鹿児島県～」
南九州縄文研究会2002



第19図　縄文時代出土遺物（石器２）



第20図　縄文時代出土遺物（石器３）

2　弥生時代の調査

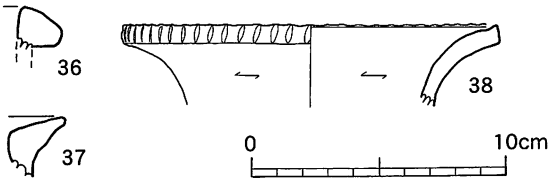
弥生時代のものと思われる遺物が，古墳時代の竪穴住居跡から出土している。いずれも小片であり，出土量も少ない。

(1)　遺物（第21図，36～38）

弥生時代の遺物として，3点を図化した。

36・37は，甕の口縁部である。内外面ともナデ調整が施されている。形状から見て36は口唇部がやや下向きになり，37はやや上向きになるようであるが，小片のため詳細は不明である。2点とも竪穴住居跡8号から出土した。

38は，壺の口縁部である。口唇部をやや引き上げて，キザミ目を施している。竪穴住居跡19号から出土した。



第21図　弥生時代出土遺物

3　古墳時代（Ⅱ層）の調査

本遺跡の主体となる時代である。竪穴住居跡が計19基検出され，成川式土器や須恵器，鉄製U字型鍬・鋤先などが出土している。ただし，遺物包含層であるⅡ層が，調査区のほぼ全面に渡って削平を受けていたため，遺物の出土量はパンケースで約100箱であった。

(1)　遺構・遺構内出土遺物

古墳時代に属すると認定した遺構は，竪穴住居跡が19基である。1次調査で8基，3次調査で6基，4次調査で5基を検出した。全てA地点で検出している。Ⅱ層が削平されているために，検出面からの深さが浅いものが多い。

【竪穴住居跡1号】（第22図）

B－11区で検出した。調査区内では，一部のみの検出であるため詳細は不明であるが，方形を呈すると思われる。3基のピットが検出されたが，埋土の観察などから，後世の撹乱であると認定した。検出面から19cmを残す。

【竪穴住居跡1号内出土遺物】（第23図，39～41）

竪穴住居跡1号からは全部で16点の遺物が出土し，そのうちの3点を図化した。全て成川式土器である。

39は，甕の底部である。脚部の内面天井部が下方に膨らんでいる。脚部が成形時の接合箇所ではずれている。

40は，壺の口縁部である。ゆるやかに外反している。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。

41は，壺の口縁部である。直線的に外反している。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。

【竪穴住居跡2号】（第25図）

B－11区で検出した。4.35m×4.34mの方形を呈している。竪穴内に13基のピットを検出した。ピット7は深さ34cm，ピット10は深さ44cmを測り，2本柱の主柱穴となる可能性がある。検出面から26cmを残す。

【竪穴住居跡2号内出土遺物】（第26図，42～57）

竪穴住居跡2号内からは，パンケース3箱ほどの遺物が出土している。このうち16点を図化した。

42～56は成川式土器，57は須恵器である。

42～46は，甕である。

42・43は，甕の口縁部～胴部である。口縁部は内湾し，胴部にキザミ目を施した突帯が1条廻る。内外面の全面に粗いハケ目が残る。外面にススが付着している。

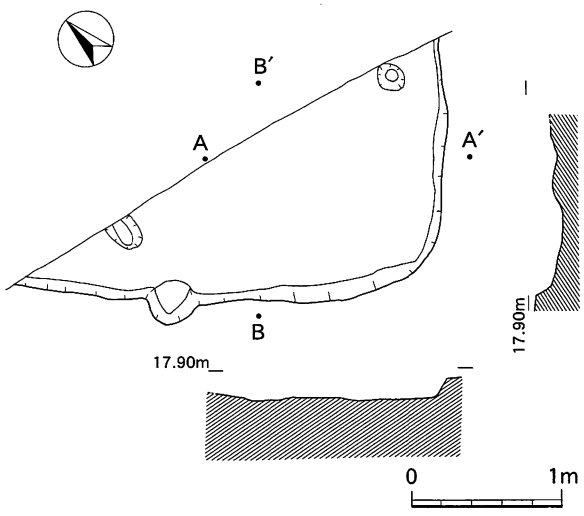
44～46は，甕の底部である。44・45は，脚部の内面天井部が平坦であり，46は，下方に膨らんでいる。44・45は，内外面にハケ目が残る。46は，外面のみにハケ目が残る。

47～52は，壺である。

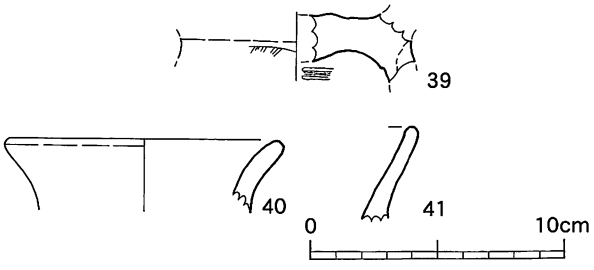
47は，壺の完形品である。口縁部はやや内湾して立ち上がる。底部は丸底である。外面にわずかにハケ目が残るが，器壁の剥落が激しい。胴部中ほどから口縁部にかけての部分が半分ほどかけている。比較的大きな破片が接合している。

48～51は，壺の口縁部である。

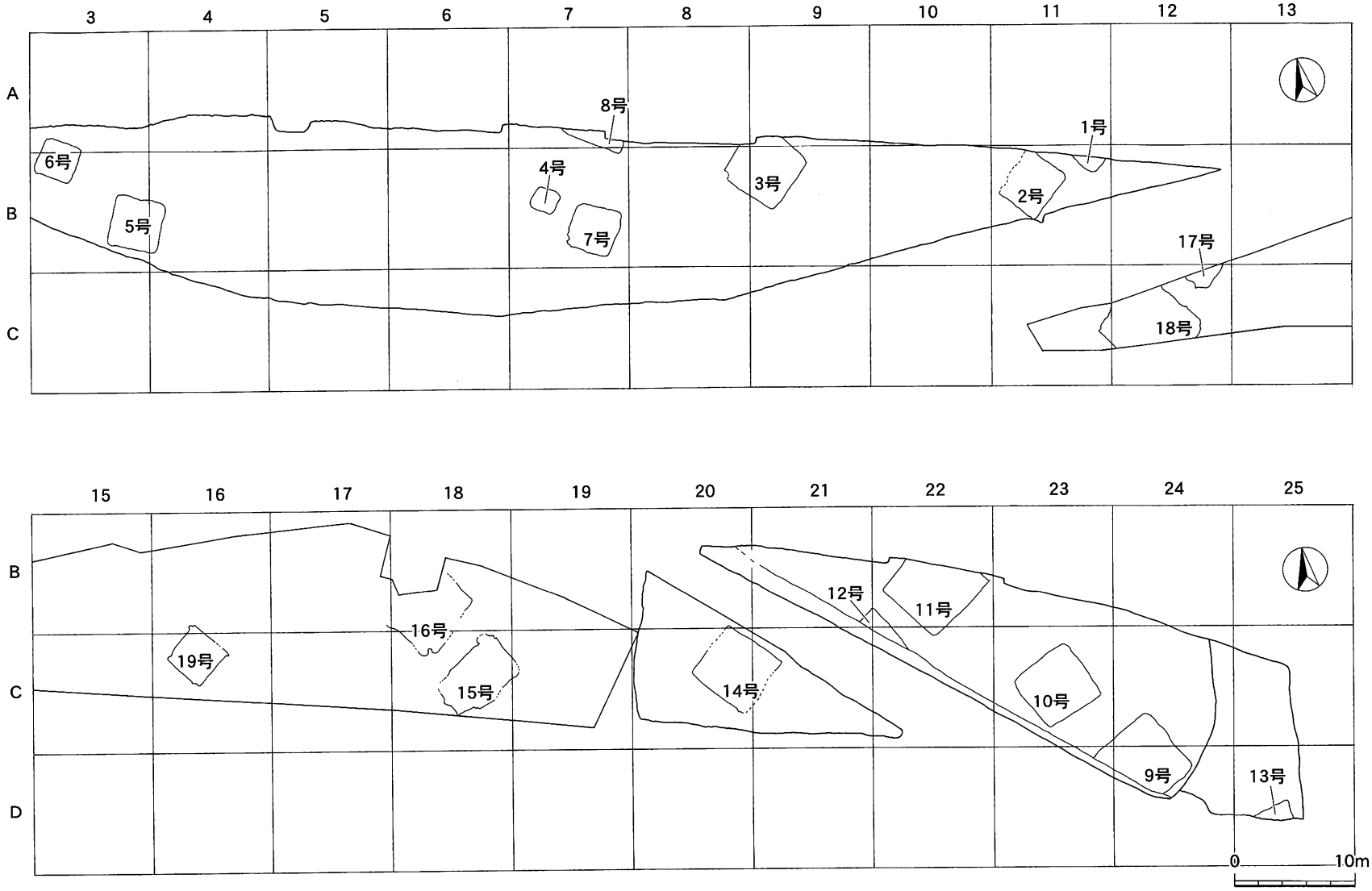
48は，口縁部がゆるやかに外反している。内外面に浅いハケ目が残る。



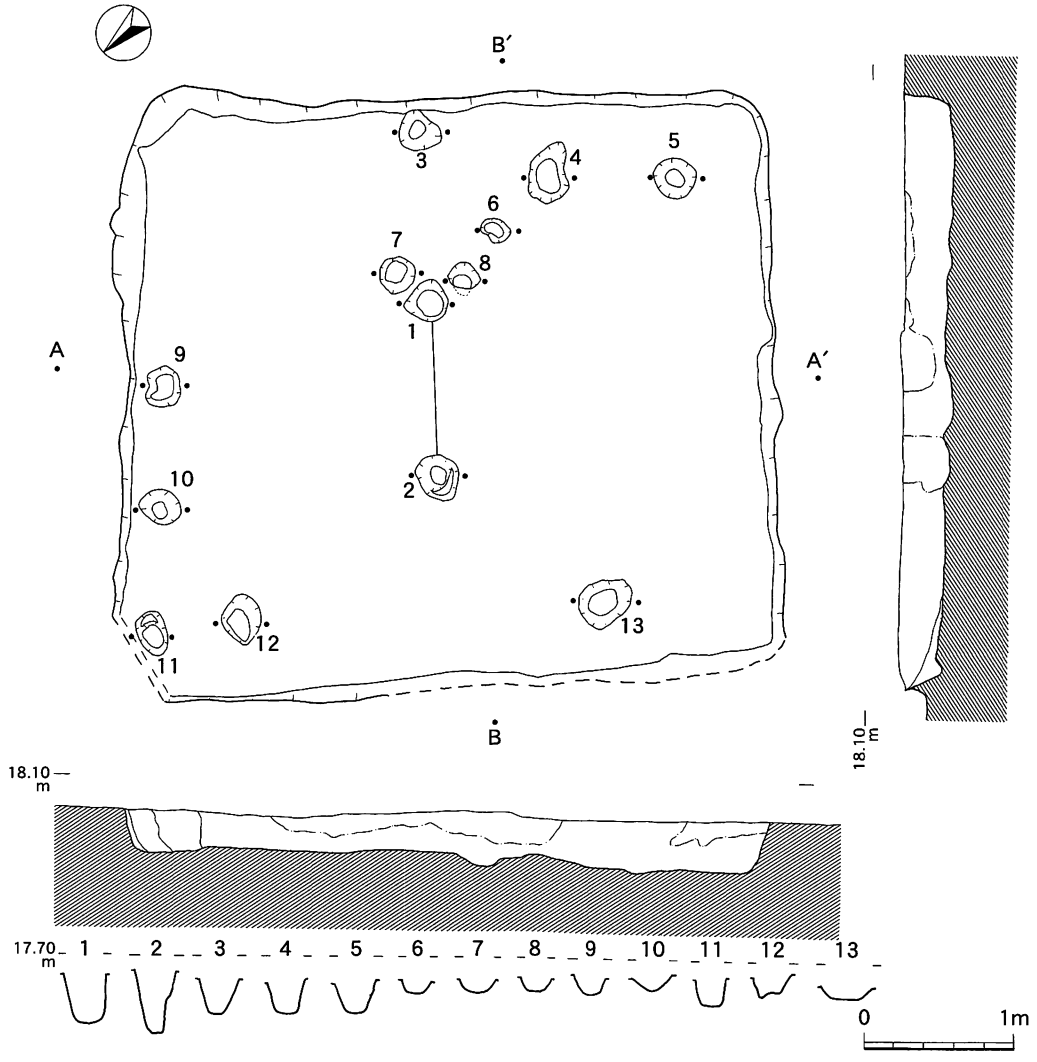
第22図　竪穴住居跡1号実測図



第23図　竪穴住居跡1号内出土遺物



第24図　遺構配置図（古墳時代・A地点）



第25図　竪穴住居跡２号実測図

49は，口縁部が直線的に立ち上がる。内外面にハケ目が施されている。外面は幅２㎝ほど磨り消されており，内面も頸部以下はナデ調整が施されている。

50は，口縁部が直線的に立ち上がる。外面にハケ目が残り，その上から，ナデ調整が施されている。内面調整はローリングのため，不明である。

51は，口縁部が直線的に立ち上がる。内外面にハケ目が残る。工具の幅は，1.9㎝である。胎土が白色を呈している。

52は，壺の胴部である。２条のキザミ目を施した突帯が廻る。外面にはハケ目が施されている。

53・54は，高坏である。

53は，高坏の坏部である。下部に段を持ち，ゆるやかに内湾しながら口縁部まで立ち上がる。内外面はミガキが施されている。器面が赤いが，丹塗りではない。胎土に茶粒を多く含む。

54は，高坏の脚部である。内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。

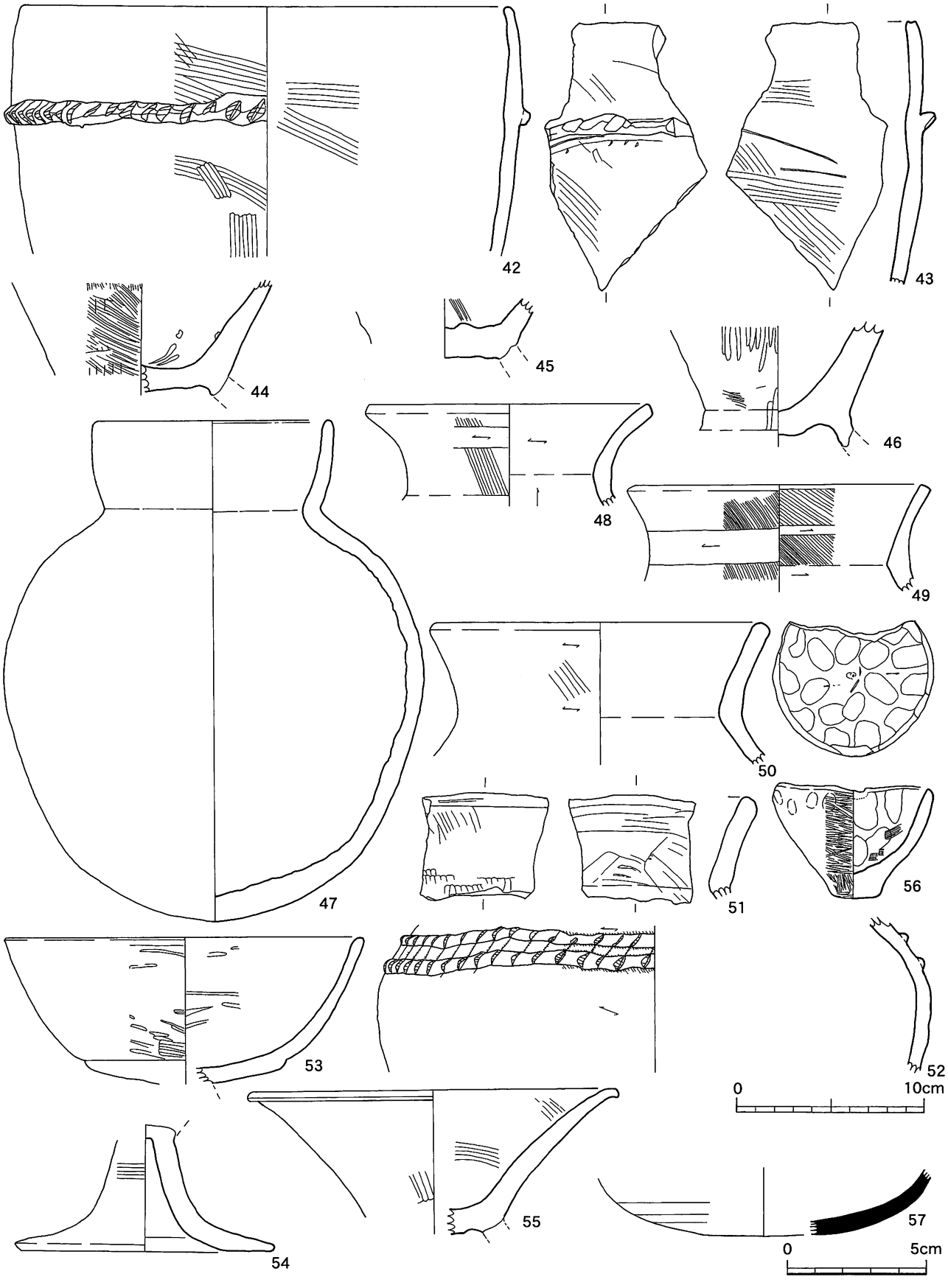
55は，脚付の鉢である。胴部はわずかに外反しながら立ち上がり，口唇部を下方に引き出している。脚部は欠損している。外面下部と内面の一部にハケ目が施されている。

56は，手づくねの鉢である。外面は全面に丹塗りされている。内面は指頭大の水玉様に丹塗りされている。丹の色が，くすんでいる。

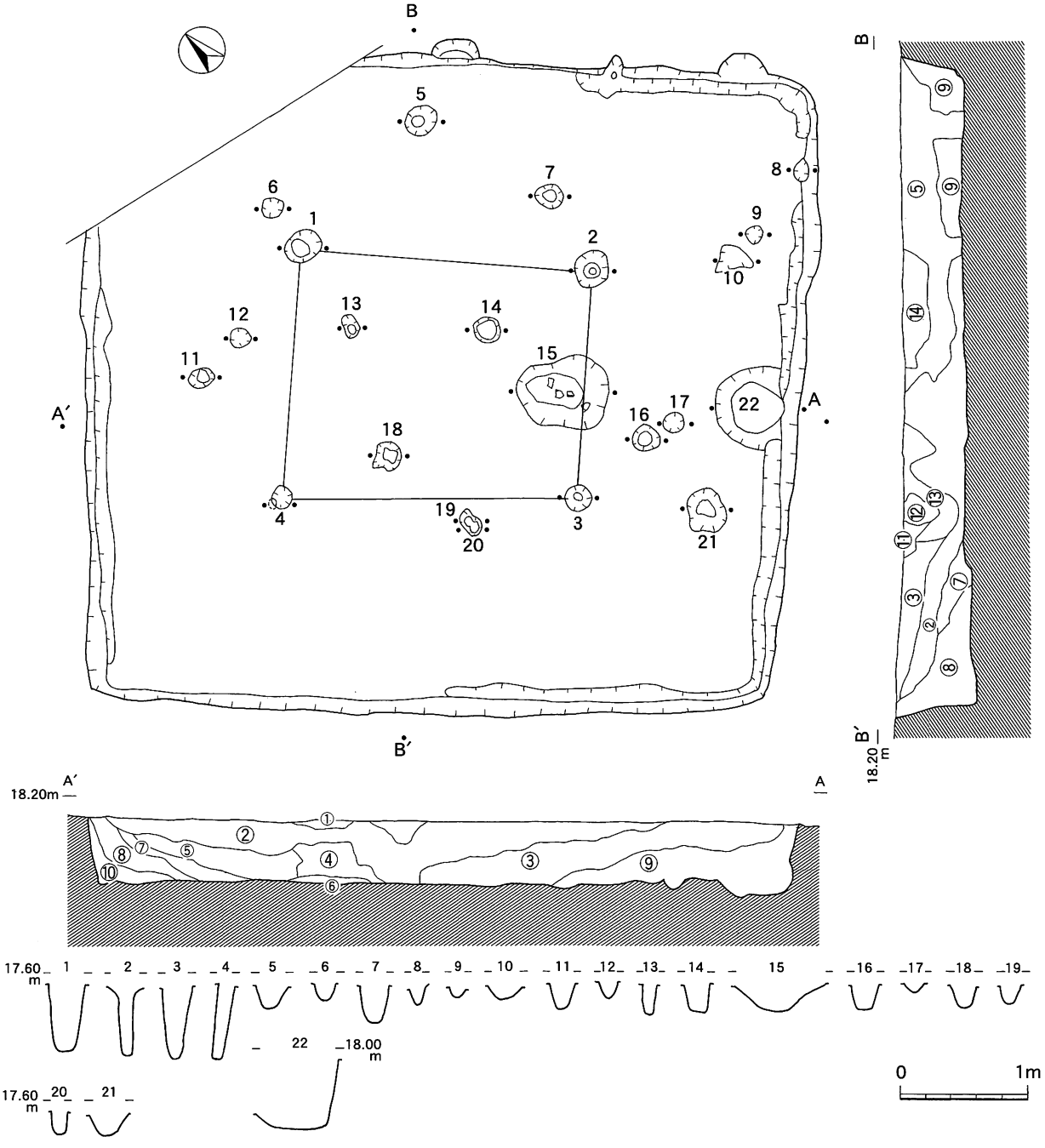
57は，須恵器坏である。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。

【竪穴住居跡３号】（第27図）

Ａ・Ｂ－８・９区で検出した。5.64m×5.23mの方形を呈している。北側の隅が調査区外にはみだしている。竪穴内から22基のピットを検出した。このうち，3・5・16・20のみが50㎝以上の深さを有している。配置から４本柱の主柱穴である可能性が高い。検出面から50㎝を残す。

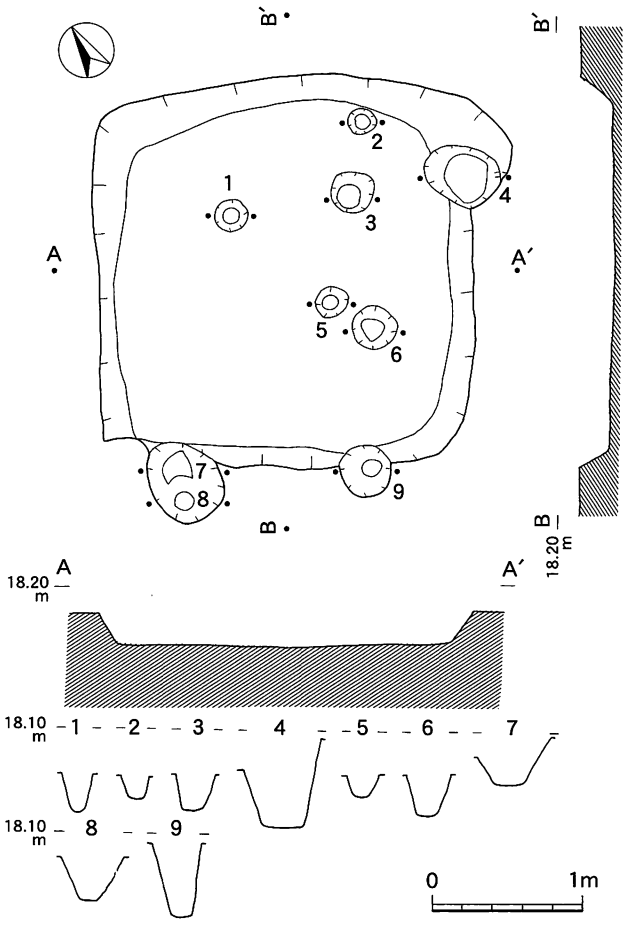


第26図　竪穴住居跡２号内出土遺物



第27図　竪穴住居跡３号実測図

番号	色調	備　　考	番号	色調	備　　考
1	淡黄褐色		8	淡褐色	
2	淡黄褐色	アカホヤブッロク混	9	淡黄褐色	
3	淡黄褐色	アカホヤ極少量混	10	淡黄褐色	
4	淡黒褐色	ブロックやや多い	11	淡黒褐色	やや明るい
5	淡黒褐色		12	淡黄褐色	
6	淡褐色		13	淡黒褐色	
7	淡褐色	アカホヤブッロク混軟質	14	淡褐色	アカホヤブロックやや多い



第28図　竪穴住居跡４号実測図

【竪穴住居跡３号内出土遺物】（第29図，58～76）

竪穴住居跡３号内からは，パンケース３箱ほどの遺物が出土している。そのうちの19点を図化した。

58～75は成川式土器，76は須恵器である。

58～60は，甕である。

58は，甕の口縁部である。口縁部がやや内湾し，胴部にキザミ目が施された突帯が廻る。内外面にハケ目が施されている。

59は，甕の口縁部付近である。口縁部に向かってやや内湾しながら立ち上がるが，上下が欠損しているため詳細は不明である。胴部にキザミ目が施された突帯が１条廻る。内外面にハケ目が施されている。

60は，甕の底部である。脚部の内面天井部が下方に膨らんでいる。内外面はナデ調整が施されている。脚部は欠損している。

61・62は，壺である。いずれも頸部付近である。

61は，頸部より上には内外面とも条痕が残る。屈曲部内面に指頭圧痕が廻る。

62は，頸部にキザミ目を施された１条の突帯が廻る。ローリングを受けている。

63～65は，高坏である。いずれも坏部である。

63は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がり口縁部付近でやや外反する。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。

64・65は，内外面とも丹塗りである。

66～69は，鉢である。

66は，鉢である。口縁部にわずかな欠損があるのみで，ほぼ完形品で出土している。底部からゆるやかに立ち上がり，口縁部で外反する。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。

67は，鉢である。底部からゆるやかに立ち上がり，口縁部で直立する。外面は丹塗りされたのちにミガキが施されている。内面は丁寧なナデ調整である。

68は，鉢の口縁部付近から底部である。ゆるやかに立ち上がり口縁部付近で内湾する。外面は丹塗りで，ミガキが施されている。内面は丁寧なナデ調整が施されている。

69は，鉢の底部である。内面が膨らんでおり，不規則なキザミ目が残っている。外面は丹塗りされている。鉢ではない可能性もある。

70～74は，坩である。71～74は，破片のためハソウである可能性もある。

70は，坩である。平底で外面は丹塗りののちミガキが施されている。内面は頸部より上部は丁寧なナデ調整が施されている。完全な形で出土しているが，胴部の屈曲部で上下２つに分離している。

71～73は，坩の口縁部である。３点とも内外面丹塗りである。

71は，外面はミガキ，内面はハケ目が施されている。

72は，外面はミガキ，内面はナデ調整が施されている。

73は，外面はミガキ，内面上部はハケ目，下部はナデ調整が施されている。

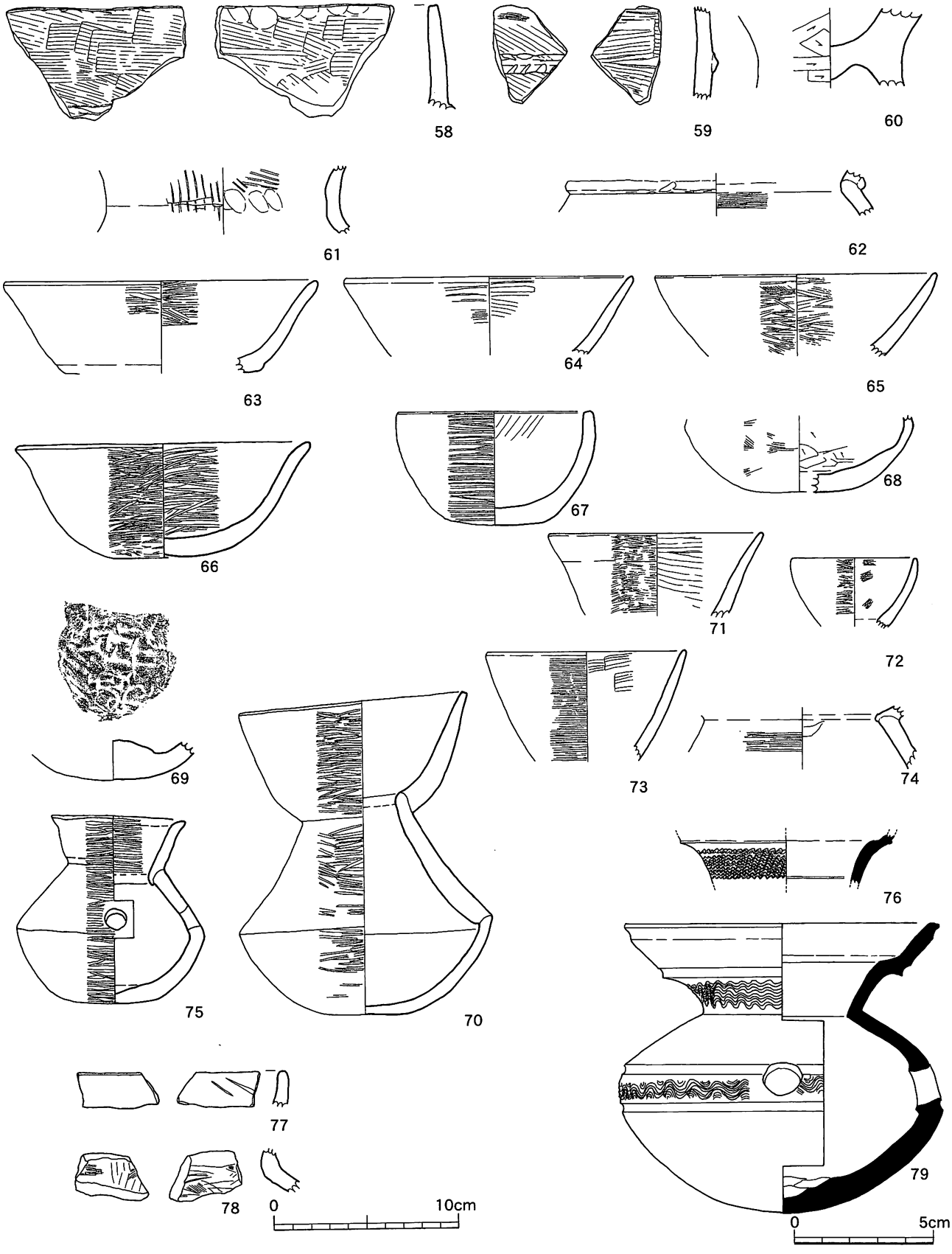
74は，坩の頸部付近である。外面のみ丹塗りのあとミガキが施され，内面はナデ調整が施されている。

75は，ハソウである。平底で口縁部はまっすぐに立ち上がったあと口唇部付近で外反する。胴部の稜より上部に直径13㎜の単孔が穿たれている。外面全面と内面頸部より上位は，丹塗りのあとミガキが施されている。内面下部には成形時に粘土を絞った痕跡が残っている。口唇部がわずかに欠損しているだけで，ほぼ完全な形で出土している。

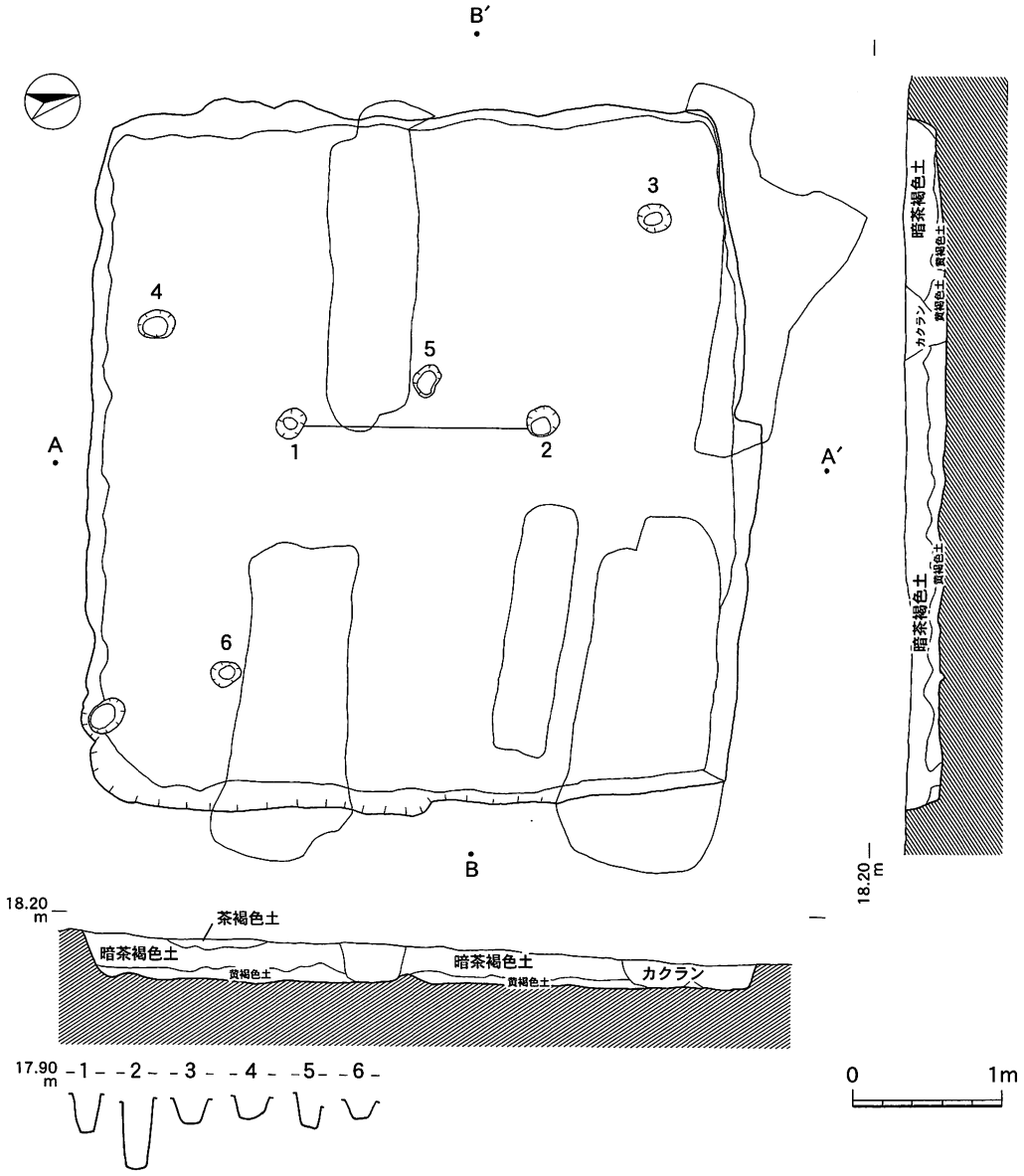
76は，須恵器のハソウである。小片であるため詳細は不明であるが，頸部付近である。９条の櫛描き波状文が施されている。内面は上部を中心に灰釉が付着している。

【竪穴住居跡４号】（第28図）

Ｂ－７区で検出した。2.63m×2.36mの略方形を呈している。竪穴内および周辺部に配置が不規則な９基のピットを検出している。検出面から深さ20㎝を残す。



第29図　竪穴住居跡３・４号内出土遺物



第30図　竪穴住居跡５号実測図

【竪穴住居跡４号内出土遺物】（第29図，77～79）

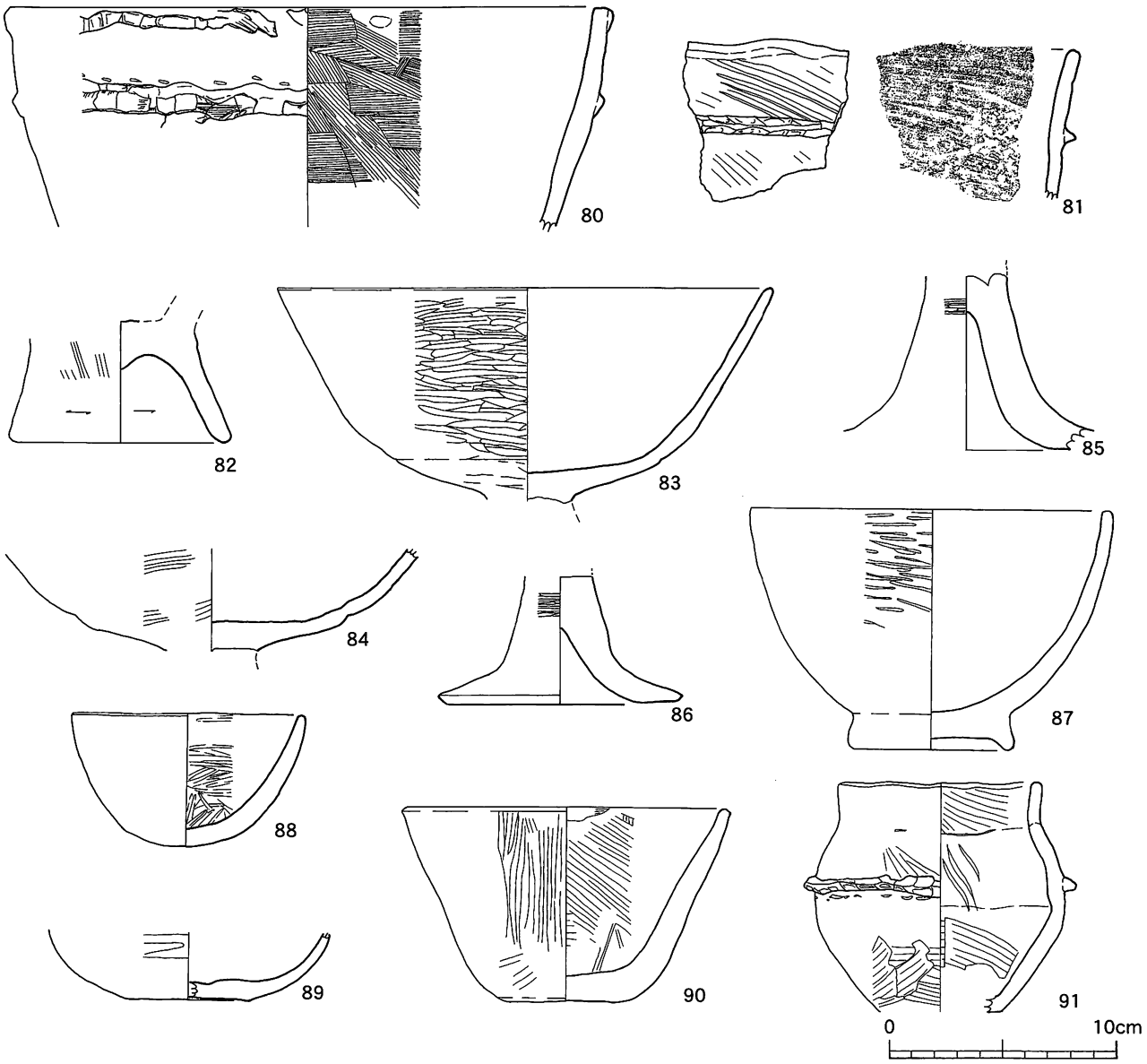
竪穴住居跡４号内からは，全部で11点の遺物が出土した。そのうちの３点を図化した。

77・78は成川式土器，79は須恵器である。

77は，甕の口縁部である。外面にススが付着している。

78は，壺の頸部である。外面にはハケ目が残り，内面はナデ調整が施されている。

79は，須恵器のハソウである。頸部から口縁部にかけてラッパ状に開きながら二重口縁を呈して立ち上がる。頸部と胴部最大径部分に櫛描き波状文が施される。体部の単孔は，櫛描き波状文の施文後に穿たれている。口縁内面と体部外面に灰釉が付着している。底部内面は棒状工具により突いて整形されている。櫛描き波状文の施文具は12条の櫛歯を有する。頸部以下は破損がみられないが，頸部より上位は１／10ほどしか残存していない。



第31図　竪穴住居跡５号内出土遺物

【竪穴住居跡５号】（第30図）

Ｂ－３・４区で検出した。4.57m×4.37mの方形を呈している。後世の撹乱のために削平を受けている部分があり断定できないが，2本柱の竪穴建物跡である。検出面から深さ25cmを残す。

【竪穴住居跡５号内出土遺物】（第31図，80～91）

竪穴住居跡５号内からは，パンケース約１箱分の遺物が出土している。そのうちの12点を図化した。

80～91は，全て成川式土器である。

80～82は，甕である。

80・81は甕の口縁部から胴部である。

80は，口縁部に向かってやや内湾しながら立ち上がる。キザミ目を施された突帯が口唇部と胴部の２条貼付されている。口唇部の突帯は，端が下方を向き，終結している（あるいは始点か）が，破片のため，どこが始点になるか確認できない。外面はナデ調整，内面は浅いハケ目が残る。外面にススが付着している。

81は，口縁部がほぼ直線状に立ち上がる。胴部にキザミ目を施された突帯が１条廻る。内外面にハケ目が残る。外面にススが付着している。

82は甕の底部である。脚部は，直線的にのび端部は，ほぼ平坦に仕上げられている。脚台内面天井部が，下方に膨らんでいる。外面にハケ目が残る。

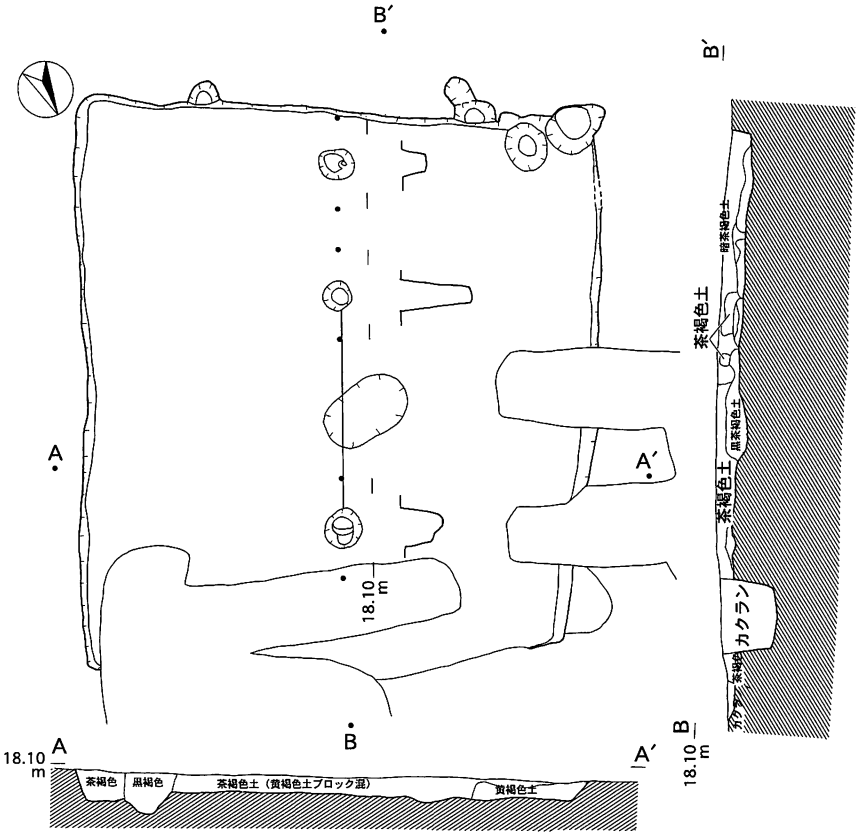
83～86は，高坏である。

83・84は，高坏の坏部である。

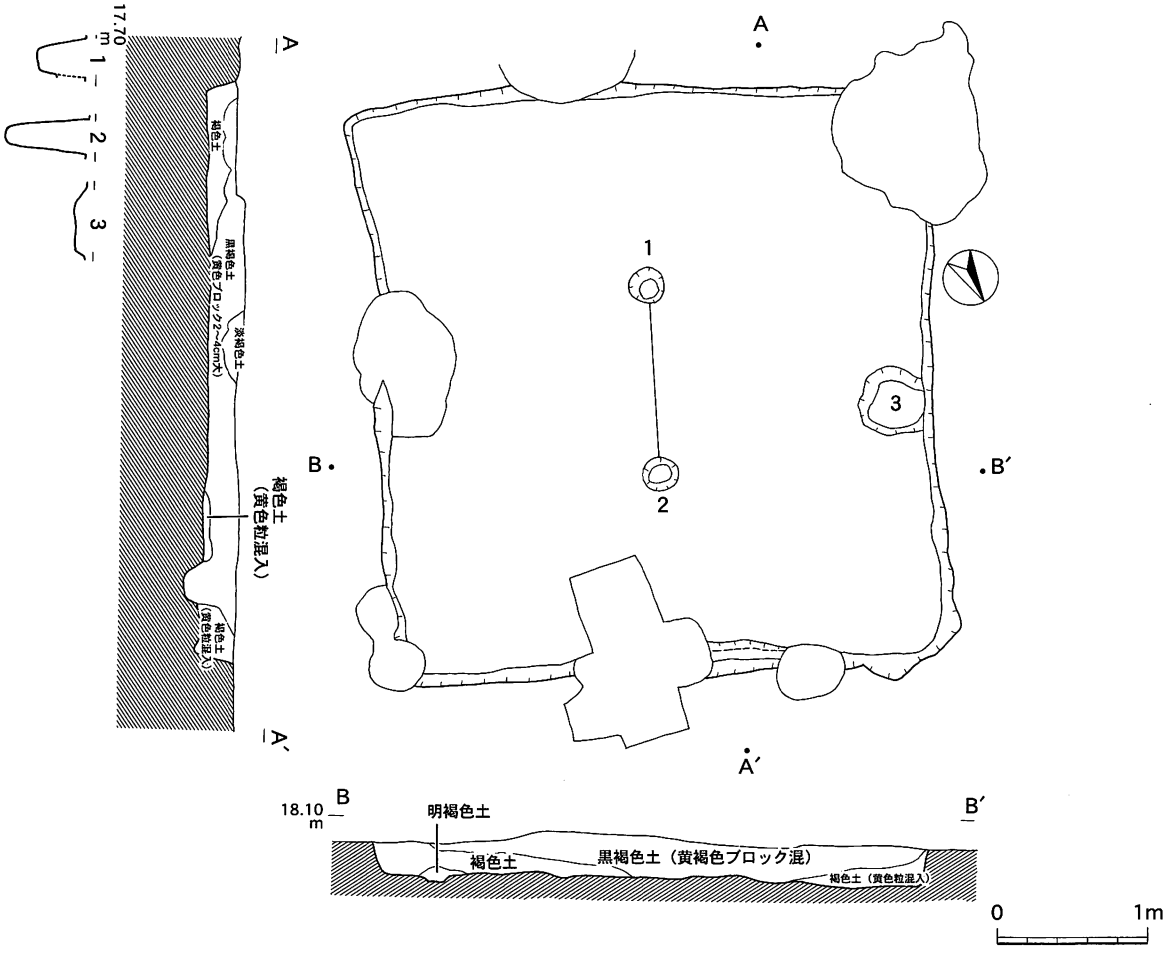
83は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がり直線的に口縁部に至る。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。

84は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。内面は器面の剥落が激しい。

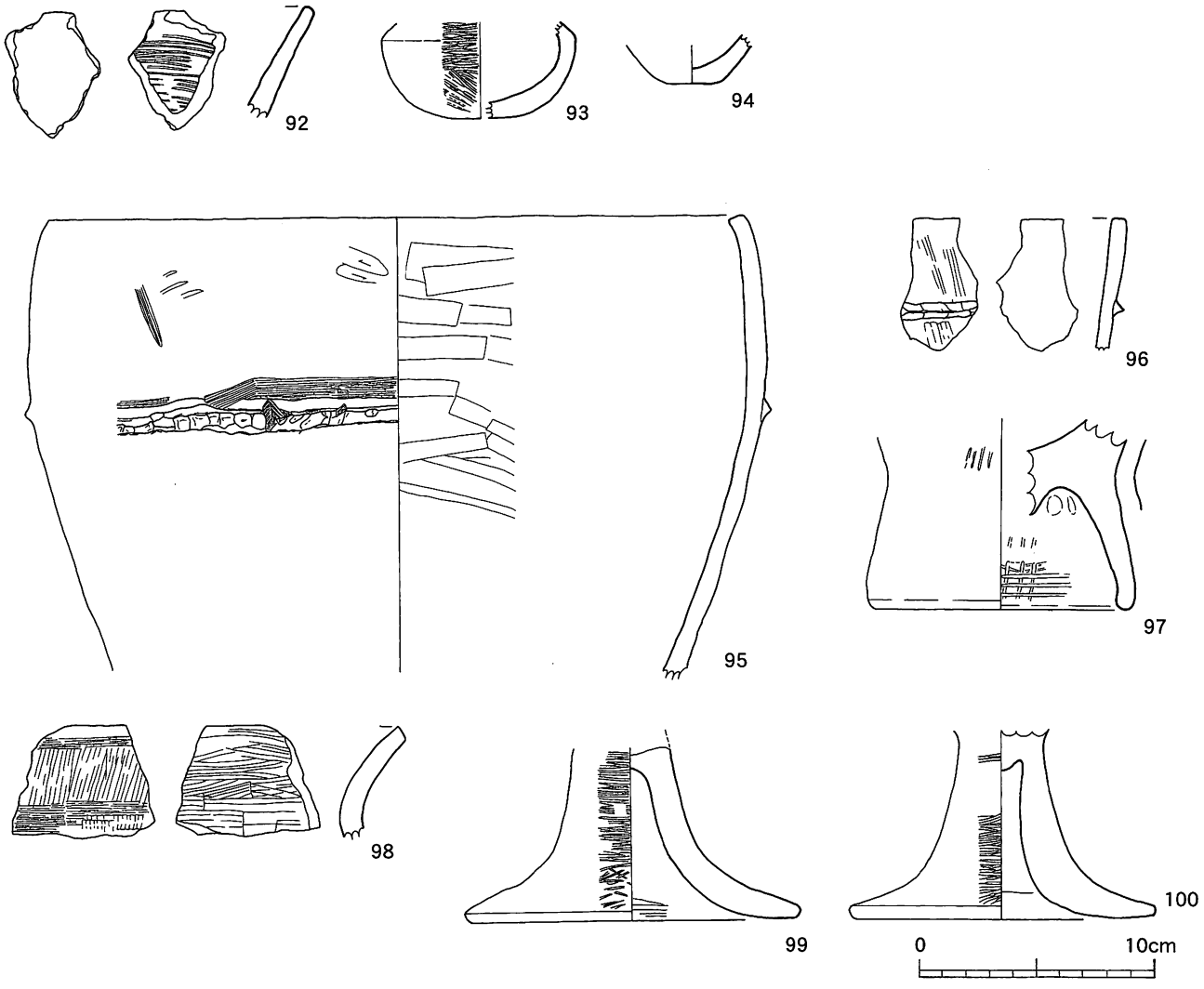
85・86は，高坏の脚部である。



第32図　竪穴住居跡６号実測図



第33図　竪穴住居跡７号実測図



第34図　竪穴住居跡６・７号内出土遺物

85は，空洞の上部に坏部との接合に関係すると思われる粘土塊が残っている。外面は丹塗りされたのちミガキが施されている。接地面にはハケ目が残る。

86は，上部にわずかに坏部がのっていた痕跡がみられることから，小型で脚が短いタイプの高坏である。外面は丹塗りされたのちミガキが施されている。内面の一部にも丹が付着している。接地面にはハケ目が残る。

87～90は，鉢である。

87は，脚付の鉢である。脚部内面は浅く平坦にくぼみ，高台状を呈している。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。脚部内面は丹塗りのみでミガキは施されていない。割れているが，口唇の一部が欠けるのみで，ほぼ完形に復元することができた。

88は，丸底の鉢である。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施され，内面上部には，ハケ目も残る。口縁部から胴部下方にかけて，幅４㎝ほど欠損しているが，ほぼ完形の状態で出土している。

89は，平底の鉢である。底部はやや上げ底で，碁笥底状を呈している。外面にはミガキが施されている。内面は器壁が剥落しており，調整の詳細は不明である。

90は，平底の鉢である。体部はゆるやかに立ち上がったあと直線状にのびる。内外面にハケ目を施したあと口唇部に粗いナデ調整が施されている。粗製の鉢である。

91は，手づくねの壺である。底部がほぼ欠損しているが平底を呈すると思われる。胴部は中ほどで内湾したのち頸部で直に立ち上がる。胴部最大径部分に，粗いキザミ目が施された突帯が１条廻る。内外面にハケ目が残る。粗製の土器である。

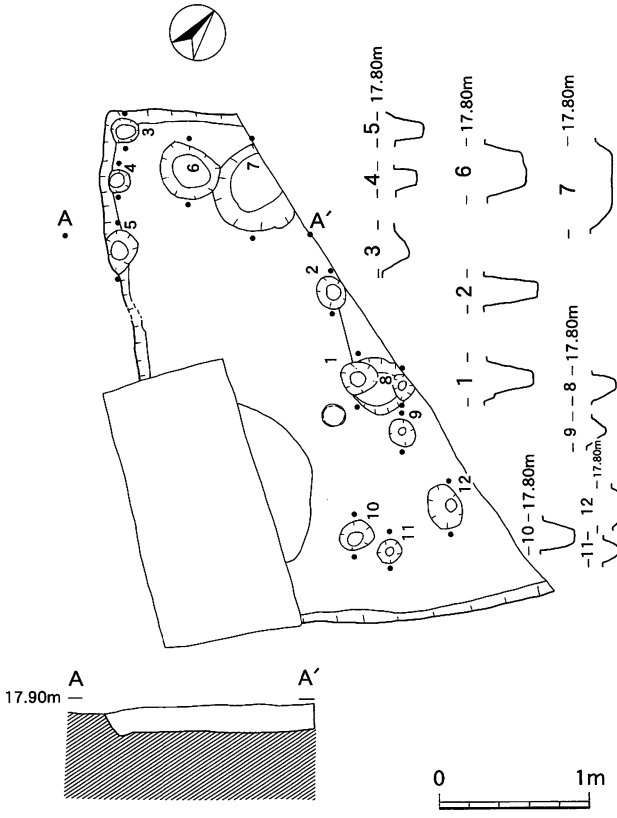
【竪穴住居跡６号】（第32図）

Ａ・Ｂ－３区で検出した。3.88m×3.42mの方形を呈している。二本柱の竪穴住居跡である。検出面から深さ11㎝を残す。

【竪穴住居跡６号内出土遺物】（第34図，92～94）

竪穴住居跡６号内からは，全部で７点の遺物が出土している。そのうちから３点を図化した。

92～94は，全て成川式土器である。



第35図　竪穴住居跡８号実測図

92は，壺の口縁部である。小破片のため器形の詳細は不明である。外面はナデ調整，内面にはハケ目が残っている。

93・94は，坩の底部片である。いずれも小片のため器形の詳細は不明であるが，平底を呈している。93は，外面に丹塗りのあとミガキが施されている。94は，外面に粗いナデ調整が施されており，内面が黒色化していることから，坩ではない可能性もある。

【竪穴住居跡７号】（第33図）

Ｂ－７区で検出した。3.95m×3.73mの方形を呈している。二本柱の竪穴住居跡である。検出面から深さ24cmを残す。

【竪穴住居跡７号内出土遺物】（第34図，95～100）

竪穴住居跡７号内からは，パンケース約１箱分の遺物が出土した。そのうちの６点を図化した。

95～100は，全て成川式土器である。

95～97は，甕である。

95は，甕の口縁部から胴部である。口縁部がやや内湾しながら立ち上がる。胴部にキザミ目を施された突帯が１条廻る。外面はナデ調整，内面にはハケ目が残る。外面全体と内面の一部にススが付着している。

96は，甕の口縁部付近である。口縁部は，ほぼ直線的に立ち上がる。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。内外面にナデ調整が施されている。

97は，甕の底部である。脚部は直線的にのびる。脚台内面天井部が，下方に膨らんでいる。外面に条痕が残る。脚台内面下部に横位のハケ目が残る。

98は，壺の口縁部である。口縁部は外反し，口唇部は平坦である。外面に縦位のハケ目，内面には横位のハケ目が残る。

99・100は，高坏の脚部である。

99は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。接地面にほぼ円形にハケ目が残る。

100は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。接地面は丁寧なナデ調整が施されている。

【竪穴住居跡８号】（第35図）

Ａ・Ｂ－７区で検出した。調査区外に広がっているため全容は不明であるが，残存部では3.46mを測る。二本柱の竪穴住居跡の可能性がある。検出面から深さ17cmを残す。

【竪穴住居跡８号内出土遺物】（第36図，101～113）

竪穴住居跡８号内からは，パンケース約１箱分の遺物が出土した。そのうちの13点を図化した。

101～113は，全て成川式土器である。

101～103は，甕である。

101は，甕の底部である。脚部は直線的にのびる。脚台内面天井部が，やや下方に膨らんでいる。外面にハケ目が残る。脚台内面下部に斜位のハケ目が残る。

102は，甕の口縁部である。小破片のため詳細は不明。内面に横位のハケ目が残る。

103は，甕の底部である。脚部は粘土の接合面ではずれている。脚台内面天井部が，下方に膨らんでいる。内外面にハケ目が残る。外面にススが付着している。

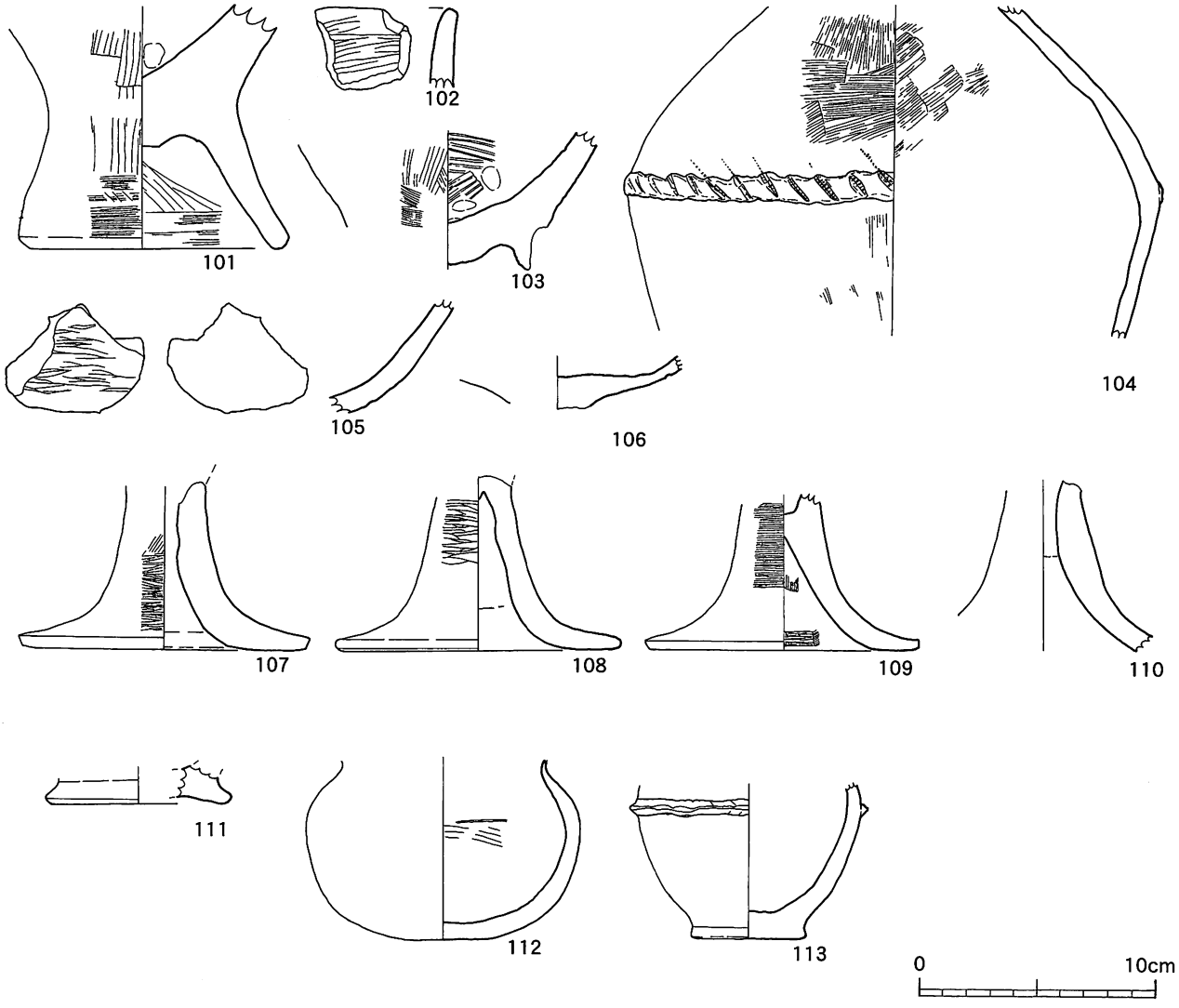
104は，壺の胴部である。胴部最大径付近にキザミ目を施された突帯が１条廻る。内外面の一部にハケ目が残る。

105～110は，高坏である。105・106は坏部，107～110は脚部である。

105は，小破片のために詳細は不明。下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。

106は，下部の段のところで欠損し，円形を呈している。円盤状土製品（通称：メンコ）に転用された可能性もある。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。器壁の丹が，かなり剥落している。

107は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。接地面にナデ調整が施される。内面の一部には丹が付着している。



第36図　竪穴住居跡８号内出土遺物

108は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。色がくすんでいる。接地面に丁寧なハケ目が残る。

109は，上部の坏部との接合面にくぼみを有する。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面下半部に丁寧なナデ調整が施されている。

110は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面下半部に丁寧なナデ調整が施されている。

111は，鉢の底部と思われるが，小破片のため詳細は不明。脚部内面がややくぼんでいる。内外面ともナデ調整が施されている。胎土に茶粒を多く含み赤色を呈しているが，丹塗りは施されていない。

112は，坩の胴部～底部である。外面は丹塗りされたあとでミガキが施されている。内面はナデ調整が施されている。

113は，手づくね甕である。底部は円盤状を呈する平底で，体部がやや内湾しながら立ち上がる。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。内外面ともナデ調整が施されている。

【竪穴住居跡９号】（第37図）

Ｃ・Ｄ－23・24区で検出した。調査区外に広がっているため全容は不明である。建て直しが行われたらしく，高低差約10㎝の段差が床面についている。内側の竪穴は4.72m×4.61mの方形を呈している。外側の竪穴は残存部で6.33mを測る。どちらも四本柱の竪穴住居跡である。検出面から深さ20㎝を残す。

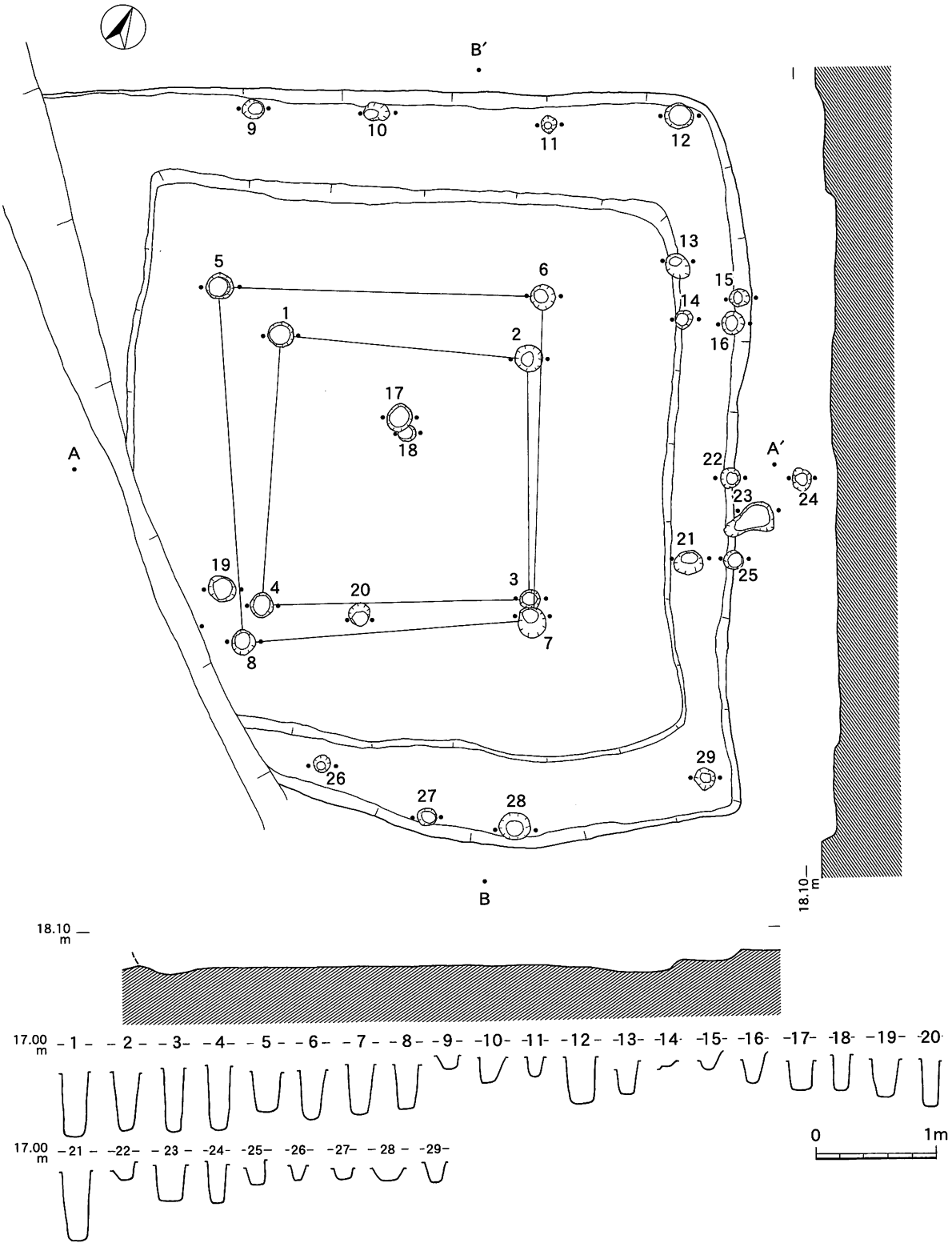
【竪穴住居跡９号内出土遺物】（第39～40図，114～144）

竪穴住居跡９号内からは，パンケース約６箱分の遺物が出土した。そのうちの31点を図化した。

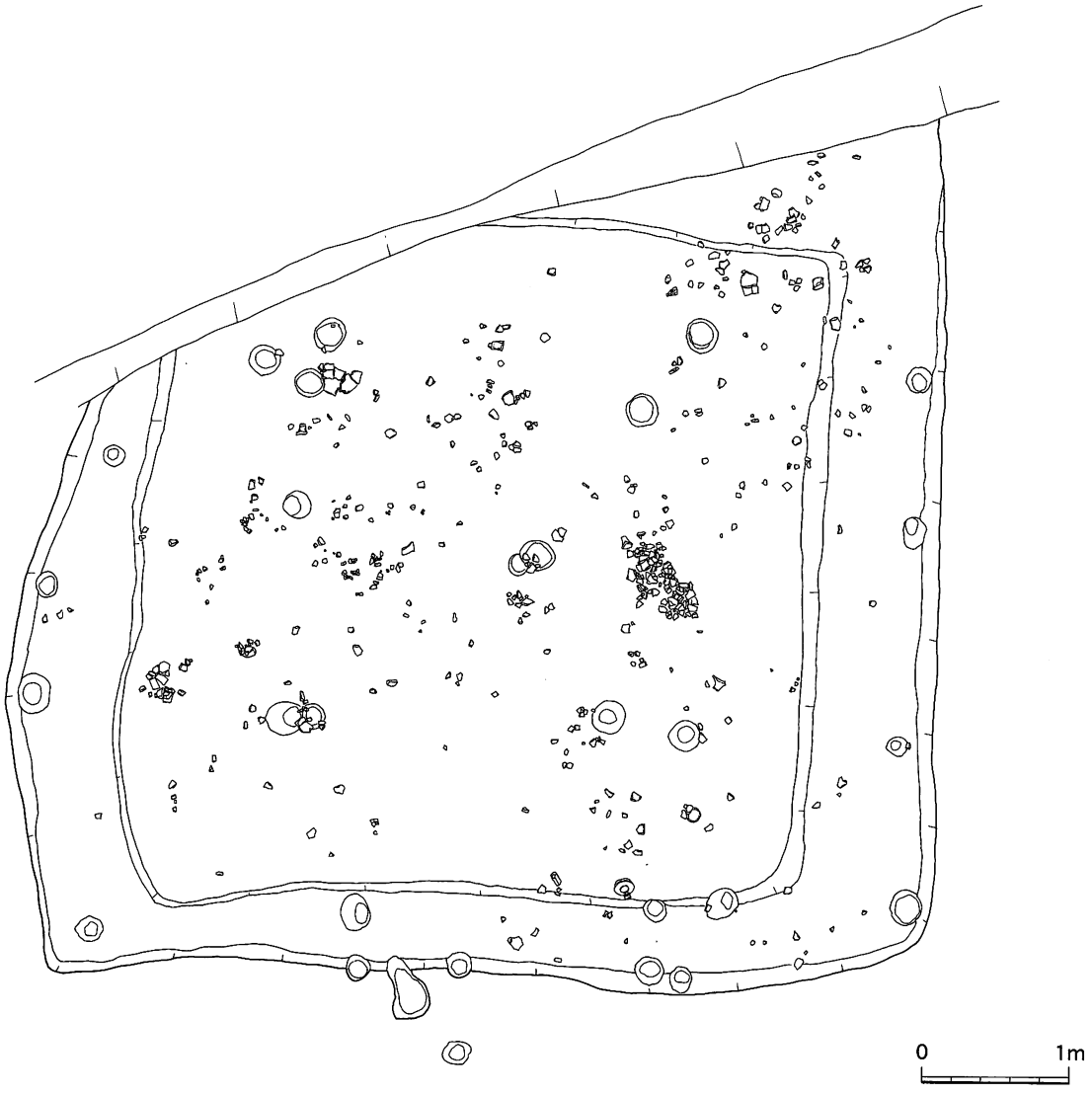
114～141は成川式土器，142～144は須恵器である。

114～118は，甕である。

114は，甕の口縁部～胴部である。口縁部はやや内湾して立ち上がる。胴部にキザミ目が施された突帯が１条廻る。内外面にハケ目が残る。内外面の一部にススが付着している。



第37図　竪穴住居跡９号実測図



第38図　竪穴住居跡９号遺物出土状況

115は，大型の甕の胴部下半である。外面全体と内面上部にハケ目が残る。外面にススが付着している。

116は，甕の口縁部である。口縁部は，ほぼ直線的にのびる。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。内外面にハケ目が残る。外面にススが付着している。

117は，甕の胴部である。小破片のため詳細は不明。キザミ目の施された突帯が廻る。内外面にナデ調整が施されている。外面にはススが付着している。

118は，甕の底部である。脚部は欠損している。脚台内面天井部は平坦に調整されている。外面にはわずかに，内面には厚くススが付着している。

119～121は，壺である。

119は，壺の口縁部～胴部である。体部は頸部で大きく屈曲したのち，口縁部付近でやや内湾する。頸部にキザミ目の施された突帯が１条廻る。外面にハケ目が残る。ローリングを受けている。

120は，壺の胴部である。小破片でローリングを受けているため詳細は不明である。キザミ目を施された２条の突帯が廻る。内面にはハケ目が残っている。

121は，壺の底部である。小破片のため詳細は不明である。丸底を呈すると思われる。内外面はナデ調整が施されている。

122～136は，高坏である。122～128は坏部，129～136は脚部である。

122は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。外面にススが付着している。

123は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がり口縁部でやや外反する。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。

124は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面にミガキが施されているが，丹塗りされていない。

125は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。

126は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。口径が10.5cmと小さい。

127は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面は丁寧なナデ調整が施されている。丹塗りされてはいない。

128は，下部に段を持つ。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。内面は器壁の剥落が激しい。

129は，坏部との接合面にくぼみが残る。外面は丁寧なナデ調整が施されている。接地面に円形のハケ目が残る。

130は，脚部外面と坏部の内外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面の一部には丹が付着している。

131は，内部の空洞は巻き成形である。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面下半部にハケ目が残る。内面の一部には丹が付着している。

132は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。丹の剥落が激しい。

133は，外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。ローリングを受けており丹はほとんど剥落している。

134は，外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面の一部には丹が付着している。

135は，内部の空洞は貫通している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面にも丹が全面に付着している。

136は，内部の空洞は巻き成形である。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている

137は，鉢である。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，口縁部で外反する。内外面に丁寧なナデ調整が施される。

138は，鉢である。底部からゆるやかに立ち上がり，口縁部で直立する。外面は丹塗りされたのちにミガキが施されている。内面は丁寧なナデ調整である。外面の一部にススが付着し，被熱のために丹の色がくすんでいる。接合部で変化していることから，廃棄後の被熱である。

139～141は，坩である。

139は，平底で，大きな胴部とそれより小さい外開きの口縁部を有する。ローリングを受けているため，調整・丹塗りの有無が不明。

140は，口縁部である。口縁部はなだらかに立ち上がり，口唇部近くでやや外反する。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。内面は丁寧なナデ調整が施されている。

141は，胴部～底部である。丸平底で，なだらかに立ち上がったあと内湾する。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。内面にはハケ目が残る。

142は，須恵器甕である。外面は平行な条痕状の叩き目が残り，内面には同心円状の当て具痕が残る。断面が赤紫色を呈している。外面に灰釉が付着している。

143は，須恵器坏である。体部は底部からやや外反しながらのびて，口縁部近くで直立する。底部外面の調整が粗い。底部内面には指頭圧痕が4か所残る。

144は，須恵器の大型ハソウである。胴部はゆるやかに立ち上がり，最大径部でゆるやかに内湾する。内外面ともナデ調整が施されている。底部内面は棒状の工具で突いている。外面上部と内面下部に灰釉が付着している。

【竪穴住居跡10号】（第41図）

C－23区で検出した。5.32m×5.31mの方形を呈している。四本柱の竪穴住居跡で，竪穴外に1対の棟持柱を持つ。竪穴内外周近くにも1対の柱穴が検出されているが，性格は不明である。検出面から深さ18cmを残す。

【竪穴住居跡10号内出土遺物】（第42図，145～157）

竪穴住居跡9号内からは，パンケース約2箱分の遺物が出土した。そのうちの13点を図化した。

145～157は，全て成川式土器である。

145～148は，甕である。

145・146は，甕の口縁部～胴部である。

145は，口縁部はやや内湾して立ち上がる。胴部に指頭圧痕が施されたすれ違いの突帯が1条廻る。内外面にハケ目が残る。

146は，口縁部はほぼ直立するが，口唇部付近でやや内湾する。胴部にキザミ目が施された突帯が2条廻る。

147・148は，甕の底部である。

147は，脚部は欠損している。脚台内面天井部がやや下方に膨らむ。

148は，脚部は直線的にのびる。脚台内面天井部がやや下方に膨らむ。内外面にハケ目が残る。

149～154は，高坏である。

149は，坏部である。下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がり，口縁部でやや外反する。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。内面は器壁の剥落が激しい。

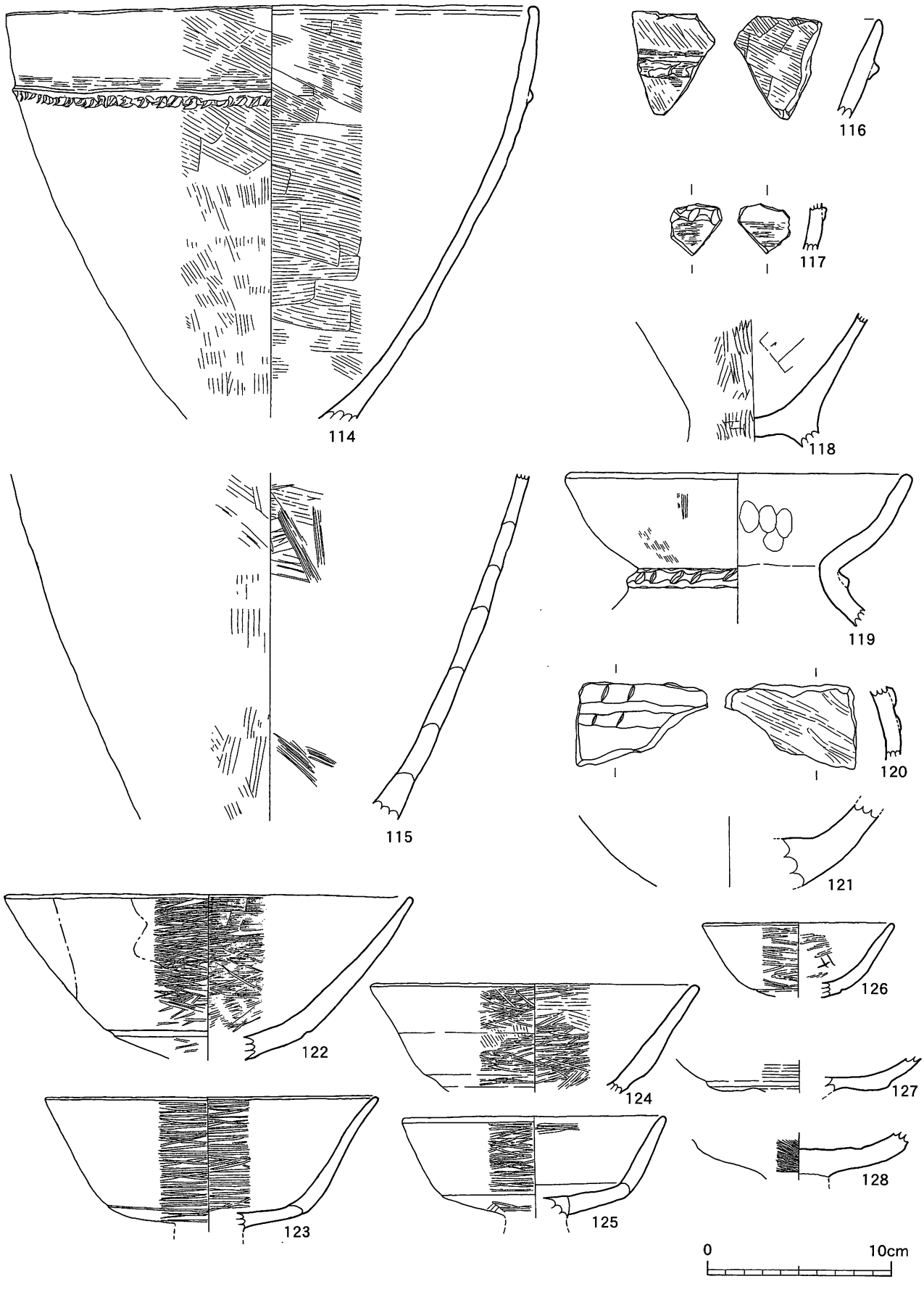
150～154は，高坏の脚部である。

150は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。接地面には丁寧なナデ調整が施される。内面の一部には丹が付着している。

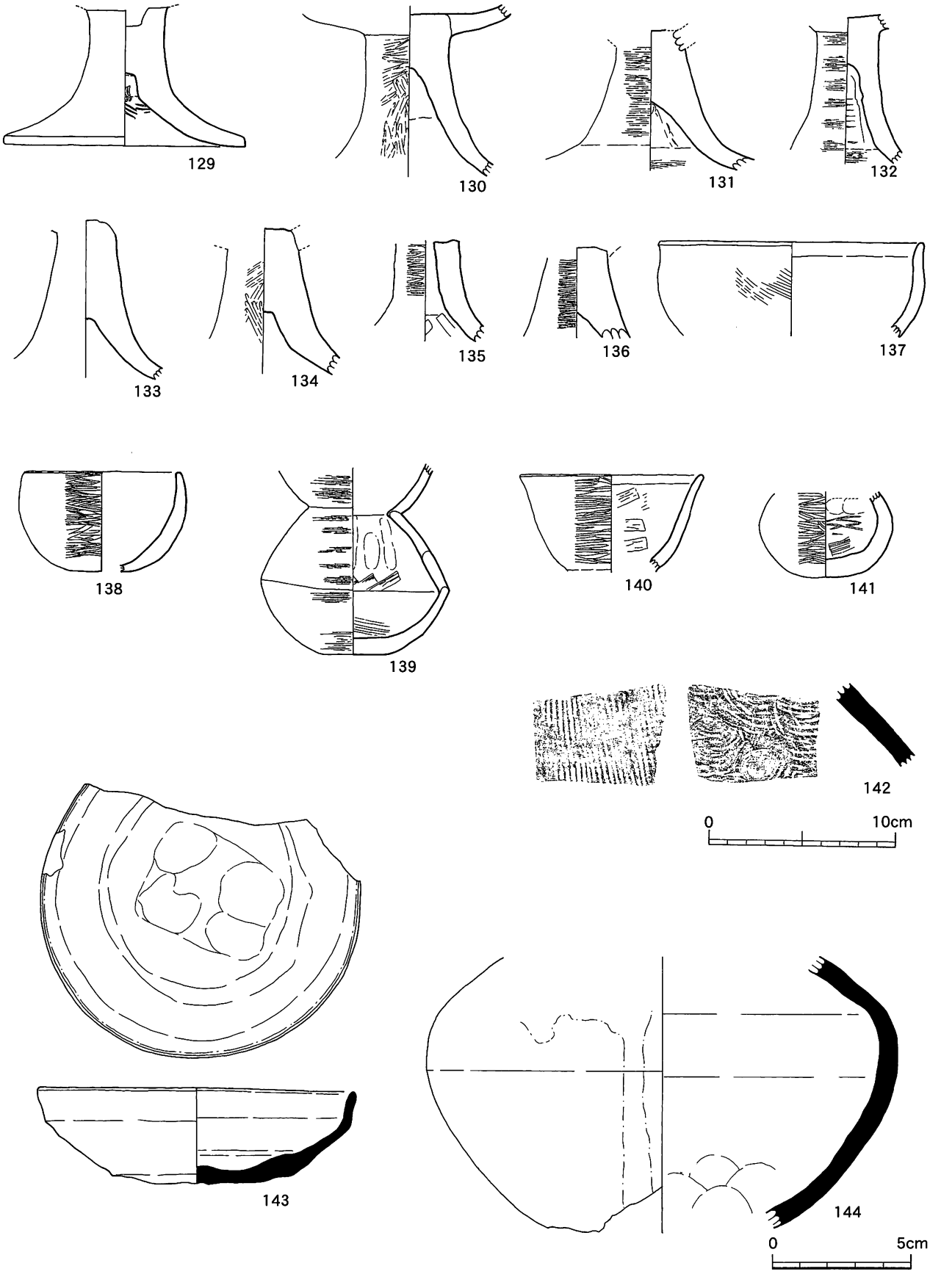
151は，外面には縦位のミガキが施される。

152は，外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面下半部にハケ目が残る。

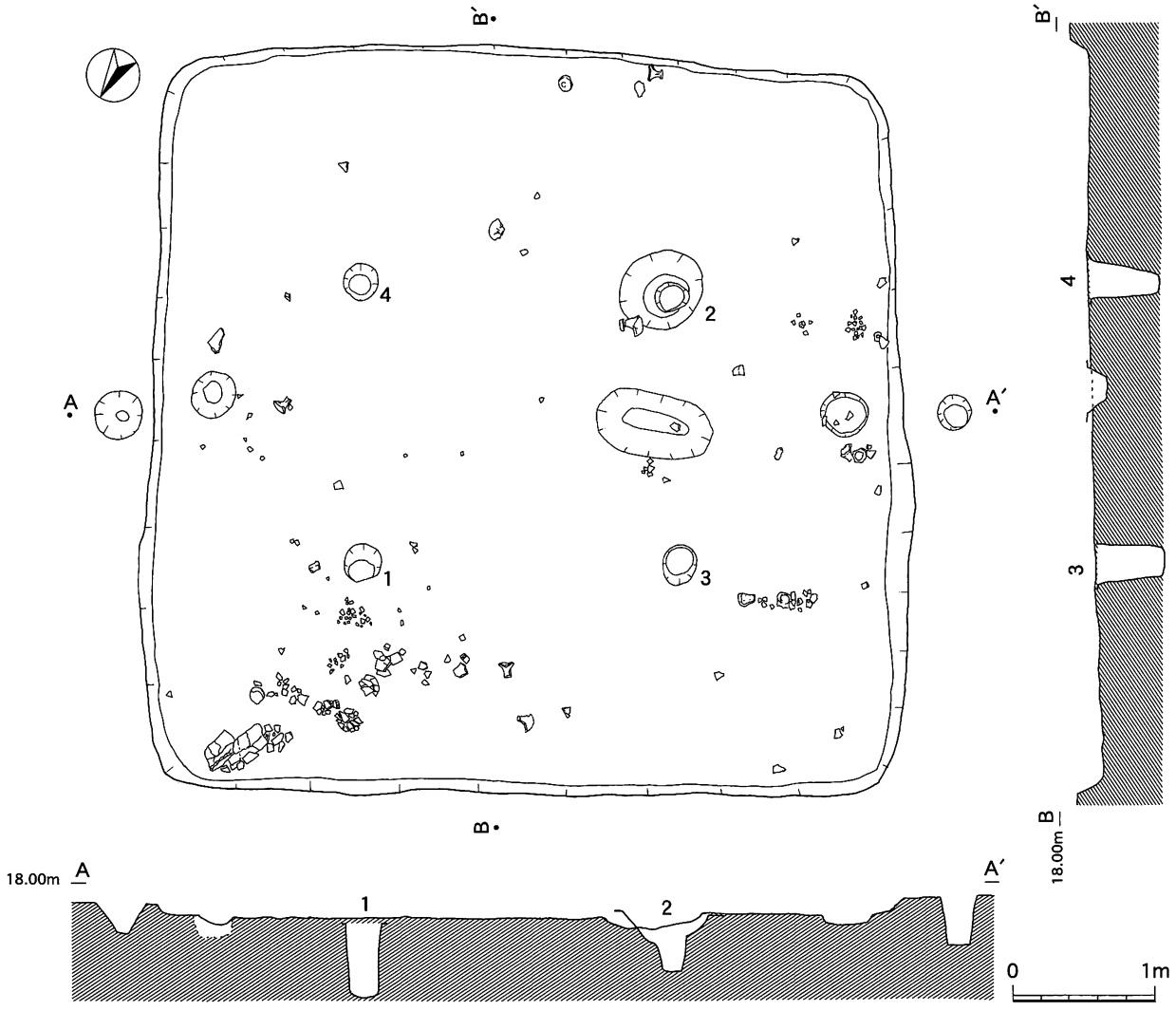
153は，外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。接地面には丁寧なナデ調整が施される。



第39図　竪穴住居跡９号内出土遺物(1)



第40図　竪穴住居跡９号内出土遺物(2)



第41図　竪穴住居跡10号実測図

154は，内部の空洞は削り出しで成形している。脚部外面と坏部の内外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。

155は，鉢である。底部は平底でゆるやかに内湾しながら立ち上がる。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面はローリングを受けているため不明。

156・157は，坩である。

156は，平底で張り出した胴部とそれより小さいやや外開きの口縁部を有する。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。内面は頸部より上位は丁寧なナデ調整が施され，頸部より下位はほぼ無調整である。頸部より下は欠損せずに出土している。口縁部が半分ほど欠損している。

157は，胴部である。張り出した胴部を有する。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。

【竪穴住居跡11号】（第43図）

Ｂ・Ｃ－22区で検出した。建て直しが行われたらしく，２面に約15㎝の段差を有している。調査区外に広がっているため断定はできないが，内側の竪穴は5.09ｍ×4.87ｍの方形を呈している。外側の竪穴は6.39ｍ×6.28ｍの方形を呈している。内側の竪穴は四本柱の竪穴住居跡である。建て直しの際に，柱を抜き取ったらしい痕跡が柱穴に残る。検出面から深さ24㎝を残す。

【竪穴住居跡11号内出土遺物】（第45～47図，158～188）

竪穴住居跡11号内からは，パンケース約５箱分の遺物が出土した。そのうちの31点を図化した。

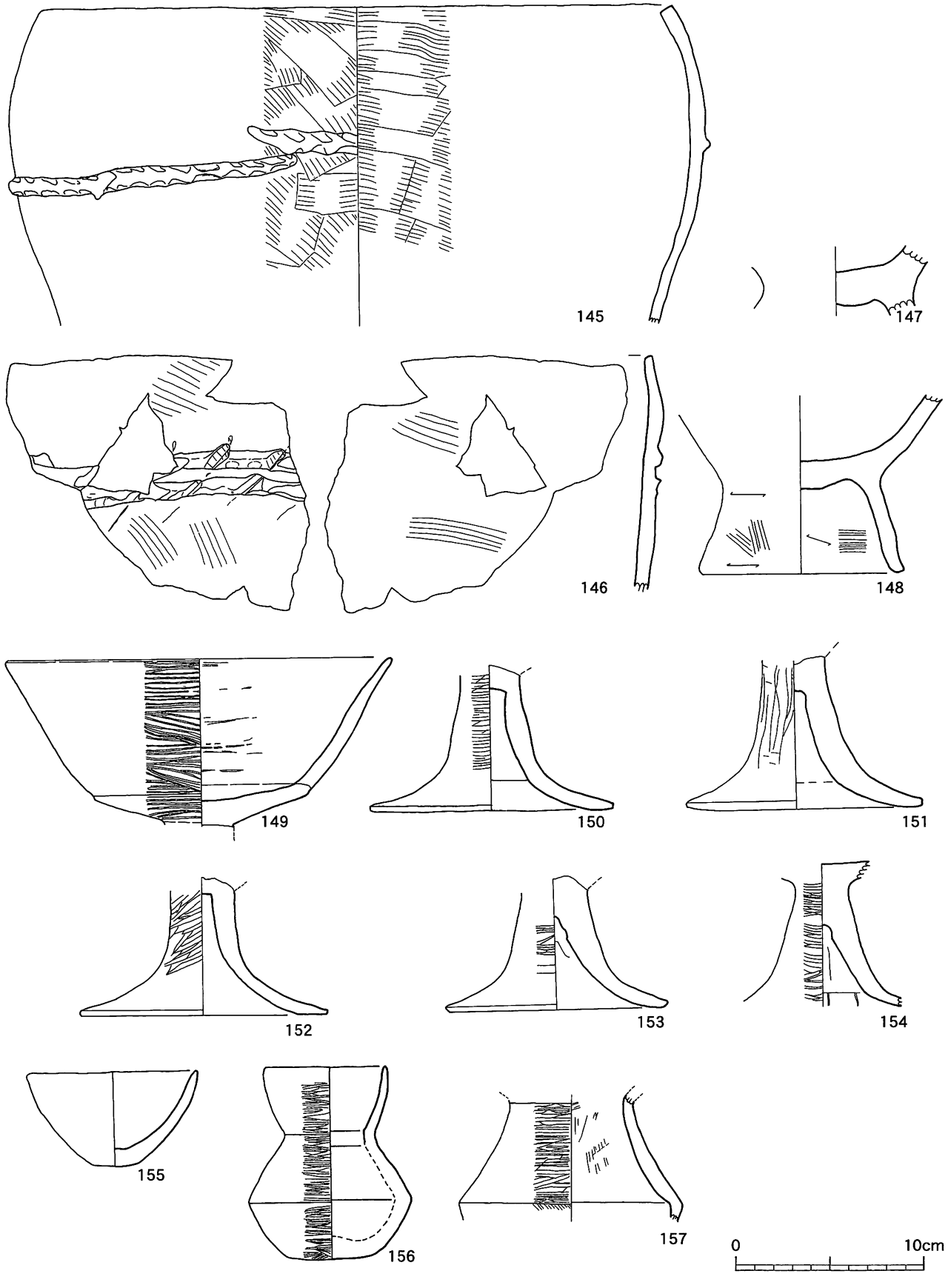
158～185は，成川式土器，186～188は須恵器である。

158～161は，甕である。

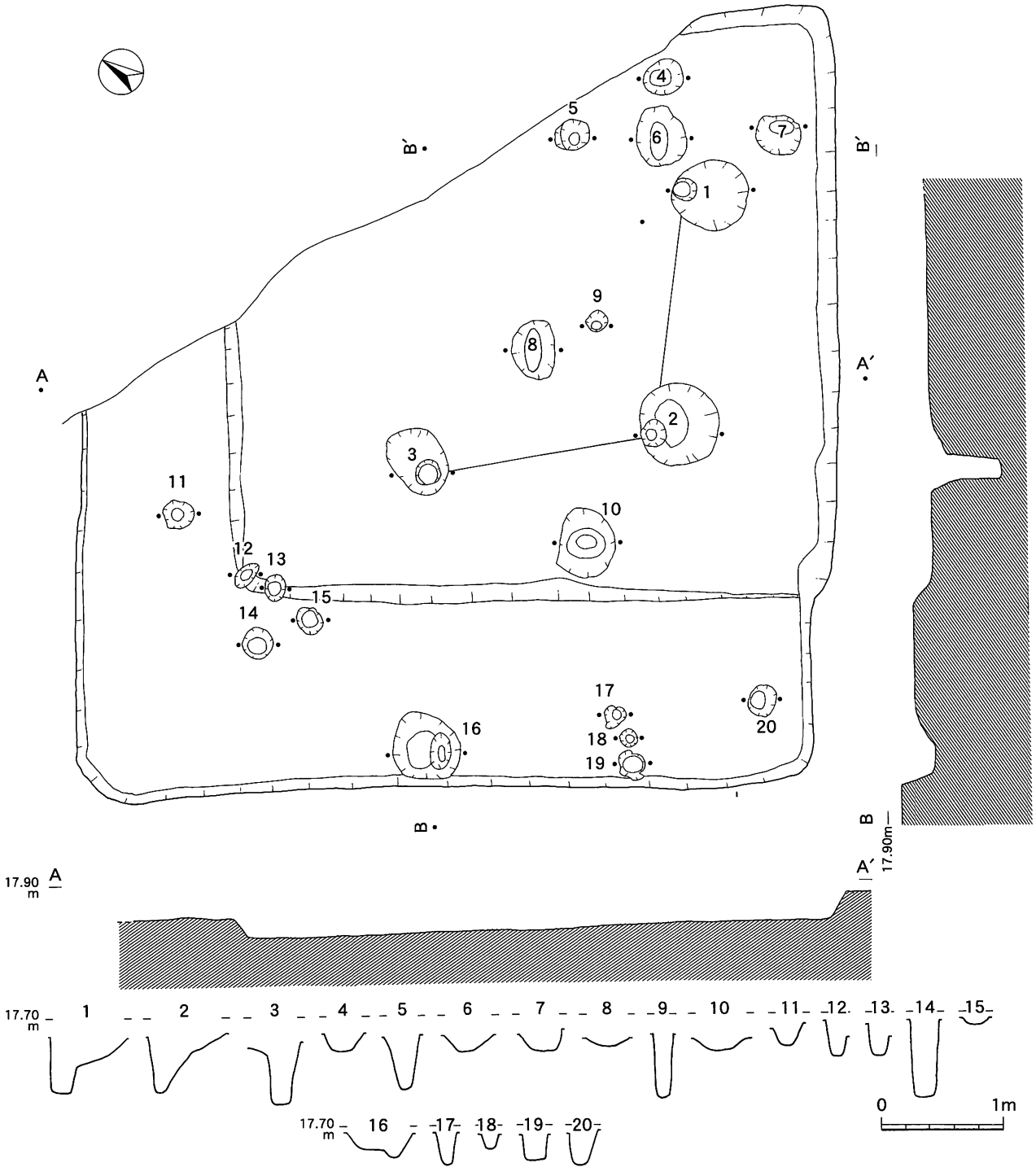
158・159は，甕の口縁部～胴部である。

158は，口縁部はやや外反して立ち上がる。胴部にキザミ目が施されたすれ違いの突帯が１条廻る。内外面はナデ調整が施される。外面下部にススが付着している。

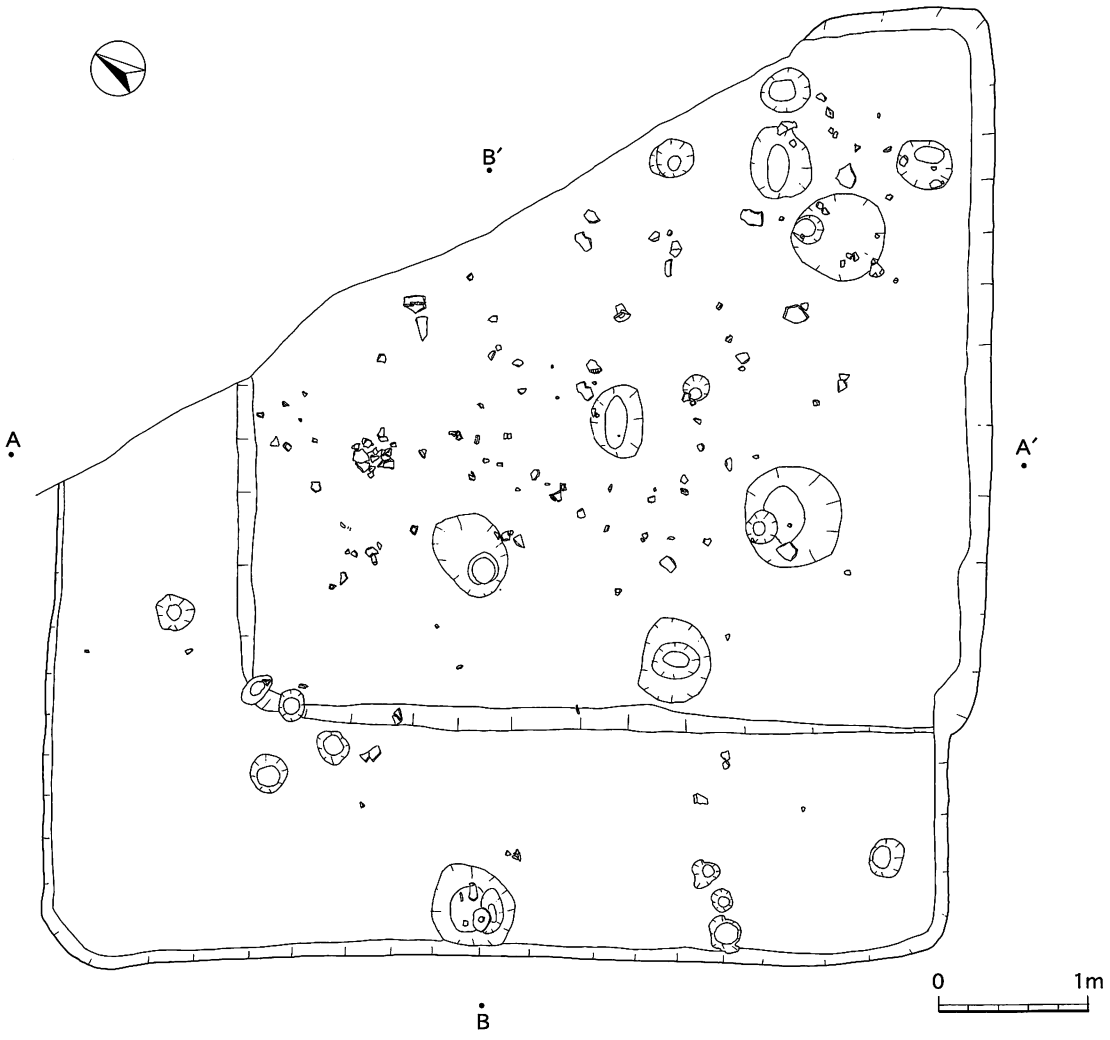
159は，口縁部はやや内湾して立ち上がる。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。内外面にハケ目が残



第42図　竪穴住居跡10号内出土遺物



第43図　竪穴住居跡11号実測図



第44図　竪穴住居跡11号遺物出土状況

る。

160は，器形は鉢であるが，外面にススが付着しているため甕として使用された可能性があると判断した。

161は，甕の底部である。脚部は欠損している。脚台内面天井部がほぼ平坦になる。内面にハケ目が残る。

162～167は，壺である。

162は，底部は丸底を呈する。体部は頸部で屈曲してほぼ直立し，口縁部でやや外反する。内外面にハケ目が残る。

163は，底部は丸底を呈する。体部は頸部で屈曲してまっすぐにのびる。内外面にハケ目が残る。

164は，底部は欠損している。体部は頸部でゆるやかに外反する。外面にハケ目が残る。

165は，大型の壺の胴部である。胴部にキザミ目の施された3条の突帯が廻る。

166は，胴部である。胴部にキザミ目の施された2条の突帯が廻る。内面最大径より上位は丁寧なナデ調整が施されている。

167は，壺の頸部である。キザミ目の施された突帯が廻る。

168～179は，高坏である。168～172は坏部，173～179は脚部である。

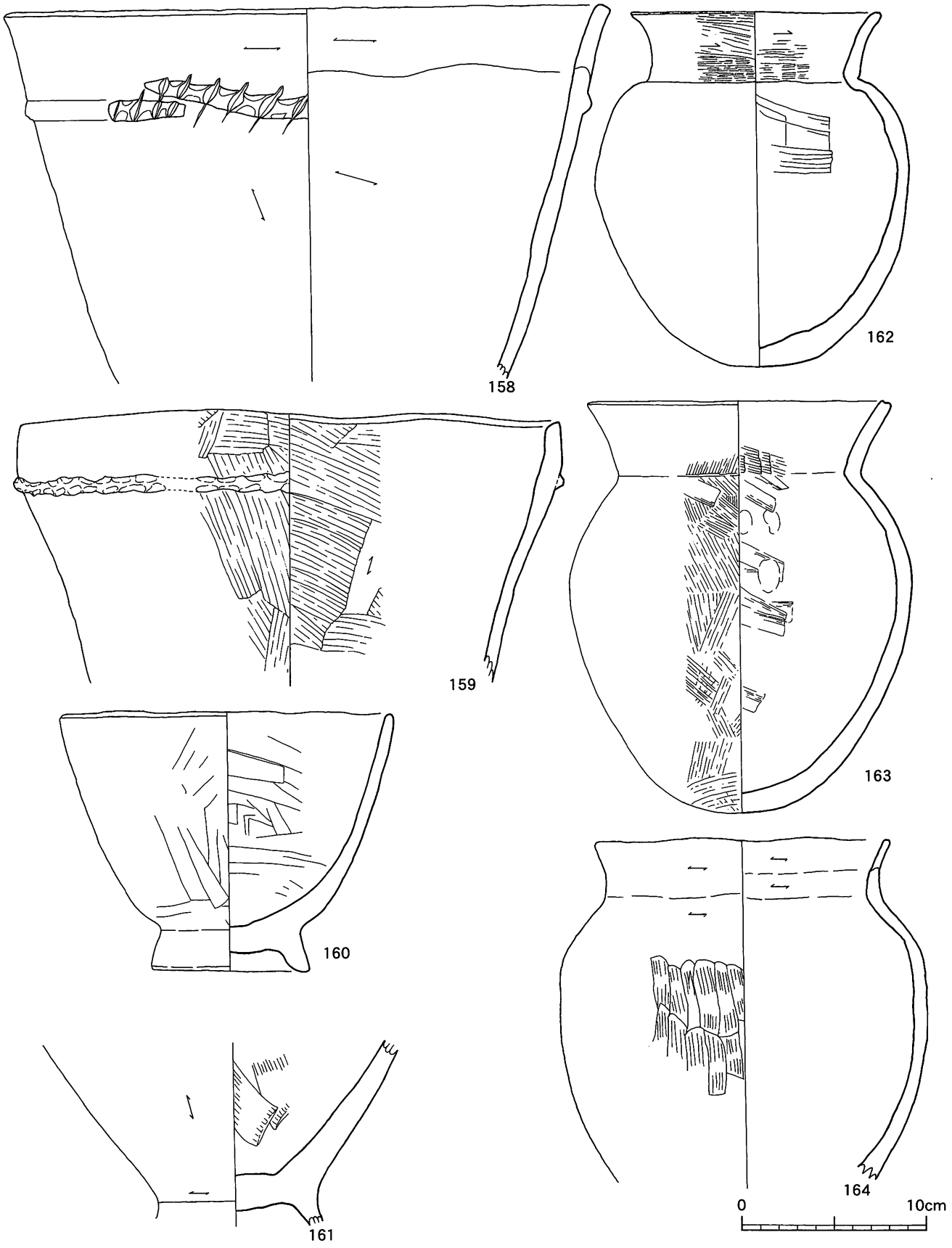
168は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。

169は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がり口縁部でやや外反する。外面と内面口唇部付近が丹塗りされたのちミガキが施されている。内面下部は丁寧なナデ調整が施されているようにみえる。

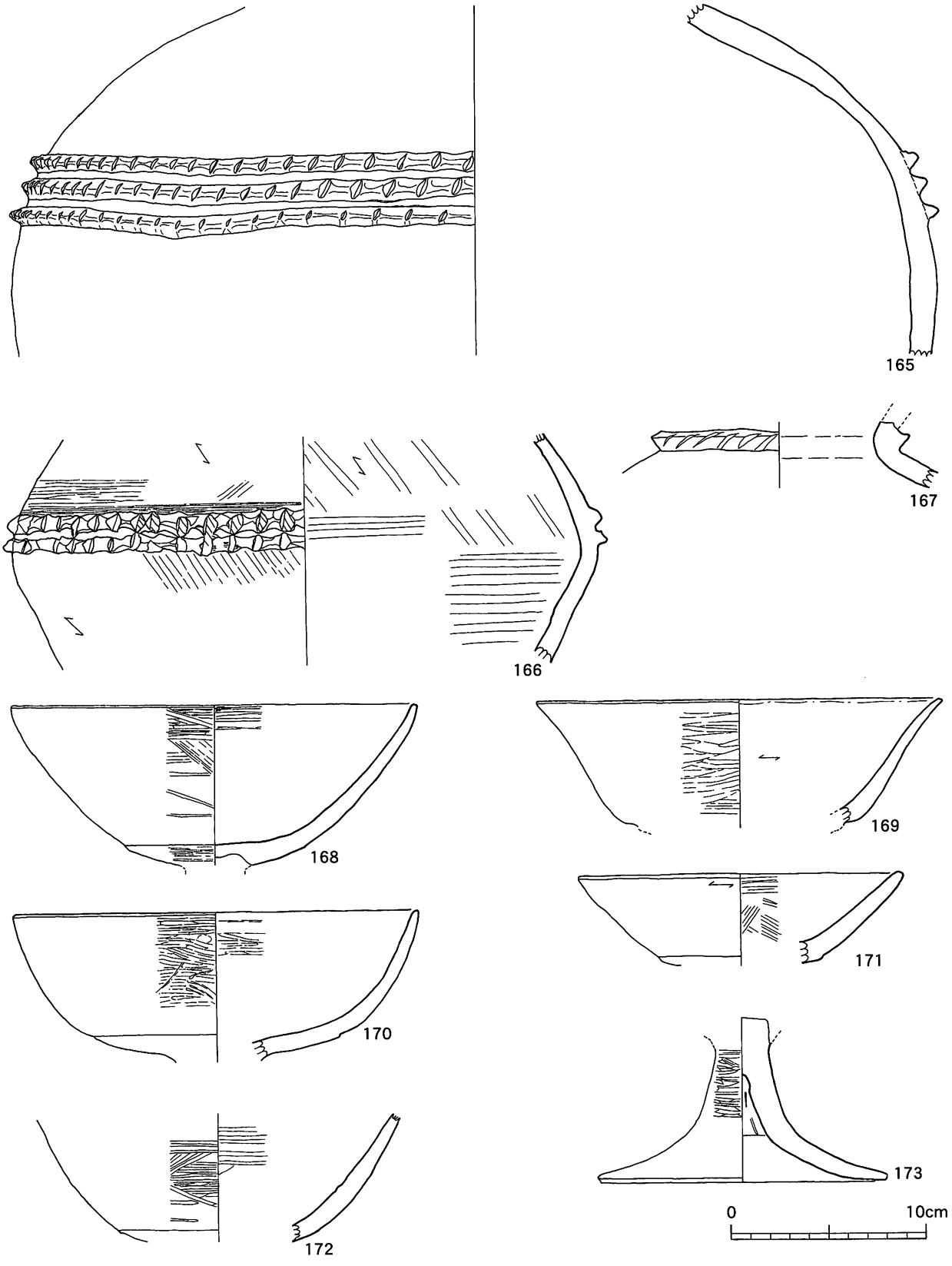
170は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りされたのちミガキが施されている。外面にススが付着している。

171は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。外面の口唇部付近が丹塗りされている。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。

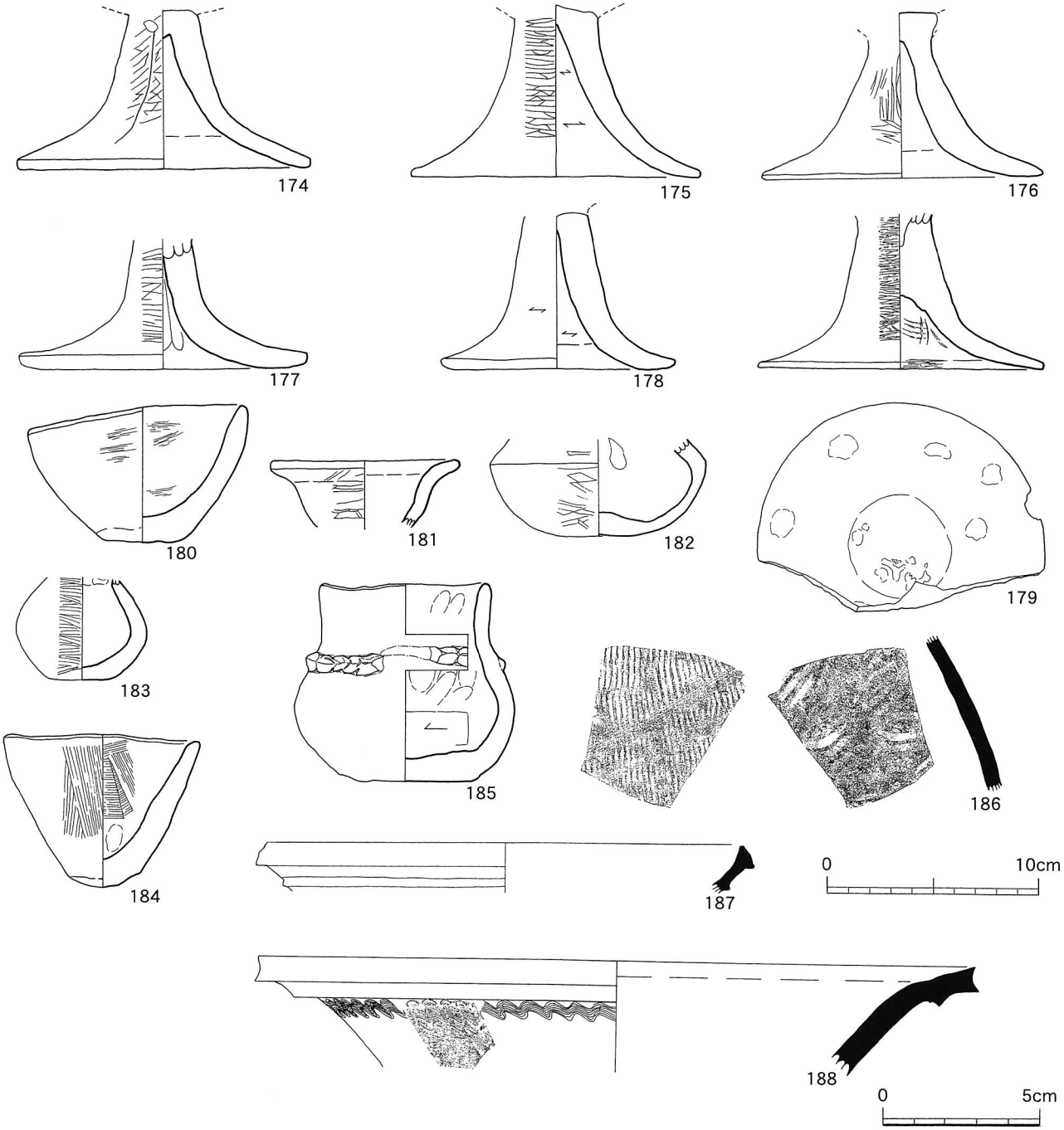
172は，下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。外面は丹塗りされている。内外面ともミガキが施されてい



第45図　竪穴住居跡11号内出土遺物(1)



第46図　竪穴住居跡11号内出土遺物(2)



第47図　竪穴住居跡11号内出土遺物(3)

る。外面のミガキは丹塗りの前である。

173は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。接地面には丁寧なナデ調整が施される。

174は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面下半部にハケ目が残る。外面に線刻が１条残る。

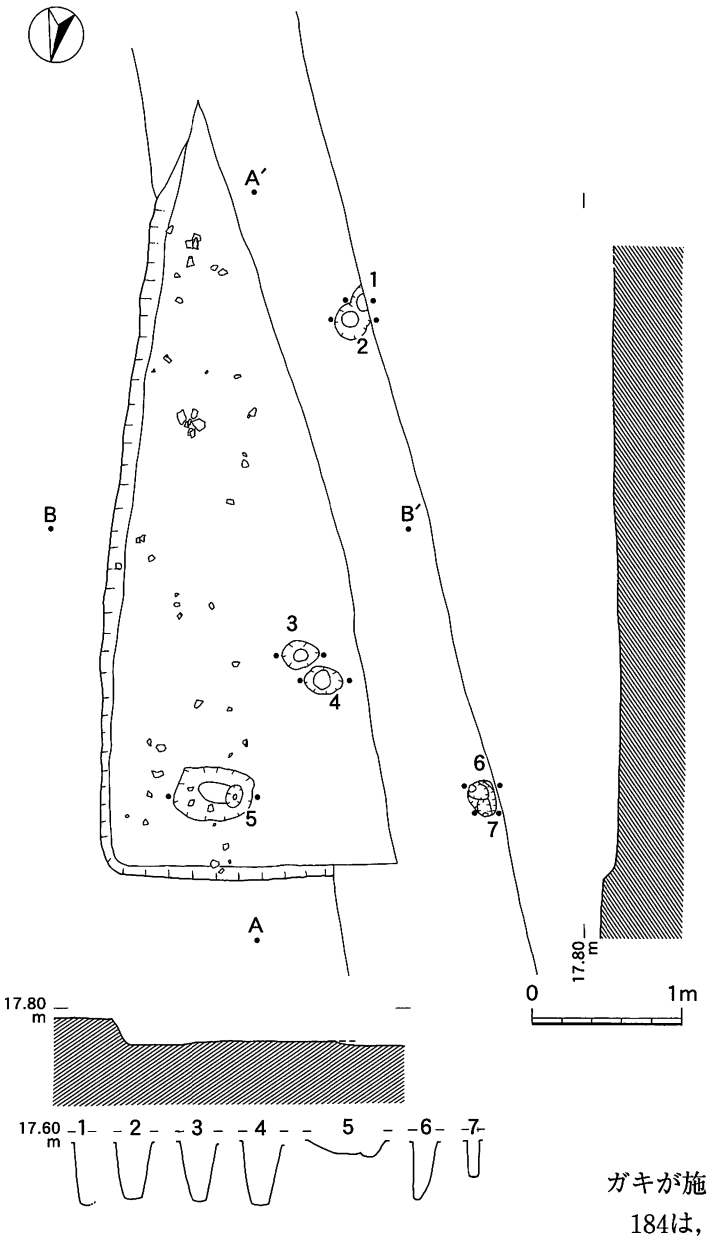
175は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面下半部にハケ目が残る。内面の一部には丹が付着している。

176は，外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。接地面が擦れたためか輪状に器壁が剥落している。

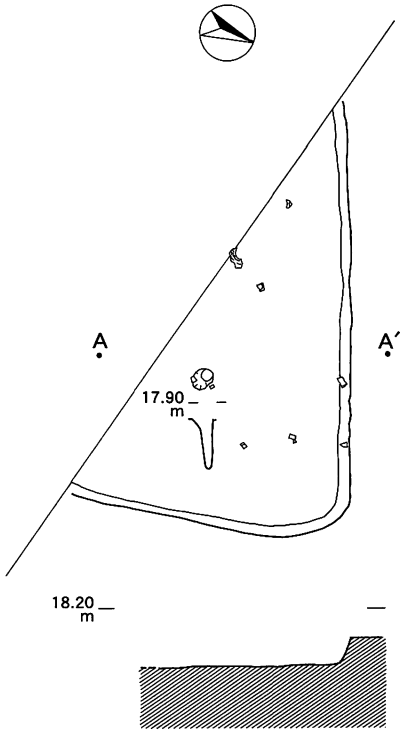
177は，内部の空洞は巻き成形である。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面下部は丁寧にナデ調整が施されているが，接地面が輪状にざらついている。

178は，脚部端部がやや上方を向く。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。

179は，内部の空洞は削り出しで成形している。削り出しが粗く，ハケ目が残る。外面は丹塗りされたあとミ



第48図　竪穴住居跡12号実測図



第49図　竪穴住居跡13号実測図

ガキが施されている。脚部内面が黒色化しており鹿の子状に丹が塗られているが，意識的なものか断定できない。

180は，鉢である。丸平底を呈し，やや内湾しながら立ち上がる。口唇部の一部が欠損しているのみで，ほぼ完全品で出土している。

181～183は，坩である。

181は，坩の口縁部である。口唇部近くで外反している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面は丁寧なナデ調整が施されている。

182は，坩の底部である。胴部が張り出している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。内面は成形時の絞ったような跡が残る。

183は，坩の底部である。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。外面底部に線刻がみられる。

184は，手づくねの鉢である。底部は丸平底を呈する。胴部はまっすぐに立ち上がったあと口縁部でやや内湾する。内外面にハケ目が残る。

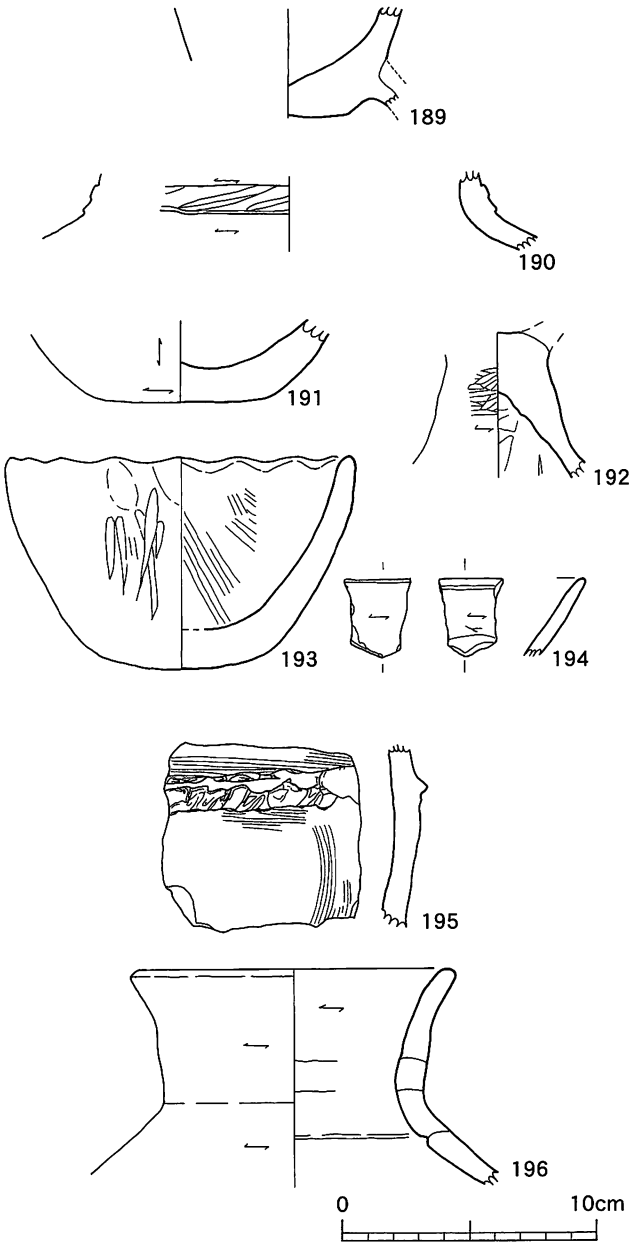
185は，手づくねの壺である。胴部がやや張り出し，頸部で直立する。頸部に指頭圧痕を施した突帯が１条廻る。

186～188は，須恵器である。

186は，甕の破片である。外面には平行叩き目が残り，一部磨り消されている。内面には同心円状の当て具痕が残るが，磨り消しを受けている。

187は，口縁端部上下に鋭い稜を有する。その下に断面三角の突帯を廻らす。竪穴住居跡11号内から出土している。

188は，広口壺の口縁部である。口縁部はラッパ状に開き，口縁端部をコの字形に成形する。口唇部付近に突帯を１条廻らし，その下に櫛描き波状文を施す。外面口唇部直下に灰が付着している。



第50図　竪穴住居跡12・13号内出土遺物

【竪穴住居跡12号】（第48図）

Ｂ・Ｃ－21・22区で検出した。近世の溝状遺構に切られており，調査区外へ広がっていると考えられるため，詳細は不明である。検出した範囲では方形を呈すると考えられる。柱穴が隣接して２基ずつ検出されており，建て直し等があった可能性もある。検出面から深さ18㎝を残す。

【竪穴住居跡12号内出土遺物】（第50図，189～194）

竪穴住居跡12号内からは，パンケース約１箱分の遺物が出土した。そのうちの６点を図化した。

189～194は，全て成川式土器である。

189は，甕の底部である。脚部は欠損している。脚台内面天井部が下方に膨らむ。

190は，壺の頸部である。口縁部へ立ち上がる部分にキザミ目を施された突帯が１条廻る。

191は，壺の底部である。平底を呈している。内面は丁寧なナデ調整が施されている。

192は，高坏の脚部である。外面とわずかに残る坏部内面は丹塗りのあとミガキが施されている。

193は，鉢である。底部は丸平底を呈し，ゆるやかに立ち上がる。口唇部の調整が粗い。外面下部にススが付着している。

194は，坩の口縁部である。まっすぐに立ち上がる。内面は丹塗りのあとミガキが施され，外面はナデ調整のあと丹塗りされている。

【竪穴住居跡13号】（第49図）

Ｄ－25区で検出した。調査区外へ広がっているため，詳細は不明である。検出した範囲では方形を呈すると考えられる。検出面から深さ20㎝を残す。

【竪穴住居跡13号内出土遺物】（第50図，195・196）

竪穴住居跡13号内からは，13点の遺物が出土した。そのうちの２点を図化した。

195・196は，成川式土器である。

195は，甕の胴部である。指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。外面にはススが付着している。

196は，壺の口縁部～胴部である。口縁部は頸部でほぼ直立したあと口唇部近くでやや外反する。外面頸部より下位はミガキが施され，上位は丁寧なナデ調整。内面頸部より下位は粗いナデ調整，上位は丁寧なナデ調整が施されている。

【竪穴住居跡14号】（第51図）

Ｂ－20・Ｃ－20・21区で検出した。後世の撹乱を受けており，竪穴の中と端を溝状遺構が切っているため詳細は不明であるが，5.75m×(5.55m) の方形を呈している。四本柱の竪穴住居跡である。検出面から深さ18㎝を残す。

【竪穴住居跡14号内出土遺物】（第53・54図，197～212）

竪穴住居跡14号内からは，パンケース約２箱分の遺物が出土した。そのうちの16点を図化した。

197～210は成川式土器，211は須恵器，212は石器である。

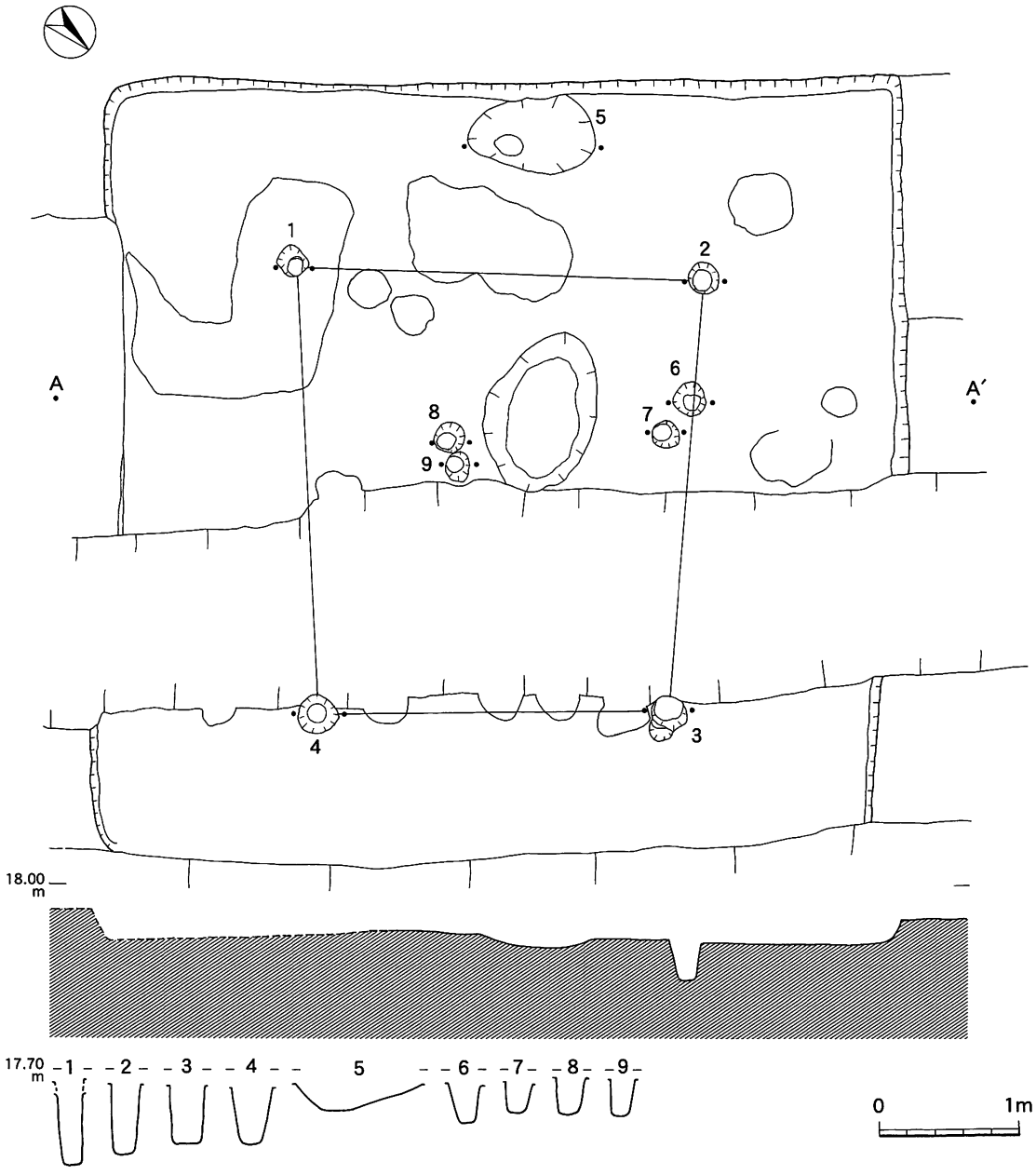
197～199は，甕である。

197は，甕の口縁部～胴部である。口縁部はほぼ直立する。口縁部の下にキザミ目を施された突帯が２条廻る。内外面にハケ目が残る。外面にはススが付着している。

198は，甕の底部である。まっすぐにのびる脚部しか残存していない。

199は，甕の胴部である。キザミ目が施された突帯が２条廻る。内外面にハケ目が残る。

200～204は，壺である。



第51図　竪穴住居跡14号実測図

200は，胴部である。最大径部分にキザミ目を施した突帯が2条廻り，すれ違っている。

201は，頸部である。「ハ」の字状にキザミ目を施した突帯が1条廻る。

202～204は，壺の底部である。201・203は丸平底，202は，平底を呈している。

205～207は，高坏の脚部である。

205は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。脚部接地面にハケ目が残る。

206は，外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。

207は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されている。

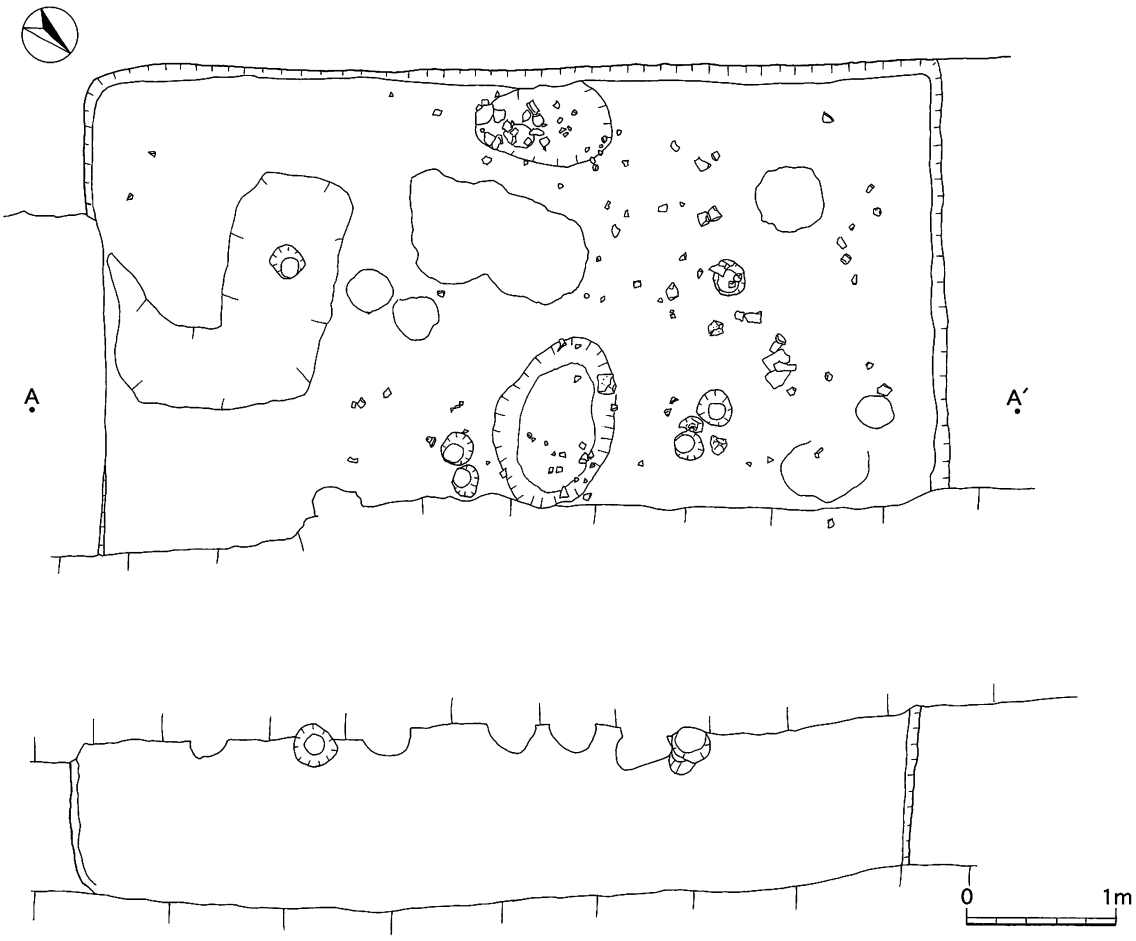
208・209は，鉢である。

208は，丸平底を呈し，やや内湾しながらゆるやかに立ち上がる。外面にハケ目が残る。内面の一部はミガキが施されている。

209は，口縁部～胴部である。内外面にハケ目が残る。内面は黒色化している。

210は，坩である。平底で張り出した胴部とそれより小さいやや外開きの口縁部を有する。外面と内面頸部より上位には丹塗りのあとミガキが施されている。

211は，須恵器のハソウである。口縁部はほぼまっす



第52図　竪穴住居跡14号遺物出土状況

ぐに立ち上がる。口唇部内側を斜めに調整する。口縁部に櫛描き波状文が施され，その下に沈線が１条廻る。

212は，砂岩製の砥石である。

【竪穴住居跡15号】（第55図）

Ｃ－18・19区で検出した。後世の撹乱を受けており，溝状遺構が竪穴を横切り，本調査の際の先行トレンチが一部を切ってしまったため詳細は不明である。6.65m×4.05mの長方形を呈している。検出面から深さ20cmを残す。

【竪穴住居跡15号内出土遺物】（第56図，213～224）

竪穴住居跡15号内からは，パンケース約１箱分の遺物が出土した。そのうちの12点を図化した。

213～222は成川式土器，223は石器である。

213～215は，甕である。

213は，脚部は欠損している。脚台内面天井部がほぼ平坦になる。ほぼまっすぐに立ち上がる。口縁部付近に粘土を貼り加えており，段を有する。内外面に条痕が残る。

214は，甕の底部である。脚部は直線的で長い。脚台内面天井部が下方に膨らんでいる。脚台内面にケズリ痕が残る。内面にはススが付着している。

215は，甕の底部である。脚部は欠損している。脚台内面天井部がほぼ平坦になる。脚部を底部に接合する際に粘土を上方まで擦り付けており，それが外れた部分にもハケ目がみられる。

216～218は，壺である。

216は，壺の口縁部である。頸部から外側に開きほぼまっすぐにのびる。内面頸部から上位はナデ調整が施されている。

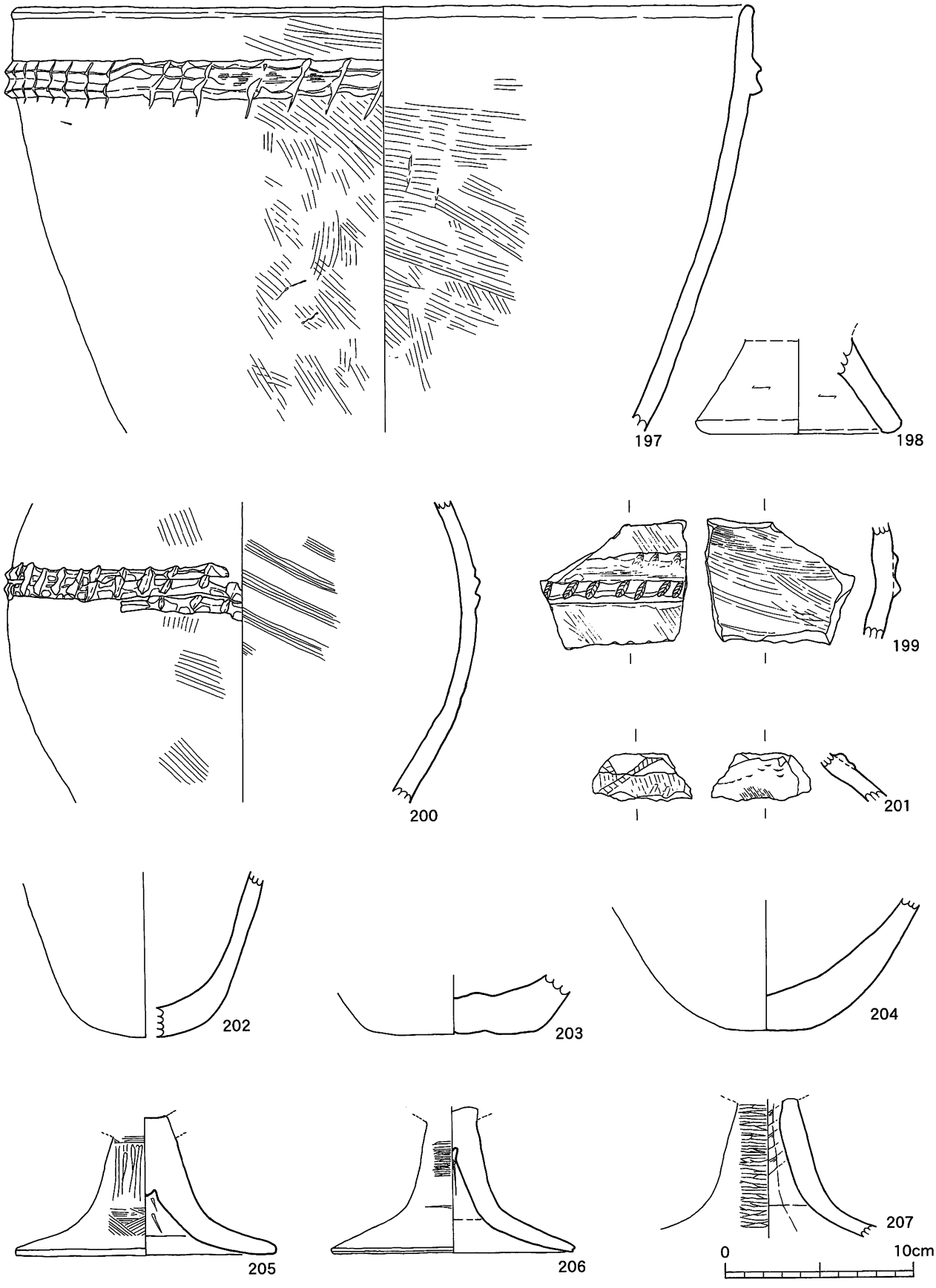
217は，口縁部である。小破片のため詳細は不明である。口唇部が外に引き出されくぼみを有する。内外面にハケ目が残る。

218は，胴部である。３条の沈線で区画されたスペースに竹管文が施された幅広の突帯が廻る。

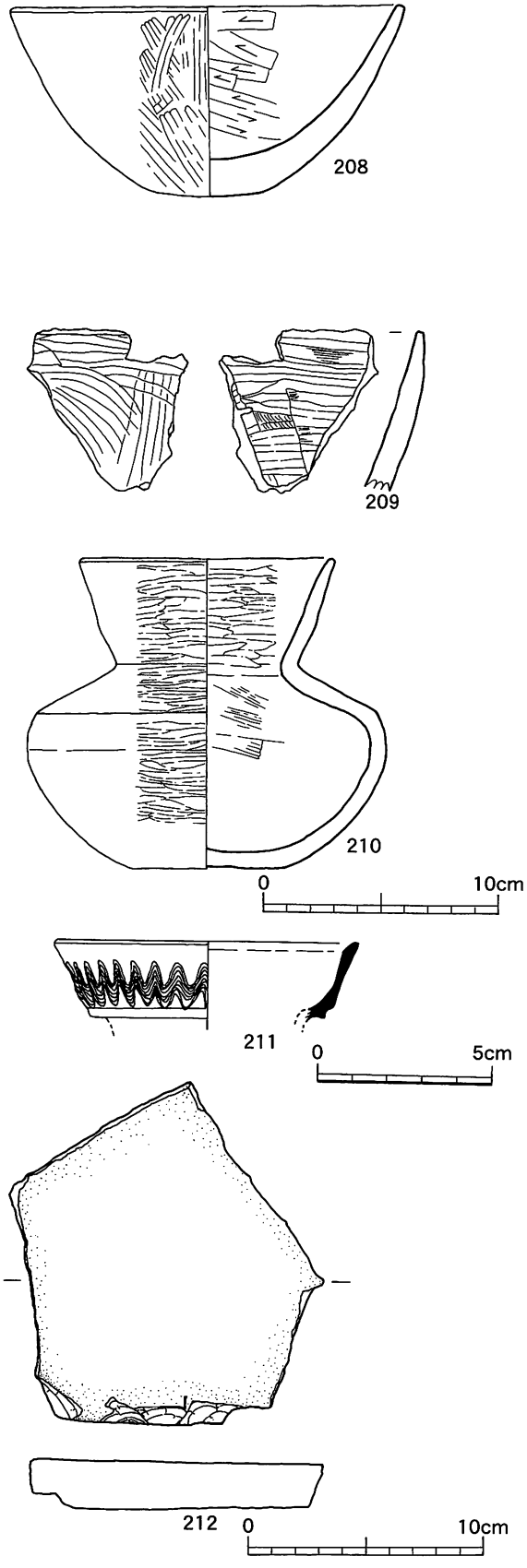
219～222は，高坏である。

219は，坏部である。底部からゆるやかに立ち上がり，口縁部でやや外反する。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。

220は，坏部である。下部に段を持ち，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。



第53図　竪穴住居跡14号内出土遺物(1)



第54図　竪穴住居跡14号内出土遺物(2)

221は，脚部である。外面は丹塗りのあとミガキが施される。

222は，脚部である。内部の空洞は削りだしで成形している。外面は丹塗りのあとミガキが施される。

223は，坩の胴部である。胴部の張り出しに稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施される。

224は，砂岩製の砥石である。

【竪穴住居跡16号】（第57図）

B－17・18，C－18区で検出した。後世の撹乱を受けており，溝状遺構が竪穴を横切り，竪穴の北・西側はすでに削平されてプランが検出できなかった。このため詳細は不明である。残存部では6.00mを測り，方形を呈していると思われる。残存状態の良好な部分では検出面から深さ15cmを残す。

【竪穴住居跡16号内出土遺物】（第58～62図，225～270）

竪穴住居跡16号内からは，パンケース約13箱分の遺物が出土した。そのうちの46点を図化した。

225～269は成川式土器，270は須恵器である。

225～242は，甕である。

225は，脚部がまっすぐにのびる。脚台内面天井部が下方に膨らんでいる。胴部は外に開いたあとやや内湾し，まっすぐに立ち上がる。胴部に指頭圧痕を施された突帯が1条廻る。

226は，脚部がまっすぐにのびる。脚台内面天井部がやや下方に膨らんでいる。胴部は外に開いたあとやや内湾しながら立ち上がる。胴部に指頭圧痕を施された突帯が1条廻る。内外面にハケ目が残る。

227は，脚部が短い。脚台内面天井部は平坦に調整されている。胴部は外に開いたあとやや内湾し，まっすぐに立ち上がる。胴部に指頭圧痕を施された突帯が1条廻る。内外面にハケ目が残る。

228は，小型の甕である。脚部は上げ底状で低い。胴部は開きながら立ち上がったあと内湾する。胴部に指頭圧痕を施された1条の突帯が廻る。内外面にススが付着している。

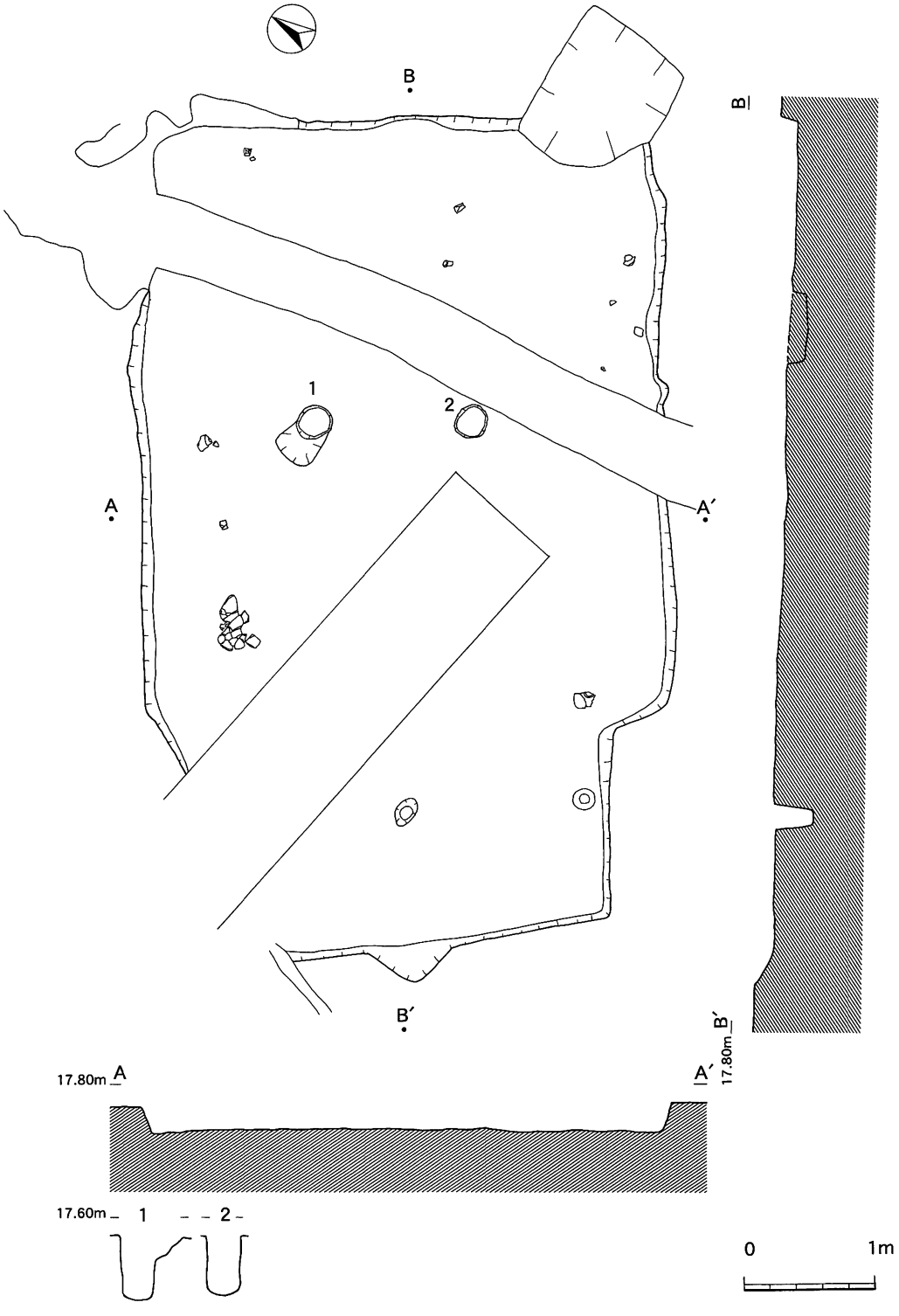
229は，甕の底部である。脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部は平坦に調整されている。内面底部付近にススが付着している。

230は，甕の底部～胴部である。脚部は低くほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部がやや下方に膨らんでいる。

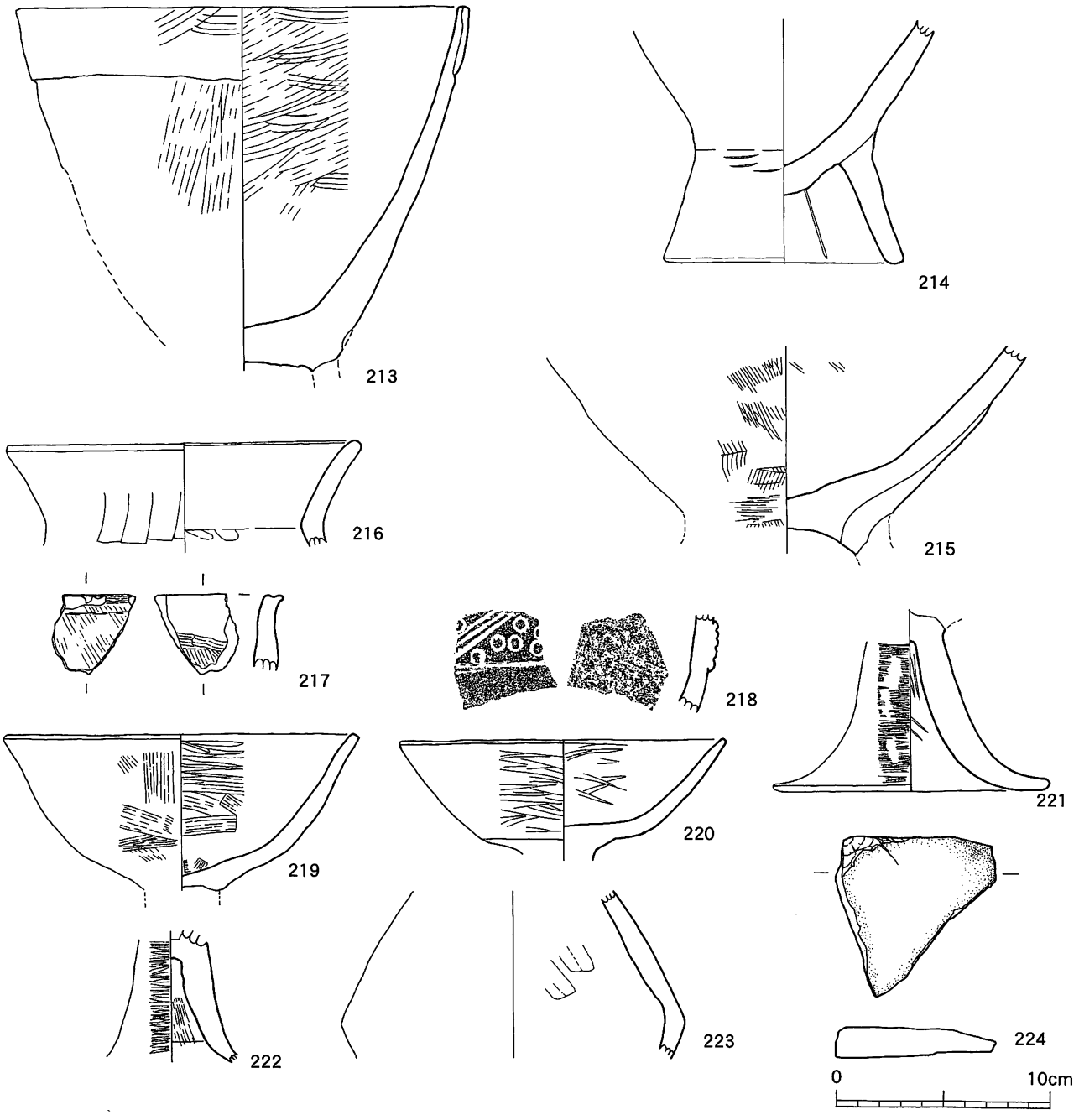
231は，甕の底部である。脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部が下方に膨らんでいる。

232は，甕の口縁部～胴部である。口縁部はほぼ直立する。胴部に指頭圧痕が施されたすれ違いの突帯が1条廻る。外面にススが付着している。

233は，甕の口縁部～胴部である。口縁部は内湾する。胴部に指頭圧痕が施された突帯が1条廻る。



第55図　竪穴住居跡15号実測図



第56図　竪穴住居跡15号内出土遺物

234は，甕の口縁部～胴部である。口縁部は内湾する。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。外面にハケ目が残る。

235は，甕の底部である。脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部が下方に膨らんでいる。内外面にハケ目が残る。

236は，甕の底部である。脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部の中央部が下方に膨らんでいる。

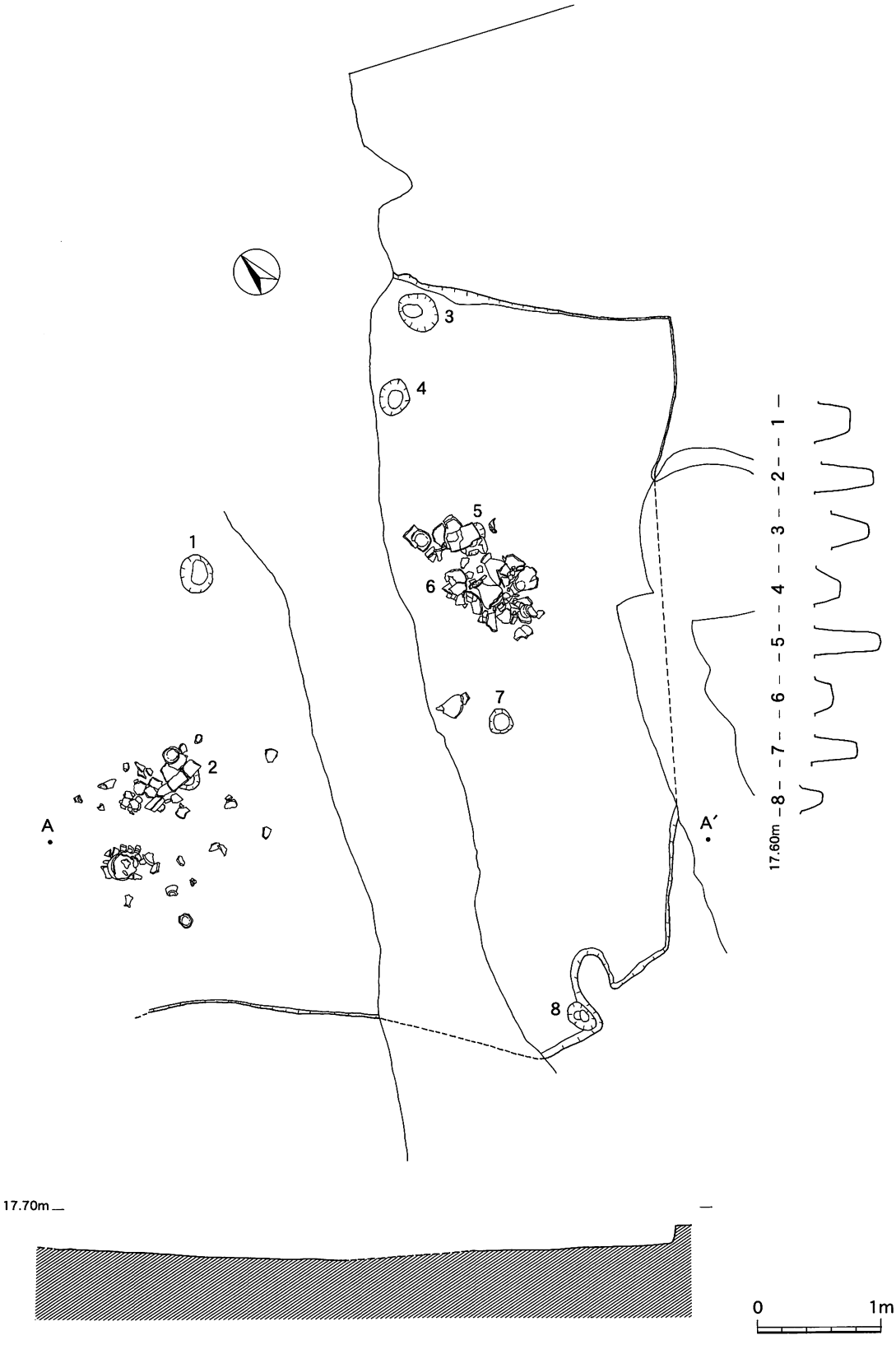
237は，甕の底部である。脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部が下方に膨らんでいる。内面にはスが付着している。

238は，甕の底部である。脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部が下方に膨らんでいる。

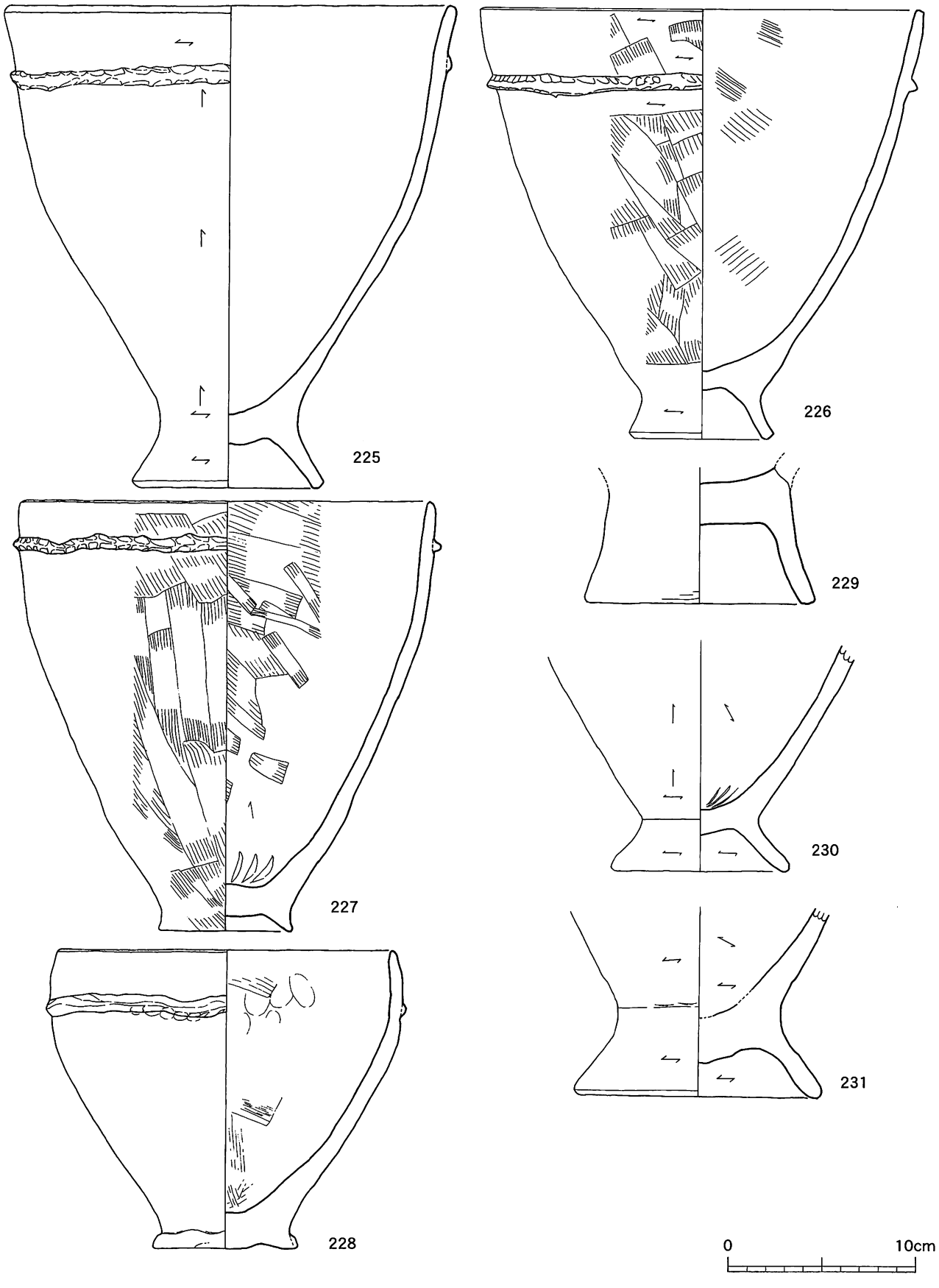
239は，甕の底部である。低い脚台を有する。

240は，甕の口縁部～胴部である。口縁部はやや内湾する。胴部にナデ調整が施され断面三角の突帯が１条廻る。

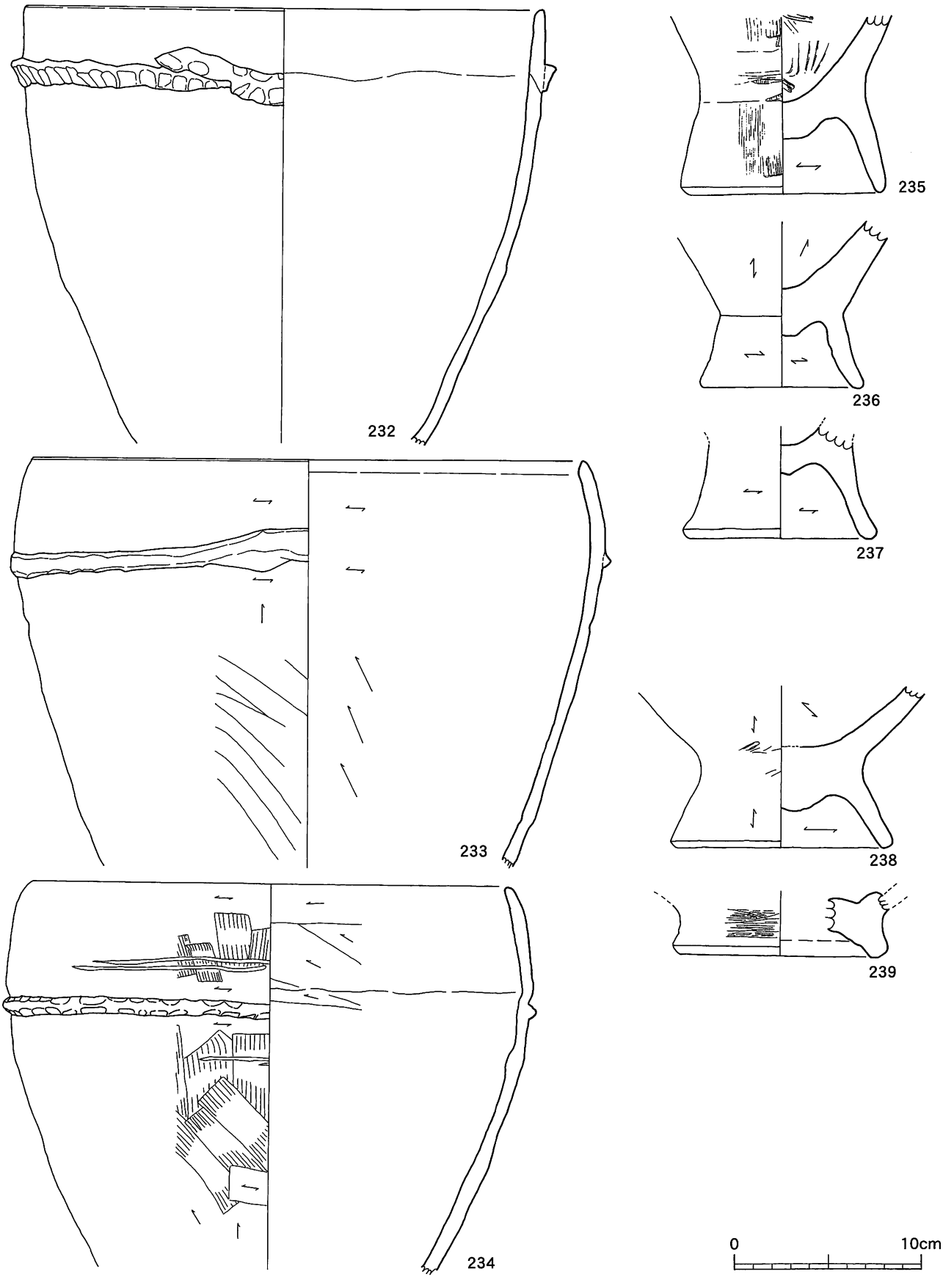
241は，甕の底部～胴部である。脚部はまっすぐにのびる。脚台内面天井部の中央部が下方に膨らんでいる。



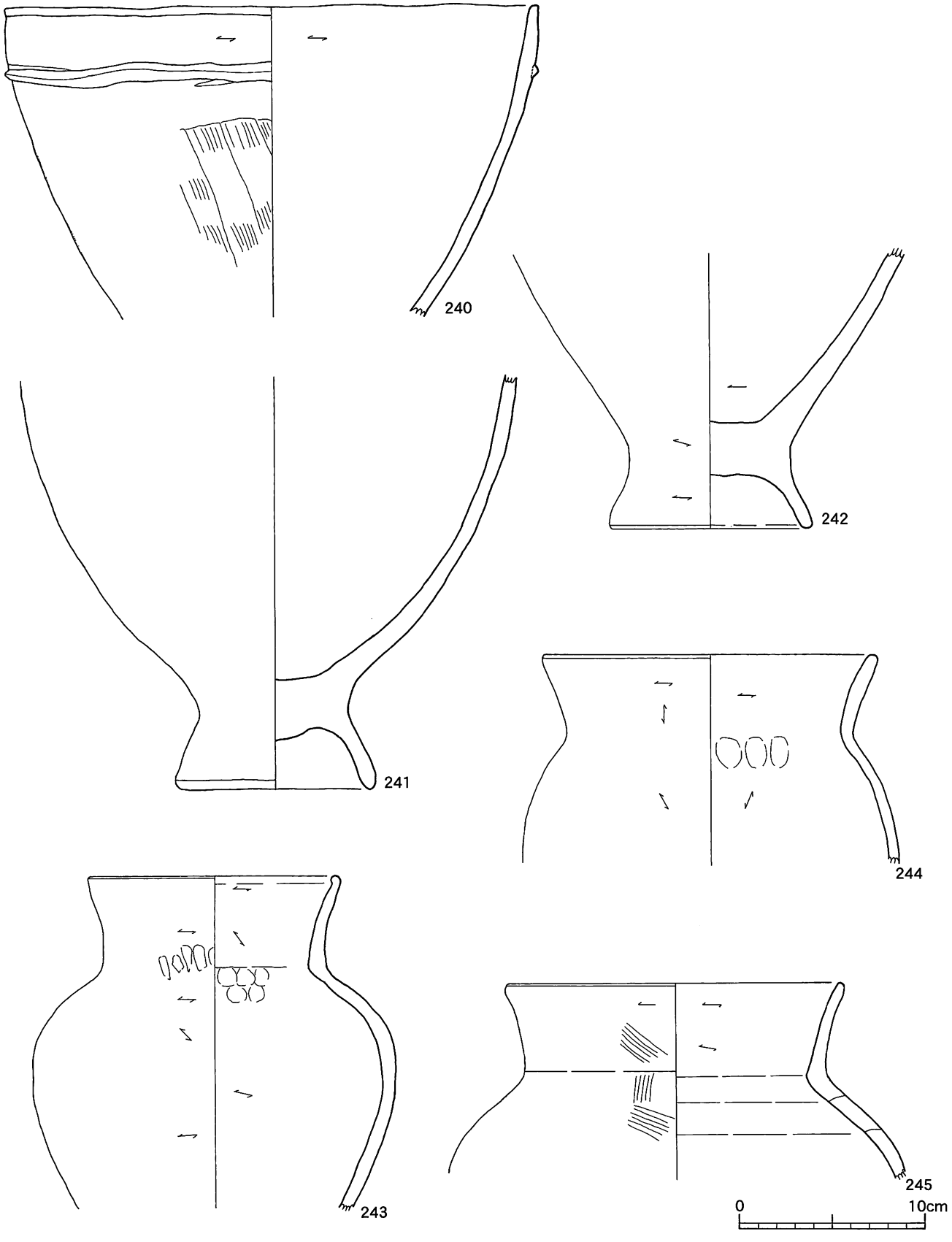
第57図　竪穴住居跡16号実測図



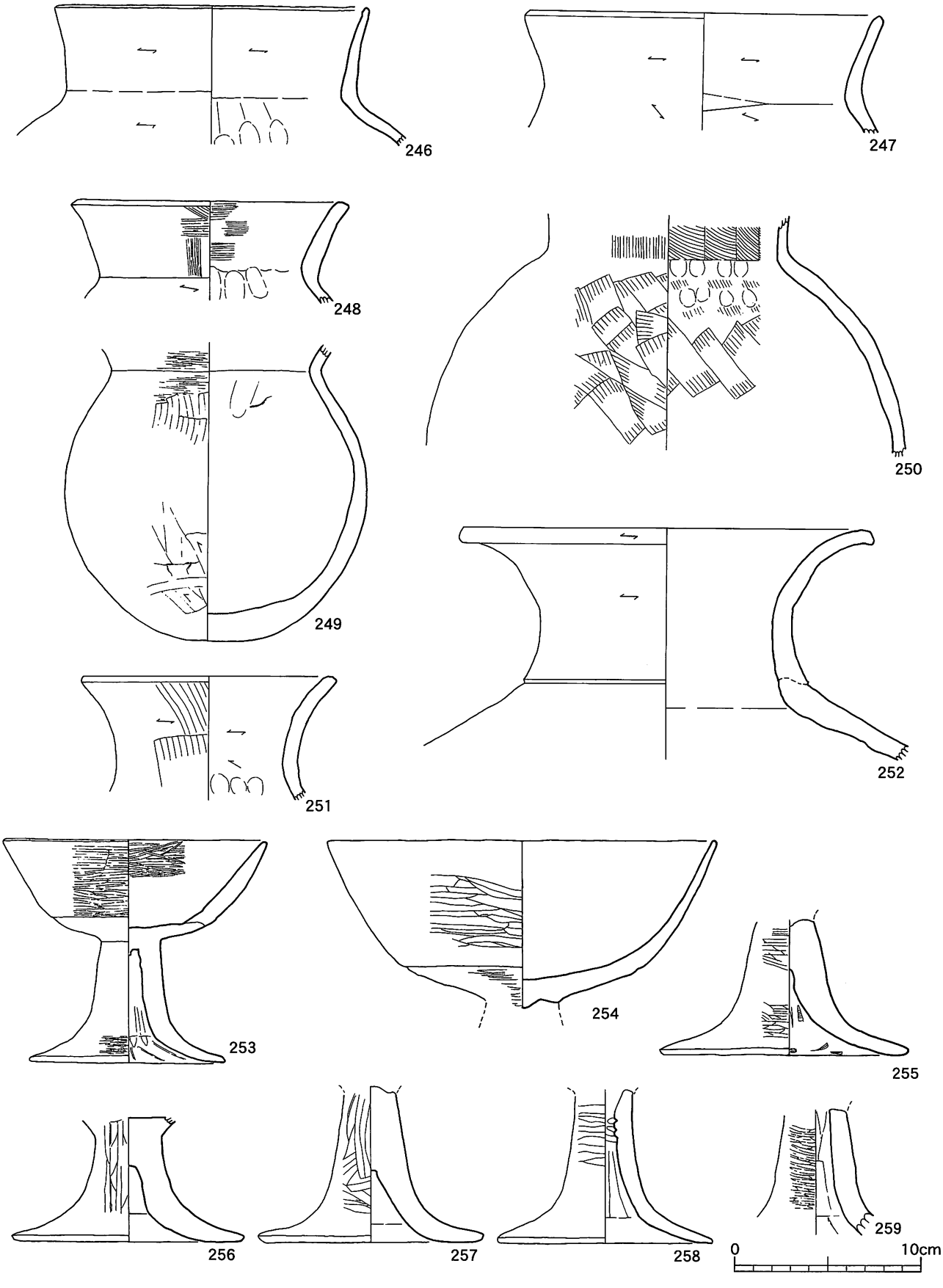
第58図　竪穴住居跡16号内出土遺物(1)



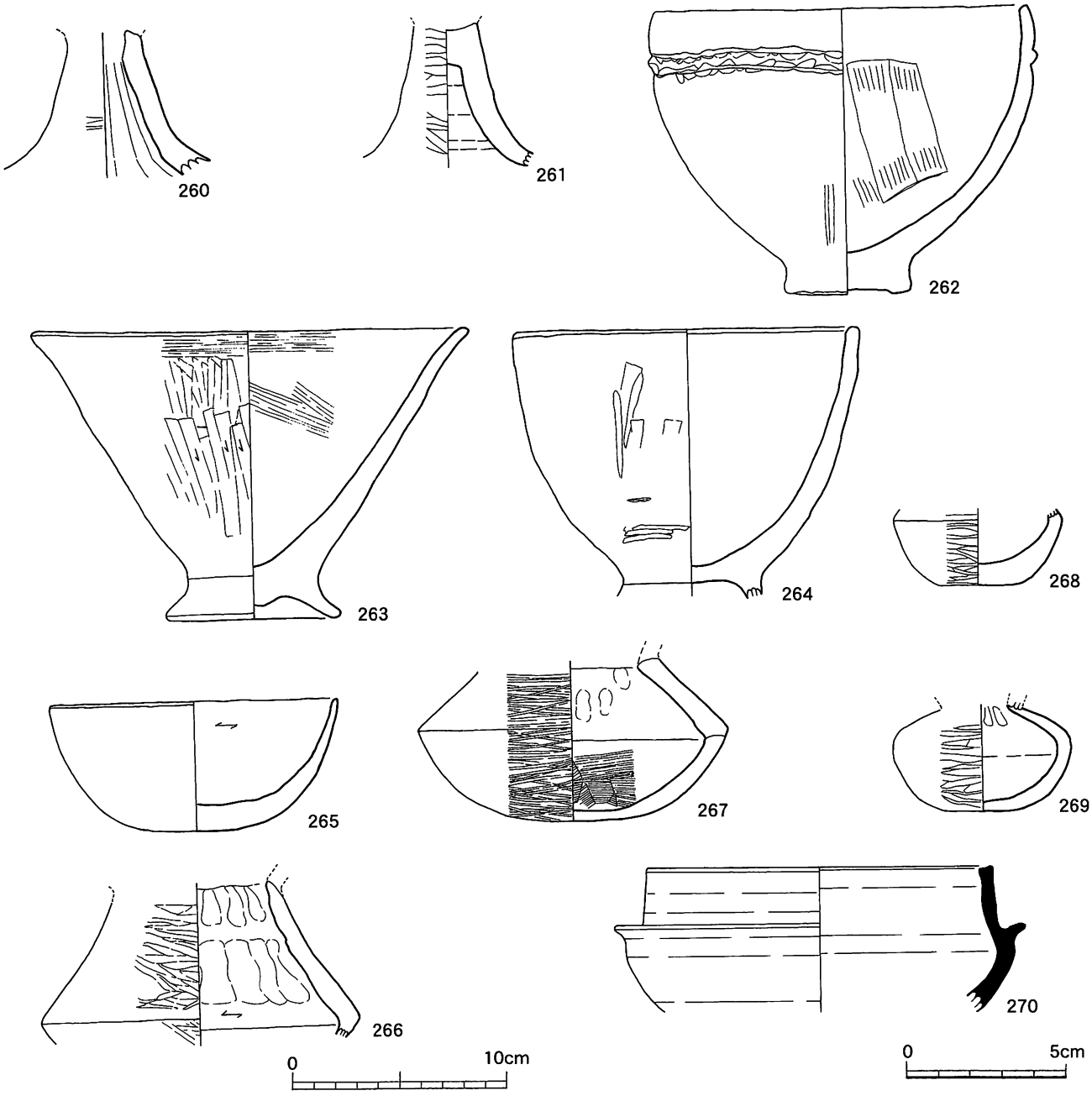
第59図　竪穴住居跡16号内出土遺物(2)



第60図　竪穴住居跡16号内出土遺物(3)



第61図　竪穴住居跡16号内出土遺物(4)



第62図　竪穴住居跡16号内出土遺物(5)

242は，甕の底部～胴部である。脚部はまっすぐにのびる。脚台内面天井部は平坦に調整されている。

243～252は，壺である。

243～248は，口縁部～胴部である。

243は，頸部で屈曲しほぼまっすぐに立ち上がり，口唇部でやや内湾する。外面にススが付着している。

244～248は，頸部で屈曲したあとほぼまっすぐに立ち上がる。

249は，底部～口縁部である。底部は丸底を呈する。ゆるやかに張り出した胴部から頸部はすぼまり口縁部で外に開く。

250は，口縁部～胴部である。胴部が膨らみ，口縁部でほぼ直立する。内外面にハケ目が残る。

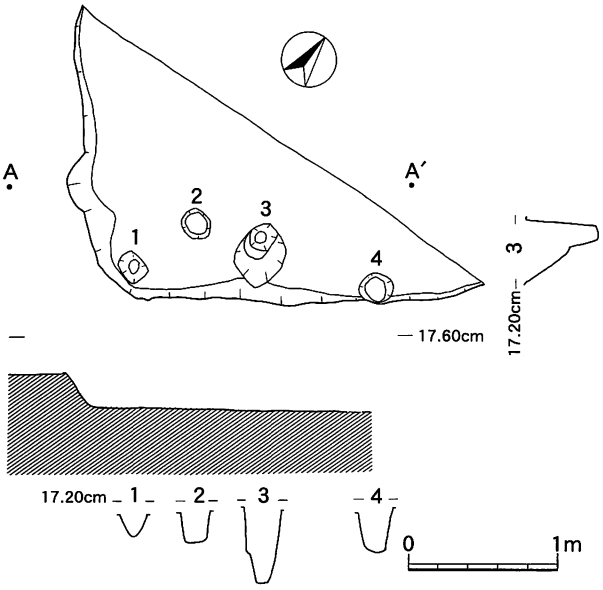
251は，口縁部である。ほぼまっすぐに立ち上がったあと口縁部で外反する。外面はハケ目が残り，内面の上部はナデ，下部は指頭圧痕が残る。

252は，口縁部～胴部である。頸部から外反しながら立ち上がる。頸部に段を有する。

253～261は，高坏である。

253は，完形の高坏である。坏部は下部に段を有し，ゆるやかに立ち上がる。坏部の底部付近が円形にはずれている。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。

254は，坏部である。下部に段を有しゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。



第63図　竪穴住居跡17号実測図

255～261は，脚部である。

255・256は，外面は丹塗りのあとミガキが施される。内面にはハケ目が残る。

257は，外面は丹塗りのあとミガキが施される。

258・259は，内部の空洞は削りだしで成形している。外面は丹塗りのあとミガキが施される。

260・261は，外面は丹塗りのあとミガキが施される。

262～265は，鉢である。

262は，脚部は上げ底状で低い。胴部は開きながら立ち上がったあと内湾する。胴部に指頭圧痕を施された1条の突帯が廻る。甕である可能性もある。

263は，外に張り出した脚部を有する。脚台内面天井部が下方に膨らんでいる。外側にまっすぐ立ち上がり，口縁部でやや外反する。内外面にハケ目が残る。

264は，脚部は欠損している。脚台内面天井部は平坦に調整されている。外面の一部にススが付着している。

265は，椀形の鉢である。丸平底を呈し，ゆるやかに立ち上がる。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。内面は器壁の剥落が激しく詳細は不明。

266～269は，坩である。

266は，胴部である。胴部最大径に稜を有する。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。

267は，底部～胴部である。胴部が張り出す。胴部最大径に稜を有する。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。

268は，底部である。胴部が張り出す。胴部最大径に稜を有する。外面にはミガキが施されている。

269は，底部～胴部である。胴部が張り出す。胴部最大径でゆるやかに屈曲する。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。

270は，須恵器坏である。受部から上はほぼ垂直に立ち上がり端部はわずかに内傾する。受部は外上方へのびて先端は鋭い。

【竪穴住居跡17号】（第63図）

C－12区で検出した。調査区外の現道下に拡がっているため詳細は不明である。残存部からは方形を呈していると思われる。検出面から深さ20cmを残す。

【竪穴住居跡17号内出土遺物】（第64図，271～278）

竪穴住居跡17号内からは，パンケース約1箱分の遺物が出土した。そのうちの8点を図化した。

271～278は，全て成川式土器である。

271は，甕の口縁部～胴部である。口縁部はやや内湾する。胴部にナデ調整が施された突帯が1条廻る。

272は，甕の口縁部～胴部である。口縁部はまっすぐに立ち上がる。胴部に指頭圧痕が施された突帯が1条廻る。内外面にススが付着している。

273は，壺の口縁部～胴部である。頸部からやや外反しながら立ち上がる。

274は，壺の口縁部である。外向きにまっすぐ立ち上がる。内外面にハケ目が残る。

275は，高坏の脚部である。内面上部に接合用のコマがみられる。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。

276は，鉢である。丸底を呈し，内湾しながらゆるやかに立ち上がる。内面は丁寧なナデ調整が施される。

277は，坩の口縁部である。口縁部で外反する。内外面には丹塗りのあとミガキが施されている。

278は，坩の頸部～胴部である。胴部最大径に稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。

【竪穴住居跡18号】（第65図）

C－12区で検出した。調査区外の現道下に拡がっていたため詳細は不明である。残存部から復元すると6.28m×6.50mの方形を呈していると思われる。四本柱の竪穴住居跡の可能性がある。検出面から深さ21cmを残す。

【竪穴住居跡18号内出土遺物】（第67～76図，279～376）

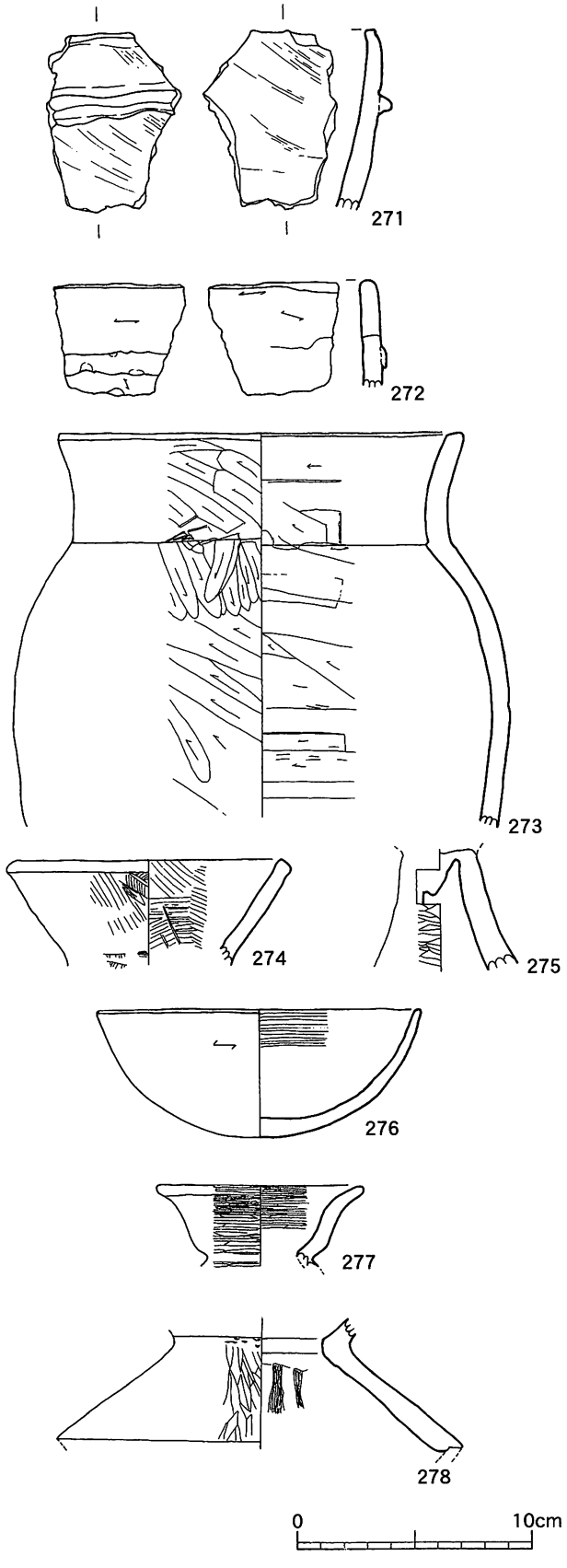
竪穴住居跡18号内からは，パンケース約24箱分の遺物が出土した。そのうちの99点を図化した。

279～374は，全て成川式土器である。375は，須恵器である。376は，鉄器である。

279～300は，甕である。

279は，脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部はほぼ平坦に調整されている。胴部はゆるやかに立ち上がり，口縁部はやや外側に開く。胴部に指頭圧痕が施された突帯が1条廻る。

280は，脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部がやや下方に膨らむ。胴部はゆるやかに立ち上がり，口縁部でほぼ直立する。胴部に指頭圧痕が施された突帯が1条廻る。外面上部にススが付着している。



第64図　竪穴住居跡17号出土遺物

281は，甕の口縁部～胴部である。口縁部までほぼまっすぐに立ち上がり，口縁部でやや内湾する。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻り，始点と終点がみられる。外面上部にススが付着している。

282は，形態上からは鉢である可能性があるが，外面上部にススが厚く付着していることから，煮炊きに使用したものと思われ，甕に分類した。脚部はやや横に張り出し，脚台内面天井部はほぼ平坦に調整されている。胴部はやや内湾しながらのびる。

283～291は，甕の口縁部～胴部である。

283は，胴部は口縁部までほぼまっすぐに立ち上がる。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻り，指頭圧痕を施す際に付いたと思われる爪形がその上にみられる。

284は，胴部は口縁部でやや内湾する。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。

285は，甕の口縁部～胴部である。胴部はまっすぐに立ち上がったあと，口縁部でやや内湾する。胴部にキザミ目が施された突帯が１条廻る。キザミ目は胴部に及んでいる。内面にハケ目が残る。

286は，胴部はまっすぐに立ち上がったあと，口縁部でやや内湾する。胴部に指頭圧痕が施されたすれ違いの突帯が１条廻る。内外面にハケ目が残る。

287は，胴部はまっすぐに立ち上がったあと，口縁部でやや内湾する。胴部に爪形が施された突帯が１条廻る。

288は，胴部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。胴部に指頭圧痕が不規則に施された突帯が１条廻る。内外面にハケ目が残る。

289は，胴部はまっすぐに立ち上がったあと，口縁部でやや内湾する。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。

290は，胴部はまっすぐに立ち上がったあと，口縁部でやや内湾する。胴部に指頭によると思われるキザミ目が施された突帯が１条廻り，始点と終点がみられる。

291は，胴部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，口縁部付近で直立する。内外面にハケ目が残る。突帯は貼付されない。

292～300は，甕の底部を含む破片である。

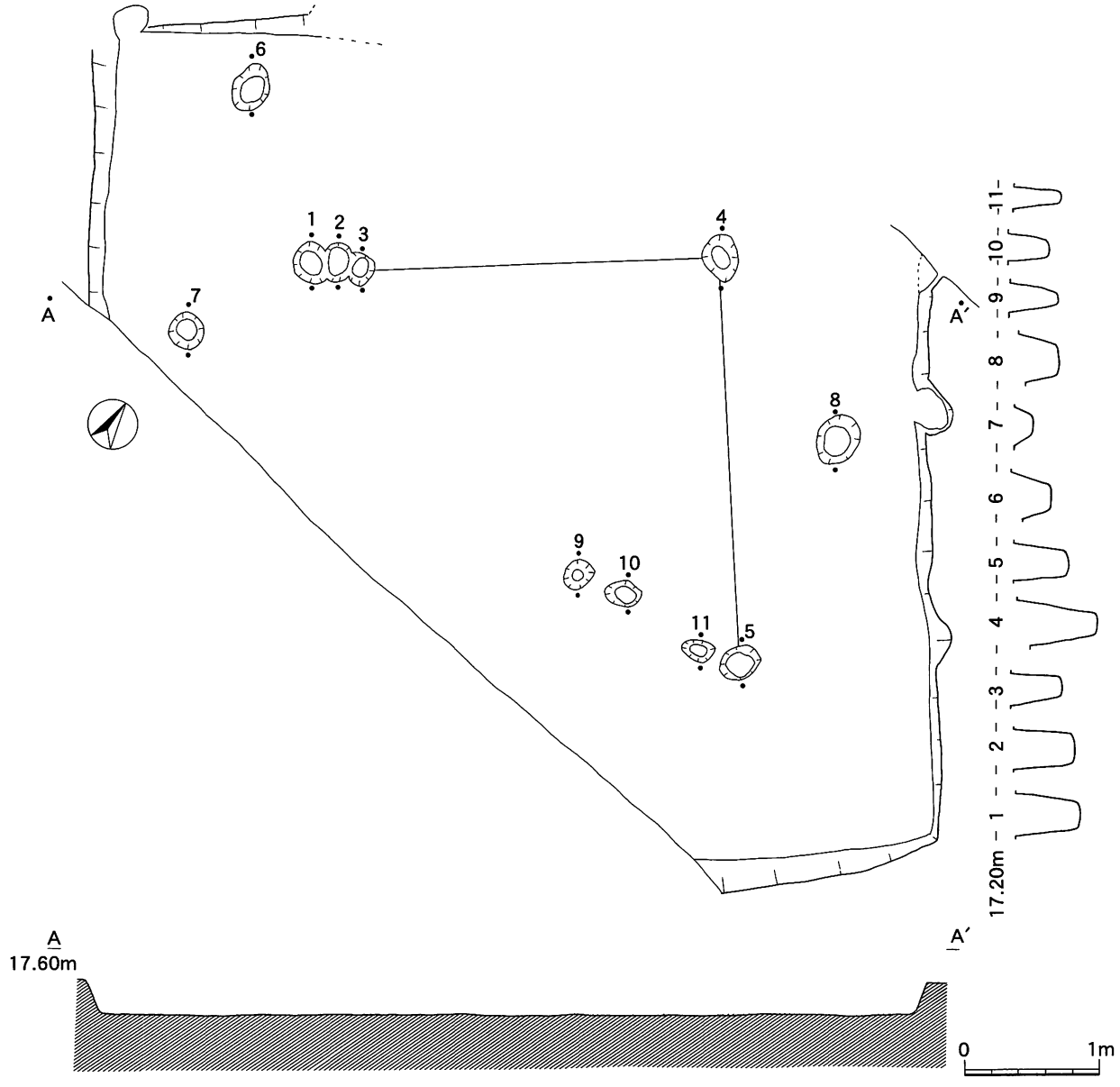
292は，手づくねの甕である。脚部は短く横に張り出す。

293～296は，脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部がやや下方に膨らむ。296は，内外面にハケ目が残る。

297は，脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部はほぼ平坦に調整されている。内面にミガキ状のナデが施されている。

298は，脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部が下方に膨らむ。内外面にハケ目が残る。

299は，脚部はほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井



第65図　竪穴住居跡18号実測図

部が下方に膨らむ。脚台内面天井部はあとで貼り付けられている。

300は，手づくねの甕の底部である。脚部は欠損している。脚台内面天井部はほぼ平坦に調整されている。

301～317は，壺である。

301は，丸底を呈し，胴部は肩が張り出し，頸部で外反しまっすぐにのびる。外面にススが付着している。

302は，丸底を呈し，胴部が中央部で膨らむ。頸部で外反し，口縁部でやや内湾する。

303は，やや尖った丸底を呈し，胴部が中央部で膨らむ。頸部で外反し口縁部でさらに外反する。

304は，丸底を呈し，胴部やや上方が膨らむ。頸部で外反したあと口縁部でやや内湾する。

305～308は，壺の口縁部～胴部である。

305・306は，頸部で外反したあと，ほぼまっすぐ外に開く。305は，内外面にススが付着している。

307は，頸部で外反したあと，やや外反しながら立ち上がる。内外面にススが付着している。

308は，頸部で屈曲したあと，ほぼまっすぐに立ち上がる。胴部に指頭圧痕が施された突帯が１条廻る。内外面にハケ目が残る。

309・310は，壺の口縁部である。

309は，口縁部で外反して外に開く。内外面丹塗りのあとミガキが施される。小片のため詳細は不明で，高坏である可能性も捨てきれない。

310は，頸部に突帯を有し，外反しながら立ち上がる。

第66図　竪穴住居跡18号遺物出土状況

内面にススが付着している。

311は，壺の口縁部～胴部である。胴部はゆるやかに内湾して頸部で外反し，ほぼまっすぐに立ち上がる。胴部最大径より上位にすれ違いの突帯が1条廻る。内面は器壁の剥落が激しい。

312は，壺の胴部である。ゆるやかに外へ開いたあと肩部で屈曲する。胴部にキザミ目を施された3条の突帯が廻る。

313は，大型の壺である。丸底を呈し，外に開いたあと胴部上部で内湾する。頸部でほぼ直に立ち上がったあと，口縁部で大きく外反する。内外面にハケ目が残る。胴部にキザミ目を施された3条の突帯が廻る。

314は，壺の胴部である。上部に向かってすぼまる。指頭圧痕を施された突帯が1条廻る。内外面にハケ目が残る。

315は，壺の胴部である。格子文を施された幅広の突帯が1条廻る。

316は，壺の底部である。丸底を呈している。

317は，壺の底部である。丸平底を呈している。

318は，壺の口縁部である。二重口縁を呈している。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。

319～337は，高坏である。

319は，高坏の完全品である。坏部下部に段を有しゆるやかにのびる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。本遺跡は高坏の出土量は多いが，坏部と脚部を接合できなかったものが多かった。整理作業の期間的な制約のため，異なる住居跡間の接合にかける時間が，不充分だった恐れがある。また，遺物包含層がほとんど削平されていたことも要因であろう。

320～329は，高坏の坏部である。

320は，下部に段を有し，ゆるやかに立ち上がりほぼまっすぐにのびる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。

321は，下部に段を有し，ゆるやかに立ち上がり口縁部でやや外反する。内外面は丹塗りのあとミガキが施されているが，内面は丹の剥落が激しく，丁寧なナデ調整

状にみえる。使用時に丹が剥げたと思われる。底部中央部に脚部との接合のためのコマが残る。

322・323・325は，下部に段を有し，ゆるやかに立ち上がりほぼまっすぐにのびる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。

324・326は，下部に段を有し，ゆるやかに立ち上がり口縁部でやや外反する。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。

327は，下部に段を有し，口縁部で大きく外反する。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。

328は，脚部との接合のために用いられたと思われる断面三角のコマが下部に貼付されている。内外面とも丹塗りされているが，ローリングを受けているためミガキがはっきりしない。

329は，下部に段を有する。円形の割れ口が2次加工されており，円盤状土製品に転用されている。

330～337は，高坏の脚部である。

330は，外面にミガキが施されている。

331は，外面は丹塗りのあとミガキが施される。内面に丹が指頭状に残る。

332は，外面は丹塗りと思われるが，ほとんど剥げている。

333は，外面はミガキが施されている。接地面が擦れている。

334は，上部に接合を補強するためのキザミ目がみられる。外面は丹塗りのあとミガキが施される。

335は，外面は丹塗りのあとミガキが施される。脚部接地面にはハケ目が残る。

336は，外面は丹塗りのあとミガキが施される。接地面が擦れている。

337は，外面と坏部内面は丹塗りのあとミガキが施される。

338～353は，鉢である。

338は，丸平底を呈し，胴部はゆるやかに立ち上がる。口縁部の一部が欠損しているだけである。

339は，鉢の口縁部～胴部であると思われるが，胴部がほぼまっすぐに立ち上がっており，器壁の厚さも5㎜と薄く，他の鉢と比べて違和感がある。

340は，丸平底を呈し，胴部はゆるやかに立ち上がりまっすぐのびる。

341は，丸平底を呈し，胴部はゆるやかに立ち上がりまっすぐのびて，口縁部でやや外反する。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。口唇部の一部が欠損するだけである。

342は，完全品である。丸平底を呈し，胴部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。内面下部は器壁の剥落がみられる。

343は，ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。内外面にハケ目が残る。

344は，内湾しながら立ち上がる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。内面下部に器壁の剥落がみられる。

345は，まっすぐに外に開き，口縁部でやや内湾する。内面に細かいハケ目が残る。内面にススが付着している。

346は，底部は小さな平底を呈しやや下に膨らむ。胴部は内湾しながら立ち上がり，口縁部でほぼ直立する。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。内面下部の器壁が剥落している。

347は，平底を呈する。胴部は内湾しながら立ち上がる。内外面に丹塗りのあとミガキが施されている。外面は色調がくすんでいる。

348～353は，鉢の底部である。

348は，平底を呈する。外面は底部までミガキが施されている。断面が縞状を呈している。

349は，平底を呈する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面は成形時に盛り上がった部分を粗くナデている。

350は，平底を呈する。内外面とも丹塗りのあと粗いミガキが施されている。内面はやや丹が剥がれている。

351は，平底を呈する。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。内面は丹の剥落が激しい。

352は，丸平底を呈する。内外面ともナデ調整が施されている。

353は，短い脚部が横に張り出す。脚台内面天井部は，ほぼ平坦に調整されている。脚部下部にひび割れがみられる。

354～371は，坩である。

354は，底部は平底で，胴部は張り出して稜を有する。頸部から内湾しながら立ち上がり，口縁部でやや外反する。外面と内面頸部より上位はミガキが施されているが，剥落が多い。

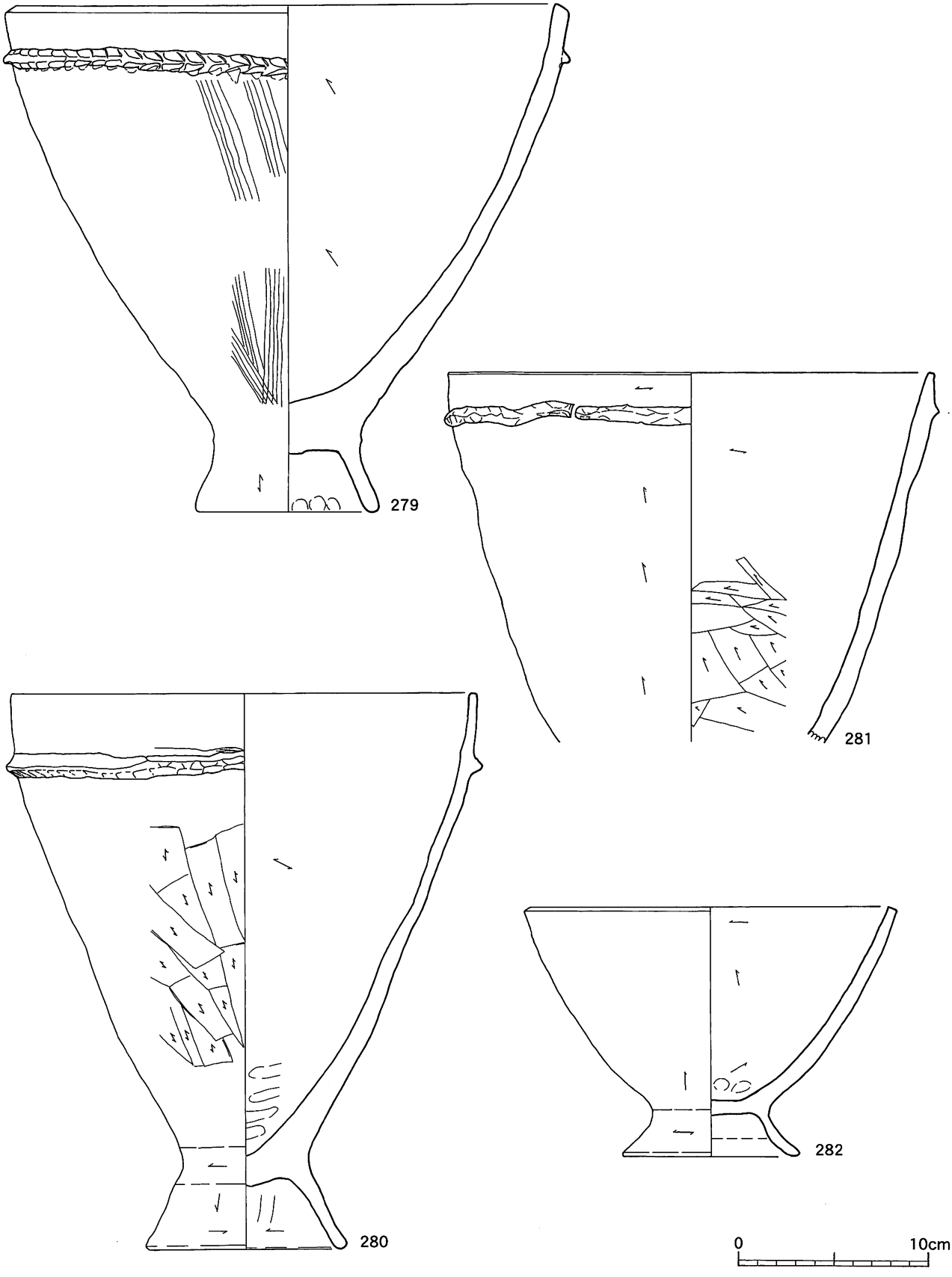
355は，底部は平底で，胴部は張り出して稜を有する。頸部からほぼまっすぐに外側に立ち上がる。外面には丹塗りのあとミガキが施されており，内面頸部より上位には，鮮明なハケ目が残る。口縁部のごく一部が欠損しているだけである。

356は，完全品である。底部は平底で，胴部は張り出して稜を有する。頸部からやや内湾しながら立ち上がる。外面と内面頸部より上位は，丹塗りのあとミガキが施されている。頸部より下にはしぼった痕がみられる。

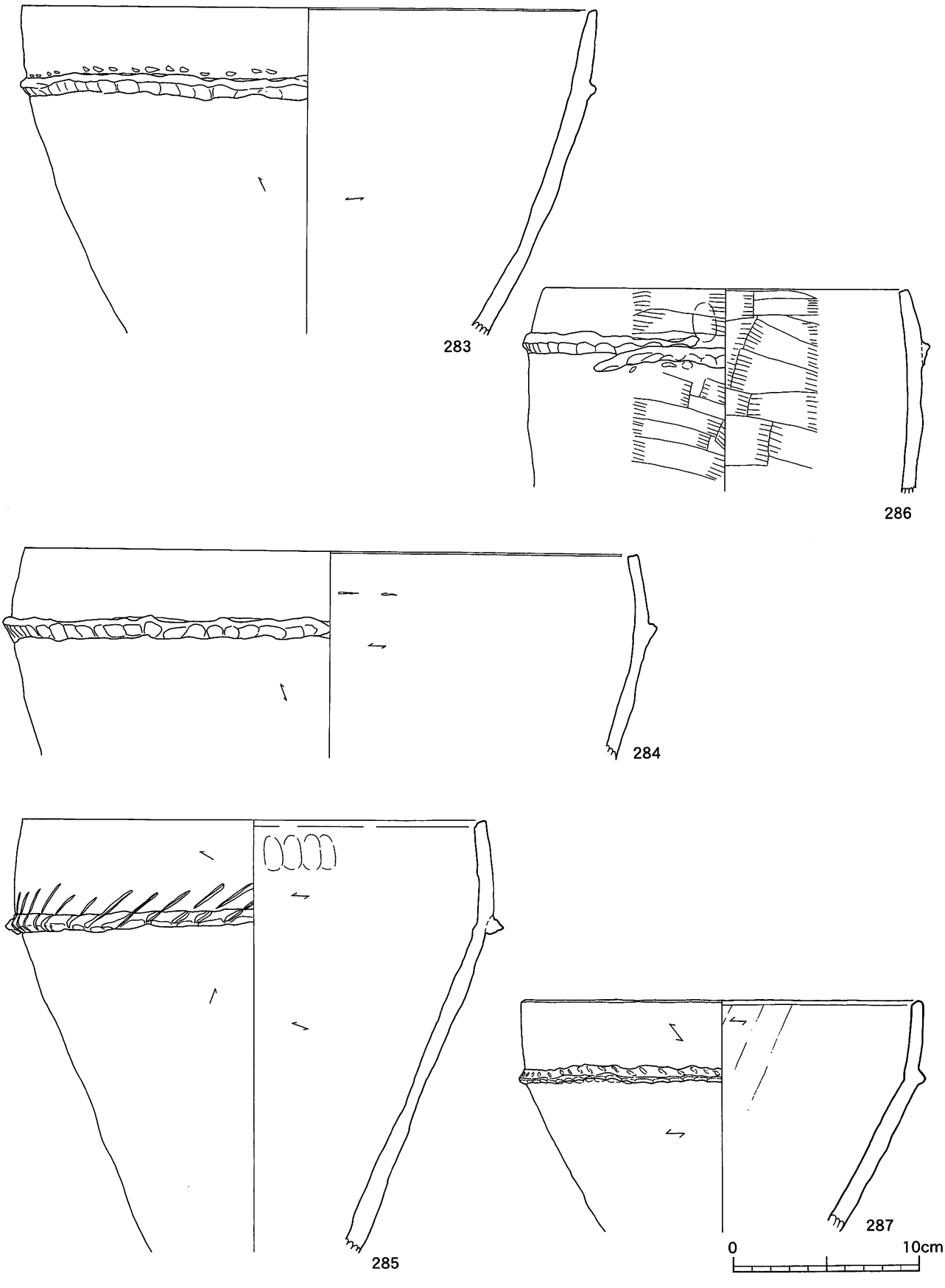
357～359は，坩の口縁部である。

357は，頸部から内湾しながら立ち上がる。外面は丹塗りされているが剥落が激しいため，調整は不明。

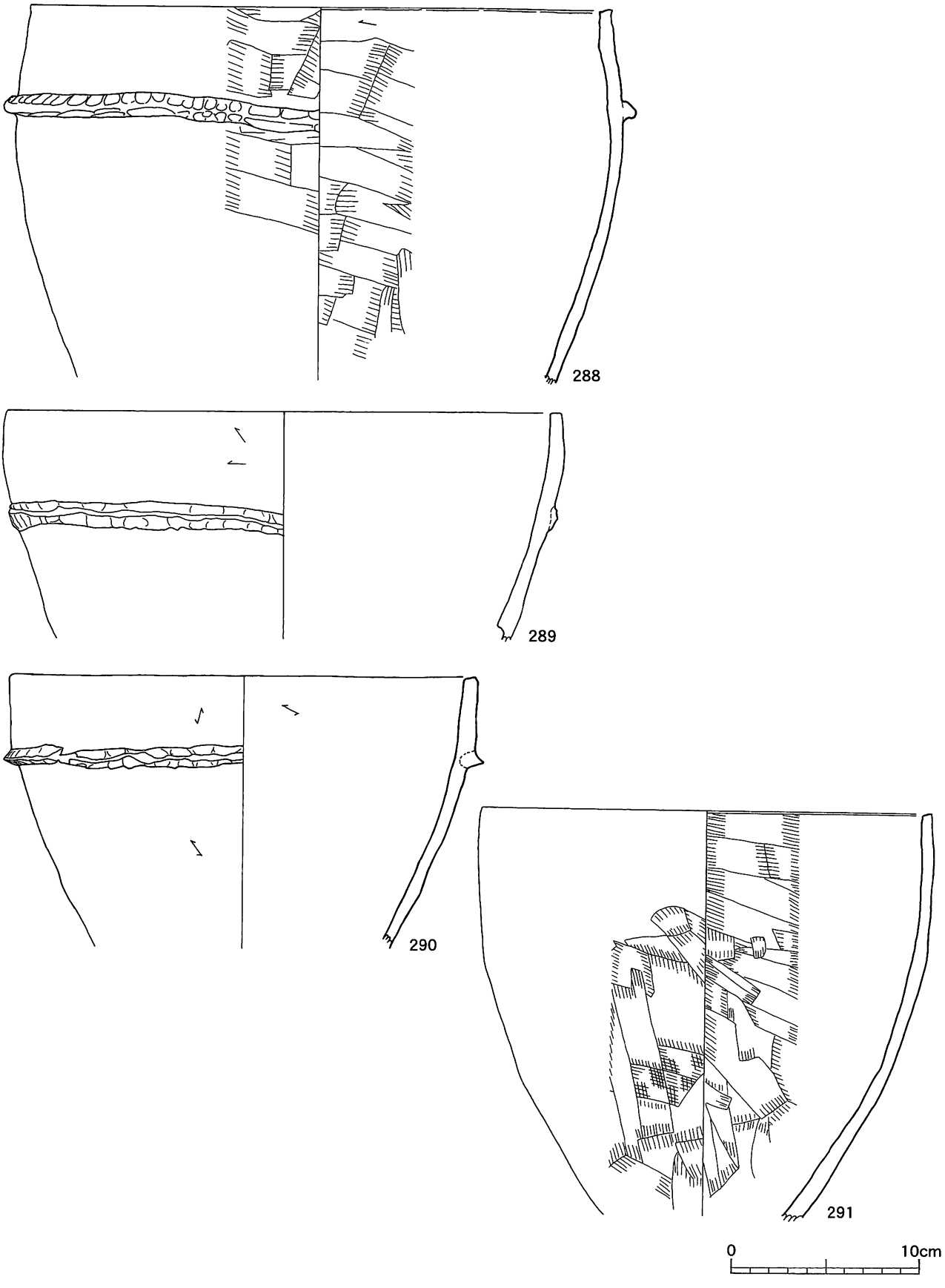
358は，頸部から内湾しながら立ち上がり，口縁部でやや外反する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面はミガキが施されている。



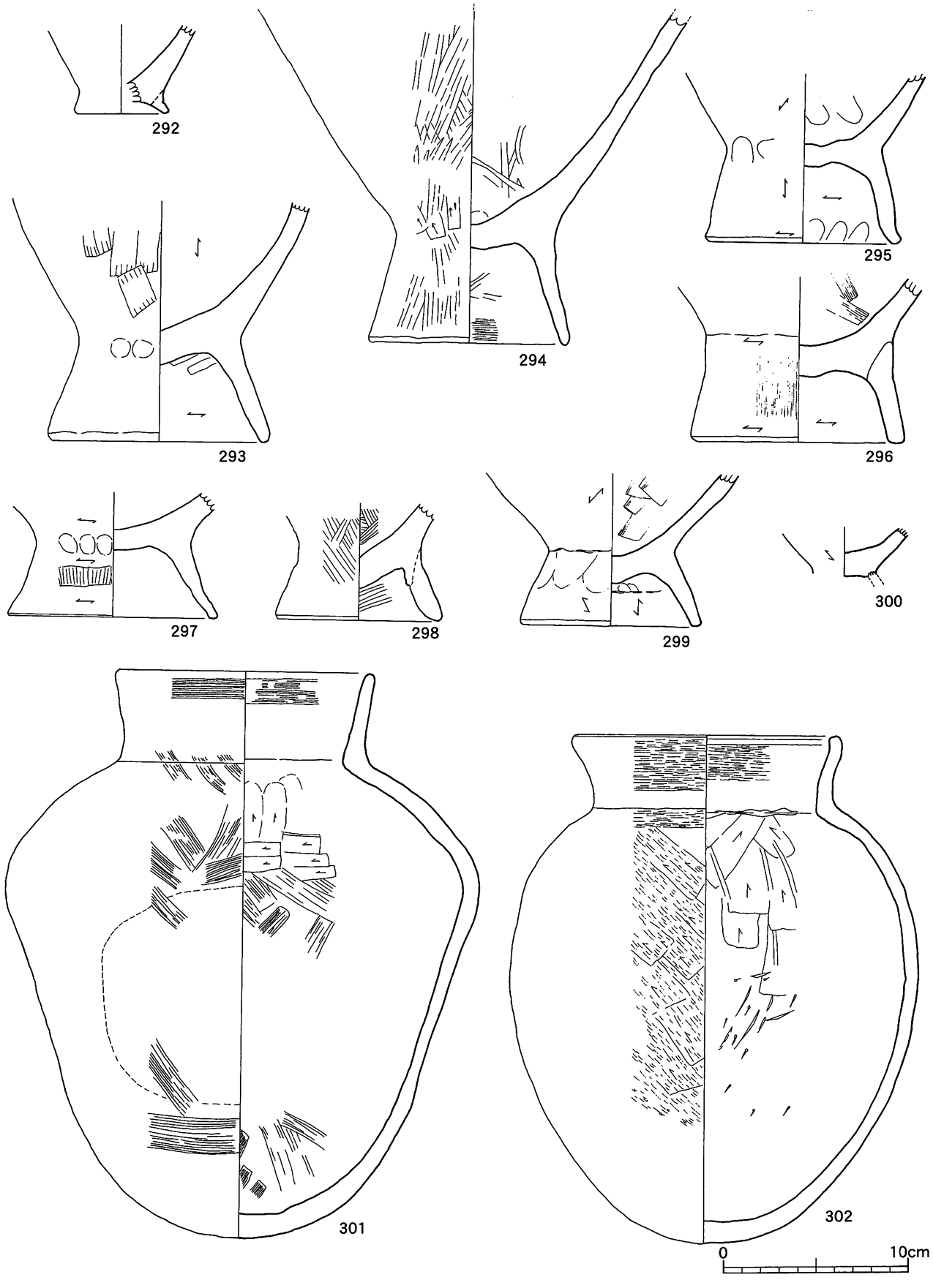
第67図　竪穴住居跡18号内出土遺物(1)



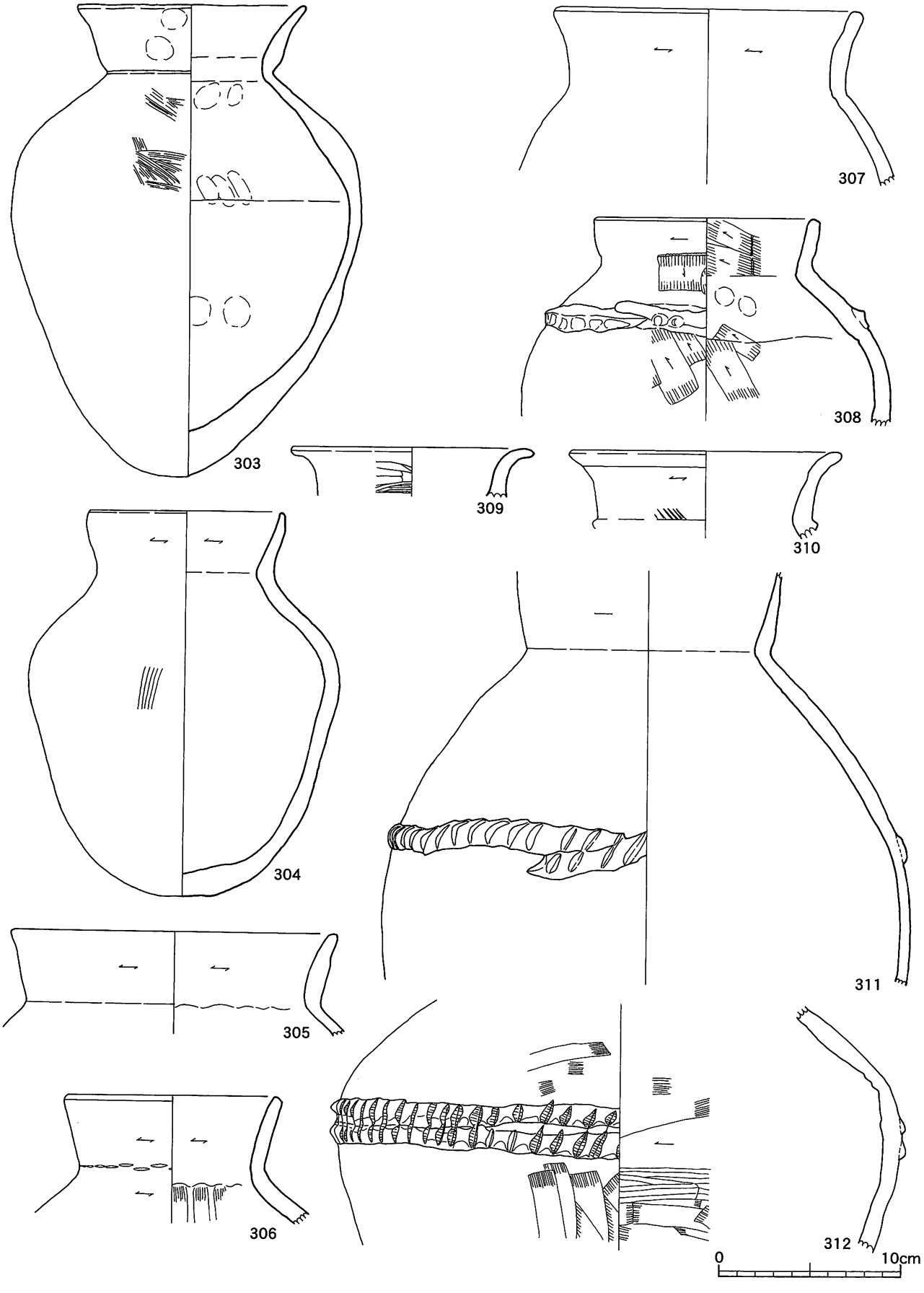
第68図　竪穴住居跡18号内出土遺物(2)



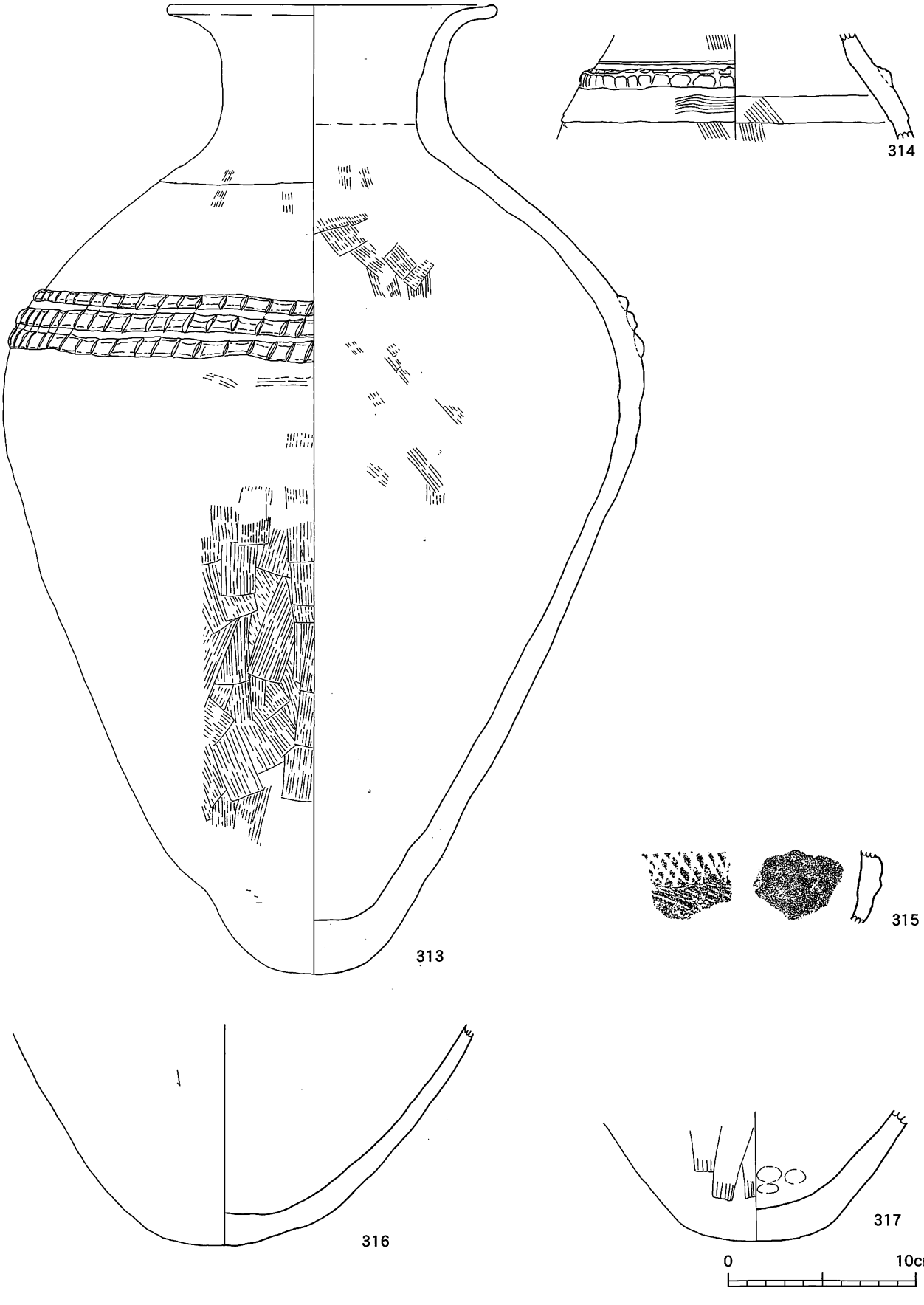
第69図　竪穴住居跡18号内出土遺物(3)



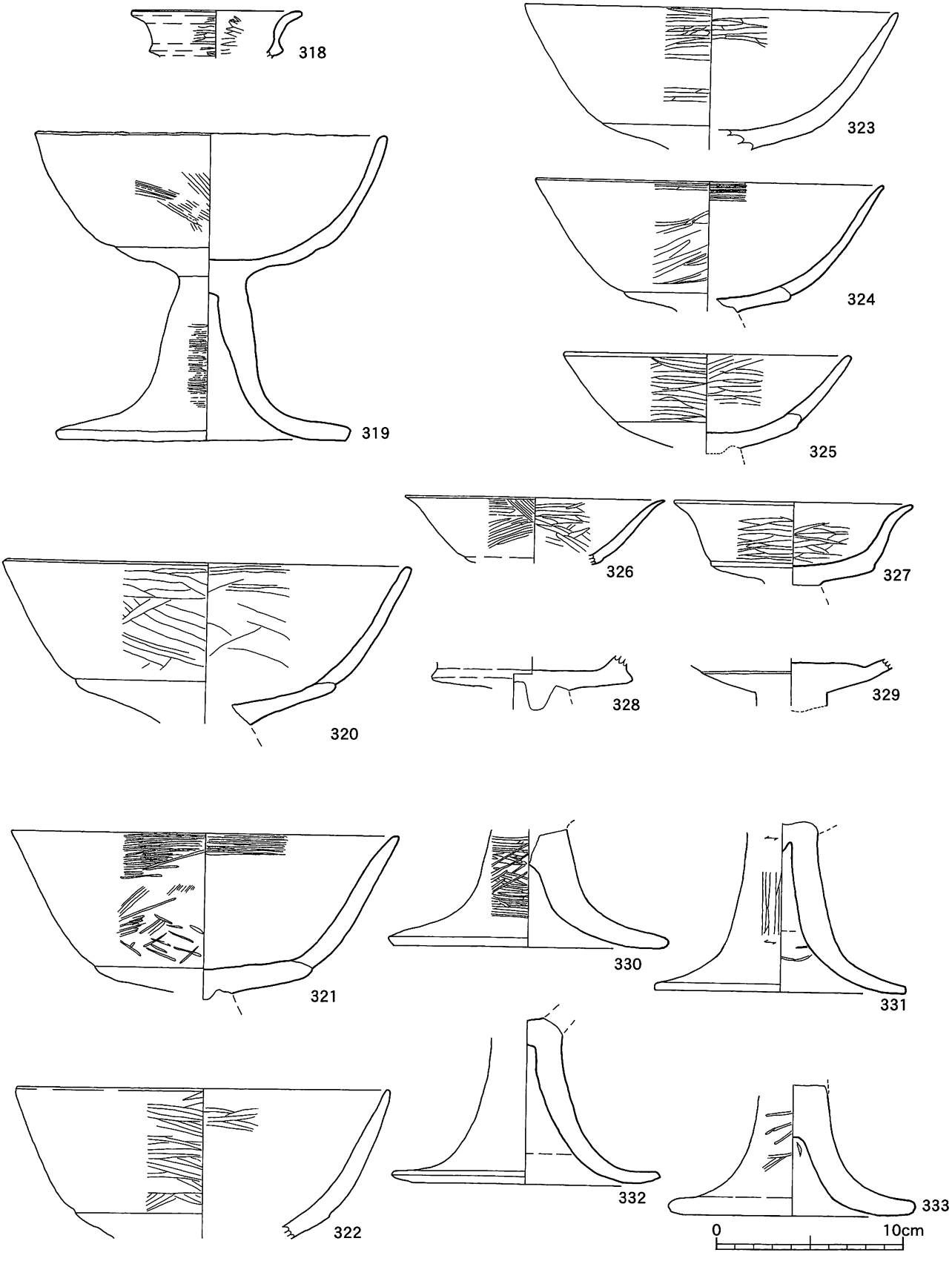
第70図　竪穴住居跡18号内出土遺物(4)



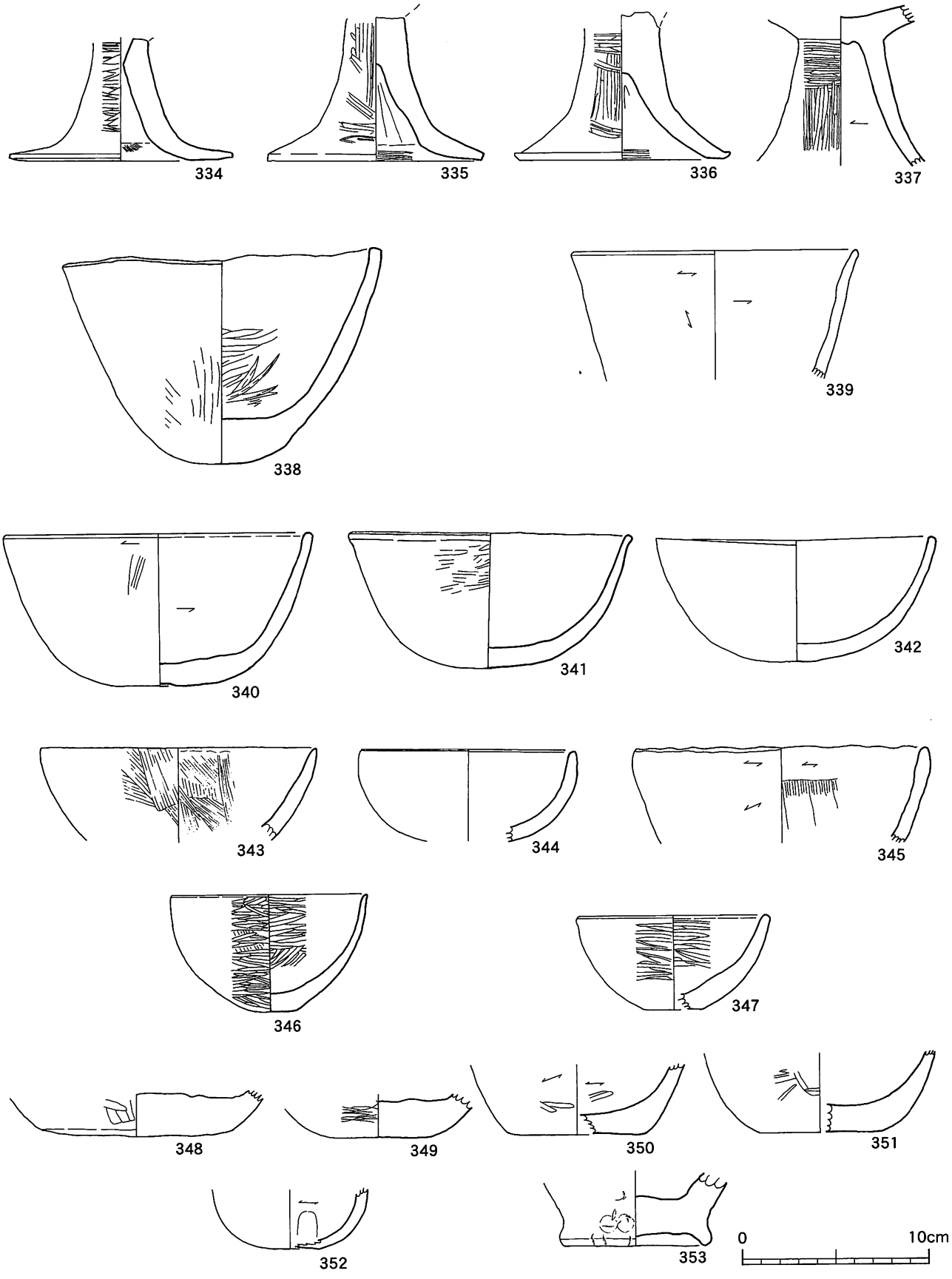
第71図　竪穴住居跡18号内出土遺物(5)



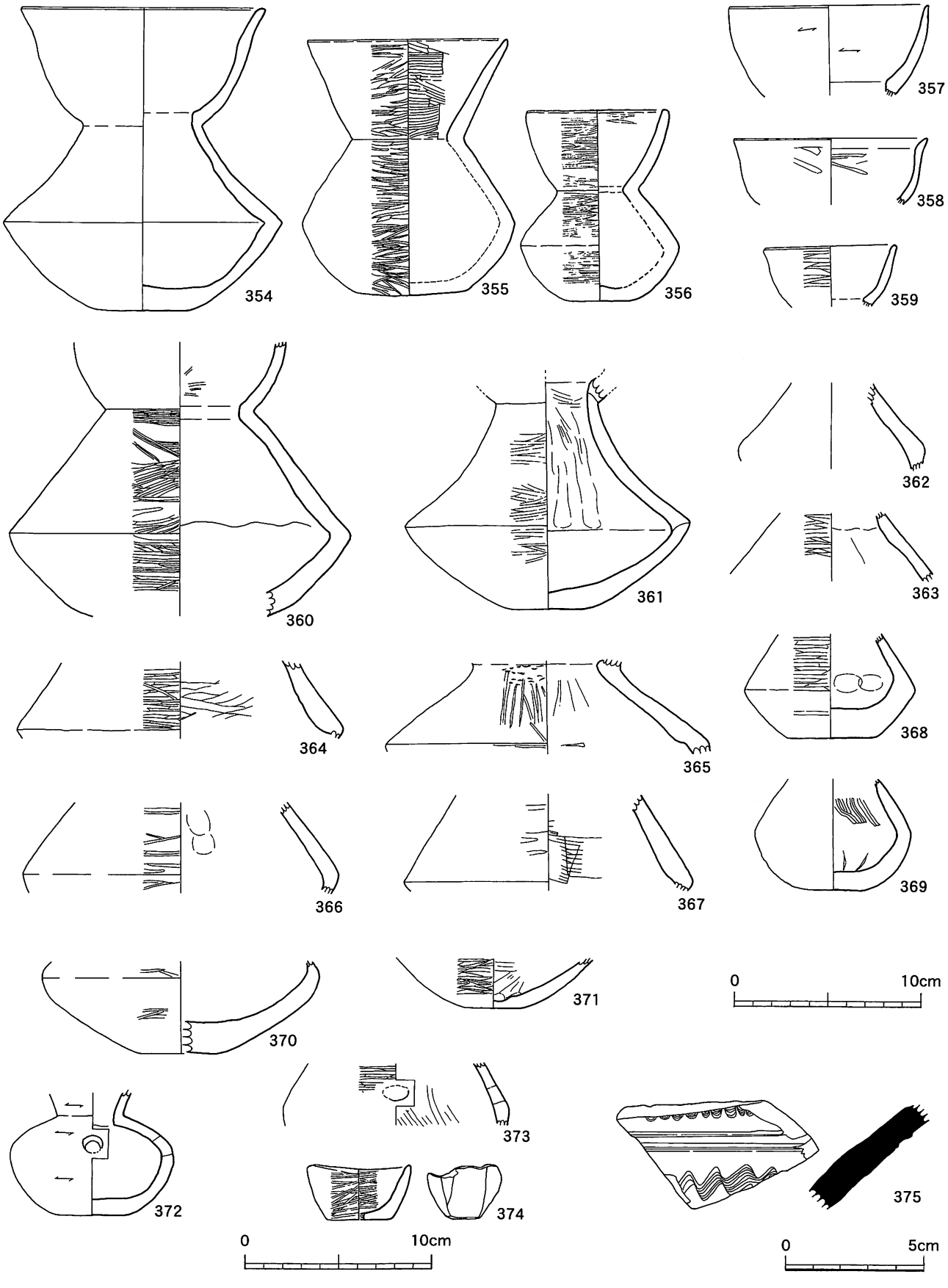
第72図　竪穴住居跡18号内出土遺物(6)



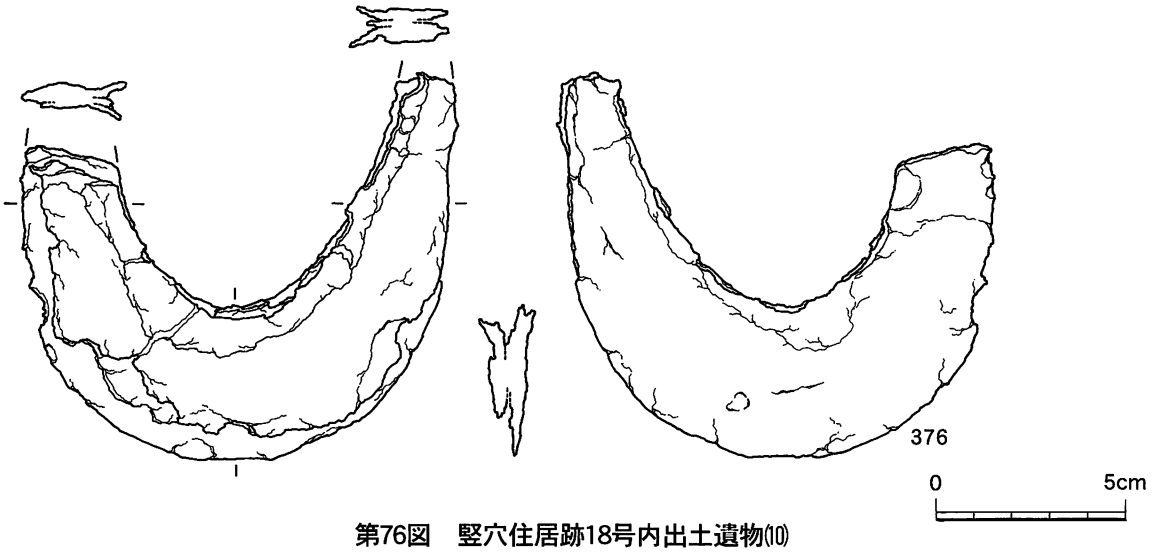
第73図　竪穴住居跡18号内出土遺物(7)



第74図　竪穴住居跡18号内出土遺物(8)



第75図　竪穴住居跡18号内出土遺物(9)



第76図　竪穴住居跡18号内出土遺物(10)

359は，頸部からやや内湾して立ち上がる。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面はハケ目をナデ消している。

360は，坩の口縁部～胴部である。胴部は張り出して稜を有する。頸部からやや内湾しながら立ち上がる。外面と内面頸部より上位は丹塗りのあとミガキが施されている。

361は，坩の頸部～底部である。底部は平底で，胴部は張り出して稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施される。内面の残存部最上位にかすかに丹が観察できるので，頸部より上位が丹塗りされていた可能性がある。胴部上部内面にはしぼった痕がみられる。縦に約半分に割れている。

362～367は，坩の胴部である。

362は，胴部は張り出して稜を有する。外面は丹塗りされている。ローリングを受けており，ミガキが確認できない。

363は，外面と内面の頸部より上位は丹塗りのあとミガキが施されている。

364は，胴部は張り出して稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面には鮮明なハケ目が残る。

365は，胴部は張り出して稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されており，頸部付近に爪跡が残る。内面はしぼった痕が残る。

366は，胴部は張り出して稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面には指頭圧痕が残る。

367は，胴部は張り出して稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面にはハケ目が残る。

368～370は，坩の胴部～底部である。

368は，底部は平底を呈し，胴部が張り出して稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面はナデ調整が施されている。

369は，底部は平底を呈し，胴部は張り出してゆるやかに内湾する。ローリングを受けているが外面に丹塗りとミガキの痕跡がみられる。内面上部にはハケ目が残る。

370は，平底を呈し，胴部は張り出してゆるやかに内湾する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面はナデ調整が施されている。

371は，坩の底部である。平底を呈し，外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面中央部は指頭により押されて器壁が薄くなっており，その周囲にハケ目が残る。

372・373は，ハソウである。

372は，口縁部～底部である。底部は平底を呈し，胴部は肩が張り出してゆるやかに内湾する。頸部で屈曲し外に開く。胴部最大径部分よりやや上位に径1.1cmの円孔が穿たれている。

373は，胴部である。胴部は張り出してゆるやかに内湾する。胴部最大径（12.2cm）部分よりやや上位に径1.3cm（推定）の円孔が穿たれている。外面には丹塗りのあとミガキが施されている。内面にはハケ目が残る。

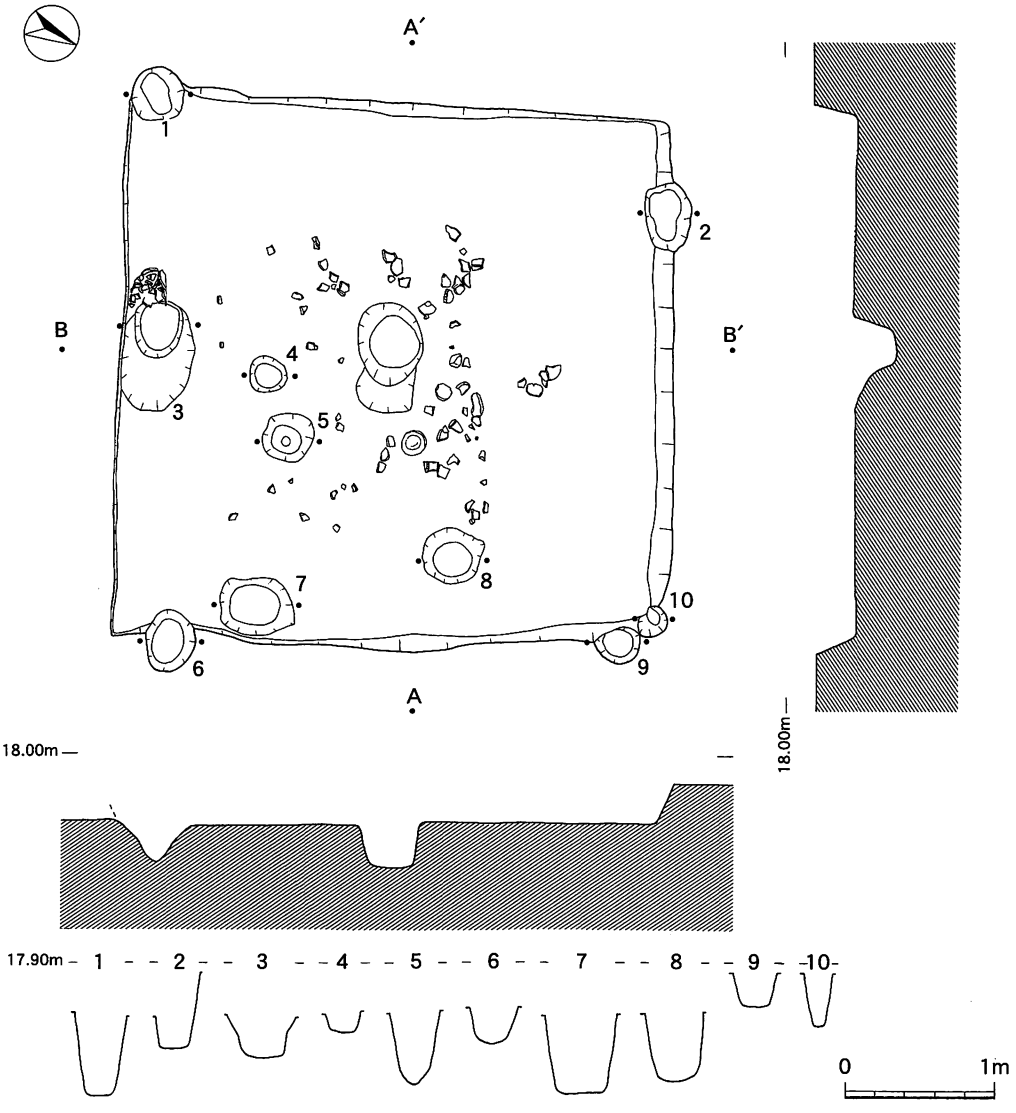
374は，手づくねの土製品である。遺物は実測図の半分しか残存していない。円形を呈していないため，径の推定は不可能である。実測図は残存している部分を反転させて作図している。上面観は楕円ぎみの略長方形を呈する。内外面に丹塗りのあとでミガキが施されている。

375は，須恵器甕の口縁部である。突帯を2条廻らし，その上下に櫛描き波状文が施されている。断面は赤紫色を呈する。5世紀中頃から後半と思われる。

376は，鉄製のU字形鍬・鋤先である。2枚の鉄板を鍛接したあと，内側にクサビ状の工具でV字状の溝を6mmほどの深さで穿っており，溝の部分の鉄板がV字形に開いている。

【竪穴住居跡19号】（第77図）

B・C－16区で検出した。3.70m×3.68mの方形を呈



第77図　竪穴住居跡19号実測図

している。柱穴の配置に規則性がみられず二本柱にも四本柱にもならない。検出面から深さ25cmを残す。

【竪穴住居跡19号内出土遺物】（第78・79図，377～396）

竪穴住居跡19号内からは，パンケース約５箱分の遺物が出土した。そのうちの20点を図化した。

377～392は，成川式土器である。393～396は，須恵器である。

377～380は，甕である。

377は，甕の口縁部である。胴部はまっすぐにのびて，口縁部で内湾する。外面にはススが付着している。

378は甕の底部である。脚部はやや外に開くがほぼまっすぐにのびる。脚台内面天井部は平坦に調整されている。内外面ナデ調整が施される。

379は，甕の底部である。脚部は欠損している。脚台内面天井部はやや下方に膨らむ。ローリングを受けている。内面は器壁が剥落している。

380は，甕の口縁部である。口縁部で内湾している。キザミ目が施された突帯が２条廻っている。内外面にハケ目が残る。

381～385は，壺である。

381は，壺の口縁部である。まっすぐに外に開く。内外面にハケ目が残る。

382は，壺の頸部である。屈曲部にキザミ目が施された突帯が１条廻る。内面は器壁の剥落がみられる。

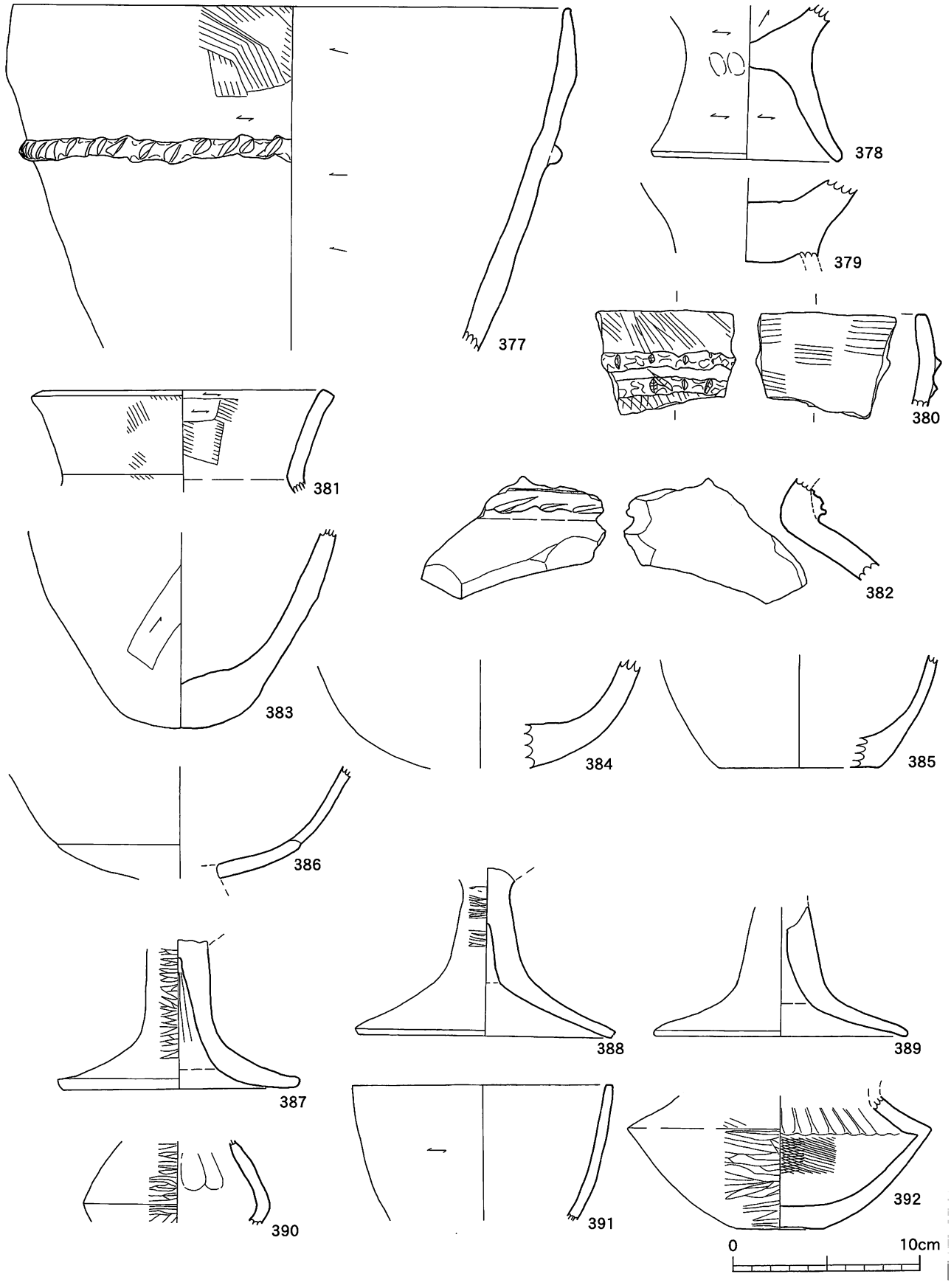
383～385は，壺の底部である。

383は，底部はやや下方に膨らみ丸平底を呈する。ゆるやかに立ち上がる。内面は器壁の剥落が激しい。

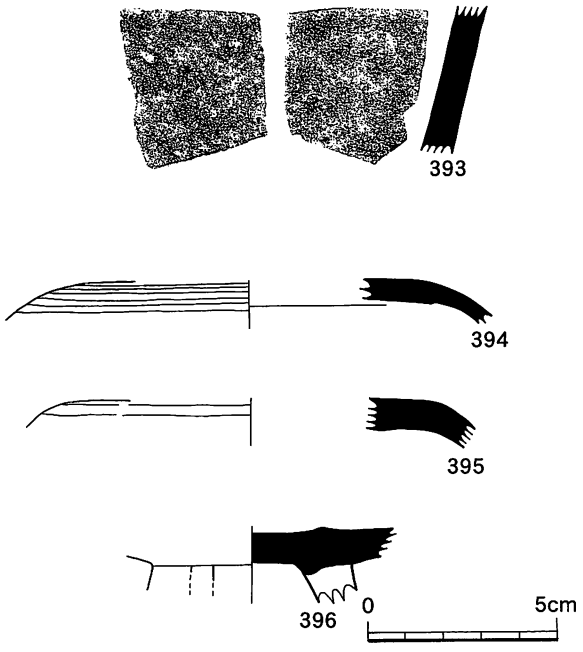
384は，丸底を呈すると思われる。

385は，平底を呈する。鉢である可能性もある。

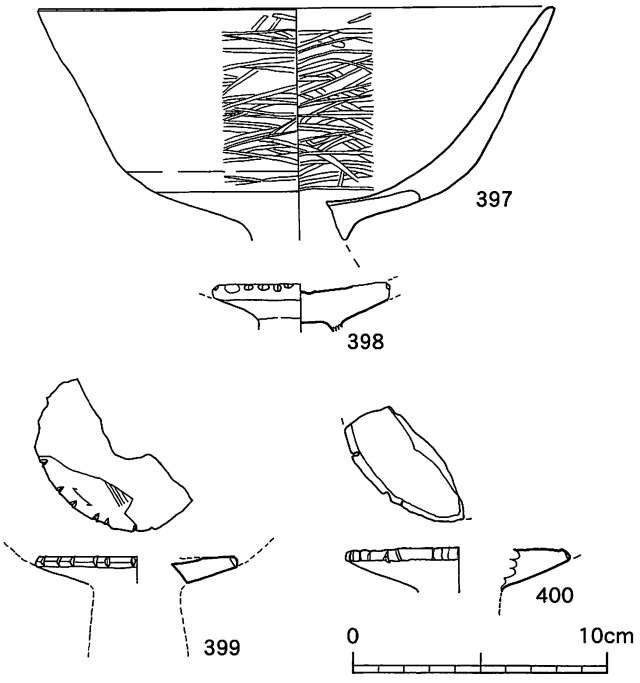
386～389は，高坏である。



第78図　竪穴住居跡19号内出土遺物(1)



第79図　竪穴住居跡19号内出土遺物(2)



第80図　接合痕のわかる高坏

386は，高坏の坏部である。下部に段を有し，やや内湾しながらのびる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。内面は器壁の剥落が激しい。

387～389は，高坏の脚部である。

387は，内部の空洞にしぼった痕が残る。外面は丹塗りされたあとミガキが施されるが発色は鈍い。

388は，外面は丹塗りされたあとミガキが施されるが発色は鈍い。

389は，内部の空洞は削り出しで成形している。外面は丹塗りされたあとミガキが施されているが発色は鈍い。接地面付近は細かいハケ目が残る。

390～392は，坩である。

390は，坩の胴部である。胴部は張り出し稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。

391は，坩の口縁部である。やや内湾しながらのびる。外面は丹塗りのあとミガキ，内面はナデ調整である。

392は，坩の胴部～底部である。胴部が張り出し，胴部最大径に稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面下部はハケ目が格子目状に残る。上部はしぼった痕が残る。頸部より上部がはずれている。

393～396は，須恵器である。

393は，甕の胴部である。外面は平行叩き目が残り，内面は丁寧なナデ調整が施されている。断面が赤紫色を呈している。5世紀代であると思われる。

394は，坏蓋である。小破片のため詳細は不明であるが，6世紀末～7世紀代のものであると思われる。

395は，坏蓋である。小破片ため詳細は不明であるが，断面は赤紫色を呈している。

396は，高坏の脚部である。小破片のため詳細は不明であるが，三角透かしが三方から穿たれている。坏部内面には自然釉がかかる。

(2)　接合痕のわかる高坏（第80図，397～400）

397～400は，成形時の坏部と脚部の接合の技法を示しているものである。

397は，坏部の底部で上面観が円形を呈して割れている。割れ口の外周にキザミ目が施されており，上部には格子目状のキザミが施されている。胴部側には，これに対応する盛り上がりがはっきりと残っている。坏部と脚部の接合力を強めるためであると思われる。竪穴住居跡18号で出土している。

397に気づいたあと注意して探してみると，398～400の3点がみつかった。いずれも外周にキザミ目が施されており，399には，上部に線状のキザミ目もみられる。

(3)　線刻が施された遺物（第81図，401～409）

401～409は，線刻が施された遺物である。

401～408は，高坏である。

401は，脚部である。外面は丹塗りのあとミガキ。外面に線刻が3本刻まれている。竪穴住居跡5号出土。

402は，脚部である。外面は丹塗りのあとミガキ。外面に線刻が3本刻まれている。竪穴住居跡11号出土。

403は，脚部である。外面は丹塗りのあとミガキ。外面に線刻が2本刻まれている。竪穴住居跡14号出土。

404は，脚部である。外面は丹塗りのあとミガキ。内面に線刻が3本刻まれている。竪穴住居跡18号出土。

405は，脚部である。外面は丹塗りのあとミガキ。外面に線刻が4本刻まれている。竪穴住居跡10号出土。

406は，高坏の坏部であると思われる。外面は丹塗りのあとミガキが施され，内面はナデ調整が施されている。外面に線刻が4本刻まれている。竪穴住居跡9号出土。

407は，脚部である。下部に貫通しない孔が3か所みられる。脚部は欠損していないので，孔は3か所のみである。竪穴住居跡18号出土。

408は，脚部である。外面はミガキが施されている。外面に11本の線刻が刻まれている。竪穴住居跡3号出土。

409は，蓋のつまみであると思われるが，天地逆の可能性もある。内面中央部に径1.1cmのくぼみがある。外面は丹塗りが施され，内面は丁寧なナデ調整が施されている。外上面に3本の線刻がみられ，内2本は丹をかぶっている。

(4) 遺構外出土遺物（第82～84図，410～467）

410～467は，わずかに残存していた包含層（Ⅱ層）・後世の撹乱内・表土層から出土した遺物を一括して掲載したものである。

410～415・417～449は成川式土器，416は古墳時代の土器，450は土製品，451～467は須恵器である。

410～415は，甕である。

410～412は，甕の口縁部～胴部である。

410は，胴部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，口縁部でほぼ直立する。胴部に指頭圧痕が施された突帯が1条廻る。胴部外面下部にハケ目が残る。器壁の剥落が激しい。

411は，胴部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，口縁部でほぼ直立する。口唇部から2cmほど下に指頭圧痕が施された突帯が1条廻る。胴部内面はハケ目がナデ消される。

412は，胴部はほぼまっすぐに立ち上がり，口唇部で内湾する。胴部に指頭圧痕が施された突帯が1条廻る。

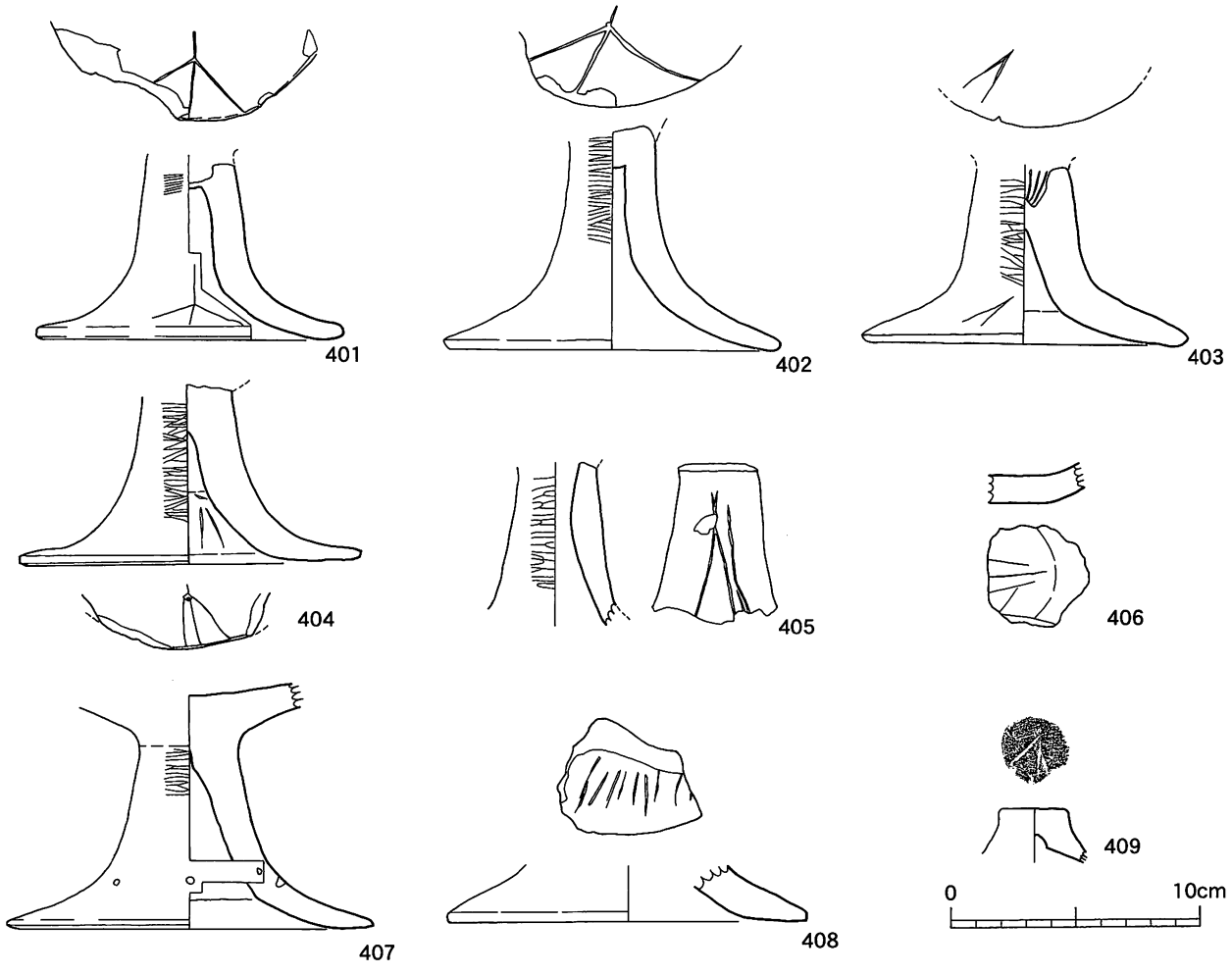
413～415は，甕の底部である。

413は，脚部はやや外反する。脚台内面天井部は平坦に調整される。外面にハケ目が残る。

414は，脚部はやや内湾する。脚台内面天井部は上方にややくぼむ。内外面にケズリ状のハケ目が残る。

415は，脚部は欠損している。脚台内面天井部は下方に膨れている。内外面にハケ目が残る。

416は，古墳時代の甕である。頸部で屈曲し，口縁部はやや外反しながら立ち上がる。内外面にハケ目が残る。



第81図　線刻が施された遺物

胴部以下は欠損しているが，丸底を呈していると思われる。在地系の土器ではない。

417～421は，壺である。

417は，壺の口縁部～胴部である。胴部は中程で最大径を有し，頸部で外反したあと口縁部でやや内湾する。外面の下部を中心にススが付着している。

418は，壺の口縁部である。口縁上部で外反する。外面は縦位のハケ目が残る。内面は器壁の剥落が激しい。

419は，壺の底部である。丸平底を呈する。底部外面に4か所キザミが残る。

420は，大型の壺の肩部である。斜格子文を施された幅広の突帯が1条廻る。

421は，壺の口縁部である。二重口縁を呈する。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。

422～432は，高坏である。

422～426は，高坏の坏部である。

422は，下部に段を有し，ゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施されている。内面は器壁の剥落がみられる。

423は，下部に段を有し，やや内湾しながら立ち上がる。内外面ともナデ調整が施されており，丹塗りはみられない。

424は，下部がやや横に張り出し段を有する。体部は外反しながらのびる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。

425は，下部が横に張り出し稜を有する。体部は内湾したあと外反し，口縁部で大きく外に開く。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。

426は，下部が横に張り出し稜を有する。体部は内湾したあと外反し，口縁部で大きく外に開く。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。

427～432は，高坏の脚部である。

427は，外面はミガキが施されている。

428は，上部に坏部との接合に用いられたコマがはまっている。

429は，外面は丹塗りのあとミガキが施されている。接地面が輪状に擦れている。

430は，外面と坏部内面は丹塗りされている。器壁の剥落が激しく調整は不明。

431は，空洞上部にケズリ痕が残る。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。

432は，外面は丹塗りのあとミガキが施される。内面下部にはハケ目が残る。ローリングを受けている。

433～439は，鉢である。

433は，底部はほぼ平底を呈する。体部はゆるやかに立ち上がる。内外面とも丹塗りのあとミガキが施される。

434は，底部は丸平底を呈する。体部はゆるやかに立ち上がる。内外面ともミガキが施されている。

435は，口縁部で内湾する。内外面とも丁寧なナデ調整が施される。

436は，口縁部でやや内湾する。内面は丁寧なナデ調整が施される。外面には，編物（ザル編みか）の圧痕が残る。横方向には幅1㎜強，縦方向には幅0.5㎜程の材料が用いられている。

437は，底部は平底を呈する。外面は丹塗りのあとミガキが施され，内面はナデ調整が施されている。

438は，脚台付の鉢の底部である。脚部は端部でやや外反する。脚台内面天井部は平坦に調整される。外面は丹塗りのあとミガキが施されるが，脚部は丹があまりみられない。内面はミガキ状の丁寧なナデ調整が施される。

439は，底部で粘土が横にはみだす。底部外面の調整は粗い。内面にはハケ目が残る。

440～445は，坩である。

440・441は，底部は平底を呈する。胴部が張り出し，胴部最大径に稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施される。

442は，底部は平底を呈する。胴部が張り出し，胴部最大径に稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内面にケズリが施される。

443は，底部は平底を呈する。胴部が張り出し，胴部最大径に稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。器壁の剥落が激しい。

444は，胴部が張り出し，胴部最大径に稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。内外面とも器壁の剥落がみられる。

445は，胴部が張り出し，胴部最大径に稜を有する。外面は丹塗りのあとミガキが施されている。外面は丹の剥落が激しい。

446～449は，手づくねである。

446は，鉢である。平底を呈し，体部はまっすぐに立ち上がる。粗製で器壁にひび割れがみられる。

447は，鉢である。丸平底を呈している。粗製。

448は，甕である。口縁部は内湾する。胴部に突帯が1条廻る。

449は，甕の底部と思われる。脚部は横に張り出す。脚台内天井部は平坦に調整される。

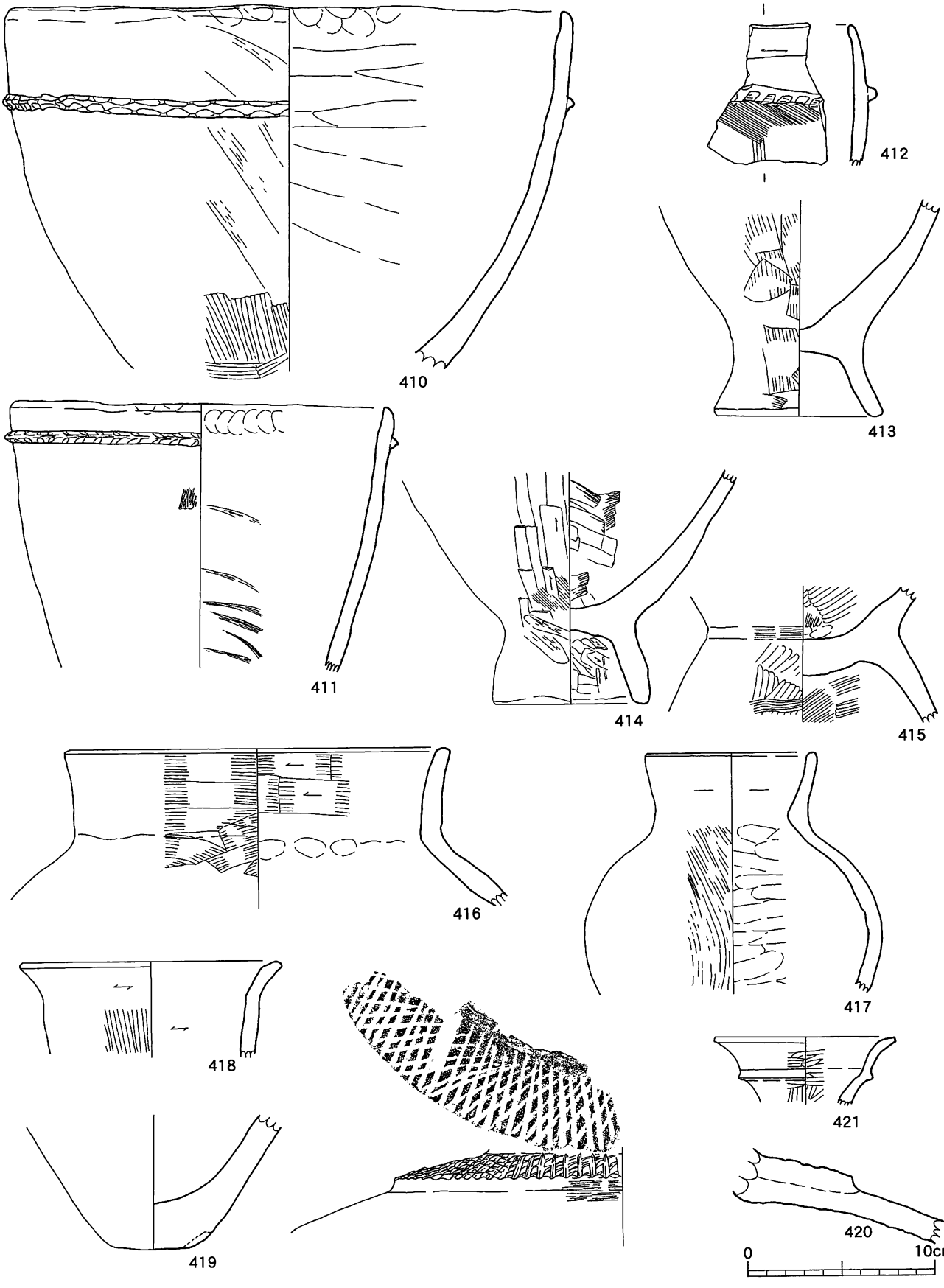
450は，土玉である。直径2.8㎝を測り，孔径は3㎜である。表面は丁寧にナデ調整されている。Ⅱ層一括で取り上げており，時期が異なる可能性もある。

451～467は，本遺跡出土の成川式土器に伴うと考えられる須恵器である。

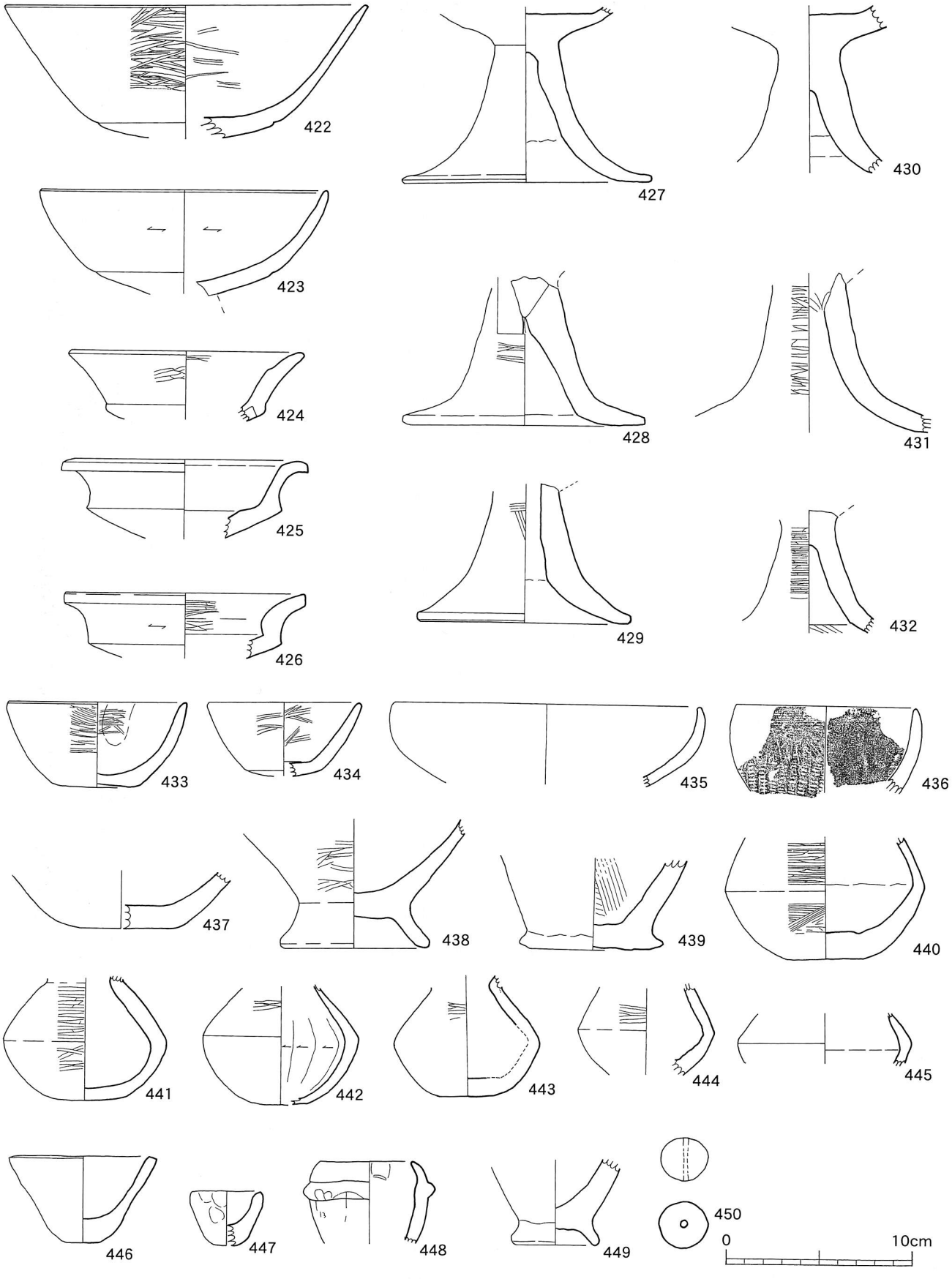
451～453は，蓋付杯の蓋である。

451は，口縁部が張り出し稜を有する。天井部は比較的平らに成形される。

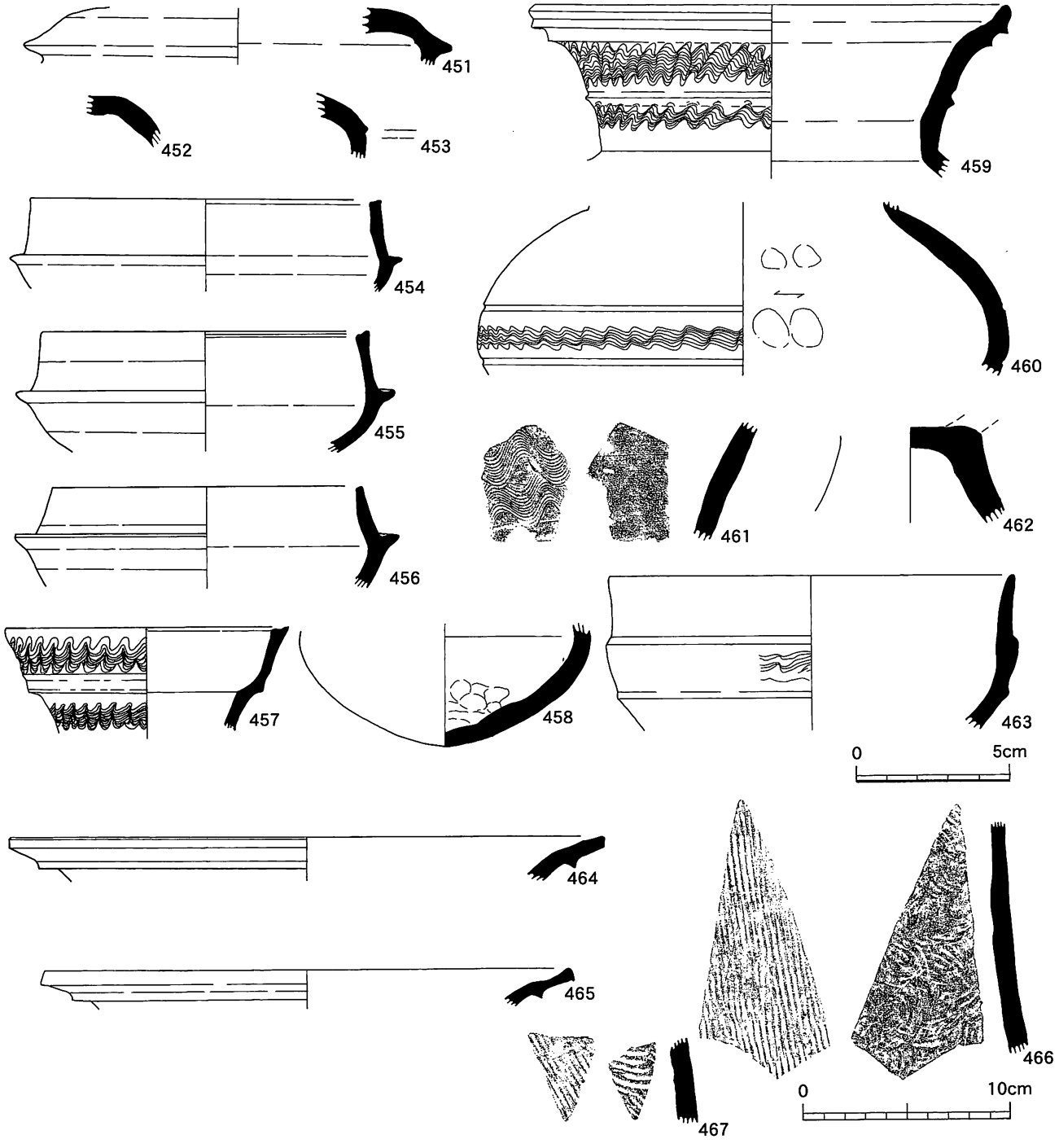
452は，小片のため詳細は不明。



第83図　遺構外出土遺物(1)



第83図　遺構外出土遺物(2)



第84図　遺構外出土遺物(3)

453は，口縁部がやや張り出し稜を有する。

454～456は，杯である。

454は，受部からの立ち上がりは内傾して，端部はやや内方へ傾き，浅くくぼむ。受部はほぼ水平にのびて先端部は鋭い。

455は，受部からの立ち上がりは内傾して，端部はやや内方へ傾き，浅くくぼむ。受部は外上方へのび端部の稜はあまい。

456は，受部からの立ち上がりは内傾して，端部はやや内方へ傾く。受部は外上方へのび先端部は鋭い。

457は，ハソウの口縁部～頸部である。口頸部は外反したあと段をつくって外上方にまっすぐのびる。頸部と口縁部との境にはわずかにつまみ出した突帯が廻る。口縁部と頸部に櫛描波状文が施されている。断面が赤紫色

を呈する。

458は，ハソウの底部である。尖り気味の底部を有する。底部内面に棒状の工具で押しつけた痕が残る。断面が赤紫色を呈する。

459は，広口壺の口縁部である。口頸部は朝顔形に外反し，端部は内湾して短く立ち上がる。口頸部文様帯は突帯で区切り，2段に櫛描波状文を施す。

460は，壺の胴部である。胴部最大径付近に沈線で区画された文様帯を有し，櫛描波状文が施されている。

461は，壺である。2段の櫛描波状文がみられる。

462は，高杯の脚部である。透かしの痕跡が2か所残り，その位置から三方透かしであると思われる。

463は，無蓋高杯の杯部である。体部に段と突帯で区画された文様帯を有し，櫛描波状文が施される。小片で，径を復元しているため，把手付鉢である可能性もある。

464～467は，甕である。

464は，口縁端部は平坦に成形し，その下に断面三角の突帯を廻らす。

465は，口縁端部上下に稜を有する。その下に断面三角の突帯を廻らす。

466・467は，甕の胴部である。外面には平行叩き目，内面には同心円状の当て具痕が残る。内面にやや磨り消しの痕が残る。

引用・参考文献

田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ1966

中村直子「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号
鹿児島大学法文学部考古学研究室1987

中村　浩「須恵器集成図録　第1巻　近畿編Ⅰ」
雄山閣出版1995

中村　浩「和泉陶邑窯　出土須恵器の型式編年」
芙蓉書房出版2001

正岡睦夫「愛媛県今治市唐子台出土の陶質土器と古式須恵器」
『遺跡』第33号　遺跡発行会1991

松井和幸「鉄製農具の変遷」『古代における農具の変遷－稲作技術史を農具から見る－発表要旨集』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994

4　古代の調査

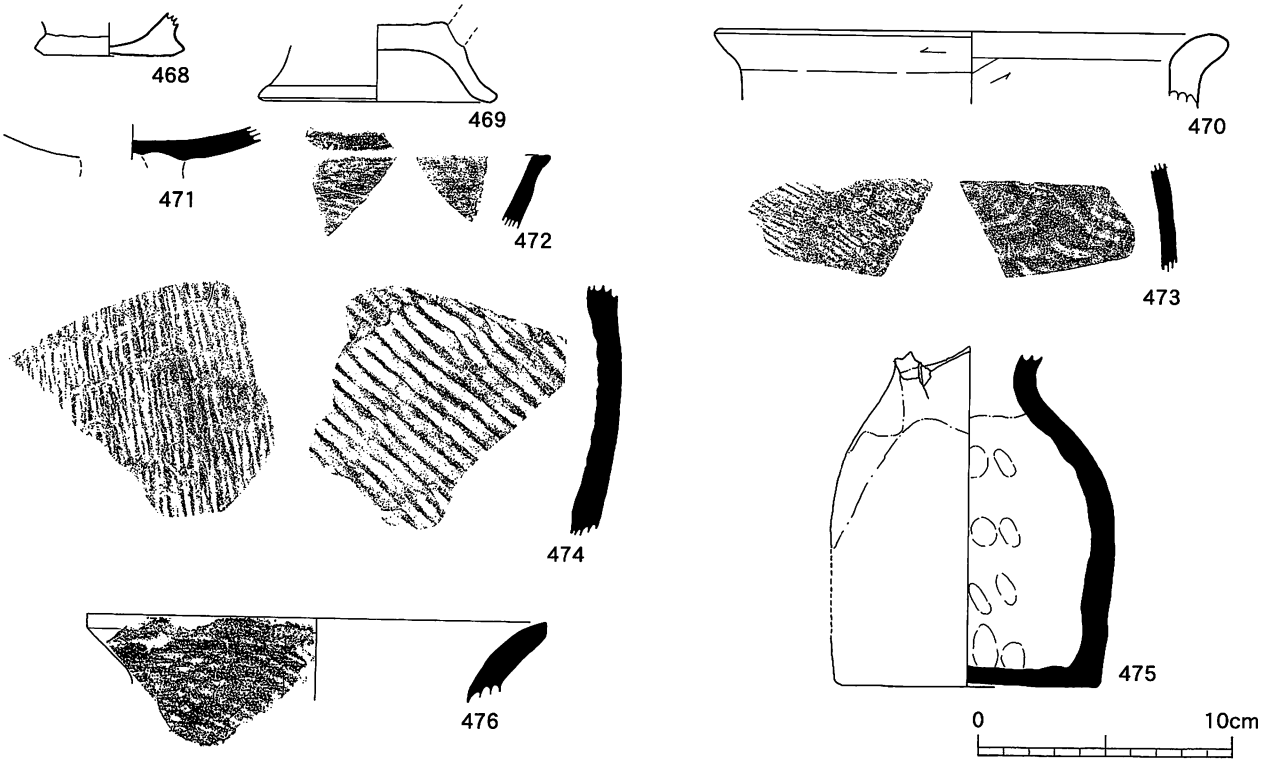
古代については，Ⅱ層～表土層にかけて土師器や須恵器が出土した。古代に属すると思われる遺構は検出していない。

(1)　遺物（第85図，468～476）

古代の遺物はパンケース約1箱分の遺物が出土している。そのうちの9点を図化した。

468～470は土師器，471～476は須恵器である。

468は，土師器坏の底部である。底部周辺の調整が粗



第85図　古代出土遺物

く，横にはみだしている。底部切り離しは，ヘラ切りである。ローリングを受けている。

469は，土師器椀の底部である。高台は端部でやや外反する。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。

470は，土師器甕である。口縁部で外反する。内面屈曲部より下位はケズリが施されている。

471は，高坏の坏部底部である。外面は成形時の回転ナデ調整のままであるが，内面はそれを磨り消すナデ調整が施されている。脚部との接合部ではずれている。

472は，碗の口縁部であると思われる。口縁端部が外につまみ出される。小片のため詳細は不明。口唇端部の一部に砂が付着している。

473は，甕の胴部である。外面は平行叩き目，内面には同心円状の当て具痕が残る。外面に灰が付着している。

474は，甕の胴部である。外面には平行叩き目，内面には条痕状の当て具痕が残る。外面に灰が付着している。

475は，壺である。平底を呈し，頸部がすぼまる。外面には平行叩き目，内面には輪積みの痕跡が残る。頸部より上位が欠損しているが，欠損部の一部（半分程度）に灰釉が付着しており，窯出し時に既に欠損していたと思われる。外面の全面と内面頸部・底部に灰釉が付着している。在地系の須恵器である。

476は，壺の口縁部である。外面に平行叩き目が残る。内面は丁寧なナデ調整が施されている。外面に灰釉が付着している。

5　中世の調査

本遺跡では中世に属する遺構・遺物が検出された。

遺構は，掘立柱建物跡３棟分・竪穴建物跡１基・土壙墓24基・夜光貝入りの土坑３基・ピット群・溝状遺構などである。土壙墓の１基と土坑３基から夜光貝が出土している。木下尚子氏によると夜光貝の本土での検出例は，鹿児島県枕崎市「松之尾遺跡」についで２例目となる。

遺物は，土師器・青磁・白磁・陶器・古銭などが出土している。青磁のうちでは，見込みに双魚文が貼付された坏が出土しており注目される。16世紀の朝鮮白磁が１点出土している。包含層が削平されているため，出土量はパンケース約10箱分である。

(1)　遺構・遺構内出土遺物

中世の遺構は，掘立柱建物跡３棟分・竪穴建物跡１基・土壙墓23基・夜光貝入りの土坑３基・ピット群・溝状遺構である。

【掘立柱建物跡１号】（第90図）

Ａ地点のＢ・Ｃ－７・８区で検出した。梁間２間×桁行４間の総柱の建物跡である。建物の桁行はＮ63°Ｗである。梁間の１間が平均1.88m，桁行の１間が平均2.06mとなる。柱穴の掘り方は円形か楕円形を呈し，平均径は49cmを測る。深さは100cm～30cmで，平均は64cmである。

【掘立柱建物跡２号】（第91図）

Ｂ地点のＢ・Ｃ－３・４区で検出した。桁行が調査区外へ広がっている可能性があり，建物の規模については断定できない。梁間２間×桁行３間以上の建物跡である。建物の桁行はＮ33°Ｅである。梁間の１間が平均1.94m，桁行の１間が平均2.14mとなる。柱穴の掘り方は円形を呈し，平均径は27cmを測る。深さは40cm～６cmで，平均は36cmである。

【掘立柱建物跡３号】（第92図）

Ｂ地点のＣ－２区で検出した。梁間１間×桁行２間の建物跡である。建物の桁行はＮ70°Ｅである。梁間の１間が平均2.59m，桁行の１間が平均1.92mとなる。柱穴の掘り方は円形を呈し，平均径は29cmを測る。深さは29cm～18cmで，平均は23cmである。

【竪穴建物跡】（第93図）

Ａ地点のＡ・Ｂ－６・７区で検出した。4.12m×2.85mの隅丸長方形を呈している。壁沿いに柱穴が廻り，内部には２か所の柱穴が残る。

【土壙墓・夜光貝入りの土坑】（第95～第97図）

Ａ地点のＡ～Ｃ－５～８（１次調査），12～16区（４次調査）で，合計24基の土壙墓を検出した。そのうちの１基（土壙墓24号）から夜光貝が出土している。

また，Ａ地点のＣ－５区・Ｂ－６・８区で，夜光貝入りの土坑を検出した。

夜光貝入りの土坑は，形状が小さく土壙墓である可能性は少ないが，検出された場所が隣接しており，何らかの関連があると思われるので，一括して掲載する。

土壙墓の時期については，発掘調査時の認定は時期不詳（１次調査）や近世（４次調査）とされていたが，出土遺物の検討の結果，中世末～近世初頭とした。古銭が出土した３基の土壙墓では，それぞれ１点ずつしか出土していない点，開元通寶（２点）・嘉祐元寶（１点）が出土している点，15～16世紀の白磁の菊皿が出土している点などが根拠である。

形態は基本的に円形を呈しており，座棺を使用していたと考えられる。

【土壙墓１号】（第95図）

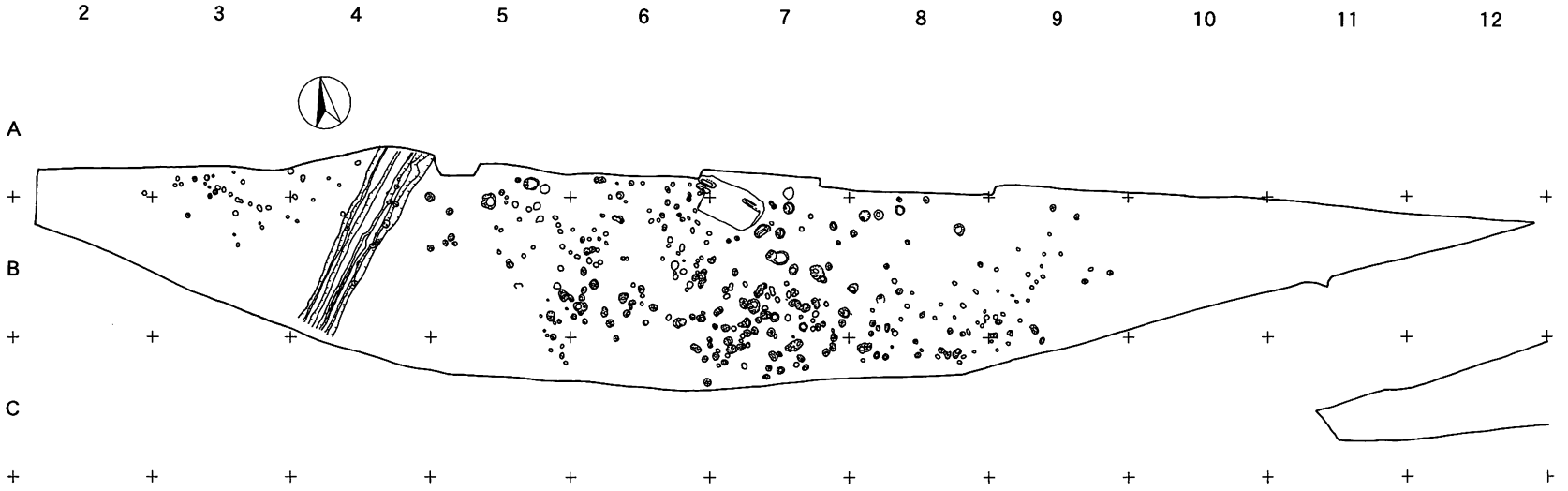
Ｃ－14区で検出した。円形を呈し，上場径132cm，下場径86cmを測る。検出面から深さ70cmを残す。壁面の観察では掘り込みは深さ102cmが確認できる。

【土壙墓２号】（第95図）

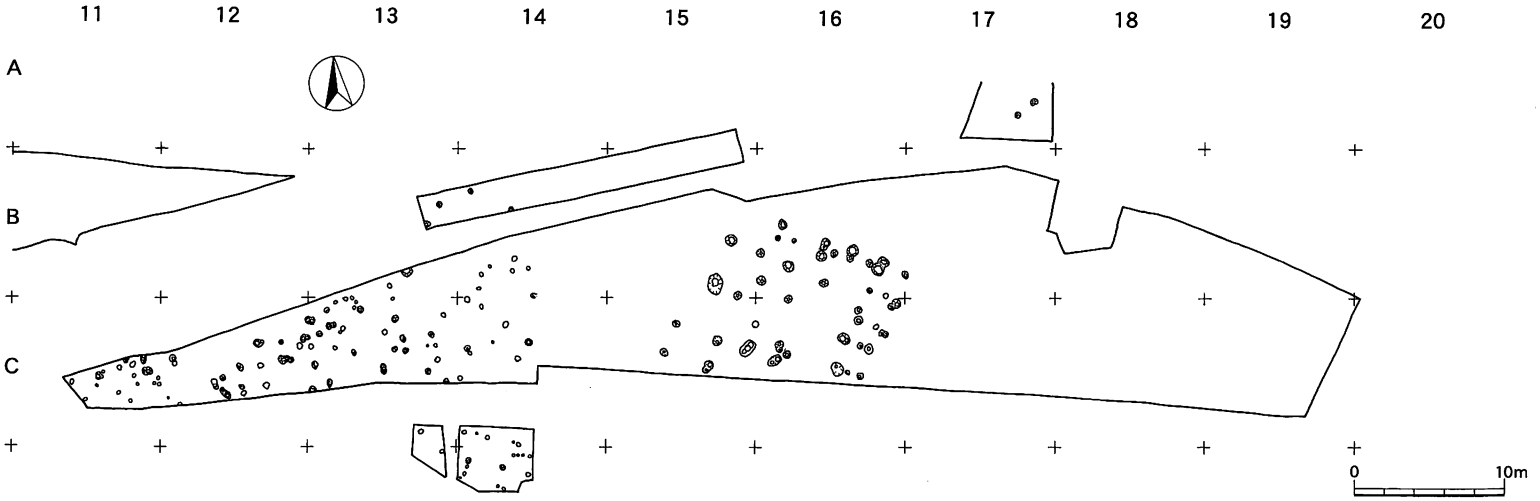
Ｃ－13区で検出した。円形を呈していると思われるが，小さなピットに切られており，調査区外へ広がっているため詳細は不明。検出面から深さ35cmを残す。

【土壙墓３号】（第95図）

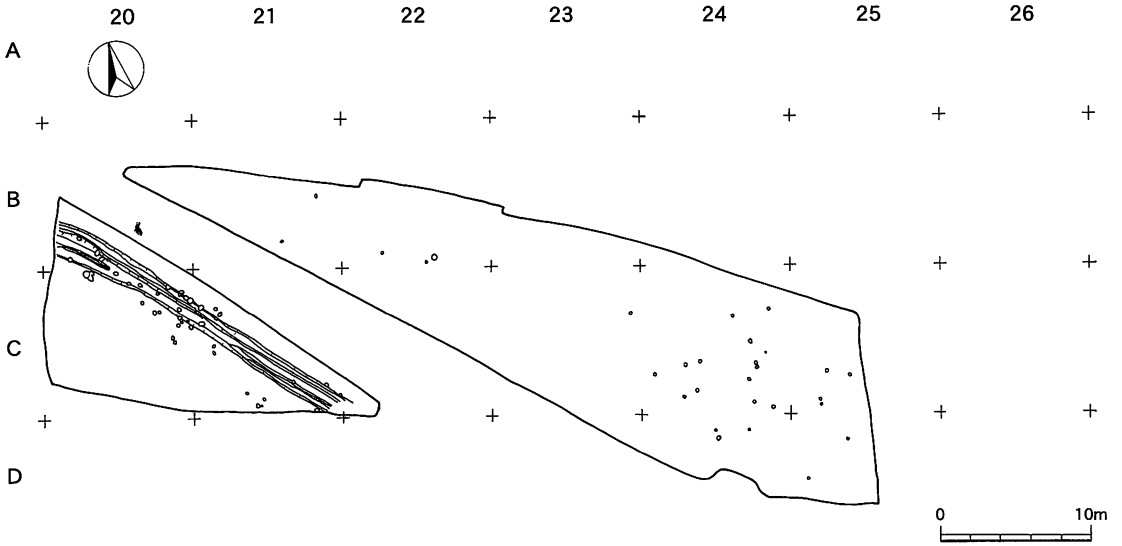
Ｂ・Ｃ－13区で検出した。円形を呈し，上場径92cm，下場径71cmを測る。検出面から深さ43cmを残す。



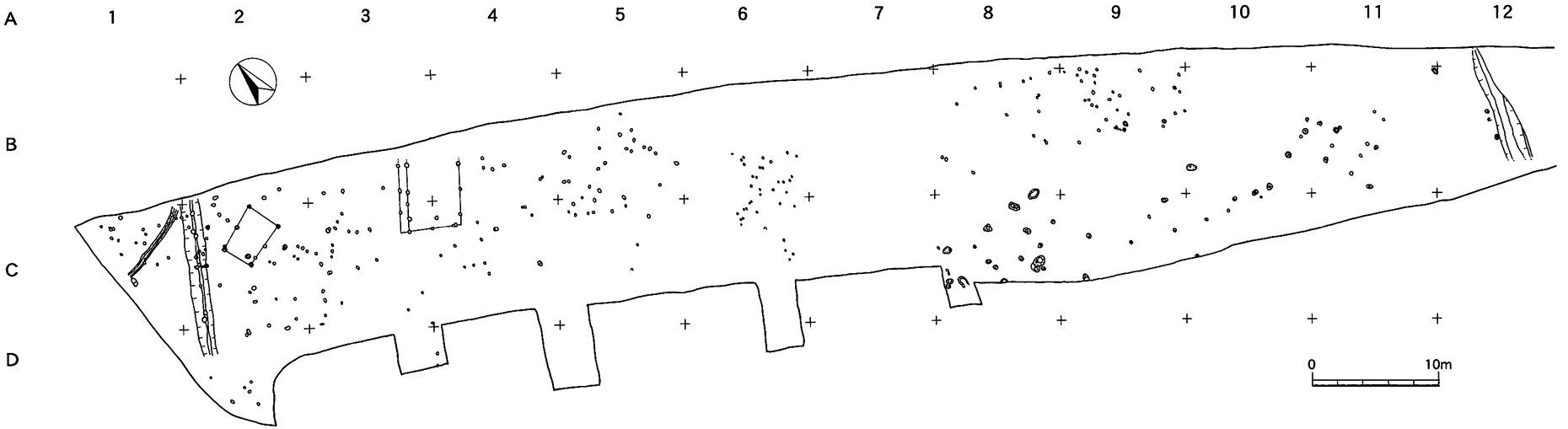
第86図　遺構配置図（中世・Ａ地点１）



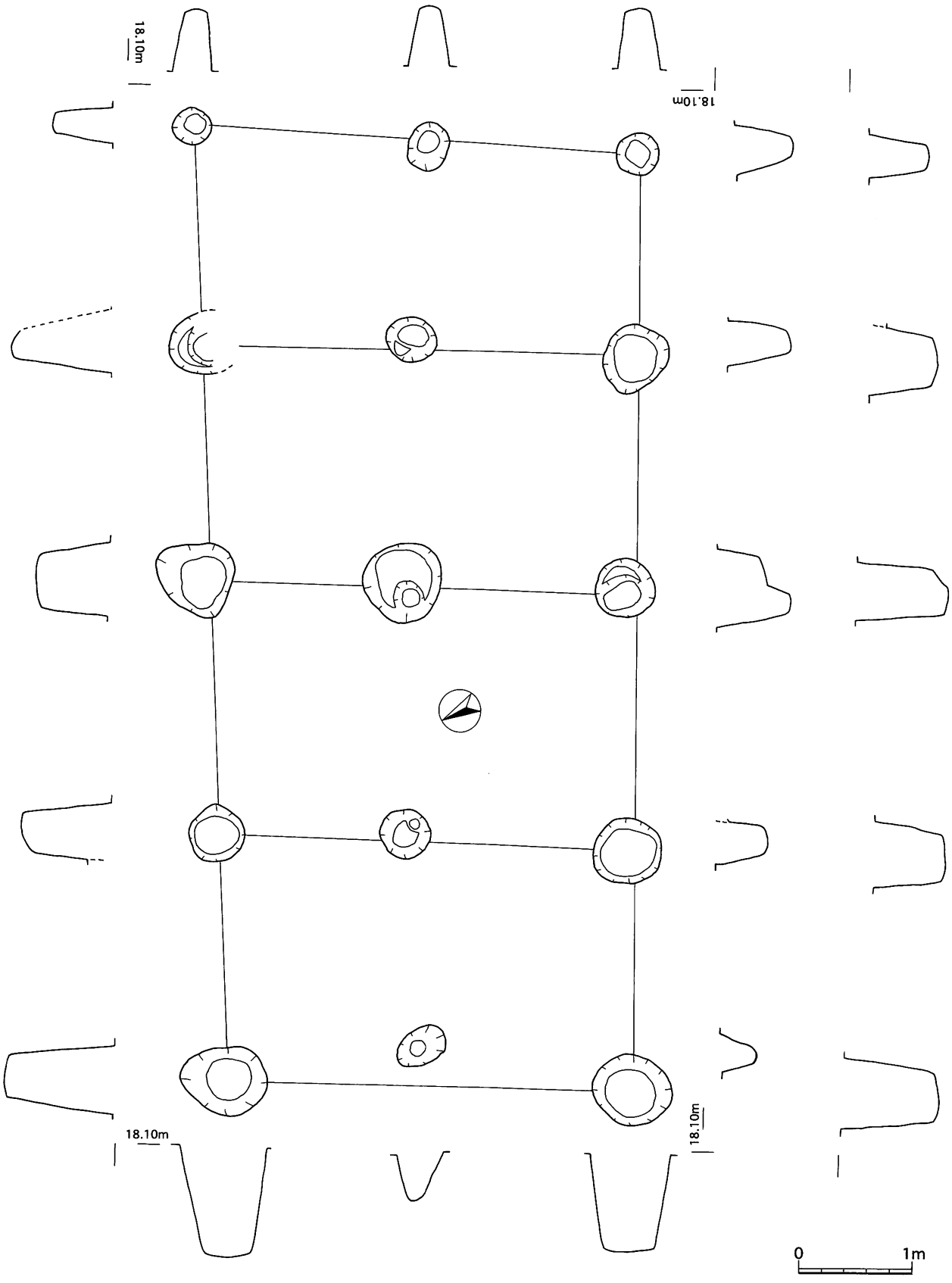
第87図　遺構配置図（中世・Ａ地点２）



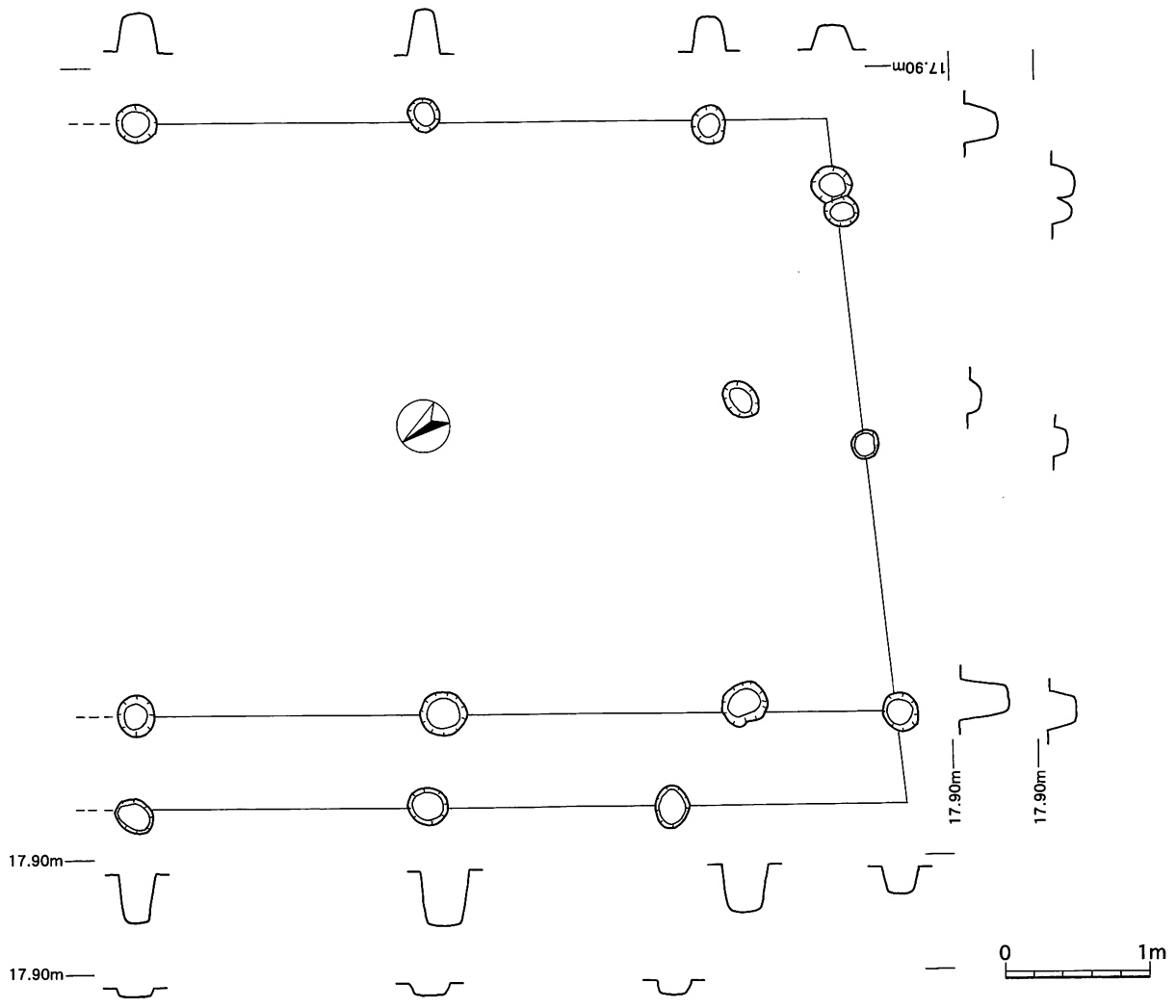
第88図　遺構配置図（中世・A地点３）



第89図　遺構配置図（中世・B地点）



第90図　掘立柱建物跡１号実測図



第91図　掘立柱建物跡２号実測図

【土壙墓４号】（第95図）

Ｂ・Ｃ－13区で検出した。円形を呈し，上場径153cm，下場径60cmを測る。検出面から深さ90cmを残す。埋土内から嘉祐元寶（478）が１点出土した。

【土壙墓５号】（第95図）

Ｃ－13区で検出した。上場は撹乱のためか不整形であるが，下場は円形を呈する。上場径105cm，下場径63cmを測る。検出面から深さ70cmを残す。埋土内から開元通寶（479）が１点出土した。

【土壙墓６号】（第95図）

Ｃ－13区で検出した。上場は２段掘りされており，不整形であるが，下場は円形を呈する。上場径130cm，下場径68cmを測る。検出面から深さ107cmを残す。

【土壙墓７号】（第95図）

Ｃ－16区で検出した。上場は楕円形を呈し，下場は円形を呈する。上場長径153cm×短径92cm，下場径70cmを測る。検出面から深さ126cmを残す。

【土壙墓８号】（第95図）

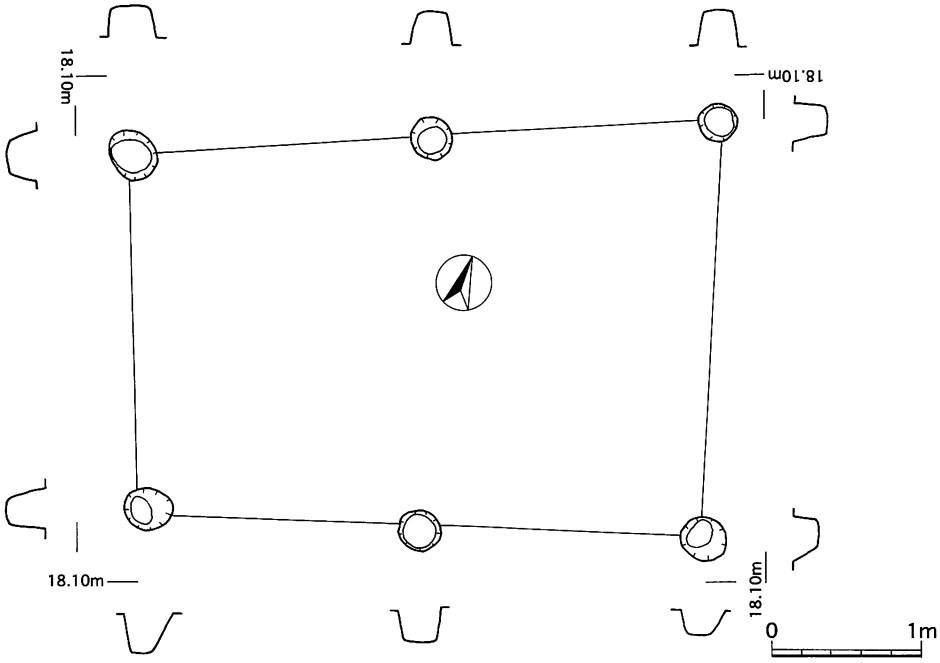
Ｃ－15区で検出した。上場は２段掘りされており楕円形を呈し，下場は円形を呈する。上場長径135cm×短径94cm，下場径68cmを測る。検出面から深さ78cmを残す。埋土中から15～16世紀代の白磁の菊皿（477）が出土した。

【土壙墓９号】（第95図）

Ｃ－15区で検出した。上場はやや不整形な円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径79cm，下場径51cmを測る。検出面から深さ79cmを残す。

【土壙墓10号】（第96図）

Ｃ－12区で検出した。上場はやや不整形な円形を呈し，下場は円形を呈する。上場長径141cm×短径112cm，下場径59cmを測る。検出面から深さ74cmを残す。



第92図　掘立柱建物跡３号実測図

【土壙墓11号】（第96図）

Ｄ－13区（個人住宅の浄化槽になる部分）で検出した。調査区外へ広がっているが，検出した範囲では，上場は楕円形を呈し，下場は楕円形を呈する。図左下は後世のピットによって切られている。上場径76cm，下場径65cmを測る。検出面から深さ120cmを残す。床面の中央部にさらに掘り込みがあり，上場径44cm，下場径34cm，深さ26cmを測る。埋土は，やわらかい黒色土であるが，掘り込み部分は粘質があり，角礫が１点出土した。

【土壙墓12号】（第96図）

Ｂ－６区で検出した。上場は円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径140cm，下場径56cmを測る。検出面から深さ79cmを残す。埋土中から開元通寶（480）が１点出土した。

【土壙墓13号】（第96図）

Ｂ－７区で検出した。上場は円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径113cm，下場径65cmを測る。検出面から深さ80cmを残す。

【土壙墓14号】（第96図）

Ｂ－８区で検出した。上場は略円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径122cm，下場径68cmを測る。検出面から深さ141cmを残す。

【土壙墓15号】（第96図）

Ｂ－８区で検出した。上場は円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径97cm，下場径47cmを測る。検出面から深さ109cmを残す。

【土壙墓16号】（第96図）

Ｂ－８区で検出した。上場は楕円形を呈し，下場は楕円形を呈する。上場長径121cm×短径92cm，下場長径77cm×短径36cmを測る。検出面から深さ84cmを残す。

【土壙墓17号】（第96図）

Ｂ－７区で検出した。上場は円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径101cm，下場径65cmを測る。検出面から深さ117cmを残す。

【土壙墓18号】（第96図）

Ｂ－７区で検出した。上場は楕円形を呈し，下場は円形を呈する。上場長径134cm×短径94cm，下場径58cmを測る。検出面から深さ118cmを残す。

【土壙墓19号】（第97図）

Ａ－７区で検出した。１次調査の初期に検出されたため半裁後に図面を作成している。上場は円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径81cm，下場径66cmを測る。検出面から深さ90cmを残す。

【土壙墓20号】（第97図）

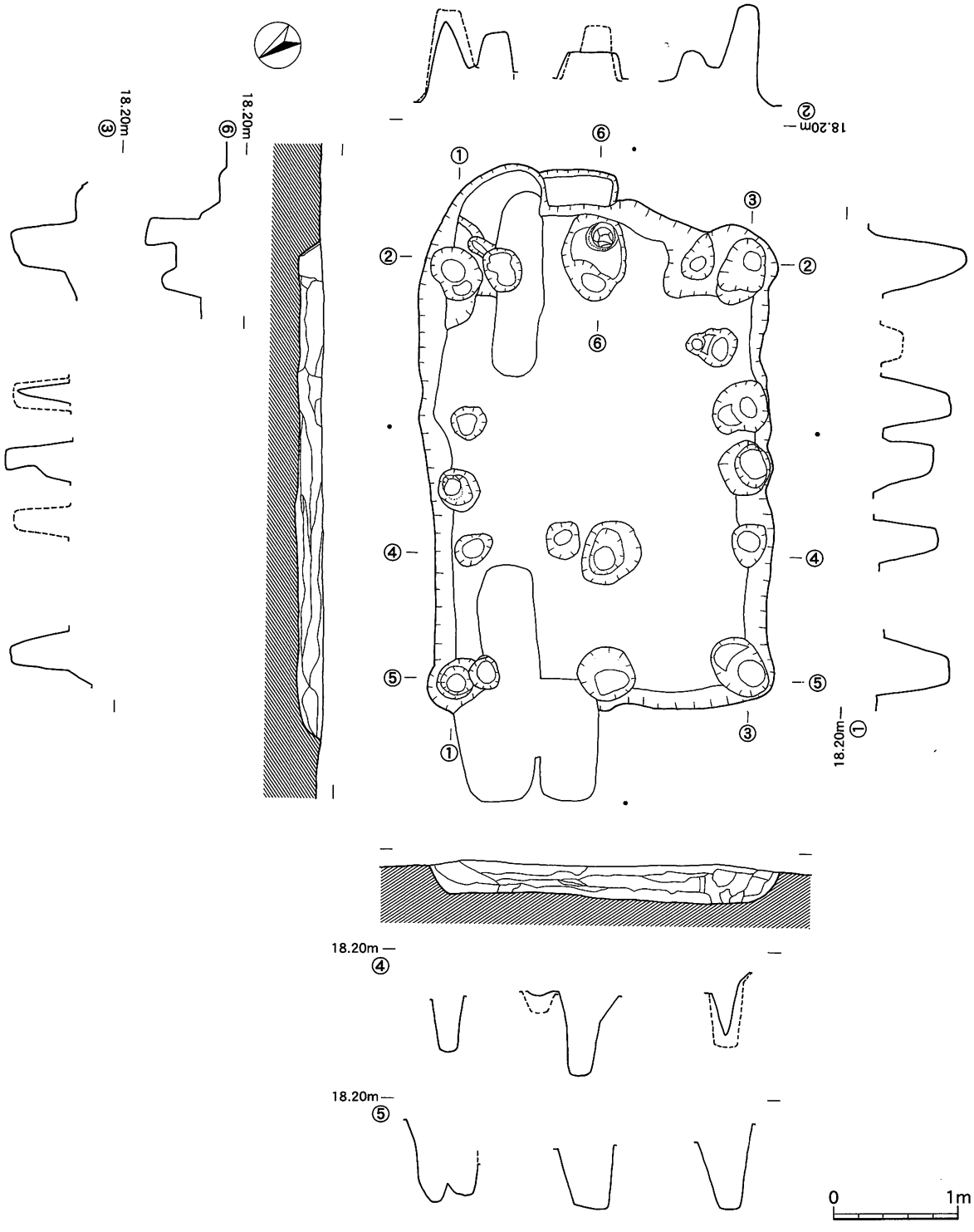
Ｂ－７区で検出した。１次調査の初期に検出されたため半裁後に図面を作成している。上場は円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径97cm，下場径50cmを測る。検出面から深さ80cmを残す。

【土壙墓21号】（第97図）

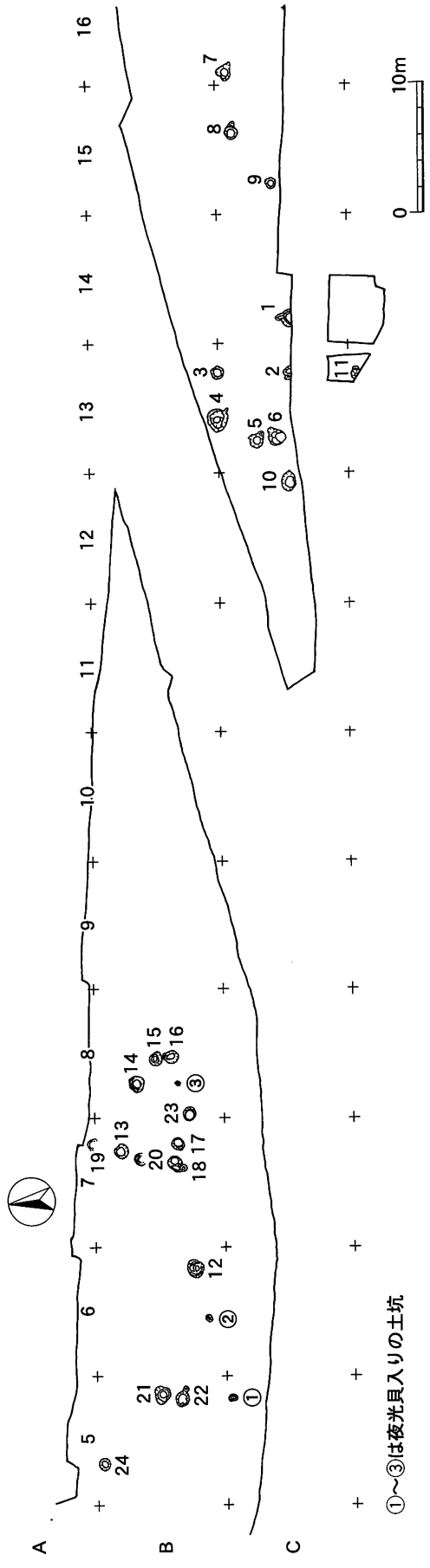
Ｂ－５区で検出した。上場は不整形な略楕円形を呈し，下場は円形を呈する。上場長径133cm×短径116cm，下場径60cmを測る。検出面から深さ123cmを残す。

【土壙墓22号】（第97図）

Ｂ－５区で検出した。上場は略楕円形を呈し，下場は不整形な略楕円形を呈する。上場長径120cm×短径94cm，下場長径88cm×74cmを測る。検出面から深さ40cmを残す。



第93図　竪穴建物跡実測図



第94図　中世土壙墓位置図（A地点）

【土壙墓23号】（第97図）

B－7・8区で検出した。上場は略円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径97cm，下場径68cmを測る。検出面から深さ63cmを残す。

【土壙墓24号】（第97図）

B－5区で検出した。上場は円形を呈し，下場は円形を呈する。上場径93cm，下場径56cmを測る。検出面から深さ77cmを残す。埋土中から夜光貝が出土した。

【夜光貝入りの土坑①】（第98図）

C－5区で検出した。上場は楕円形を呈し，下場は2段掘りされている。上場長径66cm×短径52cm，下場長径52cm×短径28cmを測る。2基のピットが切りあっている可能性もある。埋土中から夜光貝が出土した。

【夜光貝入りの土坑②】（第98図）

B－6区で検出した。上場は楕円形を呈し，下場は2段掘りされている。上場長径61cm×短径43cm，下場長径40cm×短径22cmを測る。2基のピットが切りあっている可能性もある。埋土中から夜光貝が出土した。

【夜光貝入りの土坑③】（第98図）

B－8区で検出した。上場は楕円形を呈し，下場は2段掘りされている。上場長径45cm×短径35cm，下場長径36cm×短径30cmを測る。埋土中から夜光貝がまとまって出土した。※夜光貝についてはP118参照。

【土壙墓内出土遺物】（第99図，477～480）

477は，土壙墓8号内から出土した。白磁の菊皿である。口唇部は波状を呈する。内外面に17本ずつの花弁が彫られている。彫りこみは一方（内面右側，外面左側）がやや直線状を呈し，反対側がやや丸みを帯びている。畳付部から外底無釉，貫入が多く，畳付部に砂が付着している。森田編年のE群の範疇に含まれるもので，15～16世紀代のものである。口縁部の一部を欠損するがほぼ完全品で出土している。

478は，土壙墓4号内から出土した。「嘉祐元寶」である。書体は真書である。初鋳1056年，北宋。「嘉」字の部分の腐食が進行しているため，「景祐元寶」（初鋳1034年，北宋）である可能性も排除できない。

479は，土壙墓5号内から出土した。「開元通寶」である。背面上部に月がみられる。初鋳621年，唐。

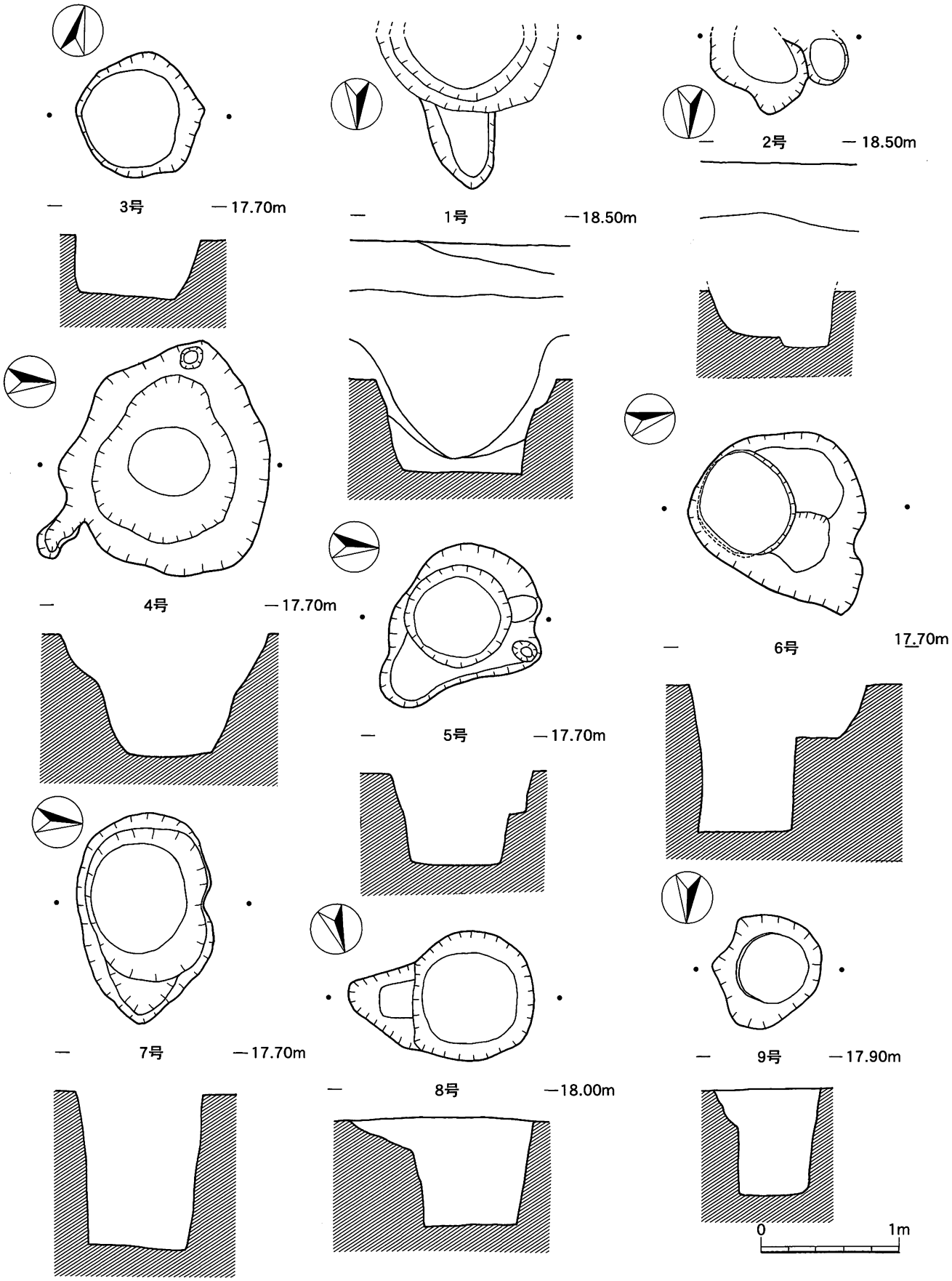
480は，土壙墓12号内から出土した。「開元通寶」である。初鋳621年，唐。

【古道】（第100図）

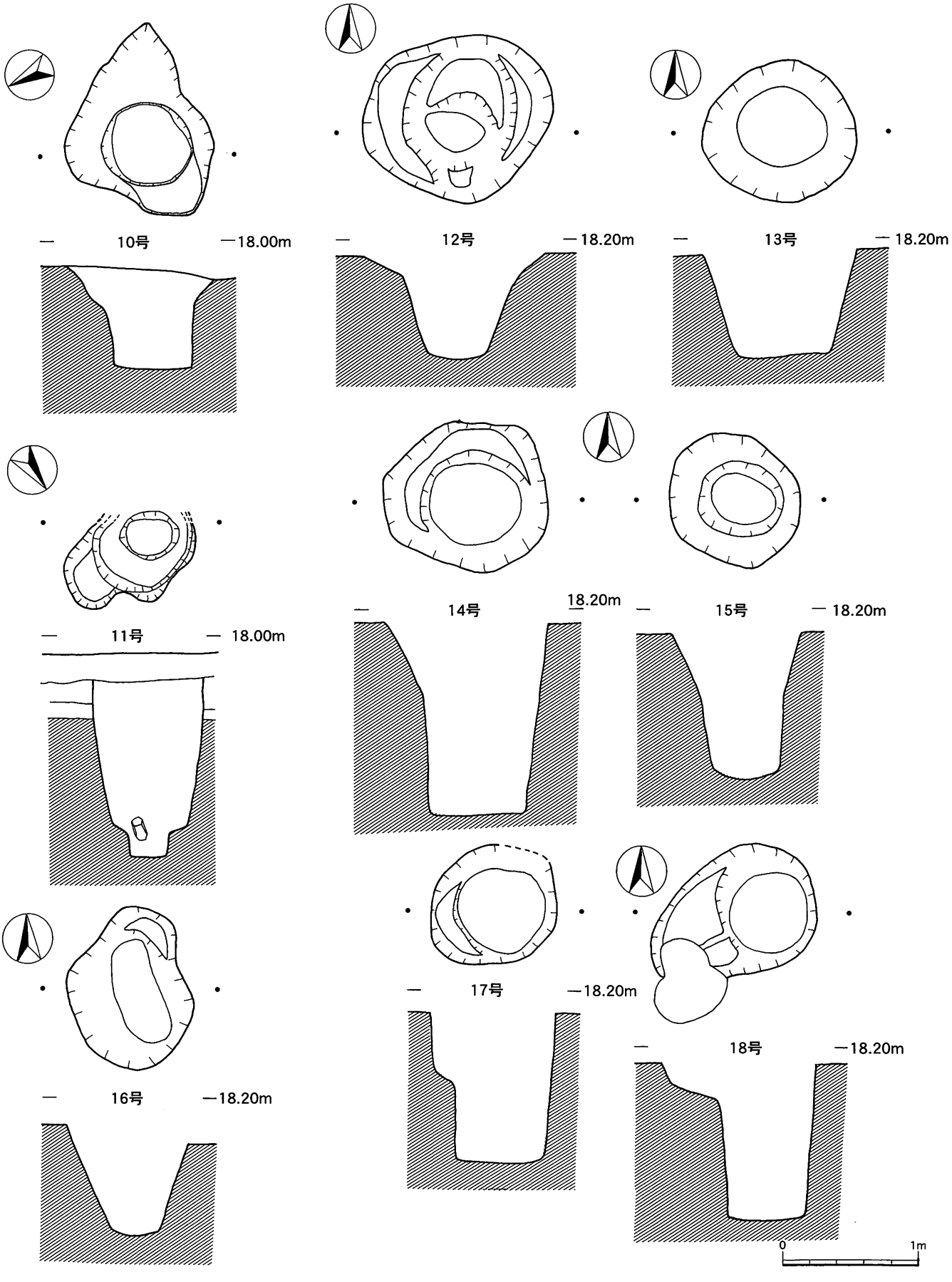
A地点A・B・C－4区で検出した。長さ約14.5m，幅約2.6mを測る。断面の観察によると，検出面からの深さ46cmを測り，9層以上の硬化面を検出した。

【古道内出土遺物】（第101図，481～484）

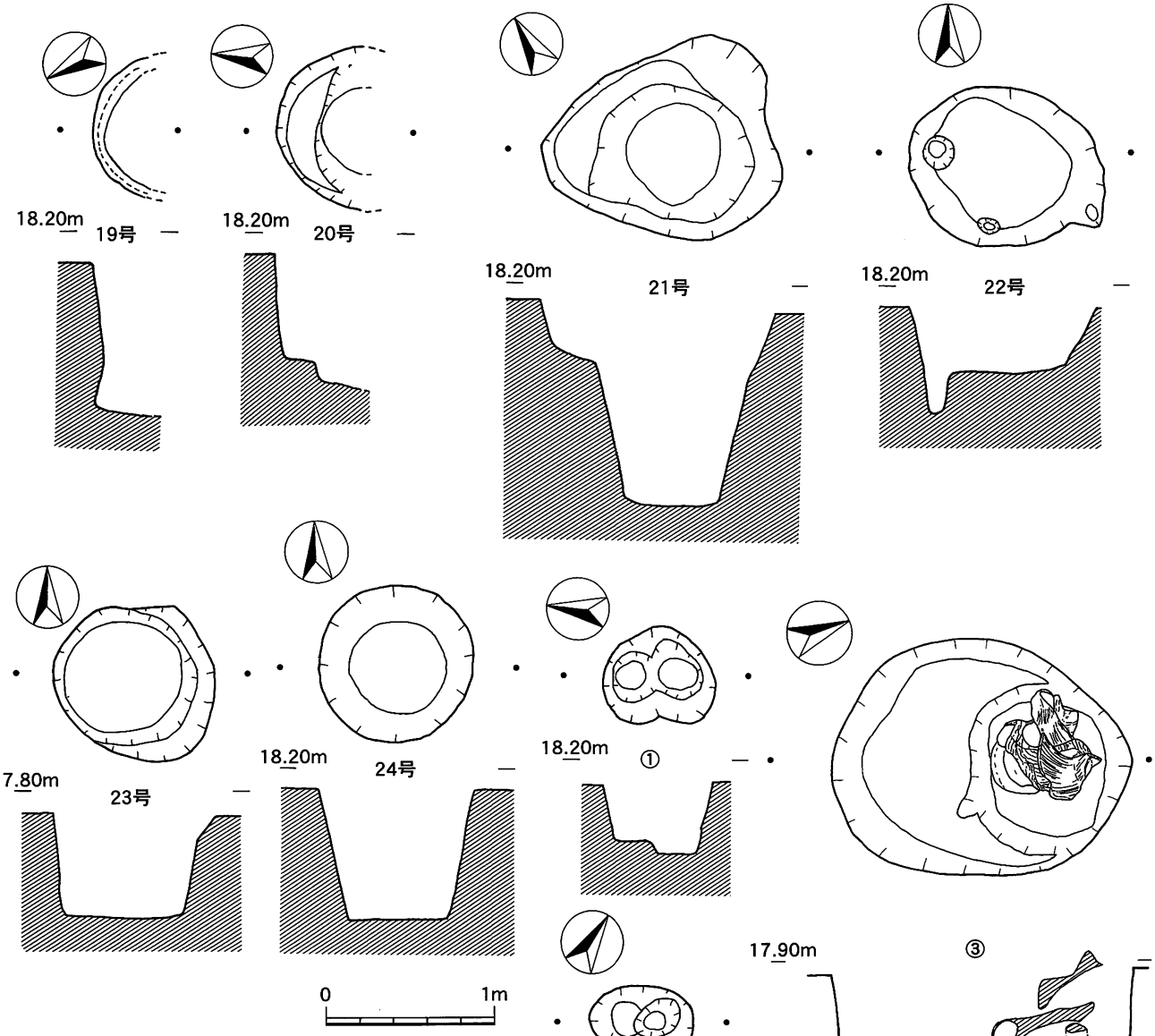
481は，土師器小皿である。底部切り離しは糸切りで，ゆるやかに立ち上がったあと，やや外反する。



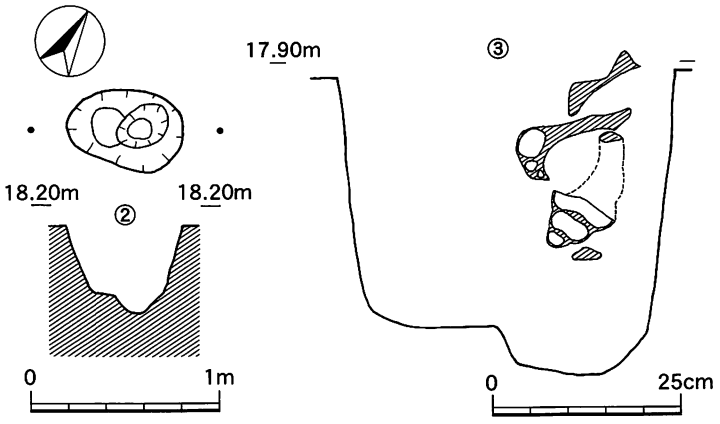
第95図　土壙墓実測図(1)



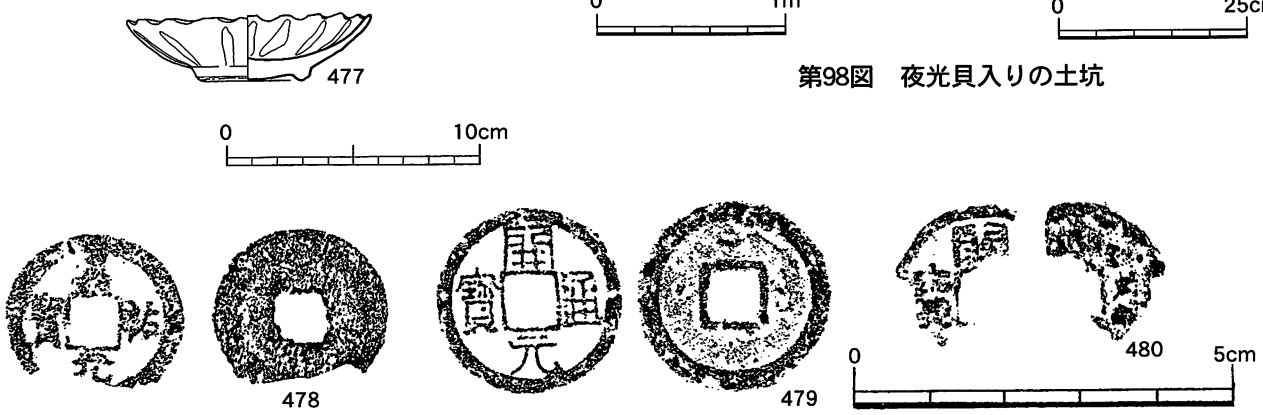
第96図　土壙墓実測図(2)



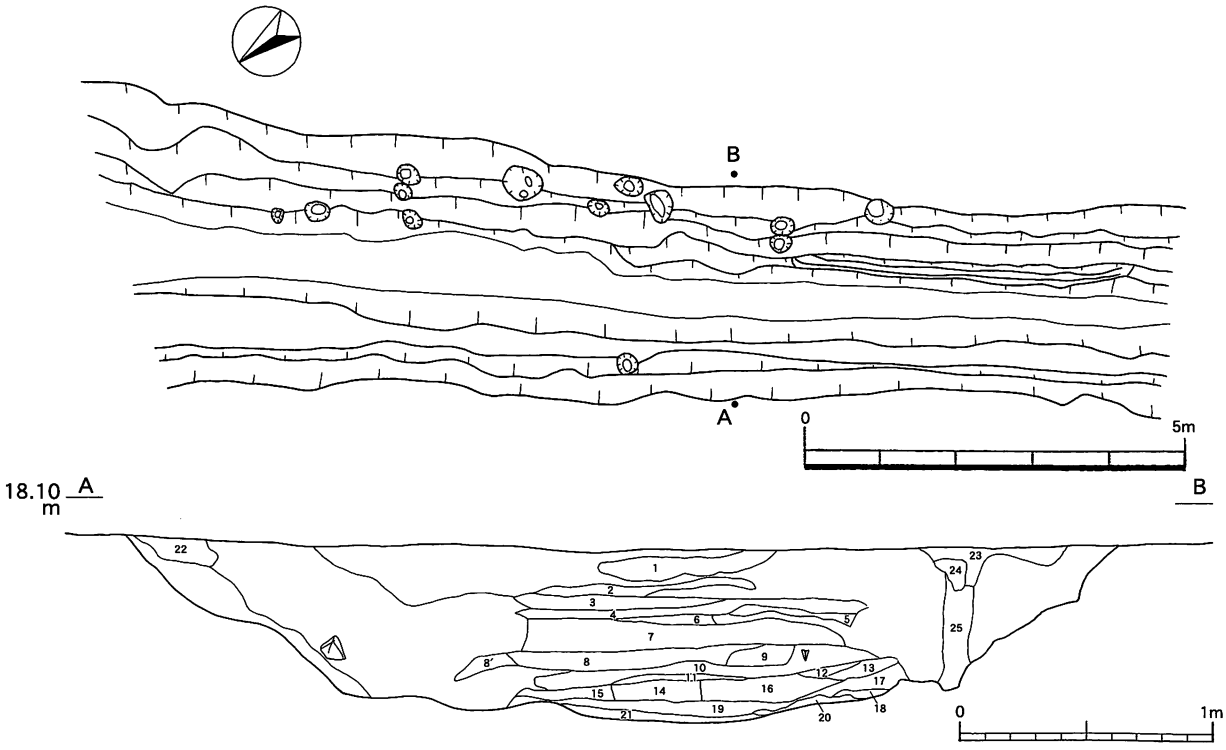
第97図　土壙墓実測図(3)



第98図　夜光貝入りの土坑

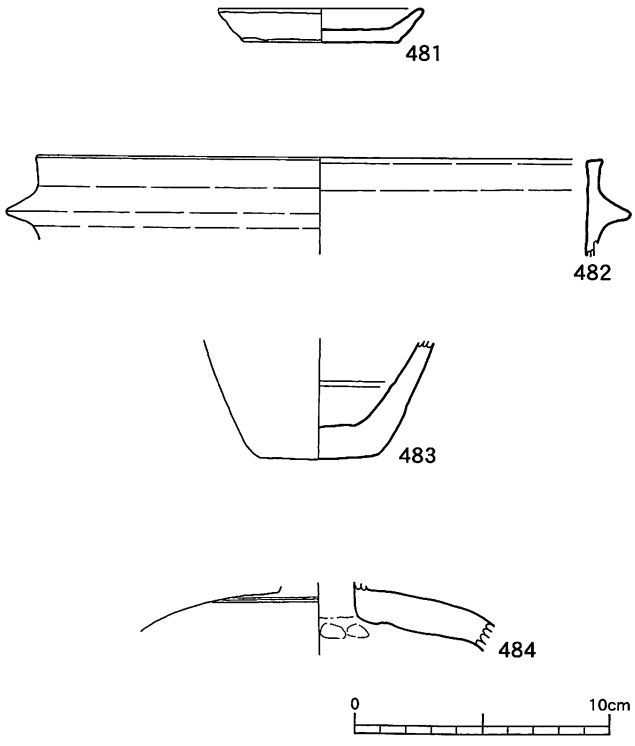


第99図　土壙内出土遺物



第100図　古道実測図

	色調	備　　考
1	褐色	硬質土。ブロック状に硬い部分がある。硬い部分は，白色粒･鉄分の沈着がみられる。
2	青灰色	硬質土。白色粒･鉄分の沈着が認められる。
3	明褐色	硬質土。白色粒･黄色粒･鉄分の沈着がみられる。
4	青灰色	②と同じ。
5	褐色	わずかに硬い。
6	褐色	⑤と同じ。
7	青灰色	②と同じ。
8	明褐色	③と同じ。
8´	褐色	①と同じ。
9	暗褐色	
10	明褐色	③と同じ。
11	褐色	
12	褐色	硬質土。白色粒･鉄分の沈着がみられる。
13	黄褐色	硬質土。
14	黄褐色	⑬と同じ。
15	青灰色	②と同じ。
16	青灰色	②と同じ。
17	明褐色	③と同じ。
18	明黄褐色	
19	青灰色	②と同じだが，やや明るい。
20	黒褐色	硬質土。
21	明褐色	③と同じ。
22	褐色	やや暗い。
23	褐色	やや暗い。23～25は，樹根か。
24	明黄褐色	アカホヤ
25	褐色	フカフカで，やわらかい。



第101図　古道内出土遺物

482は，瓦質土器羽釜の口縁部である。外面口縁部下に鍔を有する。外面にススが付着している。

483は，土師器壺の底部である。底部切り離しは糸切りである。

484は，陶器瓶子の肩部である。頸部から広がりをもって張り出す肩部を有する。肩部に3条の櫛目沈線が施される。外面と内面頸部より上位には灰釉が施されている。瀬戸窯，13世紀後半と思われる。

【溝状遺構1】（第102図）

A地点B－20区，C－20～22区で検出した。長さ約21.5m，幅約1.4～2.0mを測る。検出面から深さ27cmを残す。2～3条の溝がほぼ平行に掘り込まれており，北西部の床面が高く南東部へ向かって下る。比高差130cmを測る。

【溝状遺構2】（第103図）

B地点B－12区で検出した。長さ約9.2m，幅約2.0mを測る。検出面から深さ59cmを残す。

【溝状遺構3】（第103図）

B地点B～D－2区で検出した。長さ約12.5m，幅約1.1～1.7mを測る。検出面から深さ31cmを残す。

【溝状遺構3内出土遺物】（第104図，485）

溝状遺構3内からは，成川式土器の破片と，土師器が出土している。このうちから土師器を1点図化した。

485は，土師器坏である。底部切り離しは糸切りである。体部はやや内湾しながら立ち上がる。

【溝状遺構4】（第103図）

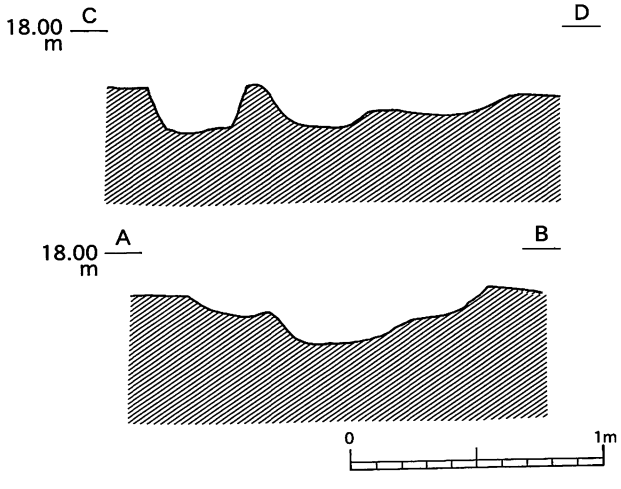
B地点C－1区で検出した。長さ約6.9m，幅約40～50cmを測る。検出面から深さ24cmを残す。

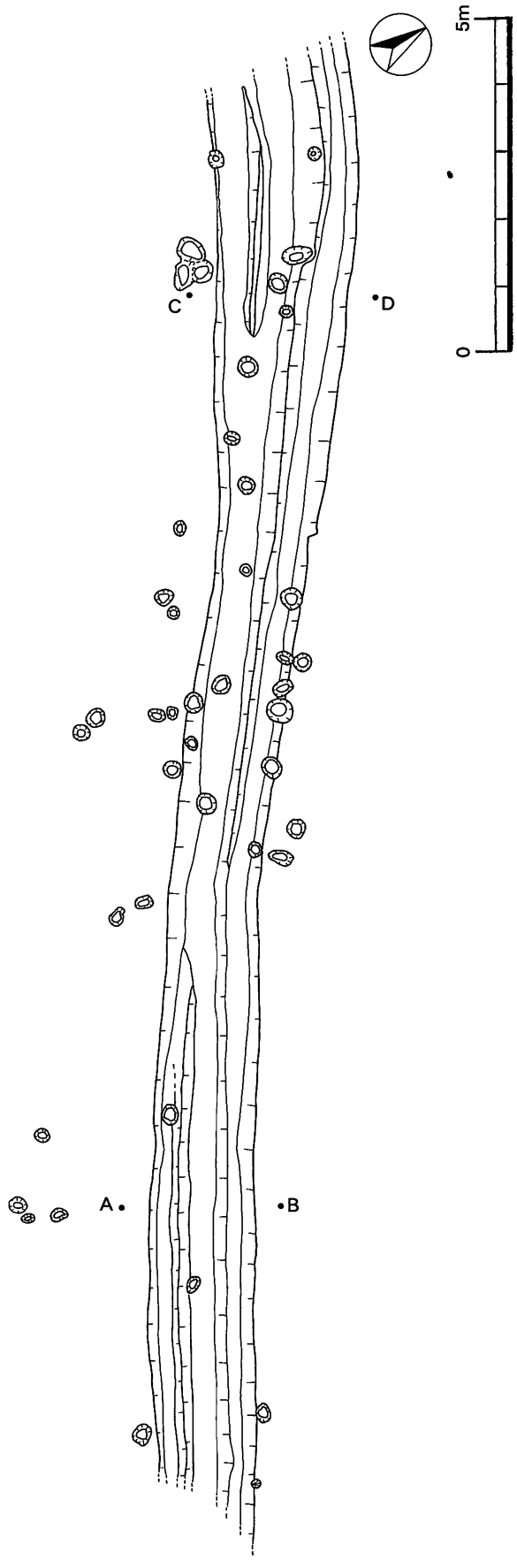
(2) 遺構外出土遺物（第105～第107図，486～548）

【土師器】（第105図，486～507・519）

486～493は，土師器坏である。底部切り離しは，全て糸切りである。

486は，完全品で出土している。





第102図　溝状遺構1実測図

487・488・490は，ローリングを受けている。

494～507は，土師器小皿である。底部切り離しは，全て糸切りである。

495は，内外面の全体にススが付着しており，灯明皿として使用された可能性がある。

496は，内外面の一部にススが付着しており，灯明皿として使用された可能性がある。

502は，ローリングを受けている。

【陶器】（第105図，508～518）

508～518は，陶器である。

508・509は東播系，510～513は熊本県の樺万丈窯産，514・515は岡山県の備前焼，516は愛知県の常滑窯，518は中国南方産の交趾焼である。

508は，東播系の鉢である。端部に平坦面を有し，上方につまみ出す。

509は，東播系の捏鉢である。口縁部が肥厚し，丸みをもつ。口唇部外面の肥厚部のみが黒色化している。

510は，樺万丈窯産の甕の胴部である。外面には山形の叩き目が残り，内面にはハケ目が残る。

511は，樺万丈窯産の捏鉢である。口唇部は平坦に調整されている。外面には目の細かいハケ目が残り，内面は目の粗いハケ目が残る。

512は，樺万丈窯産の甕の口縁部である。頸部で大きく外反し，口唇部を斜め下に向けて調整している。外面には格子状の叩き目が残り，内面にはハケ目が残る。

513は，樺万丈窯産の捏鉢である。底部からほぼまっすぐに外側に向かって立ち上がる。口唇端部がややくぼみ上方につまみ出す。内外面にススが付着している。

514は，備前焼の擂鉢である。端部は平坦に調整されている。内面に2.1㎝間に6条の櫛目が施されている。外面口唇部平坦面より下部には灰が付着している。

515は，備前焼の捏鉢の底部である。内面には灰が付着している。

516は，常滑窯産の甕の頸部である。外面には灰釉がかかり緑色を呈している。内面は粗いナデ調整が施されている。

517は，常滑窯産の甕の口縁部である。口縁で大きく外反したあと立ち上がり，「N」字状を呈している。

518は，中国南方産の壺であると思われる。肩部に1条の沈線が廻る。外面は緑色と赤銅色に輝く釉が施されている。内面は灰黒色を呈する。

519は，土師器坏の底部である。底部切り離しは糸切りである。円盤型土製品（通称メンコ）に転用されており，周縁部が上下とも面取りされている。下面の全体と上面の中央部にススが付着している。

【青磁・白磁】（第106図，520～545）

520～534は青磁，535～539は白磁，540は青白磁の合子，541は朝鮮白磁，542～545は，青磁・白磁が円盤型土製品（通称メンコ）に転用されているものである。

520～530は，青磁碗である。説明の最後の記号は太宰府市と上田秀夫氏の編年研究に基づいている。

520は，体部はゆるやかに立ち上がり，口縁部でやや外反する。体部外面に鎬蓮弁が施されている。釉の発色は緑色を呈している。Ⅱ－b類。

521～523は，体部はゆるやかに立ち上がる。体部外面に鎬蓮弁が施されている。釉の発色は青味を帯びた緑色を呈している。Ⅱ－b類。

524は，細く尖る高台を有し，ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。体部外面には鎬蓮弁が施される。高台部先端を除いて全面に施釉され，露胎部分が赤く発色している。釉の発色は淡い青色を呈し，細かい灰が内外面を覆っている。Ⅲ－2類。

525は，体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がる。体部外面には鎬蓮弁が施されるが，鎬がはっきりしない。釉の発色は淡い緑色を呈する。Ⅲ－2類。

526は，小片のため詳細は不明であるが，鎬のはっきりしない鎬蓮弁を有する。釉の発色は淡い青色である。Ⅲ－2類。

527は，細く尖る高台を有する。蓮弁が刻まれており，見込みに花文がスタンプされている。高台部先端を除いて全面に施釉され，露胎部分が赤く発色している。釉の発色は淡い緑色を呈する。Ⅲ類か。

528は，小碗である。内湾しながら立ち上がったあと，口縁部で外反する。釉の発色は淡い緑色を呈する。Ⅲ類。

529は，小片であるため詳細は不明であるが，内面に草文の彫りこみが施されている。C類。

530は，口縁部外面に雷文帯を持つ。C類。

531～533は，青磁杯である。説明の最後の記号は太宰府市の編年研究に基づいている。

531は，体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，口縁部で鋭く外反する。外面には蓮弁の削り出し文様が施され，内面見込みには双魚文が貼付されている。Ⅲ－4・b類。

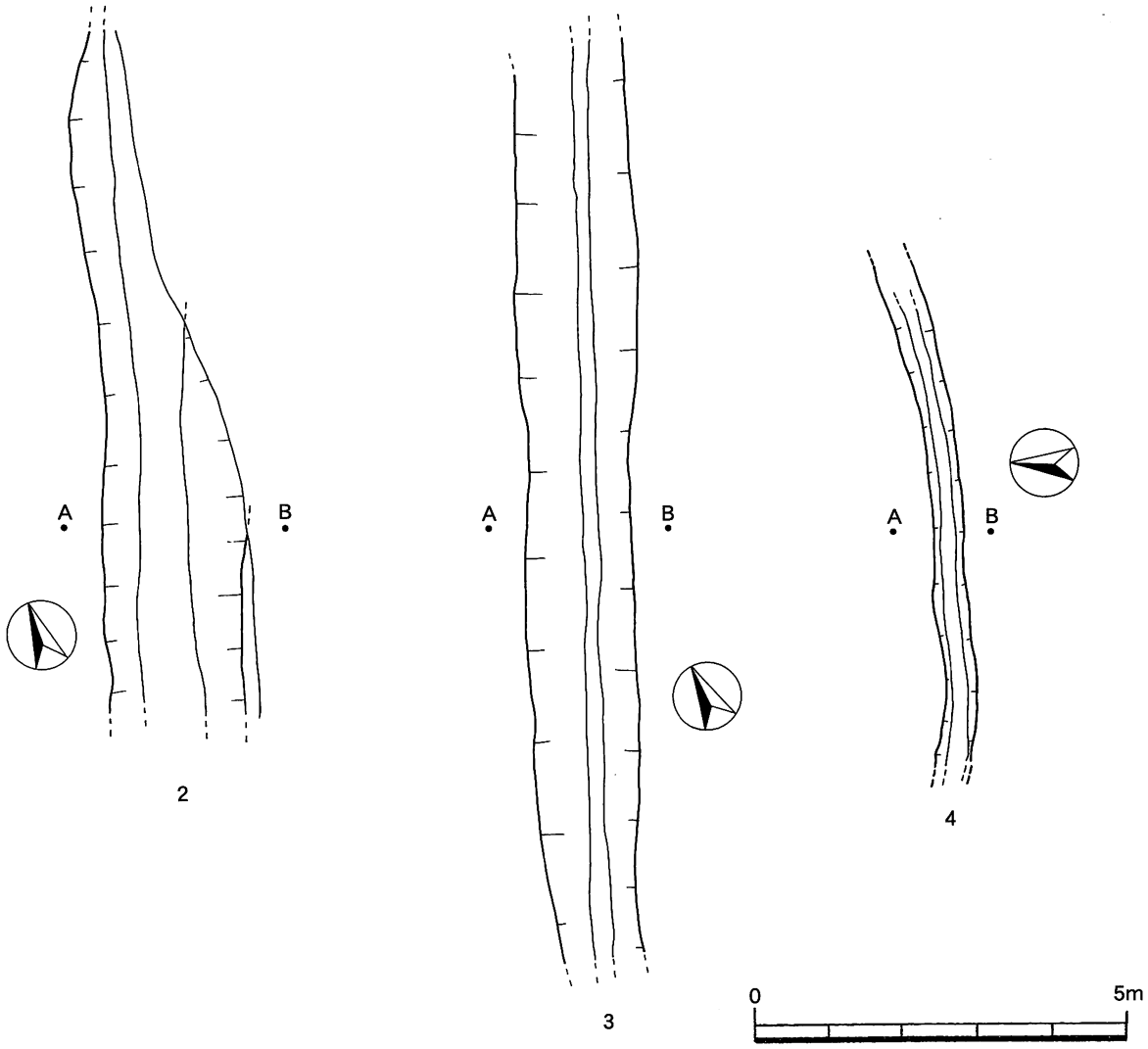
532は，口縁部が鋭く外反し，口縁端部を直上に引き出すものである。体部内面に丸のみ状の工具で蓮弁を表現した文が施されている。Ⅲ－3類。

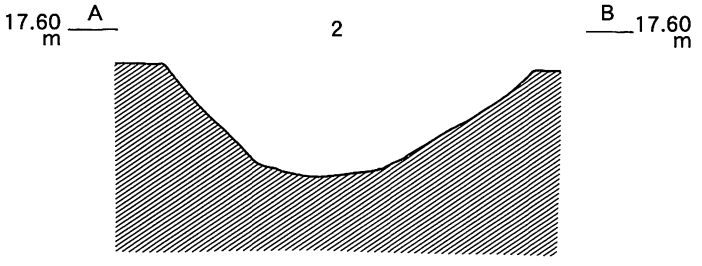
533は，口縁部が鋭く外反する。体部外面に鎬蓮弁が施されている。釉の発色は黄味を帯びた緑色を呈している。Ⅲ類。

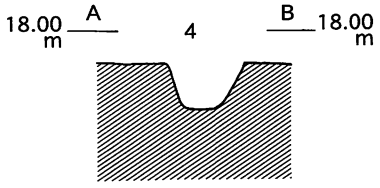
534は，小片のため詳細は不明であるが，青磁の盤であると思われる。口縁部で外反し，口縁端部がやや上に引き出されている。

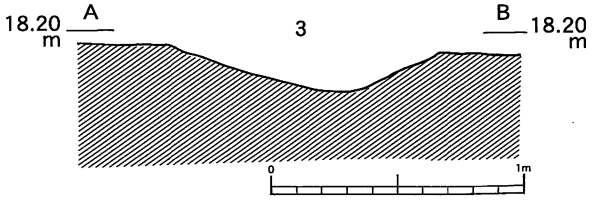
535～539は，白磁である。説明の最後の記号は太宰府市と森田勉氏の編年研究に基づいている。

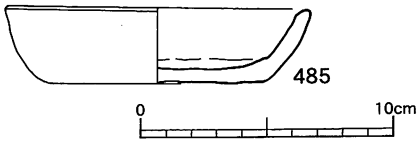
535は，白磁碗である。体部は口縁部で外反する。口唇部は口禿を呈している。Ⅸ類。





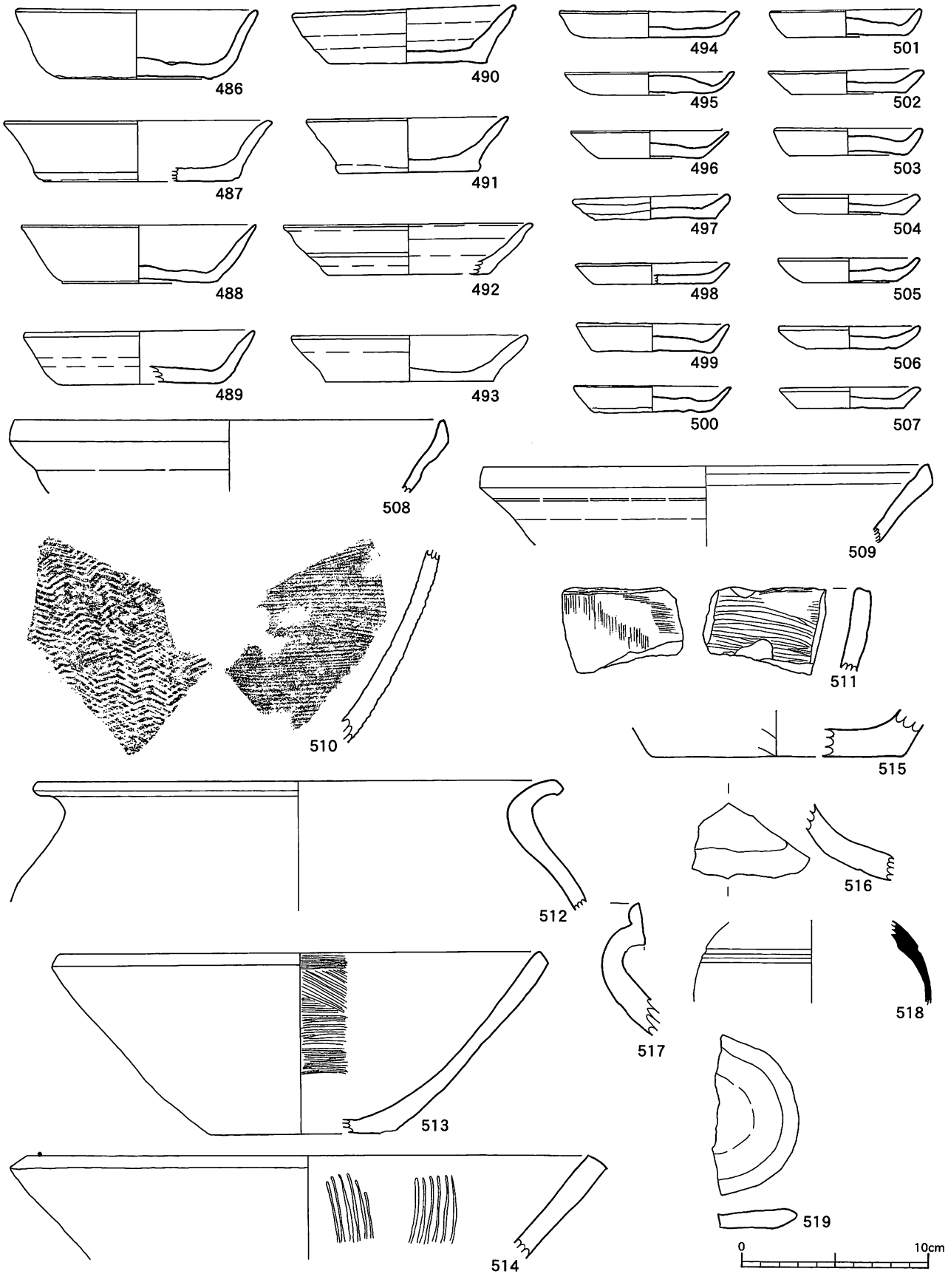




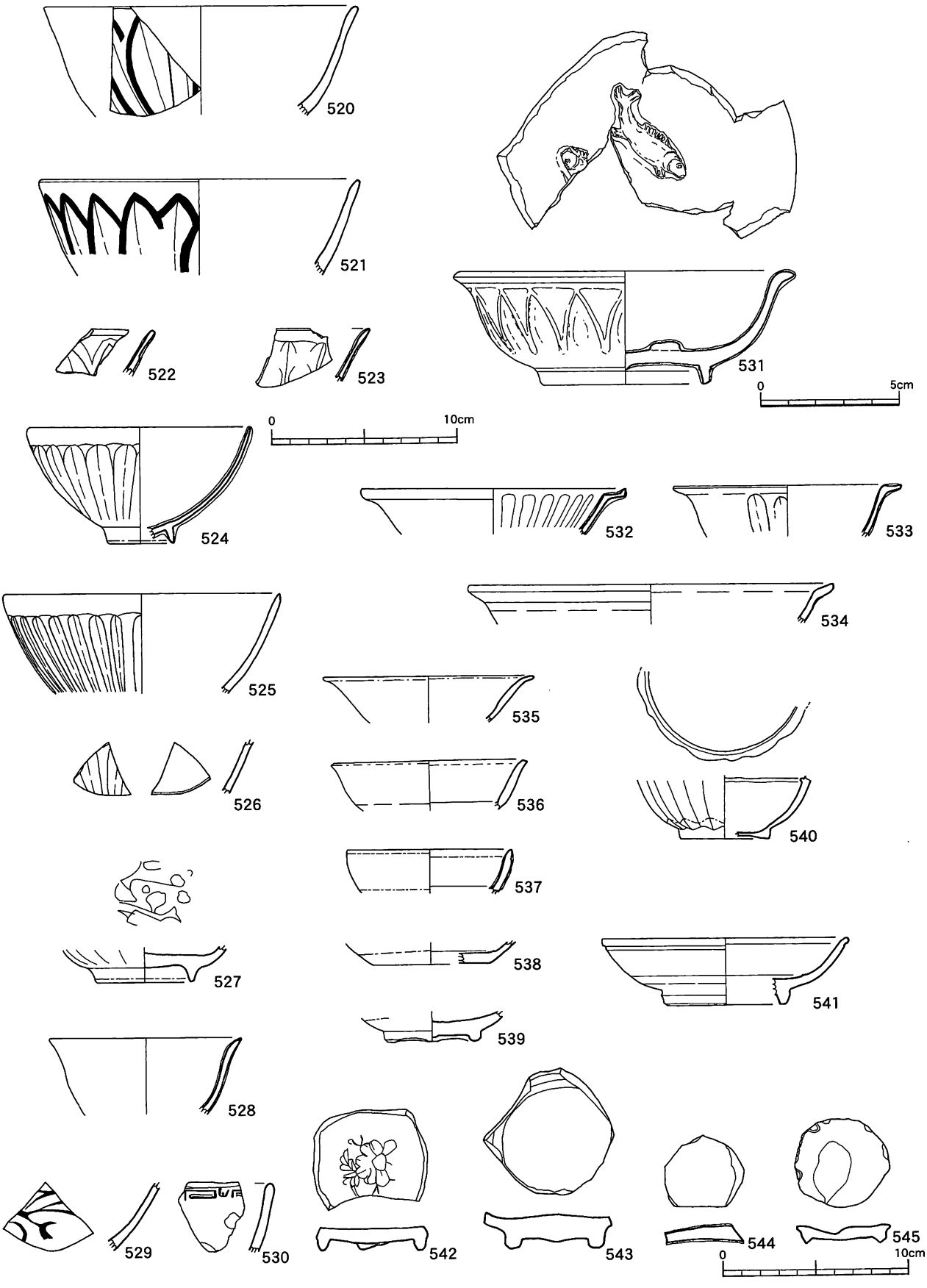


第103図　溝状遺構２・３・４実測図

第104図　溝状遺構３内出土遺物



第105図　遺構外出土遺物(1)



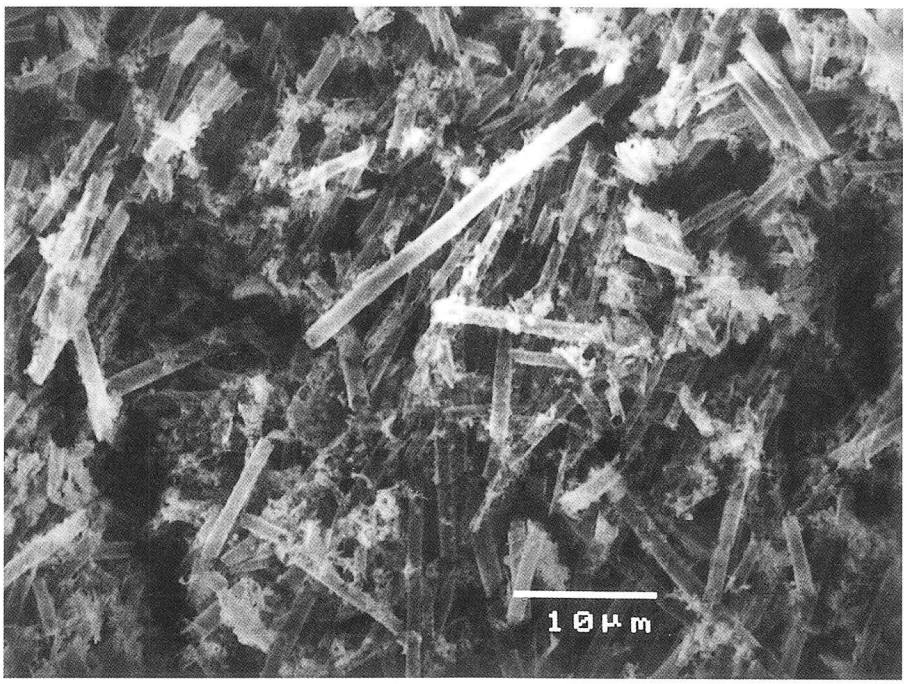
第106図　遺構外出土遺物(2)

8　白糸原遺跡出土の赤色顔料

白糸原遺跡の住居内より出土した赤色顔料について走査型電子顕微鏡による形状観察とエネルギー分散型X線分析装置によるX線分析を行った。分析は鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の機器を使用し，測定は永濵功治（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。

顔料とは着色剤の一種で，水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から「ベンガラ」，「朱」，「鉛丹」の３種類に分けられ，ベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3），水銀朱は硫化水銀（HgS），鉛丹は四酸化三鉛（Pb_3O_4）を主成分とする。ベンガラはさらに原料，製法に多様性が認められ，細分化される。赤色顔料の歴史は，古いもので1.5～２万年前に北海道，東北地方においてベンガラが付着した石器や顔料原石が出土した例があり，朱は縄文時代後期から，鉛丹は古墳時代から使われている。これまでに鹿児島県内で出土した縄文時代の赤色顔料は，ほとんどが土器に付着したベンガラであり，水銀朱の検出は数例しかない。

分析資料はⅢ層検出３号住居（古墳時代後半期該当）より出土した赤色顔料である。住居埋土に含まれており，大きさは約５㎜の粒状で色は赤褐色～茶褐色を呈する。当センターの走査型電子顕微鏡（日本電子製低真空SEM・JSM－5300LV）で3500倍まで拡大し，顔料の形状観察を行った結果，パイプ状粒子が密集していることが確認できた。さらにエネルギー分散型X線分析装置（日本電子製・JED－2001）を用い，加速電圧20.00kV，取り出し角度26．57°，作動距離20.00㎜，有効時間100秒の条件で分析したところ，Feの高いピークを得た。以上の結果から，この赤色顔料は鉄を主成分としたパイプ状ベンガラであるといえる。



9　出土遺物観察表

凡　例

1　口径，器高，底径，高台径の単位はcm である。

2　石器の重量の単位はgである。

3　調整は，アルファベットで略している。N＝ナデ調整，M＝ミガキ，H＝ハケ目，S＝指頭圧痕，K＝ケズリである。

4　色調は，「新版標準土色帖」2003による。

5　項目の丹内・丹外は，それぞれ内面・外面の丹塗りを示す。

6　その他の欄の分数は，遺物の残存率を示している。

第17図　縄文時代出土遺物（土器）

	注記	地点	出土区	層	標高	形式	器種	部位	色調	胎土	備考
1	白A以下不明	A				前平	深鉢	胴部	浅黄橙	粗	志風頭タイプ
2	SIB・B－3住5・1784	A	B－3		18.065	石坂	深鉢	口縁部	黄橙		
3	SIBA4Ⅲ2292	A	A－4	Ⅲ	17.51	縄文	深鉢	胴部	鈍黄橙	粗	下剥峯に近い
4	白A表	A		表		縄文	深鉢	胴部	黒褐	粗	下剥峯に近い
5	白A18住	A	A－18			縄文	深鉢	口縁部	灰褐	粗	下剥峯に近い
6	白AⅡ	A		Ⅱ		縄文	深鉢	胴部	赤褐	粗	下剥峯に近い
7	白14住1	A	C－20・21			桑ノ丸	深鉢	口縁部	緑黄	粗	口縁　1／8
8	白AB5Ⅲ1517	A	B－5	Ⅲ	17.825	押型文	深鉢	口縁部	橙	粗	楕円
9	SIBB3～5Ⅱ	A	B－3～5	Ⅱ		押型文	深鉢	口縁部	赤褐	粗	楕円
10	白AB5Ⅳ756	A	B－5	Ⅳ		押型文	深鉢	胴部	橙	粗	楕円
11	SIBC5Ⅲ1524	A	C－5	Ⅲ	17.95	押型文	深鉢	胴部	橙	粗	楕円
12	白B5Ⅳ752	A	B－5	Ⅳ	17.705	押型文	深鉢	胴部	橙	粗	楕円
13	SIBB4Ⅱ1523	A	B－4	Ⅱ	17.655	押型文	深鉢	胴部	橙	粗	楕円
14	白AB5Ⅳ753	A	B－5	Ⅳ	17.73	押型文	深鉢	胴部	橙	粗	楕円
15	SIBB5Ⅲ1513	A	B－5	Ⅲ	17.73	押型文	深鉢	胴部	橙	粗	楕円
16	SIBB5Ⅲ1515	A	B－5	Ⅲ	17.74	押型文	深鉢	底部	橙	粗	楕円
17	6白C5Ⅲ1525	A	C－5	Ⅲ	17.93	押型文	深鉢	胴部	橙	粗	山形
18	6白B5Ⅲ754	A	B－5	Ⅲ	17.735	押型文	深鉢	胴部	橙	粗	山形
19	白AB5Ⅳ758	A	B－5	Ⅳ	17.535	押型文	深鉢	胴部	橙	粗	山形
20	SIBB4Ⅲ1638	A	B－4	Ⅲ	18.115	曽畑	深鉢	底部	灰褐	精	

第18～20図　縄文時代出土遺物（石器）

	注記	地点	出土区	器種	石材	長軸	短軸	重量	備考
21	A－3，2288	A	A－3	石鏃	黒曜石	1.3	1.25	0.36	西北九州産
22	16住一括	A	B・C－18	石鏃	黒曜石	2.55		(1.52)	上牛鼻産
23	B－10Ⅱb，6	B	B－10	石鏃	黒曜石	2.3		(0.80)	西北九州産か
24	B－9表	A	B－9	石鏃	黒曜石	(1.95)	1.4	(0.55)	西北九州産か
25	C－11Ⅱb	B	C－11	石鏃	鉄石英	(3.05)	1.9	(1.53)	
26	白C22Ⅲ	A	C－22	スクレイパー	黒曜石	刃長5.45		11.33	針尾系
27	白B5Ⅱ下205	A	B－6	スクレイパー	安山岩	刃長6.15		30.47	（サヌカイト），抉り
28	白B	B		磨製石斧	砂岩	22.1	6.4	(675)	
29	SIBB5Ⅲ1529	A	B－5	石斧	砂岩	(5.2)	6.7	(80)	刃部
30	白A19住？5	A	B・C－16	磨製石斧	頁岩			(300)	クサビに転用
31	7白C21Ⅲ	A	C－21	磨石	砂岩	11.6	6.0	1106	短軸は厚さ
32	SIBB4Ⅲ2291	A	B－4	叩石	花崗岩	9.4	6.0	580	短軸は厚さ
33	SIBB4Ⅲ2311	A	B－4	凹石	砂岩	10.0	3.5	391	短軸は厚さ
34	白AB20	A	B－20	凹叩石	砂岩	11.7	4.6	585	短軸は厚さ
35	SIBB4Ⅰ	A	B－4	凹叩石	砂岩	11.4	4.6	750	短軸は厚さ

第21図　弥生時代出土遺物

	注記	形式	器種	口径	調整外	調整内	色調	備考
36	SIB・A－7住8・2065	弥生	甕	－	N	N	橙	中期前葉，口縁
37	SIB・A－7住8・2086	弥生	甕	－	N	N	浅黄橙	中期中葉，口縁
38	白A19住	弥生	壺	15	N	N	鈍黄橙	後期，口縁，1／9

第23図　竪穴住居跡1号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	調整外	調整内	色調	備考
39	6白住1	成川	甕	－	N	N	橙	底，1／4
40	SIB・B－11住1・2048	成川	壺	11.2	N	N	橙	口縁，1／5
41	SIB・B－11住1・1281	成川	壺	－	N	N	明黄褐	口縁

第26図　竪穴住居跡2号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
42	SIB・B－11住2・1299，1354ほか	成川	甕	26.6	－	－	H	H	橙			口縁～胴部，1／6
43	B－11白住2，1413	成川	甕	－	－	－	H	H	淡黄			口縁～胴部
44	白B－11住2，1347	成川	甕	－	－	－	H	H	鈍黄橙			底部，1／4
45	SIB・B－11住2・1984	成川	甕	－	－	－	H	N，H	橙			底部
46	白住2，841	成川	甕	－	－	－	H	N	橙			底部
47	SIB・B－11住2・1319ほか	成川	壺	12.6	26.9	－	N，H	不明				完形
48	B－11白住2，802	成川	壺	15.5	－	－	N，H	N	浅黄橙			口縁，1／4
49	B－11白住2，791	成川	壺	16.4	－	－	N，H	N，H	橙			口縁，1／6
50	B－11白住2，776	成川	壺	18.2	－	－	N，H	不明	橙			口縁，1／9
51	SIB・B－11住2・1374	成川	壺	－	－	－	N，H	N，H	灰黄			口縁
52	SIB・B－11住2・933，1979，1981	成川	壺	－	－	－	N，H	N，H	浅黄橙			胴部，1／7
53	SIB・B－11住2・1136	成川	高坏	19.4	－	－	M	M	橙			坏部
54	白住2，1332	成川	高坏	－	－	13.6	M	K，N		○		脚部
55	白B－11住2，1411	成川	甕	20.0	－	－	H	H	鈍黄			口縁～底部
56	B－2，879	成川	鉢	8.6	6.2	2.4	M，S	H	灰	○		手づくね，鹿の子文様
57	B－11白住2，1036	須恵器	坏	－	－	4.4	N	N	灰			底部

第29図　竪穴住居跡３・４号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
58	白3住埋土・2331	成川	甕	−	−	−	H	H，S	黄橙			口縁
59	SIB・B−9住3・2007	成川	甕	−	−	−	H	H，S	黄橙			胴部，突帯付
60	SIB・B−9住3・1993，2031	成川	甕	−	−	−	N	N	橙			底
61	SIB・B−9住3・1241	成川	壺	−	−	−	H	H，S	鈍黄橙			頸部，1／4
62	SIB・B−9住3・1424	成川	壺	−	−	−	N	N	浅黄橙			頸部，1／10
63	SIB・B−9住3・1251ほか	成川	高坏	17.0	−	−	M	M	橙	○	○	坏部，1／6
64	SIB・B−9住3・2023ほか	成川	高坏	15.6	−	−	M	M	橙	○	○	坏部，1／6
65	SIB・B−9住3・1160，1255	成川	高坏	15.2	−	−	M，N	M	橙	○	○	坏部，1／8
66	白3住2319	成川	鉢	15.9	6.1	5.0	M	M	浅黄橙	○	○	
67	SIB・B−9住3・1191ほか	成川	鉢	10.5	6.1	5.0	M	N	橙	○		完形
68	SIB・B−9住3・1151，1998	成川	鉢	−	−	5.8	M	N	橙	○		
69	SIB・B−9住3・1226	成川	鉢？	−	−	−	M	N	浅黄	○		底部
70		成川	坩	12.3	17.3	4.8	M，N	N	浅黄橙	○		
71	SIB・B−9住3・1995	成川	坩	11.6	−	−	M	M，H	橙	○	○	口縁，1／9
72	SIB・B−9住3・2012	成川	坩	6.8	−	−	M	N	浅黄橙	○	○	口縁，1／5
73	SIB・B−9住3・1228，1239	成川	坩	10.8	−	−	M	N，H	橙	○	○	口縁，1／7
74	SIB・B−9住3・1229	成川	坩	−	−	−	M	N	鈍橙	○		頸部，1／7
75	白3住2320	成川	ハソウ	7.2	10.0	5.2	M	M，N	橙	○	○	
76	白3住埋土・2324	須恵器	ハソウ	−	−	−	N	N	黄橙			口縁の近く
77	6白住4	成川	甕	−	−	−	N	N	橙			口縁
78	6白住4	成川	壺	−	−	−	N，H	N，H	鈍黄橙			頸部
79	7A住4	須恵器	ハソウ	11.4	10.5	−	N	N	灰黒			

第31図　竪穴住居跡５号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
80	SIB·B−3住5·2207，2180，1751	成川	甕	26.4	−	−	N	H				口縁
81	SIB・B−3住5・2210	成川	甕	−	−	−	H	H	橙			口縁
82	SIB·B−3住5·1724，1726，1734	成川	甕	−	−	9.9	N，H	N	橙			脚部
83	SIB・B−3住5・3〜6，8，9，11ほか	成川	高坏	22.6	−	−	M	M	浅黄橙	○	○	坏部，1／20
84	SIB·B−3住5·1710，1759，2190	成川	高坏	−	−	−	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
85	SIB・B−3住5・1765	成川	高坏	−	−	−	M	H，N	浅黄橙	○		脚部
86	SIB・B−3住5・1769	成川	高坏	−	−	10.0	M	H，N	灰白	○		脚部
87	SIB·B−3住5·17〜25，1727ほか	成川	鉢	16.0	11.6	6.8	M	M	淡黄	○	○	完形
88	白B−3，5住1732	成川	鉢	10.4	5.9	−	M	M	橙	○	○	完形
89	SIB・B−3住5・1721	成川	鉢	−	−	5.4	M	不明	明黄褐			下半分
90	SIB・B−3住5・1778，1783	成川	鉢	14.0	8.6	7.2	H	H	灰緑			手づくね，完形
91	SIB・B−3住5・1787	成川	壺	9.0	10.1	5.4	H，N	H	橙			手づくね，完形

第34図　竪穴住居跡６・７号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
92	SIB・B−3住6・2248	成川	壺	−	−	−	N	H，N	灰黄			口縁
93	SIB・B−3住6・2249	成川	坩	−	−	−	M	N	浅黄	○		下半分，1／7
94	SIB・B−3住6・2245	成川	坩	−	−	2.6	N	N	鈍黄橙			下半分
95	SIB・B−8住7・1944ほか	成川	甕	29.8	−	−	N，K	N	橙			口縁〜胴部
96	SIB・B−8住7・1942	成川	甕	−	−	−	N	N	橙			口縁
97	SIB・B−8住7・1912	成川	甕	−	−	11.4	N，H	N，H	橙			脚部
98	SIB・B−8住7・2143	成川	壺	−	−	−	N，H	H，N	橙			口縁
99	SIB・B−8住7・1879	成川	高坏	−	−	14.4	M	N，H	橙	○		脚部
100	SIB・B−8住7・2159	成川	高坏	−	−	13.1	M	N	浅黄橙	○		脚部

第36図　竪穴住居跡８号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
101	SIB・A−7住8・2055・2098	成川	甕	−	−	11.5	N，H	H	浅黄			脚
102	SIB・A−7住8・2095	成川	甕	−	−	−	N	H	浅黄橙			口縁
103	SIB・A−7住8・2062	成川	甕	−	−	−	N，H	H	浅黄			底
104	SIB・A−7住8・2063	成川	壺	−	−	−	N，H	N，H	鈍橙			胴部，1／7
105	SIB・A−7住8・2085	成川	高坏	−	−	−	M	M	浅黄	○	○	坏部
106	SIB・A−7住8・2099	成川	高坏	−	−	−	M	M	橙	○	○	坏部
107	SIB・A−7住8・2058	成川	高坏	−	−	12.4	M	N	浅黄橙	○		脚
108	SIB・A−7住8・2078	成川	高坏	−	−	12.2	M	N，H	浅黄橙	○		脚
109	SIB・A−7住8・2091	成川	高坏	−	−	11.7	M	N	橙	○		脚1／8
110	SIB・A−7住8・2077	成川	高坏	−	−	−	M	N	鈍黄橙	○		脚
111	SIB・A−7住8・2076	成川	鉢	−	−	8.0	N	N	橙			底
112	SIB・A−7住8・2087	成川	坩	−	−	−	M	N	橙	○		下半分，1／3
113	SIB・A−7住8・2064	成川	甕	−	−	5.0	N	N	橙			手づくね，1／4

第39・40図　竪穴住居跡９号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
114	白住9・58・144	成川	甕	29.3	−	−	H，N	H	橙			ほぼ完形
115	7白住9・191	成川	甕	−	−	−	H	N	浅黄橙			胴部
116	7白住9・222	成川	甕	−	−	−	H	H	橙			口縁
117	7白住9・203	成川	甕	−	−	−	N	N	橙			胴部，小さい
118	7白住9・13	成川	甕	−	−	−	H	K	鈍黄橙			底部
119	7白住9・110・115	成川	壺	19.0	−	−	H	S	淡黄			口縁，1／12
120	7白住9・122	成川	壺	−	−	−	N	H	浅黄橙			胴部
121	7白住9・106	成川	壺	−	−	−	N	N	浅黄橙			底部，1／6
122	7白住9・113ほか	成川	高坏	22.4	−	−	M	M	橙	○	○	坏部
123	7白住9・40～46・235	成川	高坏	18.2	−	−	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
124	7白住9・99	成川	高坏	18.0	−	−	M	M	橙			坏部，1／10
125	7白住9・207	成川	高坏	14.4	−	−	M	M	鈍橙	○	○	坏部，1／8
126	白住9	成川	高坏	10.5	−	−	M	M	浅黄橙	○	○	上半分
127	7白住9・217	成川	高坏	−	−	−	N	N	浅黄橙			坏部，1／5
128	7白住9・223・224	成川	高坏	−	−	−	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
129	7白住9・38・50・51	成川	高坏	−	−	13.1	N	H，N	浅黄橙			脚，1／5
130	白住9	成川	高坏	−	−	−	M	M，N	浅黄	○	○	脚
131	7白住9・22・61	成川	高坏	−	−	−	M	H，N	黄橙	○		脚
132	7白住9・197・229	成川	高坏	−	−	−	M	N，K	橙	○		脚
133	7白住9・57	成川	高坏	−	−	−	M	N	橙	○		脚
134	7白住9・196	成川	高坏	−	−	−	M	N	鈍黄橙	○		脚
135	7白住9・105	成川	高坏	−	−	−	M	N，K	浅黄橙	○		脚，内面丹付着
136	7白住9・7	成川	高坏	−	−	−	M	N	浅黄橙	○		脚
137	7白住9・床面	成川	鉢	14.2	−	−	H	H	鈍黄橙			上半分，1／10
138	7白住9・178・239	成川	鉢	4.2	5.3	3.5	M	N	橙	○		
139	7白住9・230	成川	坩	−	−	3.8	不明	不明	橙	不明	不明	完形
140	7白住9・10・37・247	成川	坩	10.0	−	−	M	N	浅黄橙	○		上半分，1／4
141	7白住9・135	成川	坩	−	−	−	M	H，N	明黄褐	○		下半分
142	7白住9・165	須恵器	甕	−	−	−			灰			
143		須恵器	坏	11.6	3.5	6.7	N	N	灰			
144	7白住9・55・56	須恵器	ハソウ	−	−	−	N	N	灰			1／7

第42図　竪穴住居跡10号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
145	7白住10，1他多数	成川	甕	34.0	−	−	H	H	黄橙			
146	7白住10，12，13，48	成川	甕	−	−	−	H	H	浅黄橙			口縁～胴部
147	7白住10，26	成川	甕	−	−	−	N	N	鈍褐			底部
148	7白住10，17，22，23，41，51	成川	甕	−	−	11.0	N，H	N，H	鈍黄橙			底部
149	7白住10，P6，10，12，28～30ほか	成川	高坏	20.7	−	−	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
150	7白住10，40，P1	成川	高坏	−	−	13.0	M	N，K	明黄褐	○		脚部
151	7白住10，50	成川	高坏	−	−	12.7	N，M	K	橙			脚部
152	7白住10，15，16	成川	高坏	−	−	13.2	M	N，H	明黄褐	○		脚部
153	7白住10，45	成川	高坏	−	−	11.6	M	N，K	鈍黄橙	○		脚部
154	7白住10，27	成川	高坏	−	−	−	M	N，K	明黄褐	○	○	脚部
155	7白住10，3	成川	鉢	9.2	5.0	2.4	M	不明	浅黄橙	○	不明	完形
156	7白住10，7白住10P1	成川	坩	6.6	10.4	4.6	M	N	橙	○		
157	7白住10，48	成川	坩	−	−	−	M	N	明赤褐	○		胴部，1／8

第45～47図　竪穴住居跡11号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
158	7白住11，78	成川	甕	33.2	−	−	N	N	橙			口縁～胴部，1／8
159	7白住11，3・6・10・12・18	成川	甕	29.5	−	−	N，H	N，H	橙			口縁～胴部
160	7白住11，194	成川	甕	18.2	14.0	8.6	N	N，H	橙			完形
161	7白住11，194	成川	甕	−	−	−	N	N，H	橙			底部
162	7白住11，194	成川	壺	13.7	19.3	−	N，H	N，H	橙			完形
163	7白11住159	成川	壺	15.0	22.5	−	N，H	N，H	橙			
164	7白住11，84，86，95，107	成川	壺	16.2	−	−	N，H	N	橙			ほぼ完形
165	7白住11，143，144他多数	成川	壺	−	−	−	N	N	黄橙			頸部～胴部
166	7白住11，102	成川	壺	−	−	−	N，H	N	橙			胴部
167	7白住11，38	成川	壺	−	−	−	N	N	褐灰			頸部

168	7白住11，56他多数	成川	高坏	21.0	−	−	M	M	明赤褐	○	○	坏部
169	7白住11，181，199，214，一括	成川	高坏	21.0	−	−	M	M，N	浅黄橙	○	○	坏部
170	7白住11，15，30，35	成川	高坏	21.0	−	−	M	M	赤褐	○	○	坏部
171	7白住11，135	成川	高坏	16.8	−	−	N	N	灰白	○		坏部1／9
172	7白住11，58，59，108	成川	高坏	−	−	−	M	M	赤	○		坏部，1／4
173	7白住11，97	成川	高坏	−	−	14.6	M	N	明赤褐	○		脚部
174	7白住11，194	成川	高坏	−	−	13.7	M	N，H	灰緑	○		脚部
175	7白住11，217	成川	高坏	−	−	13.8	M	N	灰緑	○		脚部
176	7白住11，206	成川	高坏	−	−	13.4	M	N，H	橙	○		脚部
177	7白住11，P−1，1	成川	高坏	−	−	13.8	M	N	橙	○		脚部
178	7白住11，29	成川	高坏	−	−	9.6	N	N	灰白	○		脚部
179	7白住11，223	成川	高坏	−	−	13.6	M	N	黒褐	○		脚部，鹿の子文？
180	7白11住197	成川	鉢	10.6	6.4	3.9	N	N	橙	○		小型の鉢
181	7白住11，193・223	成川	坩	8.8	−	−	M	N	浅黄	○		口縁
182	7白住11，一括	成川	坩	−	−	3.4	M	N	浅黄橙	○		底部，1／8
183	7白住11・145・P5	成川	坩	−	−	2.9	M	N	浅黄	○		底部に線刻
184	7白住11・188・190〜192ほか	成川	甕	9.4	7.3	3.5	N，H	N，H	橙			手づくね
185	7白住11・101・166・194	成川	壺	8.2	9.4	6.6	N	N	鈍黄橙			手づくね
186	7白住11・40	須恵器	甕	−	−	−	平行	同心円	灰褐			胴部
187	7白住11一括	須恵器	甕	22.7	−	−	N	N	暗褐			1／17
188		須恵器	壺	23.0	−	−	N	N	暗褐			1／18

第50図　竪穴住居跡12・13号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
189	7白住12，31	成川	甕	−	−	6.4	N	N	橙			底部
190	7白住12，17，45	成川	壺	−	−	−	N	N	橙			頸部，1／6
191	7白住12，21	成川	壺	−	−	7.2	N	N	褐			底部
192	7白住12，47	成川	高坏	−	−	−	M	K	橙	○	○	脚部
193	7白住12，42	成川	鉢	13.2	8.4	7.0	N	H	灰黄褐			完形
194	7白住12，34	成川	坩	−	−	−	M	N	明黄褐	○	○	口縁
195	7白住13，4	成川	甕	−	−	−	H		緑灰			胴部
196	7白住13，2，3	成川	壺	12.9	−	−	N	N	橙			口縁，1／6

第53・54図　竪穴住居跡14号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
197	白14住61・74〜76，土	成川	甕	39.6	−	−	H	H	橙			口縁〜胴部，1／10
198	白14住6	成川	甕	−	−	11.0	N	N	浅黄橙			脚部，1／7
199	白14住9	成川	甕	−	−	−	H	H	鈍黄橙			胴部
200	白14住17，18，25	成川	壺	−	−	−	H	N，H	浅黄橙			胴部
201	白14住17	成川	壺	−	−	−	N	N	褐			胴部
202	7白住14，48	成川	壺	−	−	−	N	N	浅黄橙			底部，1／5
203	白14住21	成川	壺	−	−	9.2	N	N	橙			底部，1／6
204	白14住19	成川	壺	−	−	4.0	N	N	明褐			底部
205	7白住14.15−25	成川	高坏	−	−	14.0	M	H，K	鈍黄橙	○		脚部
206	7白住14，50，51	成川	高坏	−	−	13.0	M	N，K	明黄橙	○		脚部
207	7白住14，20	成川	高坏	−	−	−	M	N，K	灰緑	○		脚部
208	7白住14，79	成川	鉢	17.0	8.1	2.0	N，H	M，K	橙			完形
209	白14住土	成川	鉢	−	−	−	H	H	橙			口縁
210	白14住5，40，41，44，58ほか	成川	坩	11.0	13.3	6.5	M	M，H	橙	○	○	完形
211	7白住14内	須恵器	ハソウ	8.8	−	−	N	N				口縁，1／9
212	白14住53	石器	砥石	−	−	−						砂岩

第56図　竪穴住居跡15号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
213	白A15住1	成川	甕	21.4	−	−	H	H	橙			
214	白A15住	成川	甕	−	−	11.3	N	N	橙			底部
215	白A15住	成川	甕	−	−	−	N，H	N，H	橙			底部
216	白A15住	成川	壺	16.8	−	−	H	N	橙			口縁，1／6
217	白A15住	成川	壺	−	−	−	N，H	N，H	橙			口縁
218	白A15住7	成川	壺	−	−	−	N	N	橙			胴部
219	白A15住4	成川	高坏	16.8	−	−	N，H	N，H，M	浅黄橙	○	○	坏部，1／4
220	白A15住	成川	高坏	15.4	−	−	M	M	橙	○	○	坏部
221	白A15住	成川	高坏	−	−	13.0	M	N，K	浅黄	○		脚部
222	白A15住8	成川	高坏	−	−	−	M	N，K	浅黄橙	○		脚部
223	白A15住11	成川	坩	−	−	−	N，M	N	橙	○		胴部1／8
224	白A15住	石器	砥石	−	−	−						砂岩

第58～62図　竪穴住居跡16号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
225	白A16住14，15他多数	成川	甕	24.4	25.6	10.4	N	N	明赤褐			完形
226	白A16住	成川	甕	24.0	23.1	7.8	M	H	橙			完形，1／4
227	白A16住25・26他多数	成川	甕	22.0	23.1	7.2	N，H	N，H	明赤褐			完形
228	白A16住35	成川	甕	18.2	16.1	7.8	N，S	H，K，S	橙			完形
229	白A16住63	成川	甕	－	－	12.0	N	N	鈍褐			脚部
230	白A16住28，32	成川	甕	－	－	9.6	N	N	浅黄橙			下
231	白A16住	成川	甕	－	－	14.4	N	N	橙			脚部，1／5
232	白A16住2	成川	甕	28.0	－	－	N	N	明黄褐			口縁～胴部
233	白A16住64，白A19住4他多数	成川	壺	30.0	－	－	N	N	赤褐			口縁～胴部
234	白A16住	成川	甕	25.8	－	－	N，H	N	明赤褐			口縁～胴部
235	白A16住	成川	甕	－	－	11.0	N	N	明赤褐			脚部
236	白A16住	成川	甕	－	－	8.8	N	N	橙			脚部
237	白A16住40	成川	甕	－	－	10.5	N	N	橙			脚部
238	白A16住45	成川	甕	－	－	12.0	N	N	赤褐			脚部，1／4
239	白A16住	成川	甕	－	－	11.6	H	N	明赤褐			脚部，1／4
240	白A16住	成川	甕	29.0	－	－	N，H	N	明赤褐			口縁～胴部，1／9
241	白A16住	成川	甕	－	－	10.9	N	N	橙			胴部～脚部
242	白A16住54・55	成川	甕	－	－	11.0	N	N	鈍橙			下
243	白A16住	成川	壺	13.8	－	－	N	N，S	橙			口縁～胴部，1／4
244	白A16住	成川	壺	18.2	－	－	N	N，S	鈍黄褐			口縁，1／8
245	白A16住	成川	壺	18.4	－	－	N，H	N	淡黄			口縁
246	白A16住	成川	壺	17.0	－	－	N	N，S	明赤褐			口縁，1／17
247	白A16住	成川	壺	19.4	－	－	N	N	明赤褐			口縁，1／4
248	白A16住	成川	壺	15.0	－	－	N	N	緑黄			口縁，1／7
249	白A16住44	成川	壺	－	－	－	H	N	橙			ほぼ完形
250	白A16住	成川	壺	－	－	－	H	H，S	橙			口縁～胴部
251	白A16住	成川	壺	13.8	－	－	N，H	N	橙			口縁
252	白A16住	成川	壺	22.4	－	－	N	N	浅黄橙			口縁～胴部
253	白A16住9	成川	高坏	14.2	12.0	10.6	N，M	M，H	浅黄橙	○	○	完形
254	白A16住2，11	成川	高坏	21.0	－	－	M	M	赤褐	○	○	坏部
255	白A16住	成川	高坏	－	－	13.0	N，M	H	鈍褐	○		脚部，1／8
256	白A16住	成川	高坏	－	－	12.6	M	N，H	明赤褐	○		脚部，1／4
257	白A16住7	成川	高坏	－	－	12.1	M	N	浅黄橙	○		脚部，1／8
258	シラⅣ16住43？	成川	高坏	－	－	11.6	M	N，K	橙	○		脚部
259	白A16住	成川	高坏	－	－	－	M	K	明赤褐	○		脚部
260	白A16住	成川	高坏	－	－	－	M	N，K	浅黄橙	○		脚部
261	白A16住	成川	高坏	－	－	－	M	N	明赤褐	○		脚部
262	白16住10，白A16住3？	成川	鉢	17.6	13.4	6.0	N	N	黒褐			完形
263	白A16住51，57，60，61	成川	鉢	20.6	13.8	8.2	N	N	橙			完形
264	白A16住P1	成川	鉢	16.4	－	－	N	N	橙			ほぼ完形
265	白A16住5	成川	鉢	13.6	6.1	－	M	不明	赤褐	○	不明	ほぼ完形
266	白A16住	成川	坩	－	－	－	M	N	鈍赤褐	○		上
267	白Ⅳ16住16	成川	坩	－	－	6.0	M	N，H	浅黄	○		
268	白A16住38	成川	坩	－	－	3.8	M	N	橙			下
269	白A16住	成川	坩	－	－	－	N	M	赤褐	○		下
270	白A・16住1	須恵器	杯	11	－	－	N	N	灰			

第64図　竪穴住居跡17号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
271	白A17住	成川	甕	－	－	－	N	N	鈍黄橙			口縁～胴部
272	白A17住	成川	甕	－	－	－	N	N	橙			口縁～胴部
273	白A17住	成川	壺	17.4	－	－	N	N	橙			ほぼ完形
274	白A17住	成川	壺	11.2	－	－	H	H	浅黄			口縁，1／7
275	白A17住	成川	高坏	－	－	－	M	N	浅黄橙	○		脚部
276	白A17住	成川	鉢	14.0	5.5	－	N	N	赤褐			ほぼ完形
277	白A17住	成川	坩	9.0	－	－	M	M	橙	○	○	口縁，1／6
278	白A17住	成川	坩	－	－	－	M	N	浅黄橙	○		胴部，1／8

第67～76図　竪穴住居跡18号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
279	白18住2，4	成川	甕	30.0	27.0	9.6	N，H	N	浅黄橙			完形
280	白18住89，123	成川	甕	24.6	29.6	10.6	N	N，S	橙			完形
281	白A18住127，136	成川	甕	25.8	－	－	N	N，K	橙			口～胴，1／4
282	白18住168，172	成川	甕	19.9	13.2	9.4	N	N，S	橙			完形
283	白18住45	成川	甕	31.0	－	－	N	N	橙			口～胴
284	白A18住	成川	甕	33.0	－	－	N	N	鈍黄橙			口～胴
285	白A18住	成川	甕	25.0	－	－	N，H	N，H	鈍橙			口～胴
286	白A18住	成川	甕	19.6	－	－	N，H	N，H	鈍黄橙			口～胴，1／7
287	白A18住33	成川	甕	21.6	－	－	N	N，H				口～胴
288	白A18住65	成川	甕	33.6	－	－	N，H	N，H	橙			口～胴
289	白A18住柱7	成川	甕	29.6	－	－	N，H	N	浅黄			口～胴，1／7
290	白A18住89	成川	甕	25.0	－	－	N	N	鈍赤褐			口～胴
291	白A18住149	成川	甕	24.0	－	－	N，H	H	鈍黄橙			口～胴，1／6
292	白A18住	成川	甕	－	－	5.2	N	N	暗灰黄			手づくね，底部，1／7
295	白A18住55	成川	甕	－	－	10.7	N	N	明赤褐			底部
296	白A18住	成川	甕	－	－	11.6	N，H	N，H	橙			底部
297	白A18住	成川	甕	－	－	11.4	N，H	N	灰黄褐			底部
298	白A18住184，185	成川	甕	－	－	9.0	N	H	鈍橙			底部
299	白A18住	成川	甕	－	－	9.8	N，H，S	N	鈍赤褐			底部
300	白A18住	成川	甕	－	－	－	N	N	明赤褐			手づくね，底部
301	白A18住39，47，126，132，137～139	成川	壺	14.0	30.9	－	N，H	N，S	橙			完形
302	白A18住140・141，144～147	成川	壺	14.6	27.6	－	N，K	K	橙			
303	白A18住115～120・122・173	成川	壺	12.6	25.9	－	N，H	N，S	橙			
304	白A18住133，134	成川	壺	11.0	21.1	3.0	N，H	N	黒			完形
305	白A18住	成川	壺	18.0	－	－	N	N	黒			口縁
306	白A18住43，51	成川	壺	11.5	－	－	N	N	赤褐			口縁
307	白A18住	成川	壺	17.0	－	－	N	N	暗灰			口～胴，1／4
308	白A18住	成川	壺	12.4	－	－	N，H	N，H	橙			口～胴，1／6
309	白A18住	成川	壺？	13.4	－	－	M	M	浅黄橙	○	○	高坏か，1／20
310	白A18住	成川	壺	15.0	－	－	N，H	N	黄褐			口縁
311	白18住18，20	成川	壺	－	－	－	N	N	褐橙			頸部～胴部
312	白A18住24～26	成川	壺	－	－	－	H	H	鈍黄橙			肩～胴
313	白A18住85・88ほか	成川	壺	17.8	52.1	－	H	H	橙			
314	白A18住	成川	壺	－	－	－	N，H	N，H	黒褐			肩部
315	白A18住	成川	壺	－	－	－	N	N	橙			胴部
316	白A18住169	成川	壺	－	－	－	N	N	鈍橙			底部
317	白A18住68	成川	壺	－	－	－	H	N	橙			底部
318	白A18住	成川	壺	9.2	－	－	M	M	橙	○	○	口縁部，1／7
319	18住63	成川	高坏	18.8	16.5	15.7	M	N，M，K	橙	○	○	完形
320	白18住48	成川	高坏	21.8	－	－	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
321	白18住13	成川	高坏	20.8	－	－	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
322	白A18住46	成川	高坏	20.6	－	－	M	M	橙	○	○	坏部，1／5
323	白A18住60，74	成川	高坏	20.0	－	－	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
324	白A18住9	成川	高坏	18.6	－	－	N，M	N	浅黄橙	○	○	坏部
325	白A18住	成川	高坏	15.4	－	－	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
326	白A18住30	成川	高坏	14.0	－	－	M	M	橙	○	○	坏部，1／5
327	白A18住	成川	高坏	12.8	－	－	M	M	橙	○	○	坏部，1／9
328	白A18住	成川	高坏	－	－	－	M	M	浅黄橙	○	○	坏部の底部
329	白A18住21	成川	高坏	－	－	－	M	M	橙	○	○	坏部の底部
330	白A18住75	成川	高坏	－	－	15.0	M	N	鈍黄橙			脚部，1／20
331	白18住124	成川	高坏	－	－	13.4	N，M	N，K	浅黄橙	○		脚部
332	白A18住143	成川	高坏	－	－	14.4	M	N，K	浅黄	○		脚部，1／6
333	白A18住160	成川	高坏	－	－	13.2	M	N，K	鈍黄橙	○		脚部
334	白18住一括	成川	高坏	－	－	12.0	M	N，K	橙	○		脚部，1／6
335	白A18住22	成川	高坏	－	－	11.6	M	N，H	橙	○		脚部
336	白18住78	成川	高坏	－	－	11.6	N，M	N	浅黄橙	○		脚部
337	白A18住	成川	高坏	－	－	－	M	K	赤	○		脚部

338	18住22	成川	鉢	17.1	11.6	−	N，H	N，H	鈍黄橙			完形
339	白A18住	成川	鉢？	15.6	−	−	N	N	灰緑			口縁，1／5
340	白A18住53	成川	鉢	16.6	8.1	6.0	N	N	橙			完形
341	白18住35	成川	鉢	15.2	7.3	−	M	M	浅黄橙	○	○	
342	白18住17	成川	鉢	15.0	6.7	−	M	M	鈍黄橙	○	○	
343	白A18住	成川	鉢	14.8	−	−	H	H	鈍黄橙			口縁，1／8
344	白A18住	成川	鉢	11.8	−	−	M	M	浅黄橙	○	○	ほぼ完形，1／4
345	白A18住	成川	鉢	15.8	−	−	N	N，H	黄灰			口縁1／4
346	白18住181	成川	鉢	10.6	6.3	2.5	M	M	浅黄橙	○	○	
347	白A18住	成川	鉢	10.4	5.1	3.2	M	M	浅黄橙	○	○	完形，1／8
348	白A18住50	成川	鉢	−	−	−	M	N	鈍黄橙			底部
349	白A18住	成川	鉢	−	−	−	N，M	N	橙	○		底部
350	白A18住	成川	鉢	−	−	7.4	N，M	N，M	橙	○	○	底部，1／4
351	白A18住	成川	鉢	−	−	6.6	N，M	N	橙	○	○	底部，1／4
352	白A18住	成川	鉢	−	−	2.0	N	N	灰黄			底部
353	白A18住	成川	鉢	−	−	8.2	N，S	N	鈍黄			底部
354	白18住161	成川	坩	13.2	17.4	5.0	M	N	橙			完形
355	白18住12	成川	坩	10.8	13.9	6.0	M	H	橙	○		
356	18住184	成川	坩	7.8	10.3	3.4	M	N，M	橙	○	○	
357	白A18住	成川	坩	10.8	−	−	N	N	橙	○		口縁，1／8
358	白A18住	成川	坩	10.6	−	−	M	N	橙	○		口縁，1／8
359	白A18住	成川	坩	7.2	−	−	M	N	浅黄橙	○		口縁
360	白A18住106，107，108，179	成川	坩	−	−	−	M	N，M	浅黄橙	○		
361	18住101	成川	坩	−	−	3.8	M	N	浅黄	○		
362	白A18住	成川	坩	−	−	−	N	N	浅黄橙	○		上部，1／4
363	白A18住	成川	坩	−	−	−	M	N	橙	○		上部，1／5
364	白A18住	成川	坩	−	−	−	M	N，H	鈍橙	○		上部，1／11
365	白A18住157	成川	坩	−	−	−	N，M	N	鈍赤褐	○		上部，1／6
366	白A18住110	成川	坩	−	−	−	M	N	橙	○		上部，1／9
367	白A18住153	成川	坩	−	−	−	M	N，H	橙	○		上部，1／8
368	白A18住175	成川	坩	−	−	4.6	M	N	浅黄橙	○		頸部～胴部
369	白A18住14	成川	坩	−	−	3.0	N，M	H	橙	○		下半分
370	白A18住44	成川	坩	−	−	−	M	N	橙	○		下部，1／4
371	白A18住	成川	坩	−	−	3.1	M	H	浅黄橙	○		下部，1／5
372	白A18住61，70	成川	ハソウ	−	−	4.0	N	N	浅黄橙			ほぼ完形
373	白A18住	成川	ハソウ	−	−	−	M	N，H	橙	○		上部，1／6
374	白A・18住	成川	不明	−	2.9	−	M	M	浅黄	○	○	手づくね
375	白A18住156	須恵器	甕	−	−	−	N	N	黒褐			胴部
376		鉄製品	鋤鍬先									U字型

第78・79図　竪穴住居跡19号内出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
377	白A19住6，32他	成川	甕	30.0	−	−	N，H	N	明赤			口縁～胴部
378	白A19住33	成川	甕	−	−	10.2	N	N	明黄褐			脚部
379	白19住	成川	甕	−	−	−	N	N	明赤灰			底部
380	白A19住	成川	甕	−	−	−	H	H	鈍橙			口縁，二重突帯
381	白19住59	成川	壺	13.0	−	−	N，H	N，H	鈍黄橙			口縁，1／24
382	白A19住	成川	壺	−	−	−	N	N	褐			頸部
383	白A19住74	成川	壺	−	−	−	N	N	褐			胴部～底部
384	白A19住15	成川	壺	−	−	−	N	N	褐			底部，1／5
385	白A19住	成川？	壺	−	−	8.6	N	N	鈍黄橙			底部，1／10
386	白A19住	成川	高坏	−	−	−	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
387	白A19住49	成川	高坏	−	−	13.0	M	N，K	橙	○		脚部
388	白A19住22	成川	高坏	−	−	14.0	M	N，H	赤褐	○		脚部，1／4
389	白A19住8，31	成川	高坏	−	−	13.6	M	N，K	赤褐	○		脚部，1／3
390	白A19住	成川	坩	−	−	−	M	N	橙	○		胴部，1／5
391	白19住30	成川	坩	14.0	−	−	M	N	浅黄橙	○		口縁，1／8
392	白A19住17	成川	坩	−	−	4.6	N，M	N，H	浅黄橙	○		下
393	白A19住	須恵器	甕	−	−	−	平行	N	灰			
394	白A19住64	須恵器	坏蓋	−	−	−	N	N	灰			1／6
395	白A19住12	須恵器	坏蓋	−	−	−	N	N	灰			外面黒褐色，1／9
396	白A19住	須恵器	高坏	−	−	−	N	N	灰白			三角透かし

第80図　接合痕のわかる高坏

	注記	遺構	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
397	白A18住54，57	18住	成川	高坏	20.6	－	－	M	M	明赤褐			キザミ目付
398	SIBB7P66	P66	成川	高坏	－	－	－	不明	M	浅黄橙	不明	○	キザミ目付
399	白A18住	18住	成川	高坏	－	－	－	M	不明	浅黄橙	○	不明	キザミ目付
400	白先トレ内ⅡB，C		成川	高坏	－	－	－	M	不明	明赤褐	○	不明	キザミ目付

第81図　線刻が施された遺物

	注記	遺構	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
401	SIB・B－3住5・1775	5住	成川	高坏	－	－	12.3	M	N，K	橙	○		脚部
402	7白住11，218	11住	成川	高坏	－	－	13.6	M	N	浅黄橙	○		脚部
403	白14住16	14住	成川	高坏	－	－	13.1	M	N，K	浅黄橙	○		脚部
404	白18住69	18住	成川	高坏	－	－	13.8	M	N，K	橙	○		脚部
405	7白住10，14	10住	成川	高坏	－	－	－	M	N，K	浅黄橙	○		脚部
406	7白住9，49	9住	成川	高坏	－	－	－	M	N，M	橙	○	○	坏部
407	白A18住柱7	18住	成川	高坏	－	－	14.8	M	N，K	浅黄橙	○	○	脚部，1／11
408	SIB・B－8・9住3・1197	3住	成川	高坏	－	－	14.7	M	N	浅黄橙	○		脚部，1／8
409	白AⅡ		成川	蓋？	－	－	－	M	N	橙	○		つまみ？

第82～84図　遺構外出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	調整外	調整内	色調	丹外	丹内	備考
410	白ミゾ8Ⅱa309	成川	甕	30.6	－	－	N	N	橙			口～胴
411	7白ミゾ8	成川	甕	20.6	－	－	N	N，K	橙			口～胴
412	注記なし	成川	甕	－	－	－	N，H	N	橙			口縁
413	6白B11，Ⅰb	成川	甕	－	－	9.2	H	N	橙			胴～底部
414	8白ミゾ8	成川	甕	－	－	8.4	H	H	橙			底部
415	白AB20	成川	甕	－	－	－	N，H	N，H	橙			底部
416	8白	古墳	甕	20.6	－	－	H	N，H	浅黄橙			口～胴，在地系ではない
417	8白	成川	壺	9.3	－	－	N	N	橙			口～胴
418	表採	成川	壺	14.2	－	－	N，H	N	橙			口縁
419	白AB20	成川	壺	－	－	4.0	N	N	浅黄橙			底部
420	7白C1ミゾ8，15，43，88	成川	壺	－	－	－	N	N	橙			肩部，幅広
421	8白BⅡ	成川	壺	9.8	－	－	M	M	橙	○	○	口縁，1／7
422	白ミゾ8Ⅱa291	成川	高坏	19.8	－	－	M	N，M	浅黄橙	○	○	坏部
423	白AⅡ	成川	高坏	15.6	－	－	N	N	鈍黄橙			坏部
424	白AC20	成川	高坏	12.9	－	－	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
425	白浄化そうⅡ	成川	高坏	13.4	－	－	M	M	黄橙	○	○	坏部
426	白AⅡ	成川	高坏	13.2	－	－	M	M	浅黄橙	○	○	坏部
427	白AⅡ	成川	高坏	－	－	13.6	N，M	N，H	明黄褐			脚部
428	白A表	成川	高坏	－	－	13.2	M	N	明赤褐			脚部
429	7白C1ミゾ8，92	成川	高坏	－	－	11.6	M	N	浅黄橙	○		脚部
430	6白A7Ⅱ671	成川	高坏	－	－	－	M	N	浅黄橙	○	○	脚部
431	白A溝1	成川	高坏	－	－	－	M	N	橙	○		脚部
432	8白A表層一括	成川	高坏	－	－	－	M	H	橙	○		脚部
433	白BⅡ	成川	鉢	9.8	4.6	3.8	M	M	橙	○		完形
434	白BⅡ	成川	鉢	8.4	4.0	－	M	M	浅黄橙	○		完形，1／8
435	白	成川	鉢	16.6	－	－	N	N	橙			1／11
436		成川	鉢	9.7	－	－	N	N	橙			1／9
437	白AB20Ⅰ	成川	鉢	－	－	5.5	M	N	浅黄橙	○		底部
438	8白	成川	鉢	－	－	8.1	N，M	N	橙	○		底部
439	白AC20	成川	鉢	－	－	7.8	N	H	橙			底部
440	8白BⅡ	成川	坩	－	－	4.0	M	N	浅黄橙	○		下
441	8白BⅡ	成川	坩	－	－	2.0	M	N	浅黄橙	○		下
442	8白BⅡ	成川	坩	－	－	3.0	M	N，K	浅黄橙	○		下
443	SIBC3Ⅲ1526	成川	坩	－	－	2.8	M	N	橙	○		下
444	SIBB8Ⅱ492	成川	坩	－	－	－	M	N	橙	○		下部
445	白A溝1	成川	坩	－	－	－	M	N	橙	○		体部，1／8
446	8白BⅡ	成川	鉢	8.0	4.7	2.0	N	N	鈍黄橙			手づくね，完形，1／4
447	8白BⅡ	成川	鉢	4.0	3.0	－	N	N	浅黄			手づくね，完形
448	白BⅡ	成川	甕	4.8	－	－	N	N	橙			手づくね，口～胴，1／5

449	白BP59	成川	甕	−	−	4.8	N	N	鈍黄			手づくね，底部
450	8白BⅡ一括	古墳	土玉	径	2.8	孔径	0.3		黒褐			
451	白A溝1	須恵器	杯蓋	14.0	−	−	N	N	灰			外面黒褐色釉，1／8
452		須恵器	杯蓋	−	−	−	N	N	灰			外面黒褐色釉
453	SIBB8Ⅱ	須恵器	杯蓋	−	−	−	N	N	灰			
454	白	須恵器	杯	11.5	−	−	N	N	灰			口縁，1／9
455	白BⅡ	須恵器	杯	10.8	−	−	N	N	灰			口縁，受有，1／5
456	白B	須恵器	杯	12.6	−	−	N	N	灰			口縁，受有
457	白ミゾ9，317	須恵器	ハソウ	9.2	−	−	N	N	灰			口縁，1／7
458	白B7Ⅱ	須恵器	ハソウ	−	−	−	N	N	灰			底部，1／8
459	白AB？18ⅡC	須恵器	壺	15.4	−	−	N	N	灰			口縁，櫛描波状文
460	白BP58	須恵器	壺	−	−	−	N	N	灰			肩部
461	白A・C20	須恵器	壺	−	−	−	N	N	灰白			
462	7白ミゾ9，407	須恵器	高坏	−	−	−	N	N	灰			脚部
463	白AC19	須恵器	高坏	13.3	−	−	N	N	黄灰			櫛描波状文,口縁,1／11
464	白BⅡ	須恵器	甕	29.0	−	−	N	N	暗青灰			外面黒褐色釉，口縁
465	白AC20	須恵器	甕	25.6	−	−	N	N	暗青灰			外面黒褐色釉，1／12
466	SIBB4Ⅲ2316	須恵器	甕	−	−	−	平行	同心円	灰			外面黒褐色釉，胴部
467	白A溝1	須恵器	甕	−	−	−	平行	同心円	灰			外面黒褐色釉，胴部

第85図　古代出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	高台径	調整外	調整内	色調	備考
468	SIBA4Ⅱ	土師器	坏	−	−	6.0	−	N	N	橙	底部
469	白AAB5Ⅱ	土師器	？	−	−	−	6.8	N	N	橙	口縁～底部，1／5
470	SIBA4Ⅱ722	土師器	甕	20.4	−	−	−	N	N	橙	口縁
471	白BⅡ	須恵器	高坏	−	−	−	−	N	N	灰	坏部，1／4
472	白BⅡ	須恵器	碗	−	−	−	−	N	N	灰	破片
473	注記なし	須恵器	甕	−	−	−	−	平行	同心円	灰	
474	SIBB4・1硬土溝4土手	須恵器	甕	−	−	−	−	平行	条痕	橙	胴部
475	表採	須恵器	壺	−	−	10.5	−	平行	N	灰白	
476	白AC20	須恵器	壺	18.5	−	−	−	平行	N		口縁，1／9

第99・101・104図　遺構内出土遺物

	注記	遺構	形式	器種	口径	器高	底径	高台径	色調	備考
477	白C6号土坑	土壙墓8号	白磁	菊皿	9.8	2.6	−	4.7		16C，完形
478		土壙墓4号	古銭	嘉祐元寶	径	2.4	−	−		
479		土壙墓5号	古銭	開元通寶	径	2.5	−	−		
480		土壙墓12号	古銭	開元通寶	−	−	−	−		
481	SITB4ミゾ4	古道	土師器	小皿	8.0	1.3	6.3	−	浅黄橙	
482	SIBAB4溝4	古道	瓦質土器	羽釜	22.5	−	−	−	灰白	口縁，1／7
483	6白溝4Ⅰ	古道	土師器	壺	−	−	5.0	−	灰白	底部
484	6白溝4Ⅰ	古道	陶器	瓶子	−	−	−	−	緑灰	肩部，瀬戸
485	7白ミゾ7，21	溝状遺構3	土師器	坏	12.2	3.1	8.5	−	浅黄橙	

第105～107図　遺構外出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	高台径	色調	備考
486	白BⅡ	土師器	坏	13.5	3.7	8.1	−	明橙	糸切，完形
487	白A18住	土師器	坏	14.4	3.3	10.2	−	淡黄	糸切，完形
488	白BⅡ	土師器	坏	8.3	3.1	12.6	−	橙	糸切，完形
489	白AⅡ	土師器	坏	12.5	2.8	8.8	−	橙	糸切，完形
490	白A	土師器	坏	12.1	3.2	8.6	−	浅黄橙	糸切
491	白車庫P7	土師器	坏	10.9	2.9	7.4	−	灰白	糸切，完形
492	白A18住柱2	土師器	坏	13.4	2.7	8.8	−	浅黄橙	糸切，完形，1／7
493	白A18住柱2	土師器	坏	12.8	2.5	9.0	−	浅黄橙	糸切，完形
494	白A18住柱2	土師器	小皿	9.8	1.4	8.0	−	浅黄橙	糸切，完形
495	6白C6Ⅰb536	土師器	小皿	9.2	1.2	6.0	−	浅黄橙	糸切，完形，1／4
496	6白B7Ⅱ412	土師器	小皿	8.6	1.4	5.6	−	浅黄橙	糸切，完形
497	白B13CⅢ	土師器	小皿	8.4	1.3	6.6	−	橙	糸切，完形
498	白A18住柱2	土師器	小皿	9.4	1.2	6.3	−	浅黄橙	糸切，完形

499	白A18住	土師器	小皿	6.2	1.5	6.6	−	鈍黄橙	糸切，完形
500	白BⅡ	土師器	小皿	8.6	1.5	6.3	−	橙	糸切，完形
501	白	土師器	小皿	8.2	1.5	6.6	−	鈍橙	糸切，完形
502	白B13CⅢ	土師器	小皿	8.4	1.3	6.2	−	浅黄橙	糸切，完形
503	8白BⅡ	土師器	小皿	8.0	1.5	6.4	−	橙	糸切，完形
504	白A	土師器	小皿	7.7	1.1	6.2	−	橙	糸切，完形
505	白AⅡ	土師器	小皿	7.6	1.3	5.0	−	鈍黄橙	糸切
506	SIBB7Ⅱb1792	土師器	小皿	7.6	1.2	6.6	−	浅黄	糸切，1／4
507	SIBB8Ⅱb1952	土師器	小皿	7.6	1.1	5.8	−	浅黄橙	糸切
508	白AⅡ	陶器	鉢	23.0	−	−	−	黄灰	東播，口縁
509	白BⅡ	陶器	捏鉢	24.0	−	−	−	鈍黄橙	東播，口縁，1／9
510	7白C1Ⅱ層147	陶器	甕	−	−	−	−	灰白	櫛万丈
511	白A17住	陶器	捏鉢	−	−	−	−	灰白	口縁，櫛万丈
512	注記なし	陶器	甕	28.4	−	−	−	明黄褐	櫛万丈
513	SIBB8Ⅱ一括	陶器	捏鉢	26.6	9.7	10.0	−	黒	櫛万丈，1／8
514	白A	陶器	擂鉢	32.0	−	−	−	暗褐	備前，1／12
515	白14住内	陶器	捏鉢	−	−	13.5	−	黒褐	備前，底部1／6
516	注記なし	陶器	甕	−	−	−	−	橙	常滑，頸部
517	白AB20	陶器	甕	−	−	−	−	赤褐	常滑，口縁
518	白CP15	陶器	壺	−	−	−	−	赤，緑	中国南方産
519	6白B9P不明	土師器	坏	−	−	−	−	浅黄橙	円盤状土製品
520	SIBB9Ⅱ31	青磁	碗	17.0	−	−	−		龍泉Ⅱ類，口縁
521	BAⅡ	青磁	碗	17.4	−	−	−		龍泉Ⅱ類，口縁～体部
522	白A18住	青磁	碗	−	−	−	−		龍泉Ⅱ類，口縁
523	白A18住	青磁	碗	−	−	−	−		龍泉Ⅱ類，口縁
524	6白B7Ⅱ172	青磁	碗	14.0	6.3	−	3.6		龍泉Ⅲ類，完形，1／12
525	白BⅡ	青磁	碗	15.0	−	−	−		龍泉Ⅲ類，口縁
526	SIBB7Ⅱ226	青磁	碗	−	−	−	−		龍泉Ⅲ類
527	6白B7Ⅱ378	青磁	碗	−	−	−	5.2		龍泉Ⅲ類，底部
528	SIBB9Ⅲ81	青磁	碗	10.4	−	−	−		龍泉Ⅲ類，1／7
529	SIBB5P33	青磁	碗	−	−	−	−		龍泉C類
530	6白BC9Ⅰb	青磁	碗	−	−	−	−		龍泉C類，口縁
531		青磁	杯	12.4	4.1	−	6.2		龍泉Ⅲ類，双魚文
532	SIBB7P39	青磁	杯	14.4	−	−	−		龍泉Ⅲ類
533	SIBA7Ⅱ107	青磁	杯	12.4	−	−	−		龍泉Ⅲ類口縁，1／12
534	SIB1275	青磁	盤	19.8	−	−	−		龍泉，口縁，1／14
535	C－8BⅡb	白磁	碗	11.4	−	−	−		Ⅸ類，口禿
536	SIB3・4P85	白磁	Ⅲ	10.6	−	−	−		Ⅸ類，口禿，1／7
537	SIBB7P68	白磁	Ⅲ	9.0	−	−	−		Ⅸ類，口禿，1／8
538	SIB3・4表採	白磁	Ⅲ	−	−	6.4	−		Ⅸ類，底部，1／4
539	6白A9ⅠbⅡ	白磁	Ⅲ	−	−	−	5.2		D群，底部
540	SIBB7Ⅱ373，1655，P63	青白磁	合子	9.4	−	4.8	−		
541	白B4P1	白磁	Ⅲ	13.4	3.6	−	6.7		朝鮮白磁，16C
542	白AC20	青磁	碗	−	−	−	5.8		円盤状土製品
543	白AC20	青磁	碗	−	−	−	5.4		円盤状土製品
544	白AC18Ⅱ	青磁	碗	−	−	−	−		円盤状土製品
545	白	白磁	碗	−	−	−	4.7		円盤状土製品
546	SIBB8Ⅱ303	滑石	石鍋	−	−	−	−		口縁
547	ピットカB8埋土	滑石	石鍋	−	−	17.2	−		底部
548		土製品	羽口	長軸	16.3	−	−	橙	内孔径2.6～5.6

第108・109図　近世・時期不詳出土遺物

	注記	形式	器種	口径	器高	底径	色調	その他
549	SIBA4Ⅱ一括	薩摩焼	土瓶	−	−	−	褐	巻口
550		古銭	寛永通寶					背面「小」か
551	白AⅡ	土師器	土錘	長さ	4.2	幅	2.1	孔径0.7
552	白B6Ⅱ213	石器	砥石	−	−	−		凝灰岩質頁岩
553	白先トレ内ⅡB，C	軽石		−	−	−		

10　白糸原遺跡出土のヤコウガイ

熊本大学　木下尚子

白糸原遺跡では，1基の墓，3基のピットと包含層から合計6個体以上のヤコウガイ*Turbo (Lunatica) marmorata* (Linnaeus) が検出された。これらはいずれも破片で，完全な個体は無い。それぞれの貝殻の残存部位を，現生ヤコウガイに対応させて示すと第111図のようになる（貝殻部位の名称は第110図を参照されたい）。これらを整理したのが第1表である。

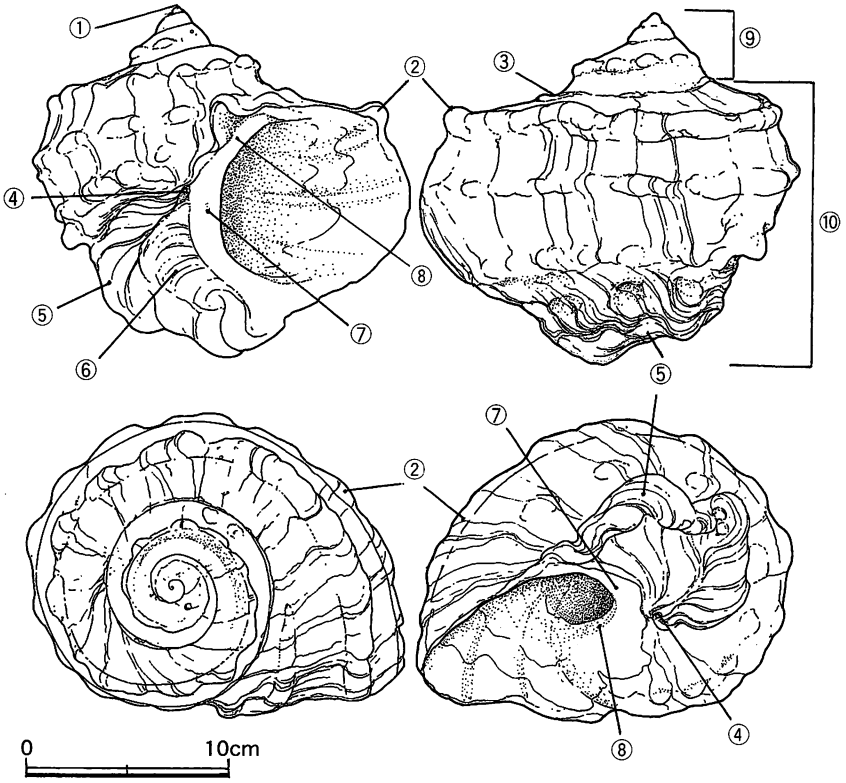
出土したヤコウガイは，第1表，第111図からも明らかなようにいずれも体層（縫帯部を除く，以下同じ）を欠いている。No. 1には体層部分を帯状に割り取った加工痕が認められ，本遺跡出土品が体層を除いた後の廃材であることを示唆する。ところで，9世紀以降中世に至る時期の西日本において，ヤコウガイは螺鈿の素材であり，その要所はまさに体層部分であった。以上を踏まえると，本出土品も螺鈿の素材であった可能性が高い。しかし，それならばなぜその廃材を墓に入れたり，ピット内に放置したりしたのか，疑問がのこる。

ヤコウガイは屋久島以南に生息する熱帯海域の貝であり，中世の日本において高い商品価値をもっていた。したがってこれらが白糸原遺跡に意識的に持ちこまれたものであることは疑いない。その出土状況に現在説明できない部分を残すものの，白糸原遺跡のヤコウガイは，加工工程を示す貝殻が消費地側でまとまって出土した初めての事例として，たいへん貴重である。

第1表．白糸原遺跡出土のヤコウガイ一覧

No.※1	出土遺構	残存する貝殻の部位※2 螺塔	内唇	体層※3	軸唇	臍盤	縫帯	重さ（g）	備考
1	B8区土坑③	○	○		○	○	○	484	体層が割りとられている。老成貝。
2	B8区土坑③	○	○		○	○	○	371	一部二次的に破損。表層剥落。
3	B5区土壙墓24号	○	○				○	122	螺塔の破損は二次的。縫帯は細片。
4	B8区土坑③				○	○	○	212	大型の老成貝。
5	B8区土坑③				○	○	○	143	表層残存。
6	C5区土坑①				○			11	軸唇末端の細片。表層剥落。
7	B6区2層				○			28	軸唇端部。表層剥落。
8	B6区土坑②						○	11	表層剥落。

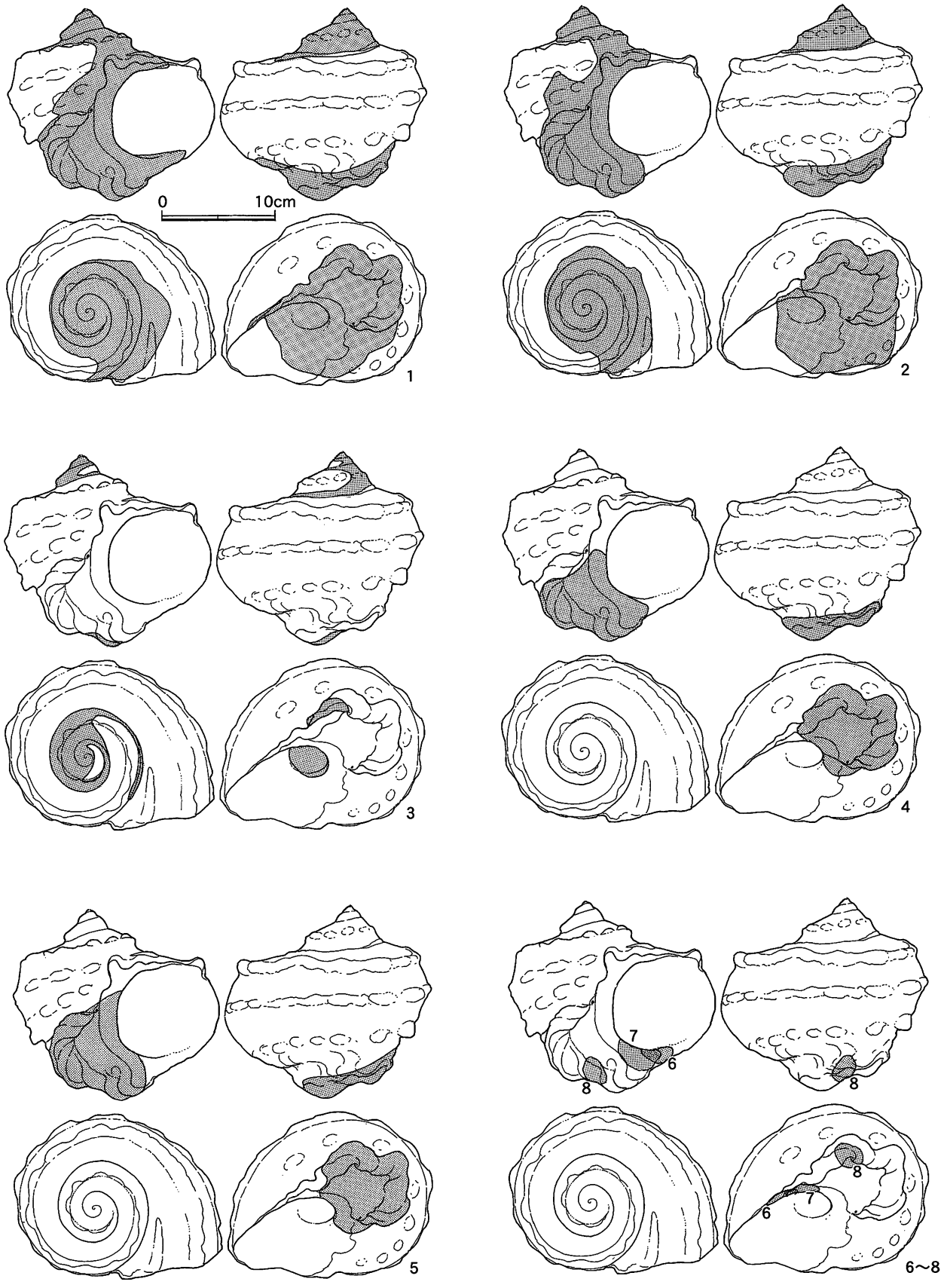
（※1　番号は第111図・巻頭カラー図版に対応、※2　○は残存することを示す、※3　縫帯部を除く）



① 殻頂
② 螺肋
③ 縫合
④ 臍孔
⑤ 縫帯
⑥ 臍盤（臍索とも）
⑦ 軸唇
⑧ 内唇
⑨ 体層
⑩ 螺塔

各部の名称は、以下の2冊に拠った。
奥谷喬司編2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
波部忠重監修1975『学研中高生図鑑7 貝Ⅰ』学習研究社

第110図　ヤコウガイ各部名称



第111図　ヤコウガイ残存部位模式図（網かけ部分　番号は第１表に対応する）

第Ⅳ章　調査のまとめ

第１節　縄文時代

(1)　遺構

草創期の遺構として，落とし穴を１基検出した。掘り込み面がⅦａ層（通称：チョコ層）上面であることと薩摩火山灰のパミスを含むＶ層類似の埋土であることから所属時期を認定した。上面観は楕円形を呈している。床面から逆茂木の痕跡である可能性を有するピットを検出しているが，調査期間の制約のために横からのスライスを行っておらず，形状にやや不安が残る。

鹿児島県内での落とし穴の検出例は現在のところ旧石器時代（細石刃文化期）が最も古く，大久保（１基），鹿村ヶ迫（２基），老ノ原（１基），竹ノ山Ｂ（２基），山ノ上Ｂ（１基），仁田尾（16基），根木原（12基）などで検出されている。

草創期の落とし穴の類例としては前原和田（２基），鳥山（１基），桐木（１基），小中原（２基），中尾（２基）などがあり，後期旧石器時代から草創期とされているものに鹿児島大学構内桜ヶ丘団地（３基），志風頭（２基）がある。詳細は（前迫ほか2004）を参照されたい。

(2)　遺物

早期（Ⅰ類～Ⅴ類）から前期（Ⅵ類）にかけての土器が少量出土している。Ⅴ類土器以外は，出土量が少なく，小片のため詳細な分類はできなかった。

Ⅰ類は，横位を基本とする貝殻条痕に，斜位の条痕が施されており，二重施文の構成となっている。「前平式土器」の範疇に属すると考えられ，黒川忠弘の「志風頭タイプ」に近い。

Ⅱ類は，器形は口縁部が外反する。口唇部にキザミ目を施し，口縁部に貝殻刺突文が斜位に施される。内面は丁寧なナデ調整が施される。「石坂式土器」である。

Ⅲ類は，羽状を基本とする施文が施されているものが多い。「下剥峯式土器」に近いと思われる。

Ⅳ類は，円筒形を呈する。口縁部がやや内湾する。口縁部に５条の横位の流水文を施し，胴部には縦位の流水文を施す。口唇部と内面には，非常に丁寧なナデ調整が施される。「桑ノ丸式土器」である。

Ⅴ類は，押型文土器で楕円押型文（Ⅴａ類）と山形押型文（Ⅴｂ類）が出土している。

Ⅴａ類土器は，やや上げ底ぎみの平底を呈しており，口縁部内面から外面全面に楕円押型文が施されるが，外面の一部で押型文をスリ消すナデ調整が施されている。

Ⅴａ類のうち，8・9・10・13・14は，同一の原体が使用されており，約12㎜おきに同一のパターンが確認されることから，直径約3.8㎜の原体を使用していることが判明した。

Ⅴｂ類は，出土量が少なく器形等の詳細は不明。

Ⅵ類は，前期の範疇に含まれる。器形は丸底を呈し，底部の最突起部を中心として蜘蛛の巣状の条痕文が施される。内面には，丁寧なナデ調整が施される。「曽畑式土器」である。

第２節　弥生時代

(1)　遺物

弥生時代の遺物は，ごく少量の出土である。甕の口縁部の特徴から，中期前半～後期にかけてのものであると考えられる。

第３節　古墳時代

本遺跡の主体を占める時代は古墳時代と中世である。

(1)　遺構

竪穴住居跡を19基検出している。床面に柱穴が多数検出され，中世のピットと区別できないものもあったが，床面からの掘り込みが深いものを選ぶと，四本柱（3・9・10・11・14・18号）と二本柱（2・5・6・7号）が確認できた。平面プランが拡大された改築の痕跡（9・11号）もみられた。

(2)　遺物・土器

本遺跡出土の土器は，南九州の古墳時代に使用されたいわゆる成川式土器と呼ばれるものである。編年上の位置については

1　甕の口縁部がほぼまっすぐにのびるものと，やや内湾するものがみられる。
2　甕の脚部内面形態が，平坦に調整されるものと，下方に膨らむものがある。
3　高坏・坩に丹塗りされているものが多い。
4　小型の壺の口縁部がほぼ直立し，丸底で肩部が張っている。

以上のことから，中村直子の辻堂原式期後半から笹貫式期に該当すると思われる。

器種構成は，甕・壺・高坏・鉢・坩・ハソウ・手づくねからなる。

甕は，口縁部がまっすぐ伸びるものと，やや内湾するものがあり，脚台内面天井部も下方に膨らむものと平坦に調整されるものがあることから，やや時期差が想定されるが，同一遺構内からも出土していることから大きな開きはないと思われる。

壺は，大型で頸部に幅広の突帯を有するものと，小型で突帯を有さないものの２種類がある。使用目的が異なっていたと考えられる。

高坏は，丹塗りが施されているものが多く，また出土点数も多い。個体数の概要を把握するため脚部の円筒部分（１／２以上残存しているものがほとんどである）の点数を未掲載遺物も含めて数えたところ，丹塗り193点，

丹塗りなし16点の計209点であった。

鉢は，脚台がつく大型のものと，丹塗りが施されることがある小型のものが出土している。大型の鉢は，ススが付着することがあることから，甕として使用されることがあったと思われる。小型の鉢は，食器として使用されたものであろう。

坩は，底部は平底で，胴部が張り出して稜を有している。丹塗りされているものが多い。

ハソウは，出土数が少ない。単孔が穿たれている部分がみられないものは，坩として扱っているためとも考えられるが，単孔がみられると気付いた遺物は全て掲載した。出土数自体が少ないのであろう。丹塗りされ，坩と同様に胴部に稜を有するものと，丹塗りが施されず胴部は張るものの，なだらかなものがみられる。

手づくねは，粗製が多い。器種は甕・壺・鉢などである。外面は丹塗りで，内面に鹿の子文を丹塗りした鉢が１点出土している。焼成が還元で，くすんだ色調を呈しており，鹿の子文と関連を有する可能性がある。

⑶ 高坏について

高坏については，日本の他地域では弥生時代から増加する傾向がみられる。南九州においては，高坏が盛行するのは，本遺跡が属すると考えられる古墳時代の後半であり，丹塗りが施されるという特徴を有する。この丹塗りの高坏の用途について考えてみたい。

高坏については，祭祀用の土器であるとする説と，日常的に使用する土器であるという説の二つがあるようである。

祭祀用に使用されたことは，弥生時代の北部九州で特定の墓に赤く彩色された高坏を含む土器群が供献されることなどから確実である。

それでは，日常的に使用されたとする説はどうであろうか。

南九州においては他地域と比較して高坏が盛行し始める時期が異なるので，弥生時代の高坏も含めてみていきたい。

池畑耕一は，弥生時代の高坏について「高坏形土器は稲の導入とともに食器として登場し，５世紀になって供献用にその用途を変えるまでは，食器としての用途をもちつづけたものと思える。」とし，高坏形土器と稲作のひろがりに密接な関係があることを指摘している。

さらに丹塗りについては，「丹塗りは従来いわれてきたような祭祀的要素を持つものではなく，実用的要素の強いものと思える。」とし，南九州の古墳時代にあらわれる丹塗りの高坏についても実用品であるという考えを示している。

清水真一は山陰地方の古墳時代について「高坏は，この時期（布留式土器併行期）に入って急激に増加する。…中略…この時期の器種比率は20～30％あり，食生活の変化か食形態の変化が考えられる。」としている。

いずれも，高坏が日常的に食器として使用されていると考えている。

本遺跡についてみると，いくつかの点で，丹塗りが施された高坏は日常的に使用されていたと考えられる。その理由について述べてみたい。

【高坏の使用痕】

高坏の観察をしているうちに，杯部においては外面と比較して内面の器壁が擦れていたり，剥落が多くみられたりすることに気がついた。掲載遺物のうち内外面が比較できる43点について，その頻度を調べたところ，28点にその傾向がみられた（約65％）。外面のほうが擦れていたり，剥落が多いという遺物はみられなかった。

これについては，製作上の理由（ミガキが甘いなど）から内面の器壁がもろいという可能性もあるが，使用と洗浄（水を使わない場合もありうる）によって内面に残されたいわゆる使用痕のようなものである可能性が指摘できる。なぜならば，食物を入れるのは当然，内面であるし，洗浄する際に汚れている内面を中心にこするであろうことも容易に予測できるからである。

祭祀が毎日行われていた可能性も考えられるが，高坏は丹塗りや器壁が剥げるほど日常的に使用されていた可能性も考えられる。

また，脚部の接地面に輪状に残る摺り跡も頻繁に小移動して使用されたことを意味していると思われる。

土器の使用痕ついては，高坏は丹塗りが施されているために容易に観察できたが，鉢や，甕（被熱のためまったく同じではないが）についても同様であることが予測される。

【出土量の多さ】

本遺跡においては古墳時代の包含層（Ⅱ層）がほとんど削平されていることと竪穴住居跡の残存状況も平均で深さ約21㎝を残すのみであることから，残された遺物量は本来の遺物量に比べて相当少なくなっていることが予想される。

それにもかかわらず，前述のように本遺跡の高坏の出土点数は209点が数えられた。高坏の脚部の円筒部分は，残存率が高いことから，この点数はある程度，個体数を反映していると考えられる。

本遺跡には焼失住居はみられないから，住居内の出土遺物はその出土状況からみて住居の廃絶後に廃棄されたものである。その期間を特定することは不可能であるが，平均の深さ約21㎝が埋まる期間であり，それほど長期間ではないと思われる。遺構外出土遺物は全体の３割程度を占めているが，これはほとんど残存していない包含層などから出土しているものであるから，19基の竪穴住居跡内に21㎝の深さまで遺物が廃棄される期間内には，実際にはもっと多くの高坏が周辺にも廃棄されていたと考

えてよいであろう。

したがって，本遺跡に残された高坏は竪穴住居跡１基が21cm埋まる期間に11点以上と考えられる。祭祀用とするには点数が多いのではないだろうか。

以上述べてきたように，使用痕と出土量の多さから，本遺跡出土の高坏は日常的な使用が想定できる。

(4) 高坏の成形法

本遺跡では高坏の成形法を示す資料が何点か出土している。

坏部と脚部の接合に関するものは接合痕のわかる高坏（397～400）として掲載した。これらは，脚部の上部を円形に平坦につくり，その周囲と上面に接合力を高めるためにキザミ目を施すものである。坏部は底抜けか，底が薄く作られたと考えられる。

脚部については，中空部に①しぼり痕がみられるものと，②縦位のスジが何本もみられるものがある。

①は板状の粘土を巻いて成形したものである。

②はヘラ状の工具のケズリ痕であり，円錐台を呈する粘土をヘラ状工具でくり抜き，接地面をひろげて成形したものである。

四元誠（琴鳴窯）が実際に製作してみせてくれたが，②は①より製作が容易である。

(5) 線刻が施された遺物

主として高坏に線刻が施されるものがみられた。

第４節　古代

古代については，遺構は検出されず，遺物の出土量も少量である。本遺跡の周辺には阿多の郡衙跡である可能性が指摘されている小中原遺跡が所在している。本遺跡においても引き続き生活が営まれた可能性はあるが，包含層が残存していないためであろう。

第５節　中世

本遺跡で，古代と並んで主体を占める時代である。

(1) 土壙墓と夜光貝入り土坑

土壙墓を24基検出した。

土壙墓の時期については，発掘調査時の認定は時期不詳（１次調査）や近世（４次調査）とされていた。出土遺物の検討の結果，中世末～近世初頭とした。古銭が出土した３基の土壙墓では，それぞれ１点ずつしか出土していない点，開元通寶（２点）・嘉祐元寶（１点）が出土し，寛永通寶が出土していない点，15～16世紀の白磁の菊皿が出土している点などが根拠である。

この土壙墓のうち１基から夜光貝が出土している。また，周辺の小型の土坑３基からも夜光貝が出土しており注目される。木下尚子によると素材としての夜光貝の九州本島での検出例は，鹿児島県枕崎市「松之尾遺跡」についで２例目となる。

(2) 遺物

青磁・白磁をはじめ，国内外産の陶器等が出土した。そのうちで，注目されるものを紹介する。

双魚文が見込みに貼付された青磁坏（531）が出土している。龍泉窯系のⅢ－４・ｂ類（太宰府編年）である。

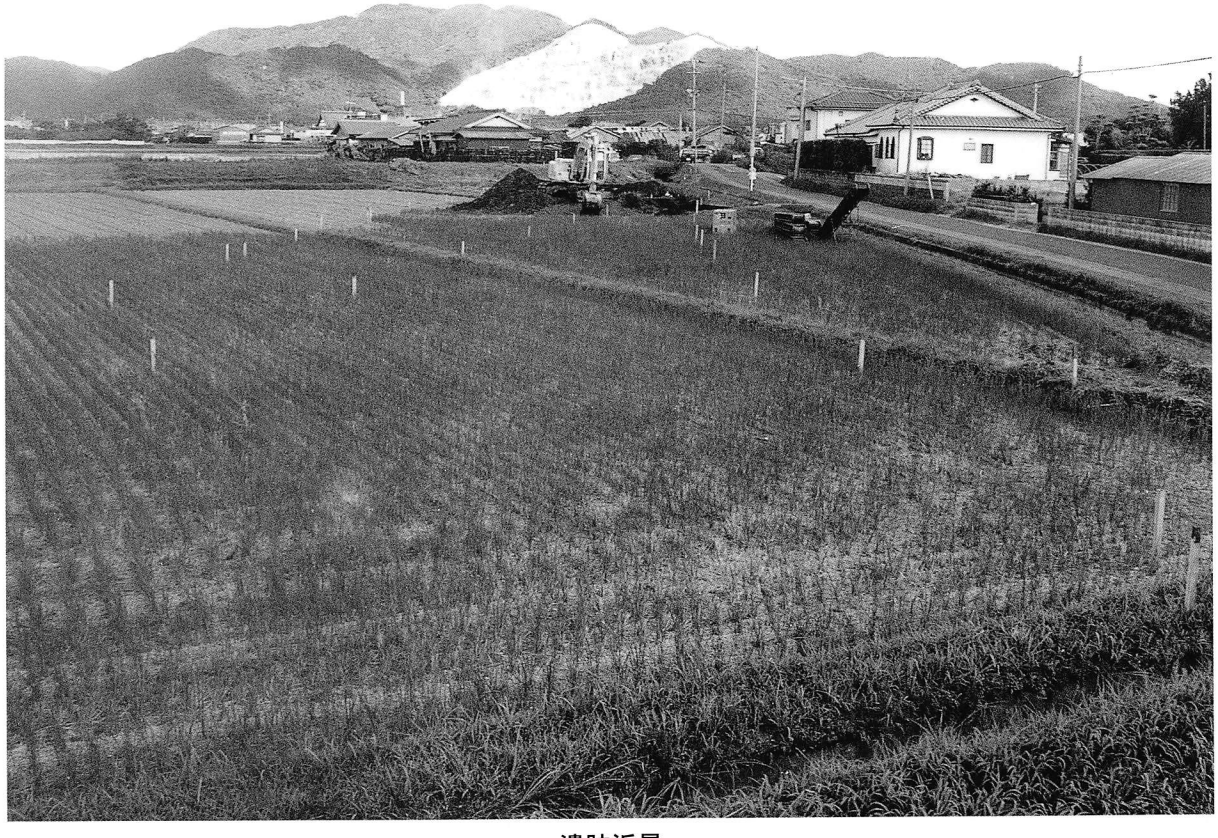
また，県内では出土例が少ない16世紀の朝鮮白磁のⅢ（541）が出土している。

本遺跡は，東シナ海に注ぐ万之瀬川の河口から約３㎞上流に位置し，中世の中国陶磁器を大量に出土した持躰松遺跡からは約１㎞下流にあたる。中世においてこの地域が果たしていた交易上の位置を示唆する遺物である。

引用・参考文献

池畑耕一「弥生時代における高坏形土器の用途について」
『瀬戸内考研連絡誌No.6』瀬戸内考古学研究所1977
牛ノ濵修ほか「旧石器から縄文へ－遺構と空間利用－」
『日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集　第２集』
日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会
2000
小畑弘己「出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通」
『文学部論叢第57号』熊本大学文学会1997
黒川忠弘「南九州貝殻文系土器Ⅰ～鹿児島県～」
南九州縄文研究会2002
黒川忠広，桑波田武志「竹ノ山Ａ・Ｂ遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
（29）2001
酒井龍一「弥生の世界」『歴史発掘６』講談社1997
清水真一「弥生土器から土師器へ」
『季刊考古学』第19号雄山閣1987
角南総一郎「「円錐塊充填法」に関する予察－永野原遺跡出土資料を中心として－」『永野原遺跡』高山町教育委員会2000
戸崎勝洋ほか「松之尾遺跡」枕崎市教育委員会1981
外山和夫「弥生土器の形と用途」
『季刊考古学』第19号雄山閣1987
中村直子「成川式土器再考」『鹿大考古第６号』
鹿児島大学法文学部考古学研究室1987
前迫亮一ほか「九州における縄文時代のおとし穴状遺構」
第14回　九州縄文研究会鹿児島県大会
発表要旨・資料集2004
森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について
－型式分類と編年を中心として－」
『研究論集４』九州歴史資料館1978
太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－」
太宰府市の文化財第49集2000

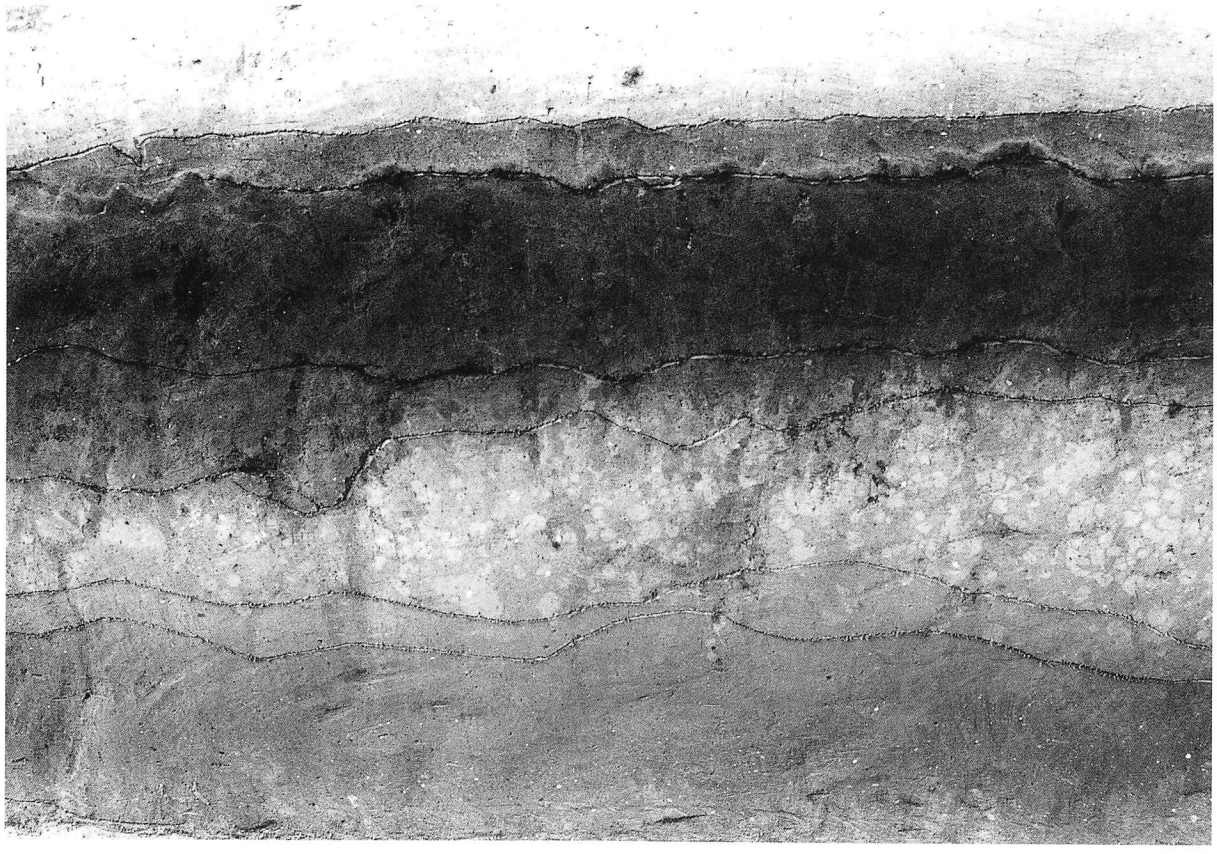
写　真　図　版



遺跡近景

発掘調査風景

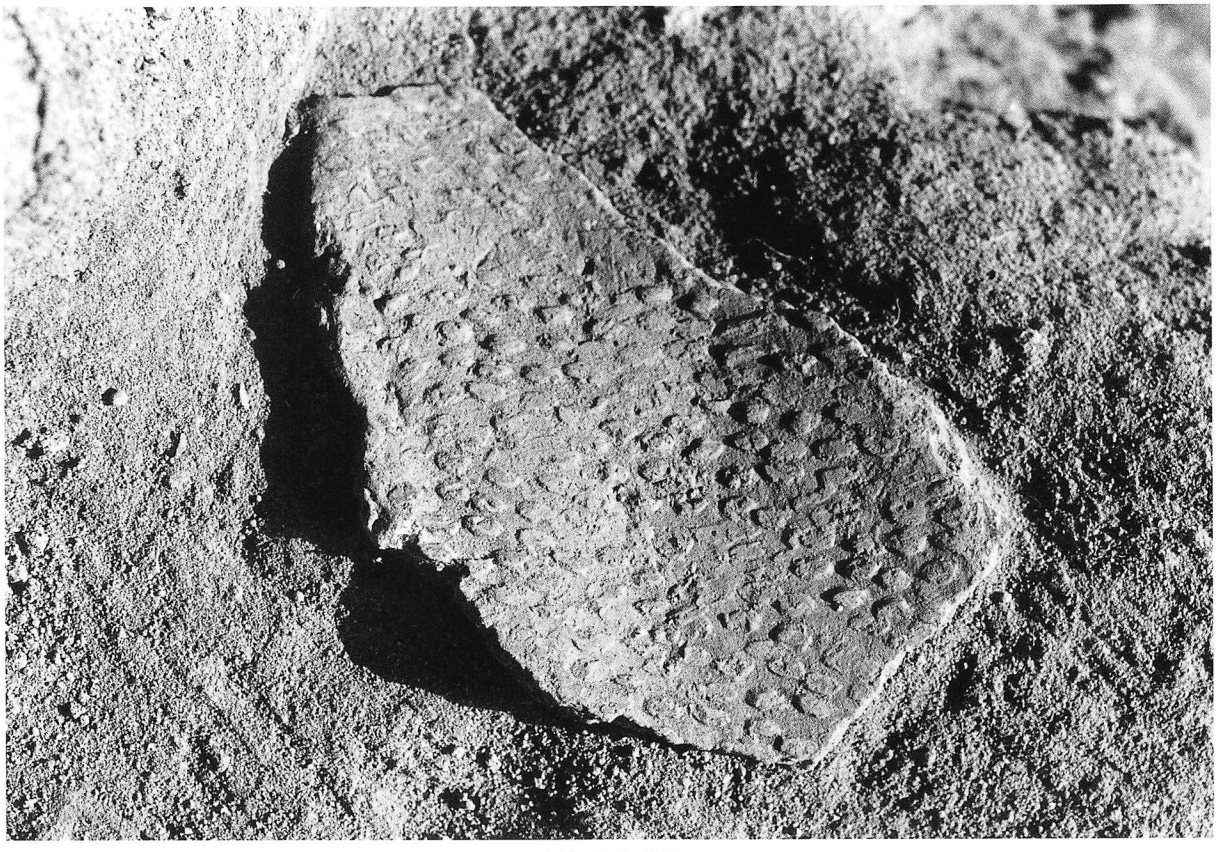
図版2



土層断面

集石１号

集石２号



遺物出土状況

図版4

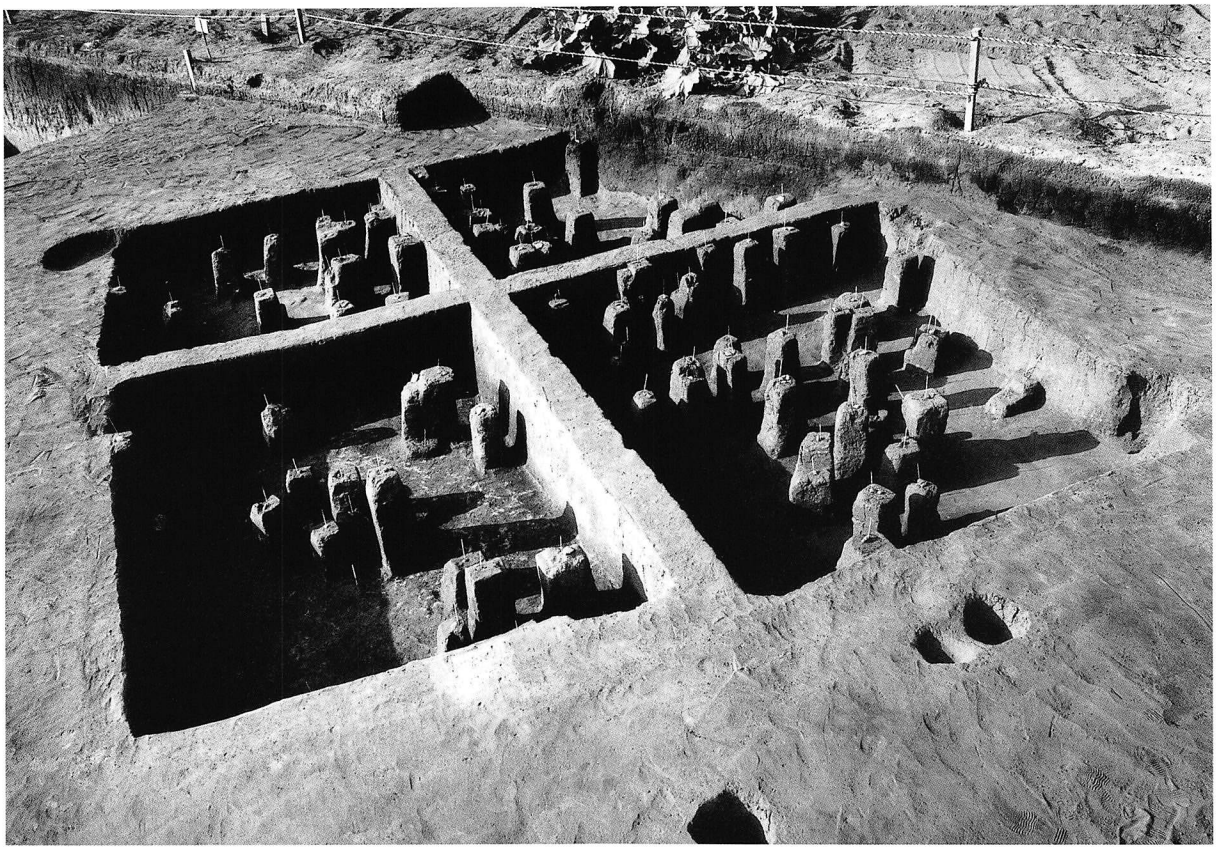
竪穴住居跡１号

竪穴住居跡２号

竪穴住居跡２号

竪穴住居跡４号

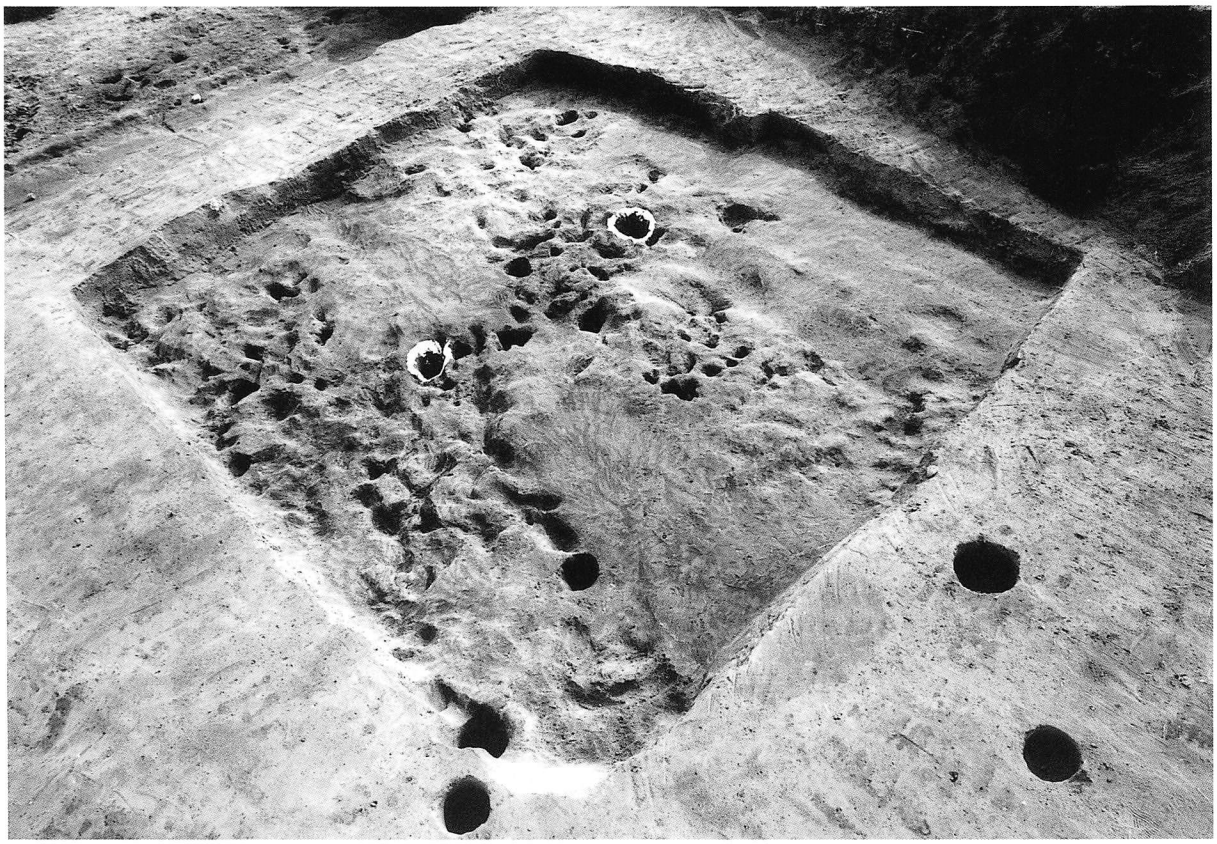
図版6



竪穴住居跡3号

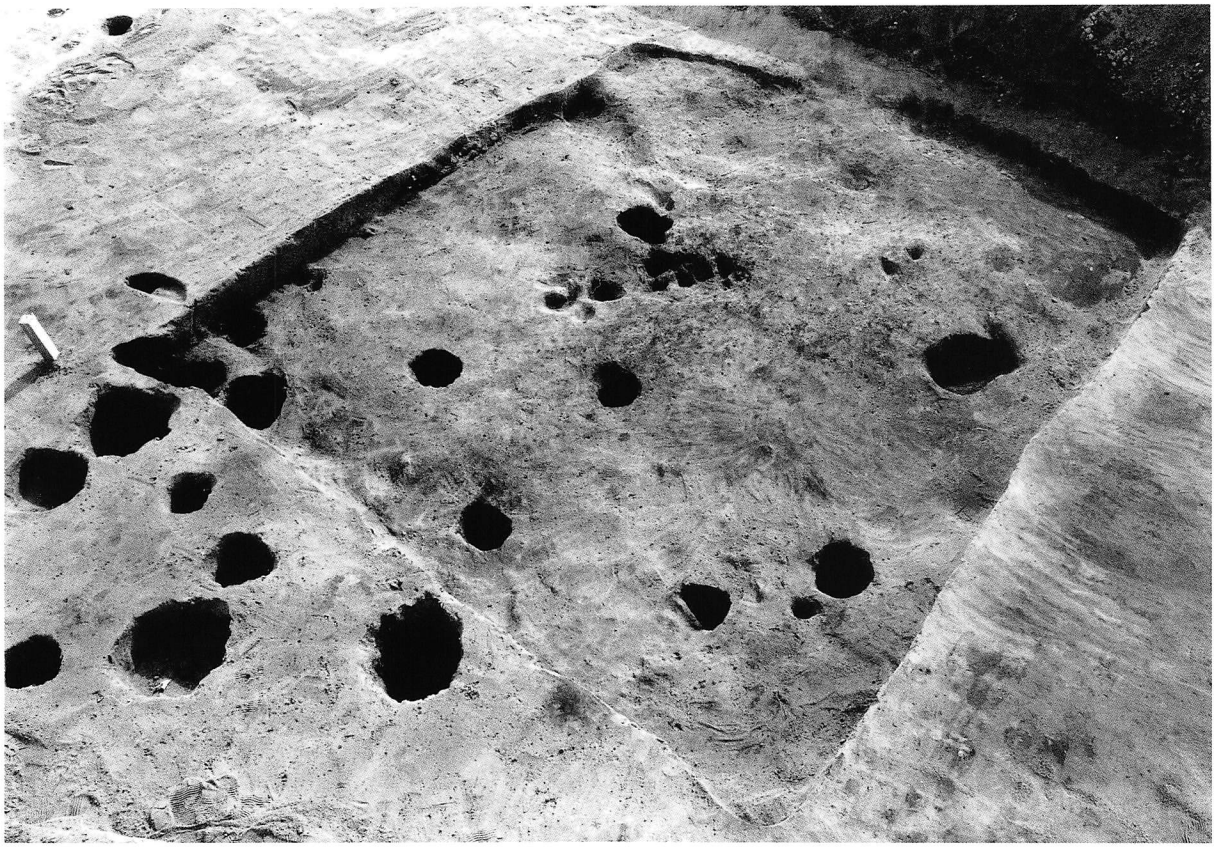
竪穴住居跡3号

竪穴住居跡3号内遺物出土状況



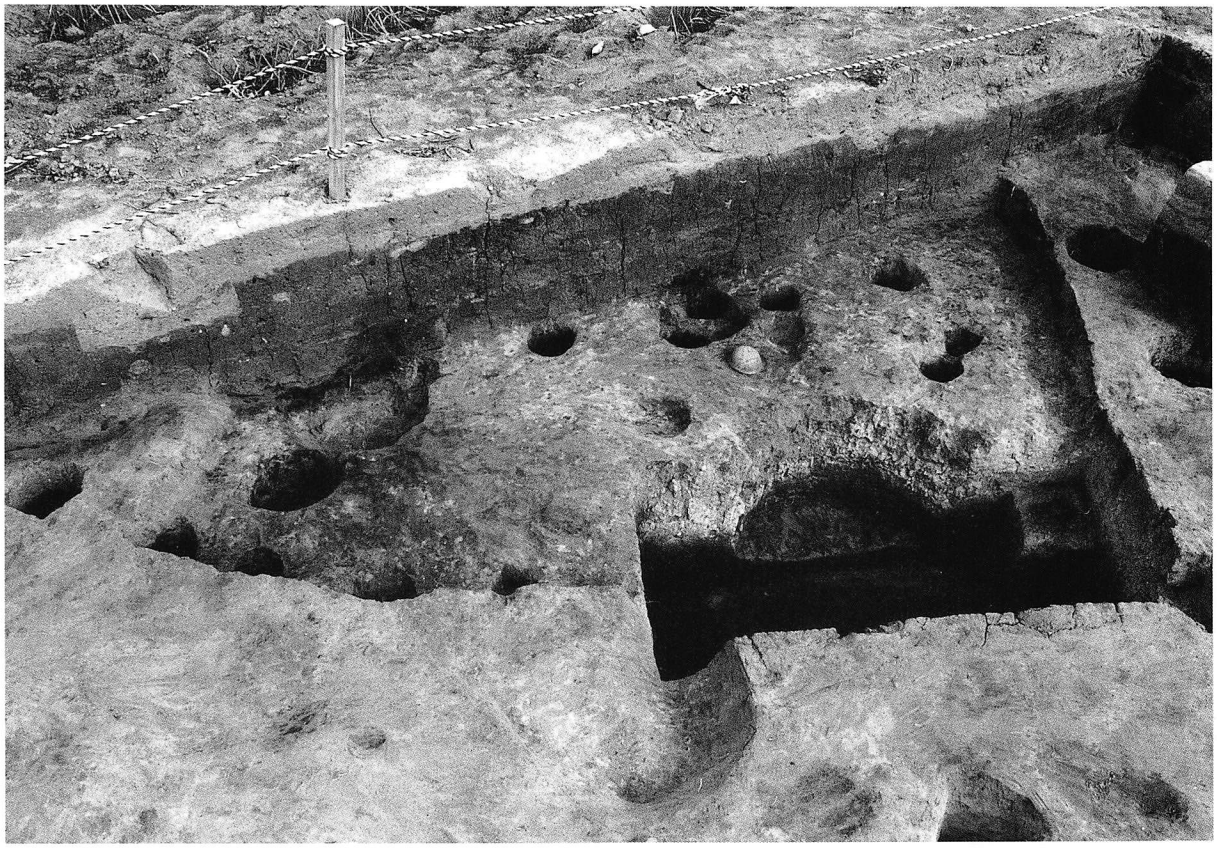
竪穴住居跡5号

図版8



竪穴住居跡6号

竪穴住居跡7号



竪穴住居跡８号

竪穴住居跡12号

図版10

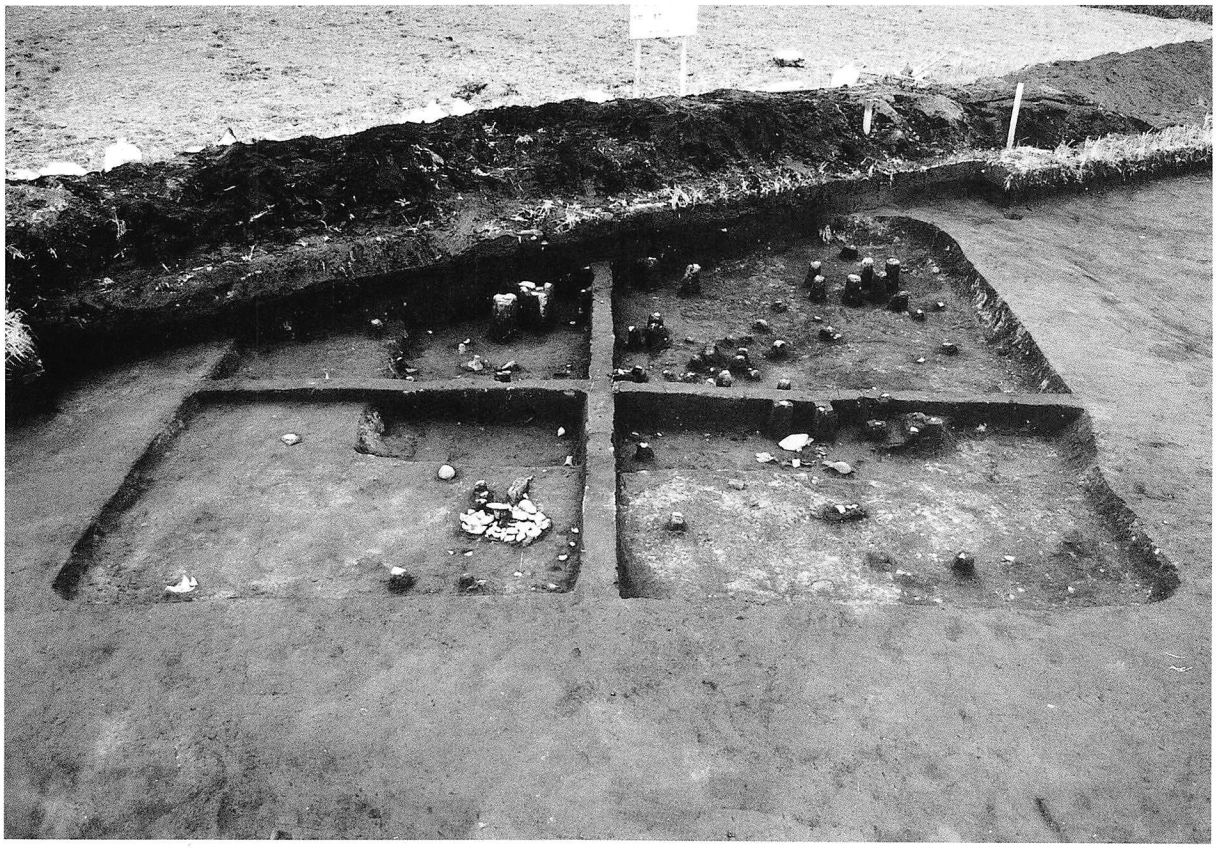
竪穴住居跡９・10号検出状況

竪穴住居跡９号

竪穴住居跡10号

竪穴住居跡13号

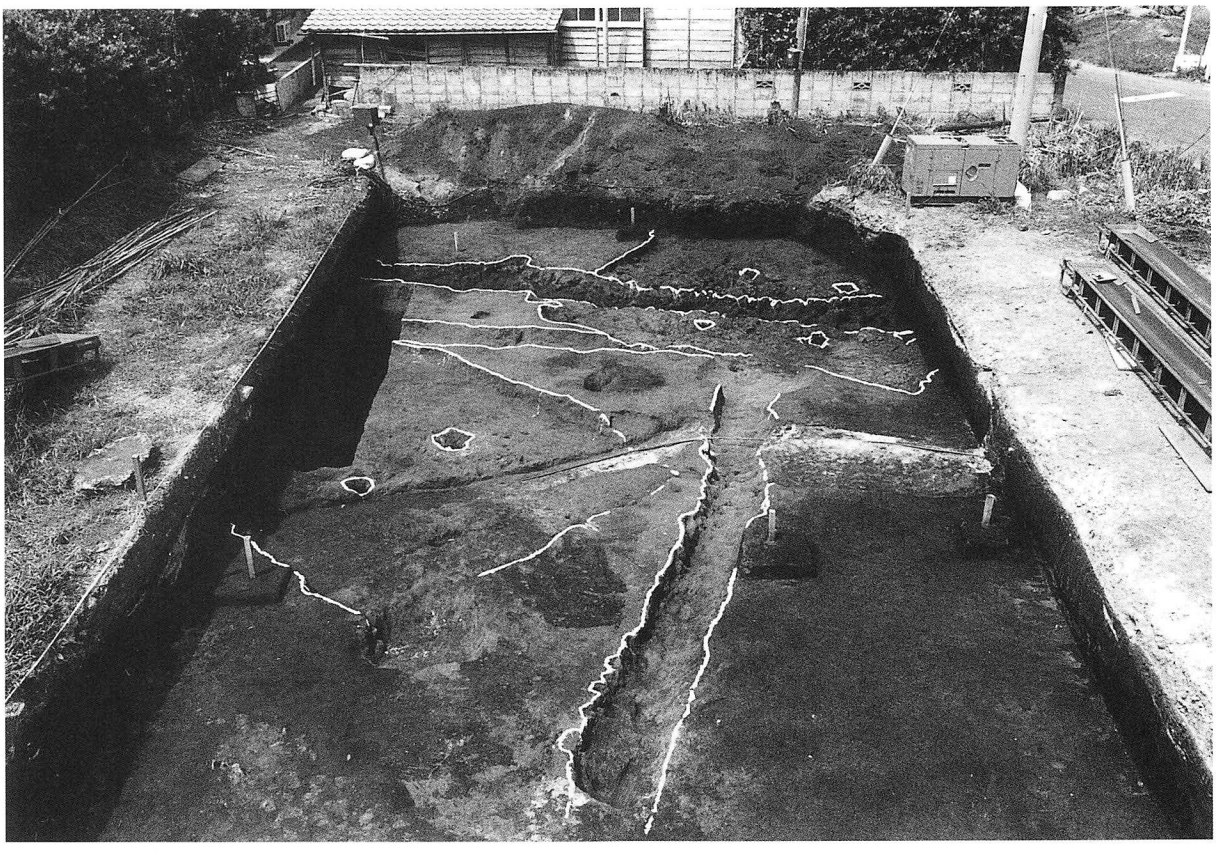
図版12



竪穴住居跡11号

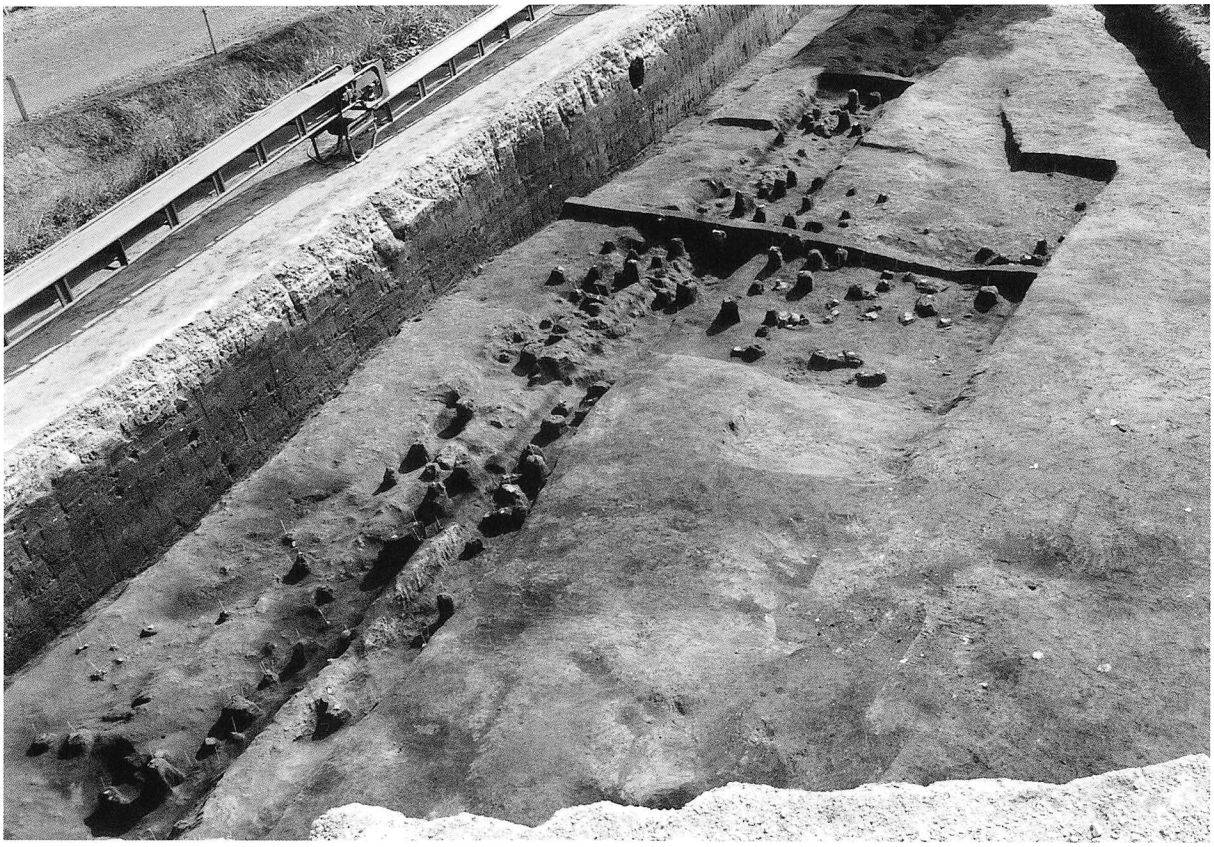
竪穴住居跡11号内遺物出土状況

竪穴住居跡11号



竪穴住居跡15号

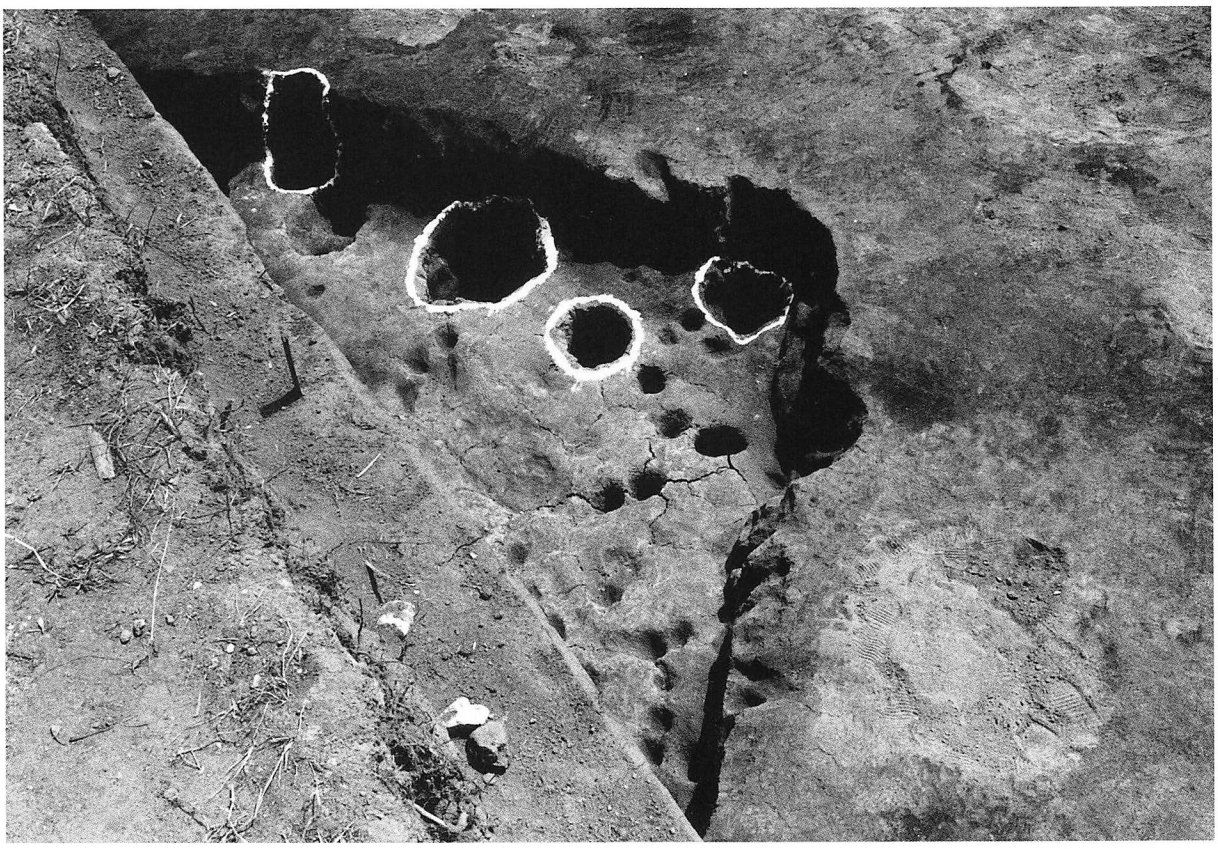
図版14



竪穴住居跡14号

竪穴住居跡14号

竪穴住居跡16号



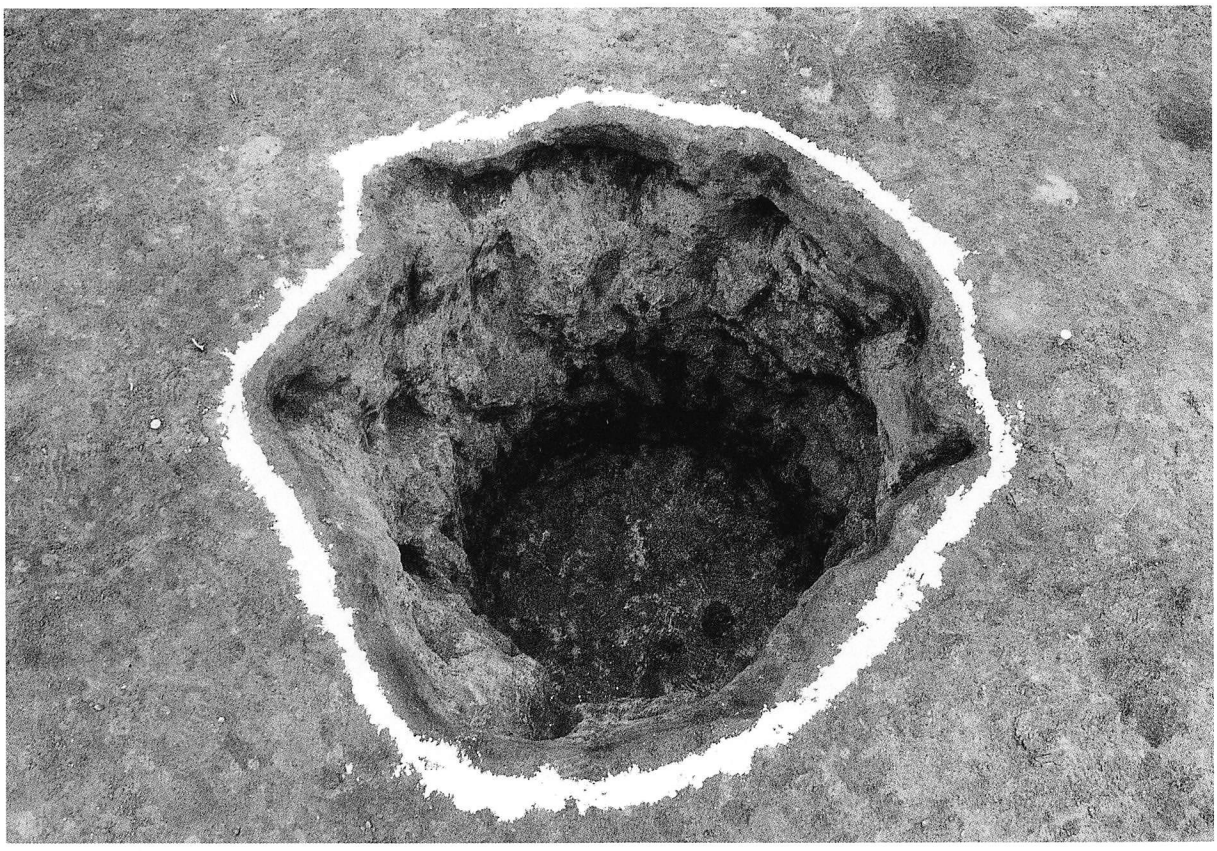
竪穴住居跡17号

図版16

竪穴住居跡18号

竪穴住居跡19号

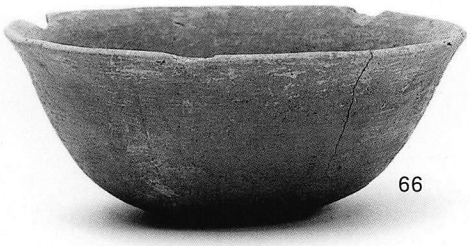
土壙墓８号



土壙墓９号

図版22

56


66

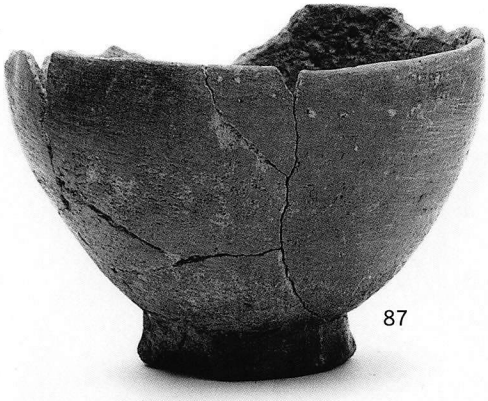
67

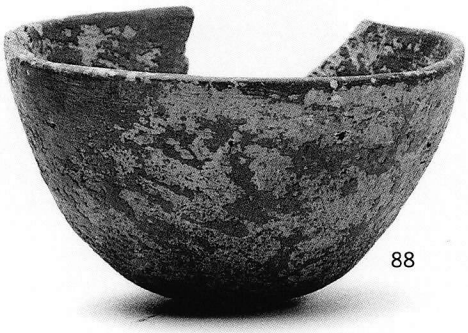
75

70

79

出土遺物 1


87


88

100

108

114

139

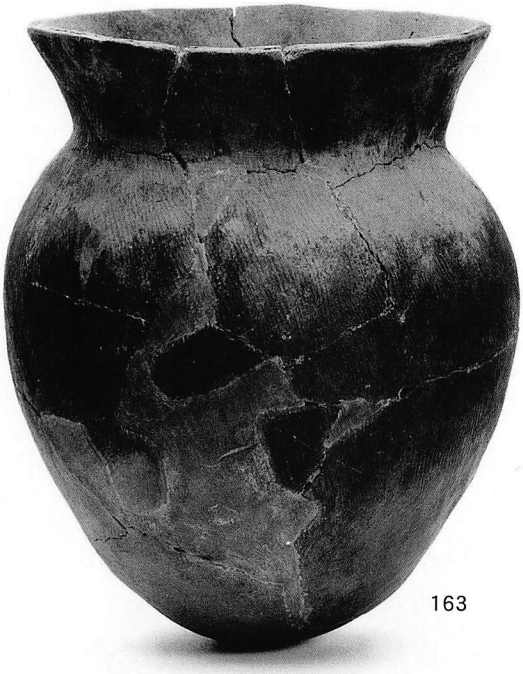
143

152

出土遺物２

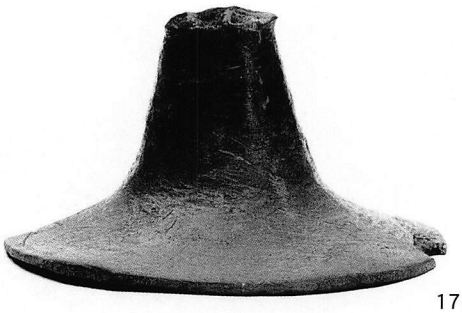
図版24

156



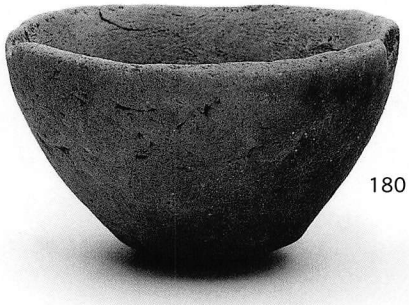
163

174

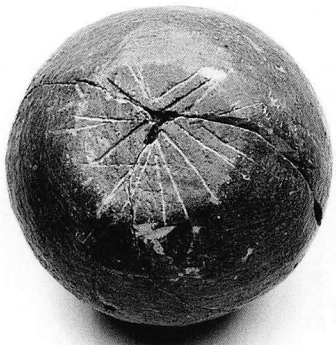


179

183

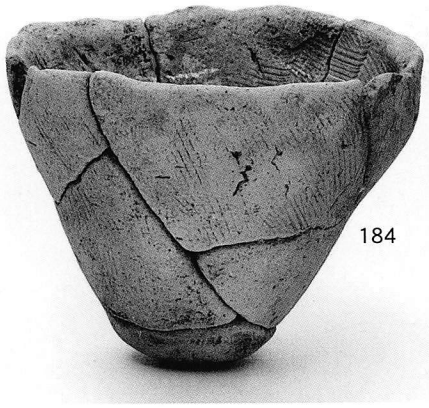


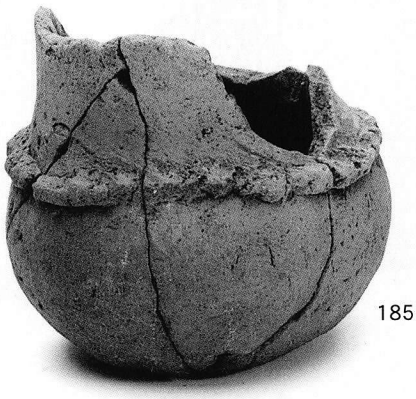
180



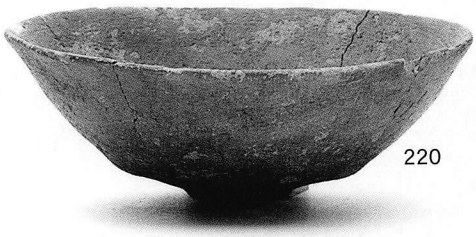
183

出土遺物 3


184


185

210


220

225

226

出土遺物 4

図版26

221

227

253

258

262

302

263

出土遺物5

303

313

319

321

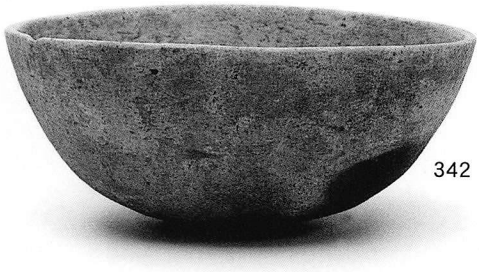
331

338

出土遺物 6

図版28

341

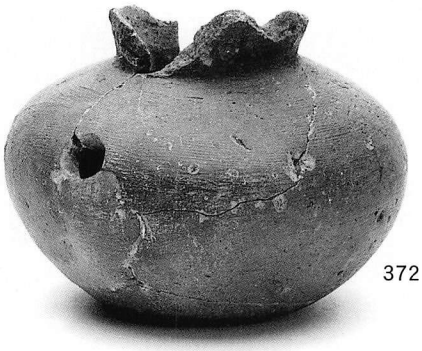

342

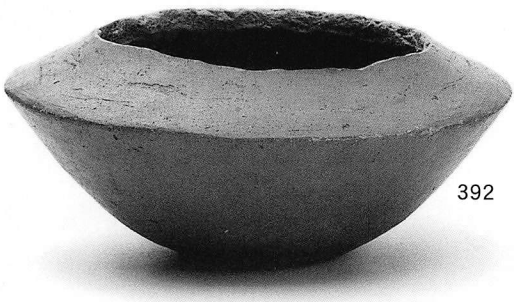
346

354

355

356


372


392

出土遺物7

376

401

402

403

404

出土遺物 8

図版30

407

475

477

488

493

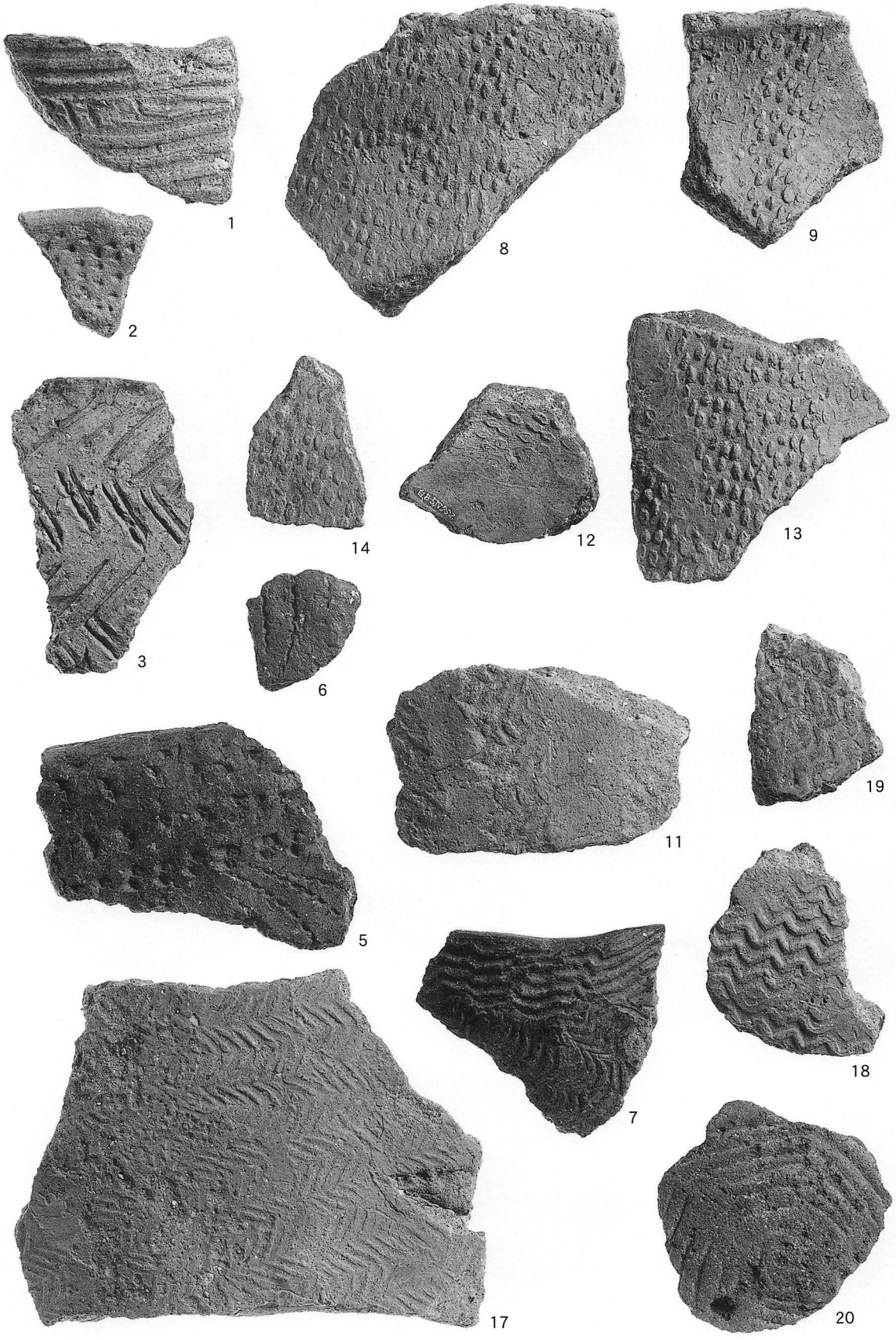
497

503

504

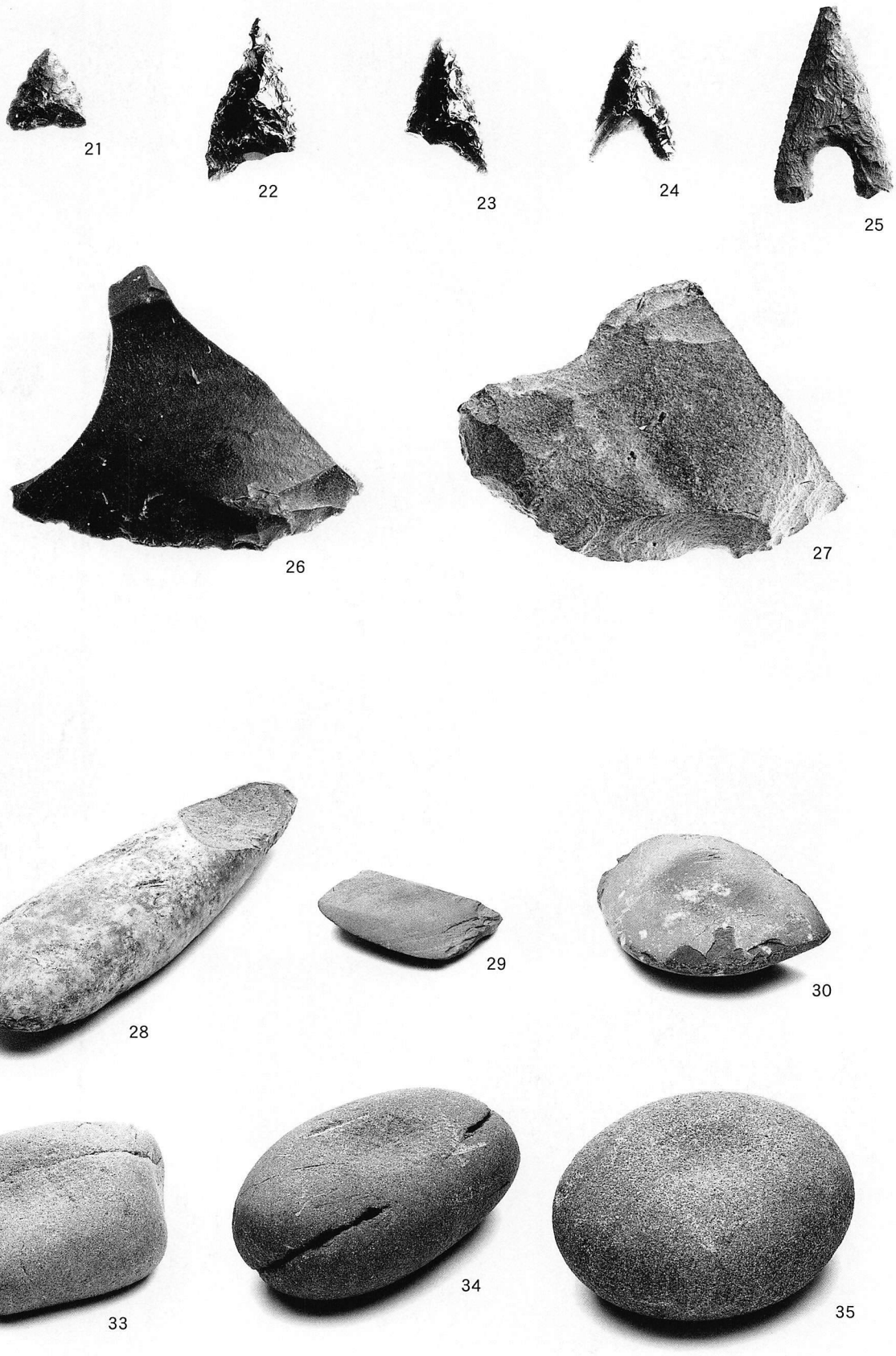
548

出土遺物9

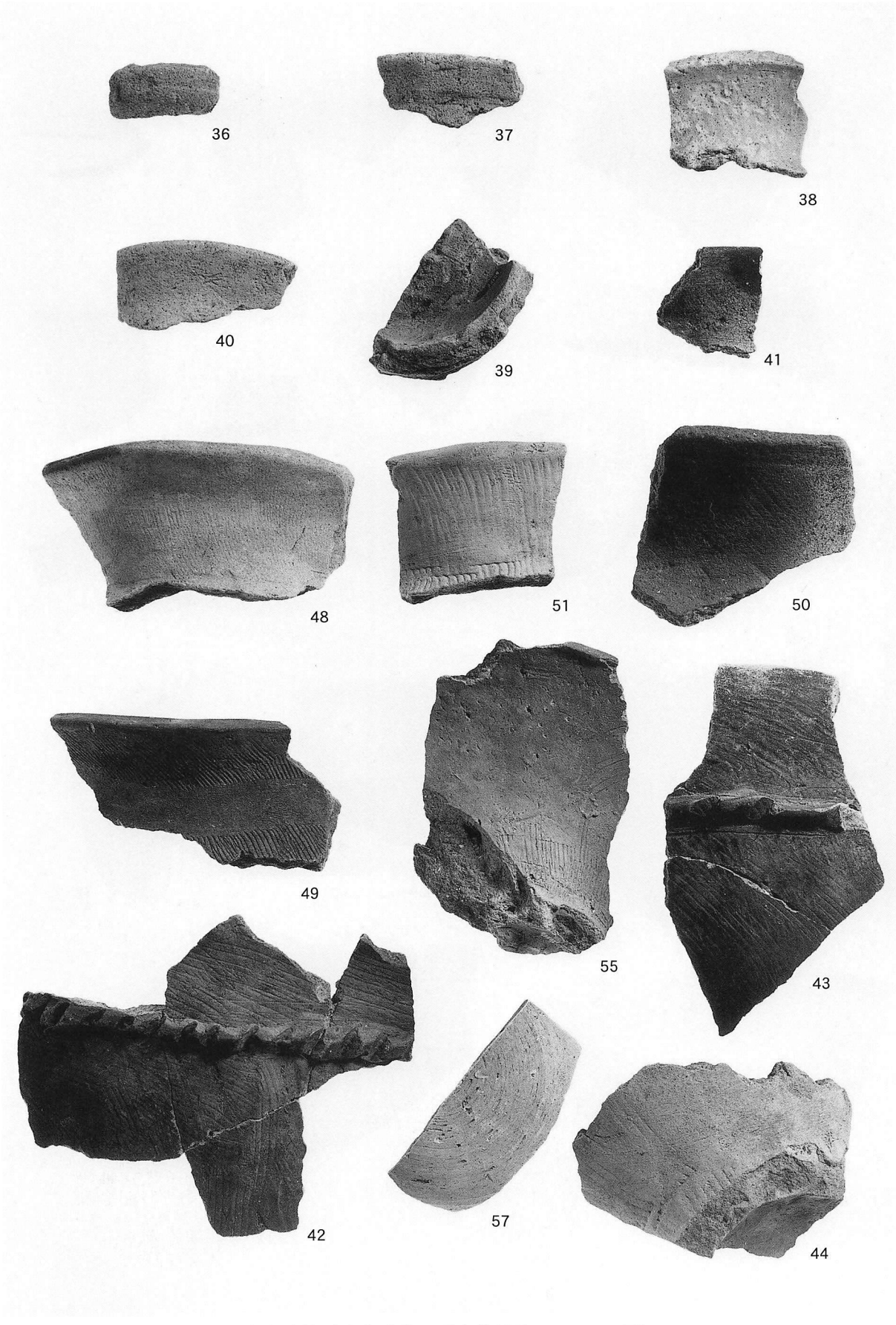


出土遺物（縄文時代１）

図版32

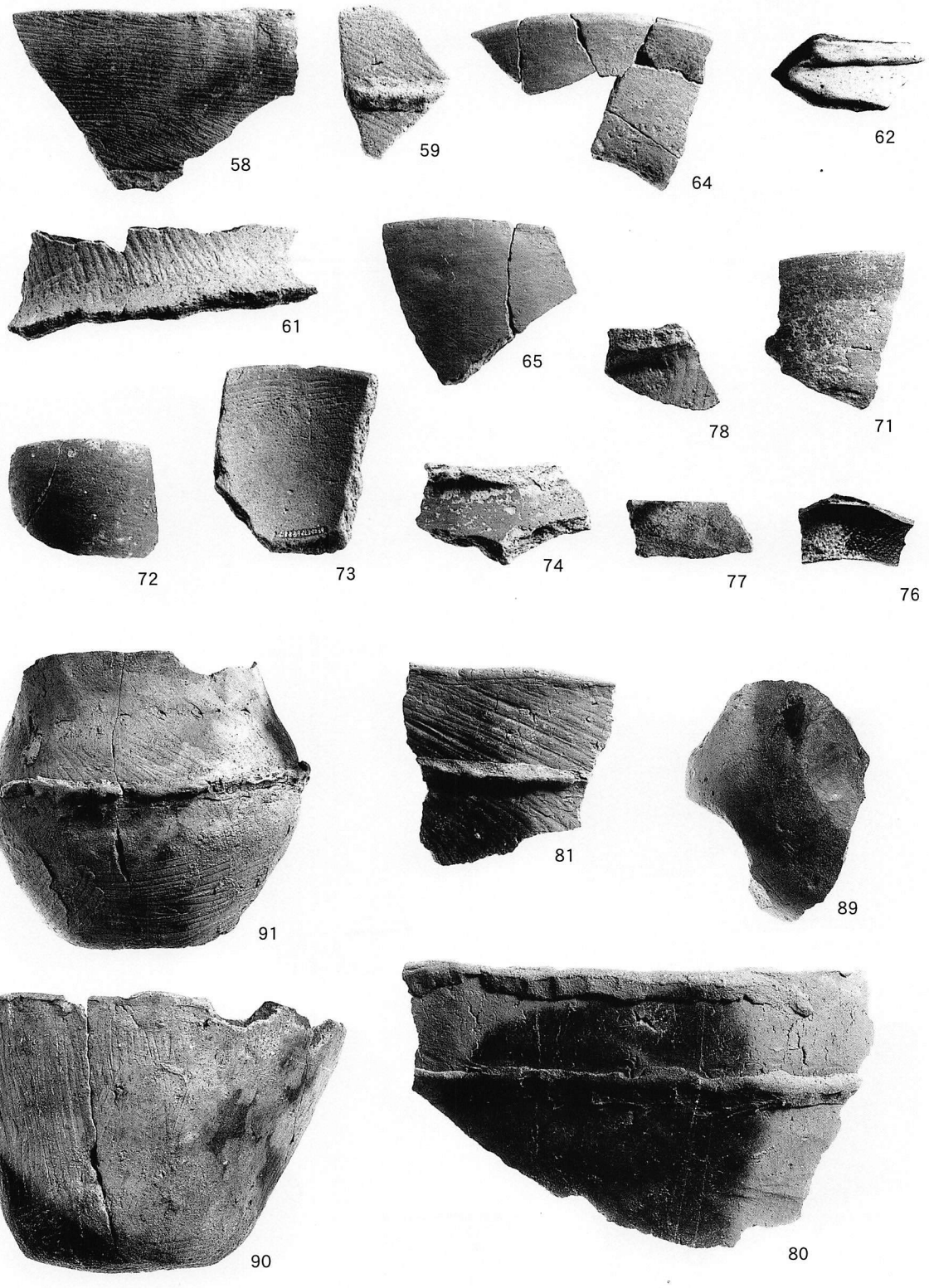


出土遺物（縄文時代２）

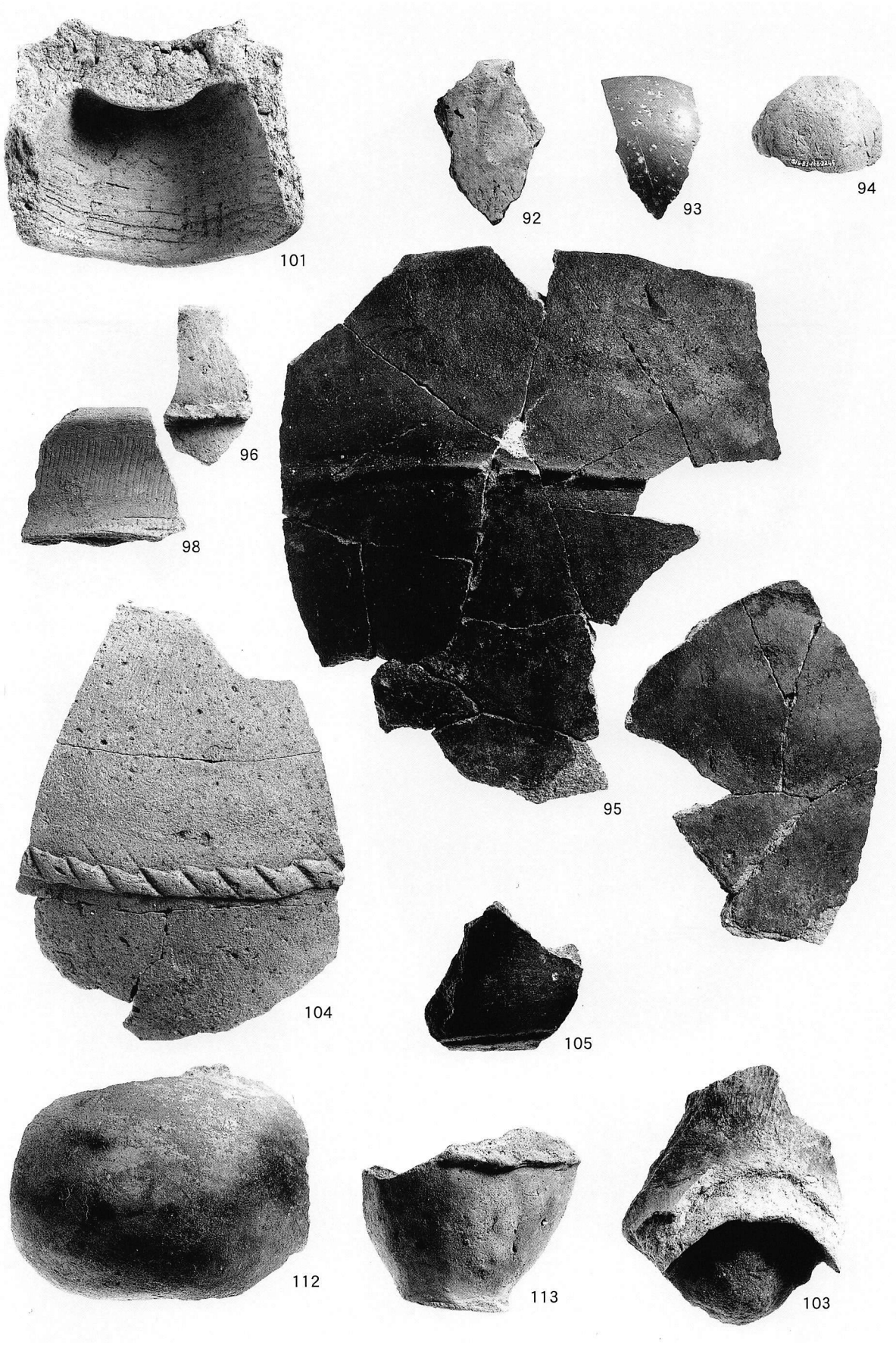


出土遺物（弥生時代，竪穴住居跡１・２・３号）

図版34



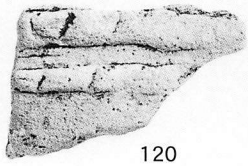
出土遺物（竪穴住居跡３・４・５号）



出土遺物（竪穴住居跡６・７・８号）

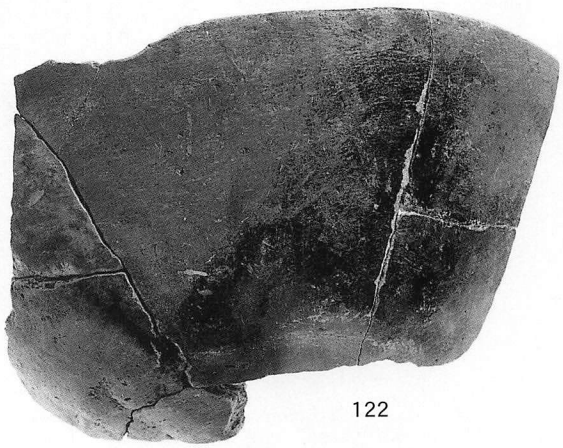
図版36

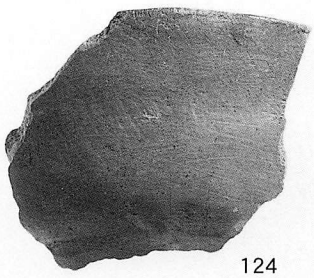
115


120

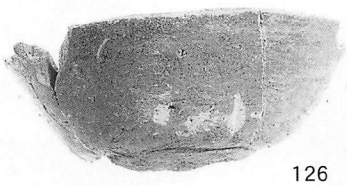
116

117

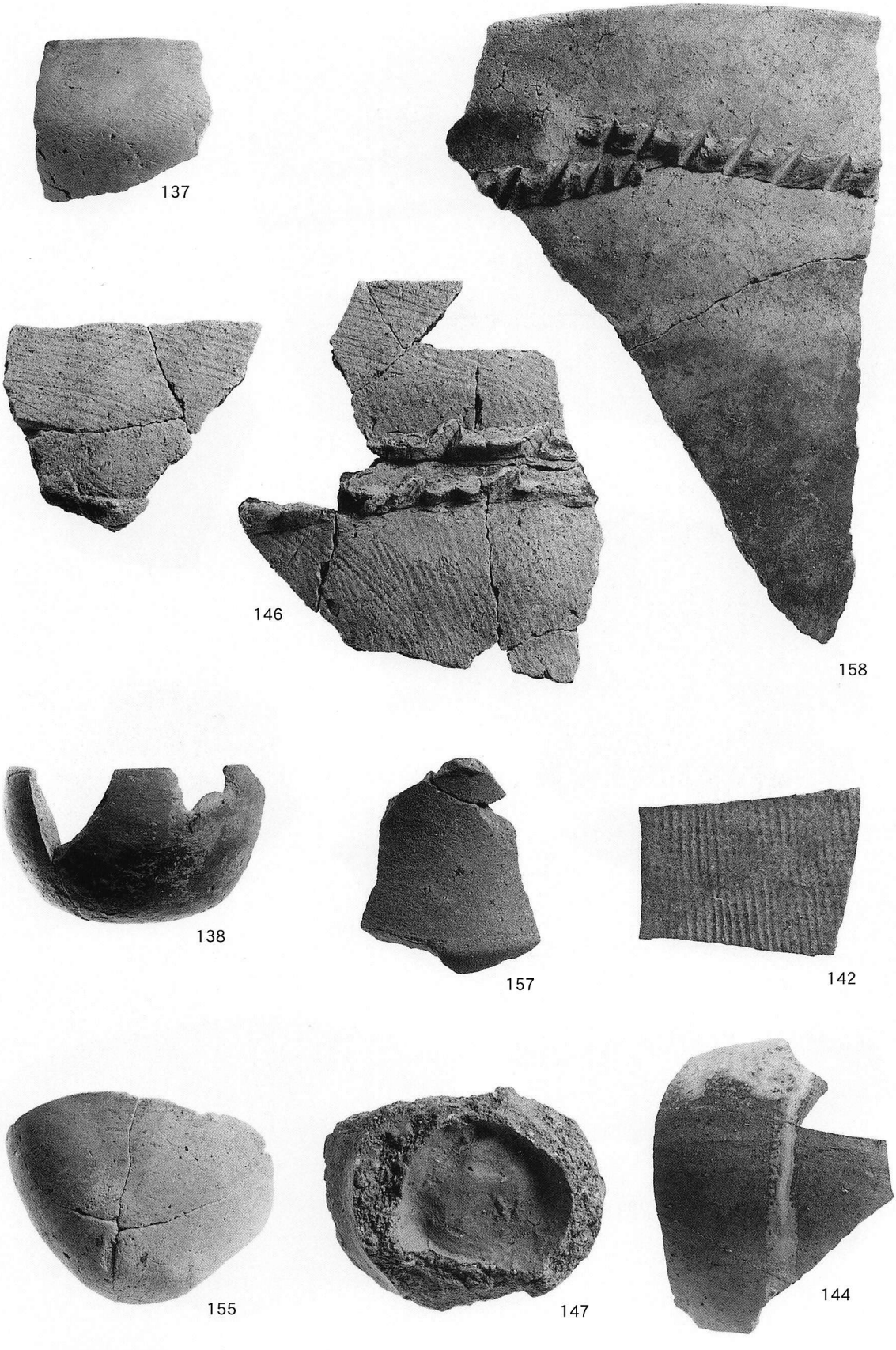

122


124

118

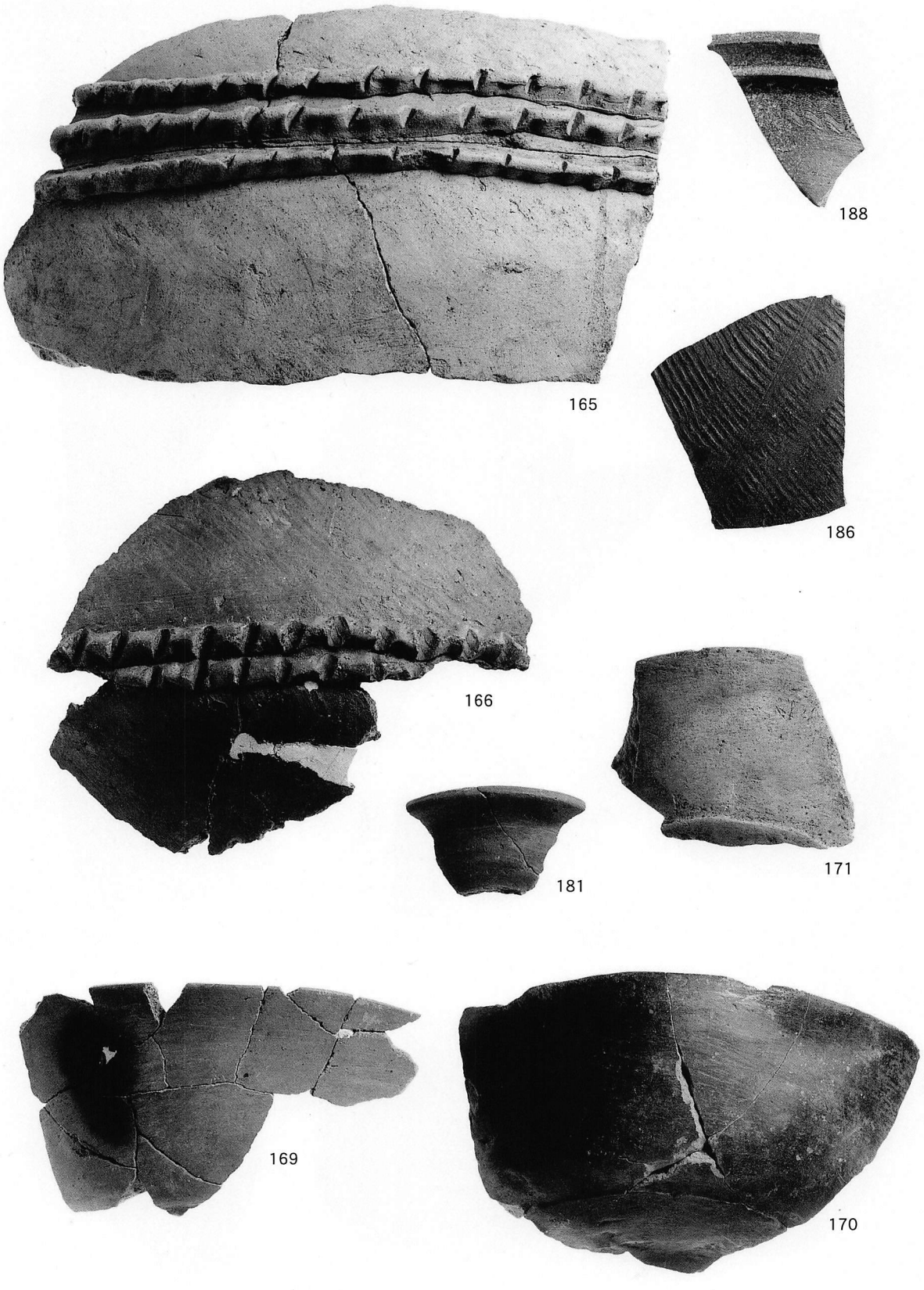

126

出土遺物（竪穴住居跡９号）

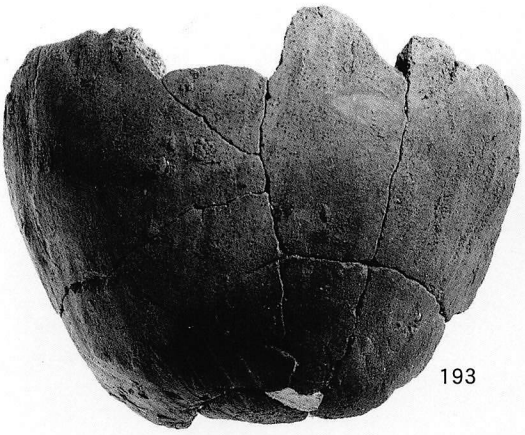


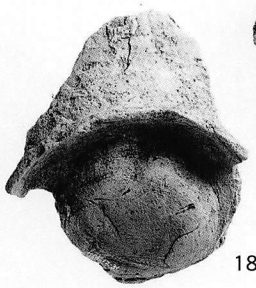
出土遺物（竪穴住居跡９・10・11号）

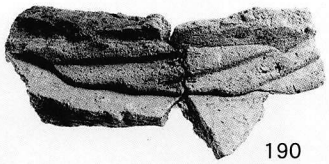
図版38



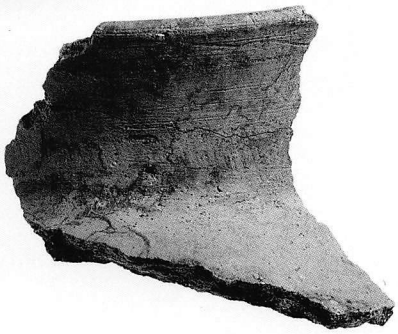
出土遺物（竪穴住居跡11号）


193


189

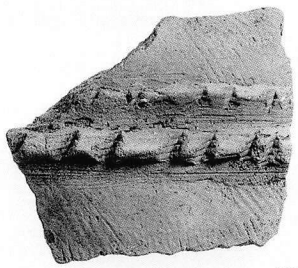

190

194

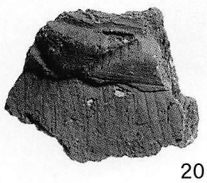

196

195

197

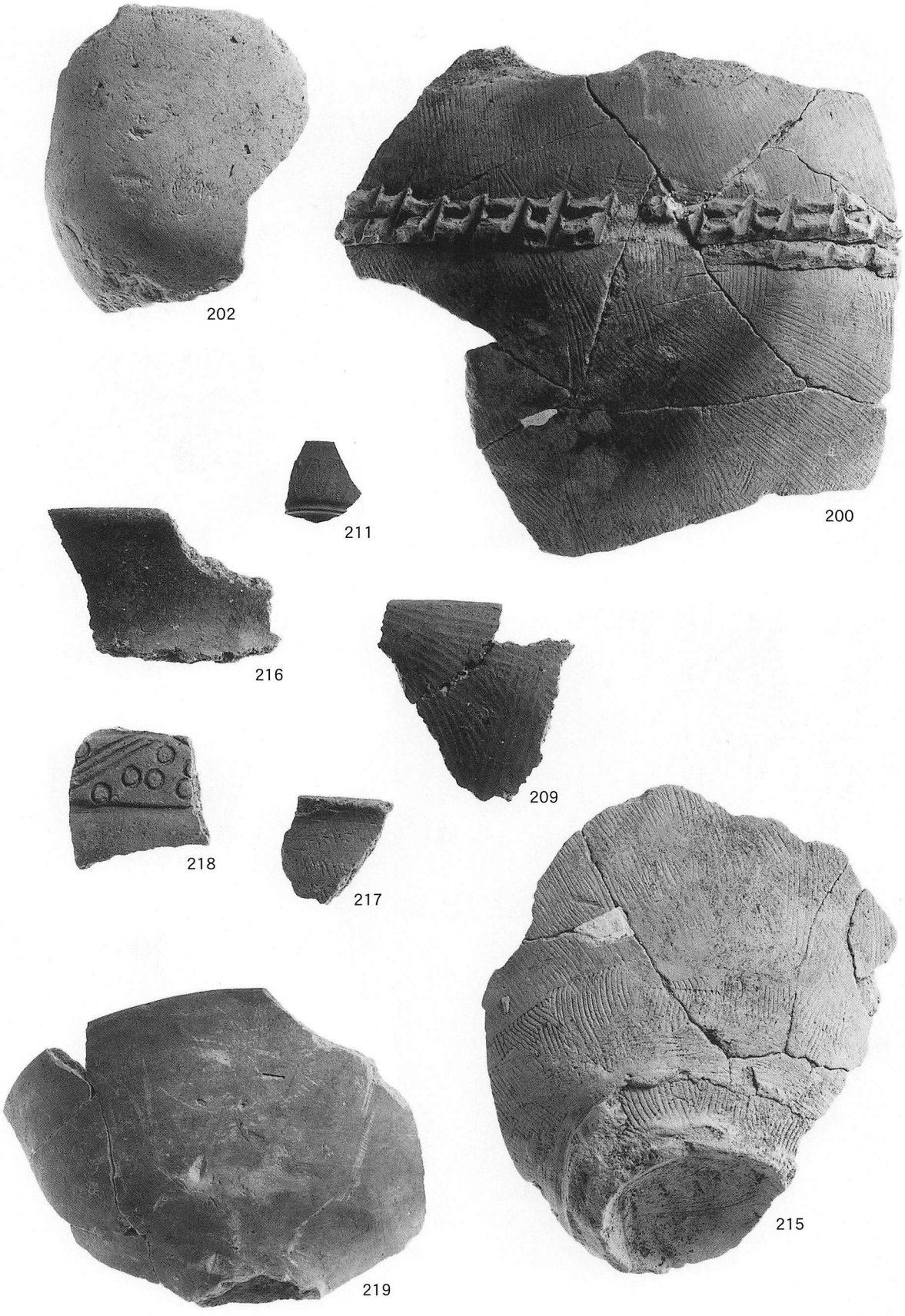

199

198

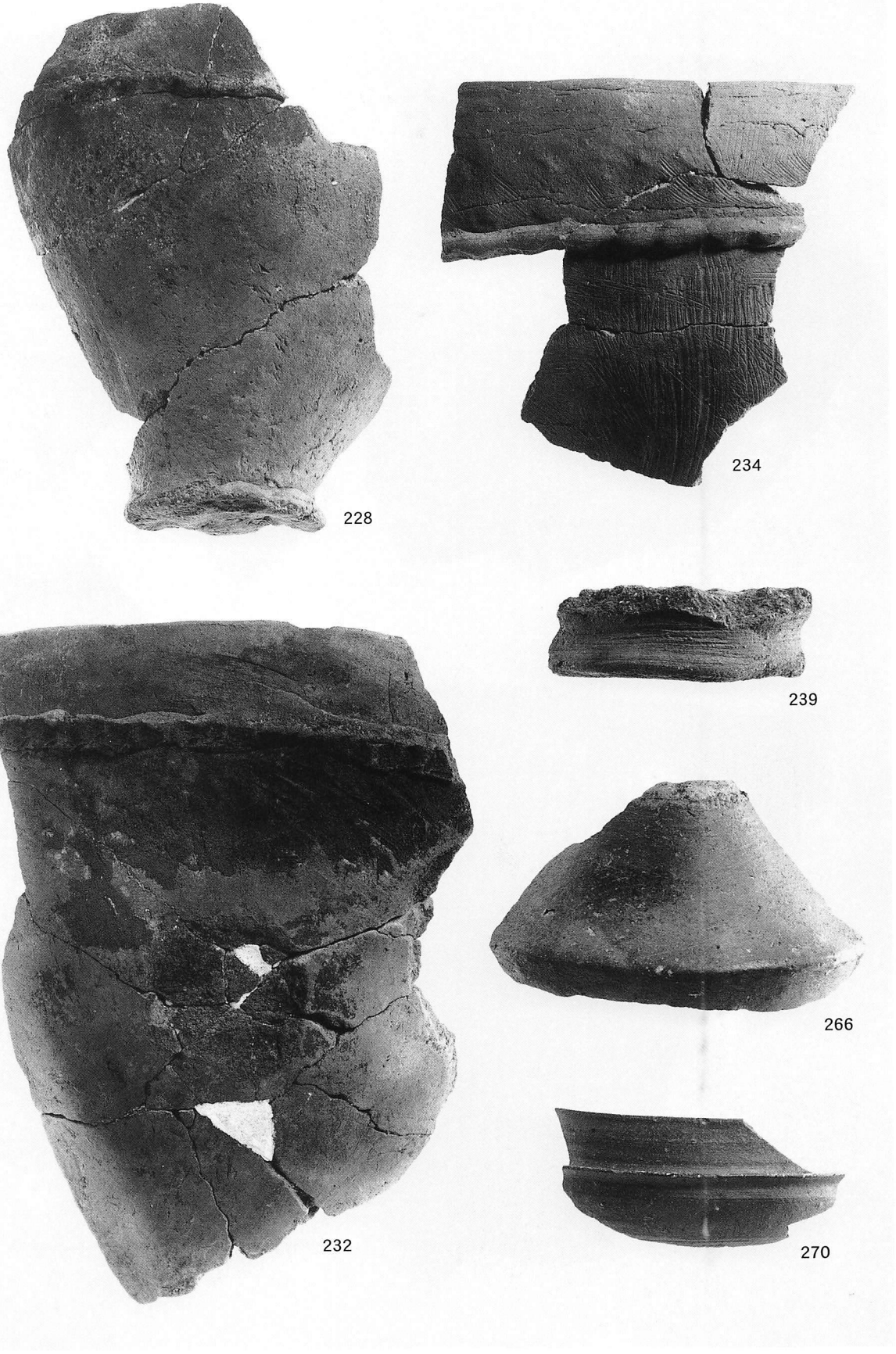

201

出土遺物（竪穴住居跡12・13・14号）

図版40

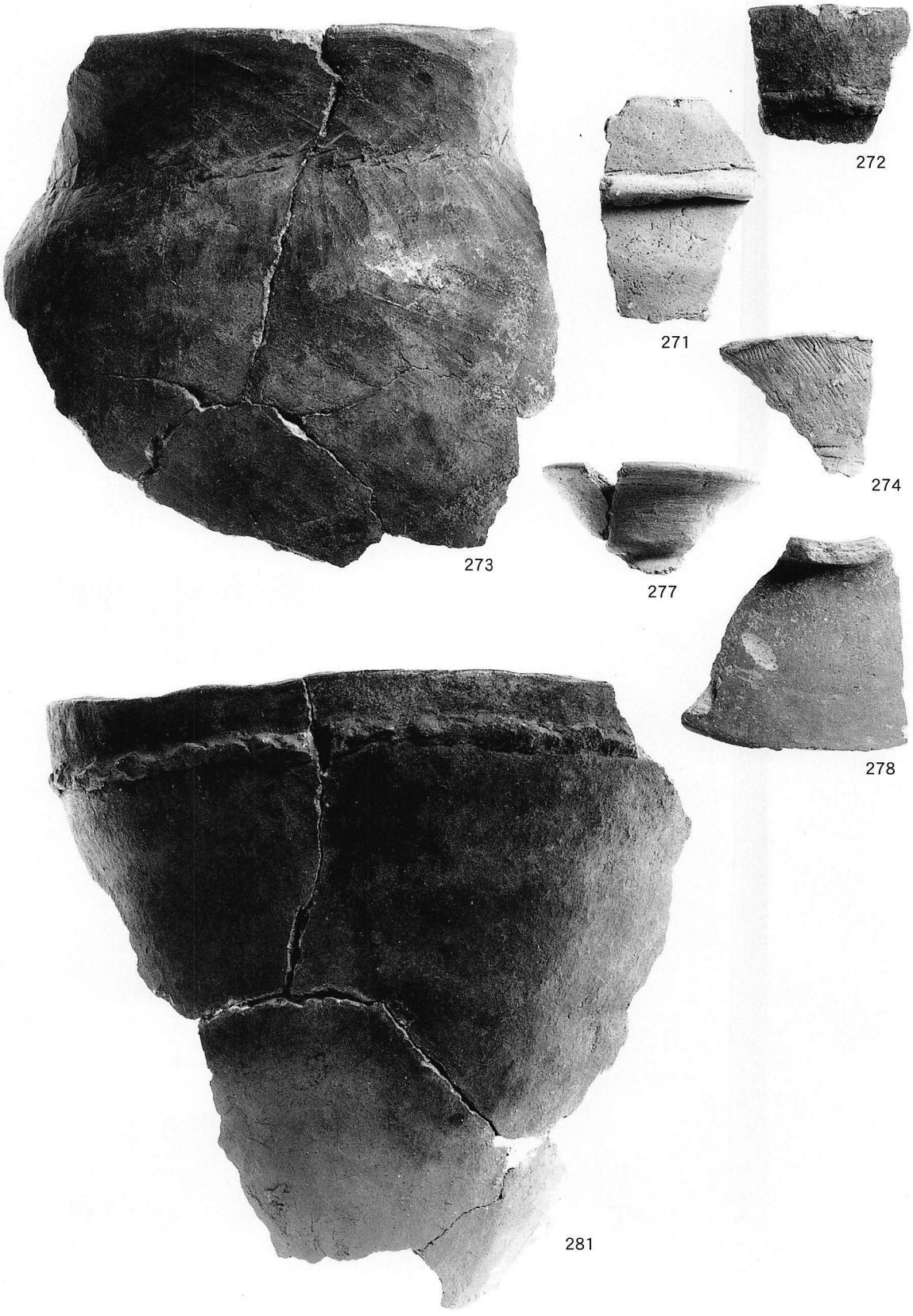


出土遺物（竪穴住居跡14・15号）

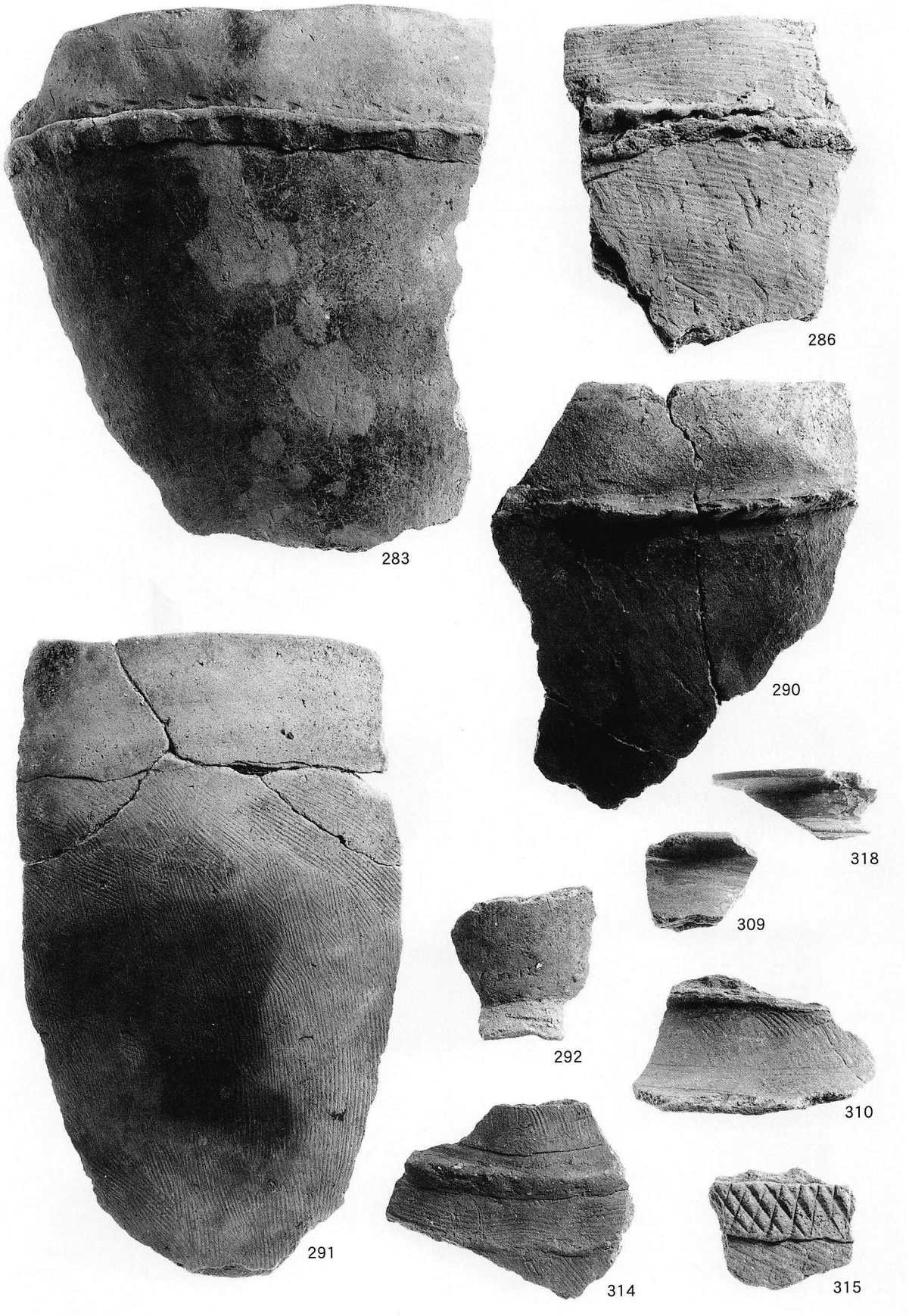


出土遺物（竪穴住居跡16号）

図版42



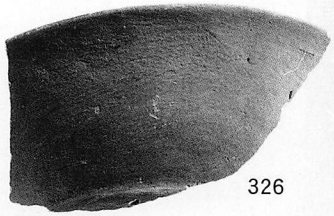
出土遺物（竪穴住居跡17・18号）

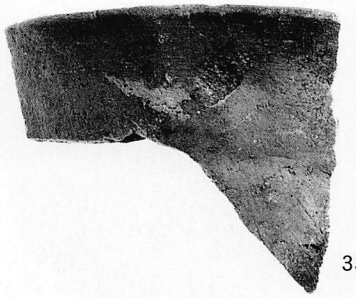


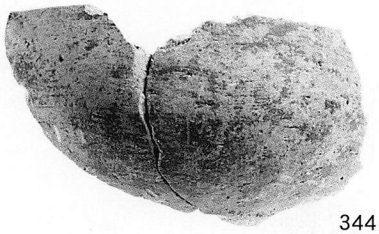
出土遺物（竪穴住居跡18号）

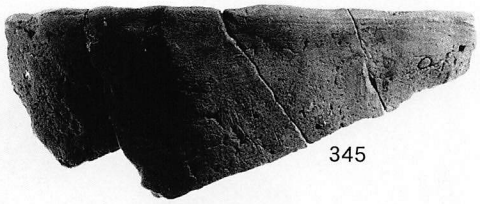
322

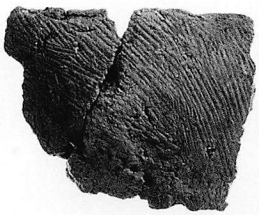
328


326

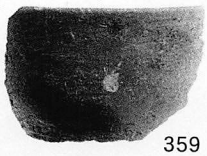

339


344


345


343

352


359

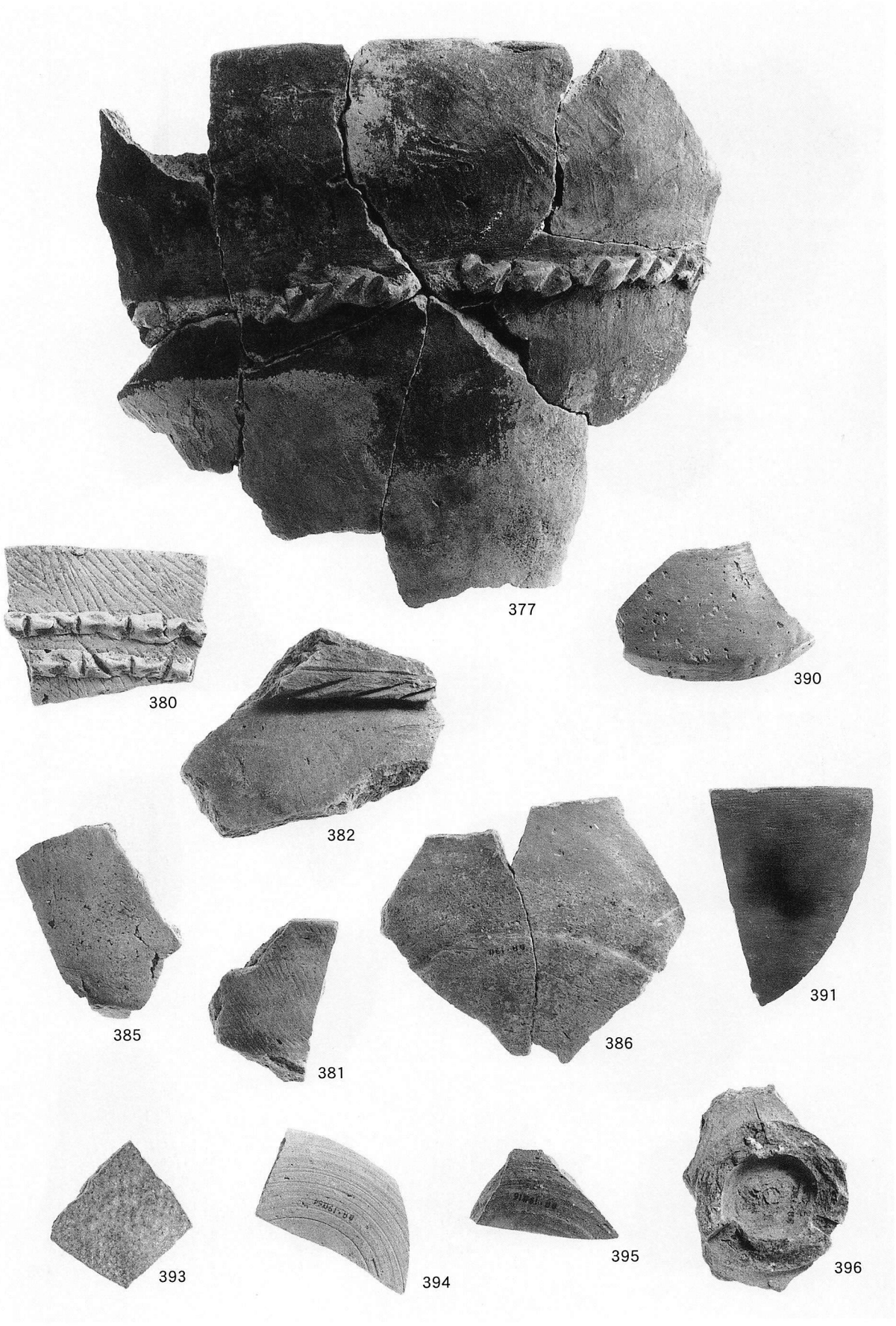
358

357

375

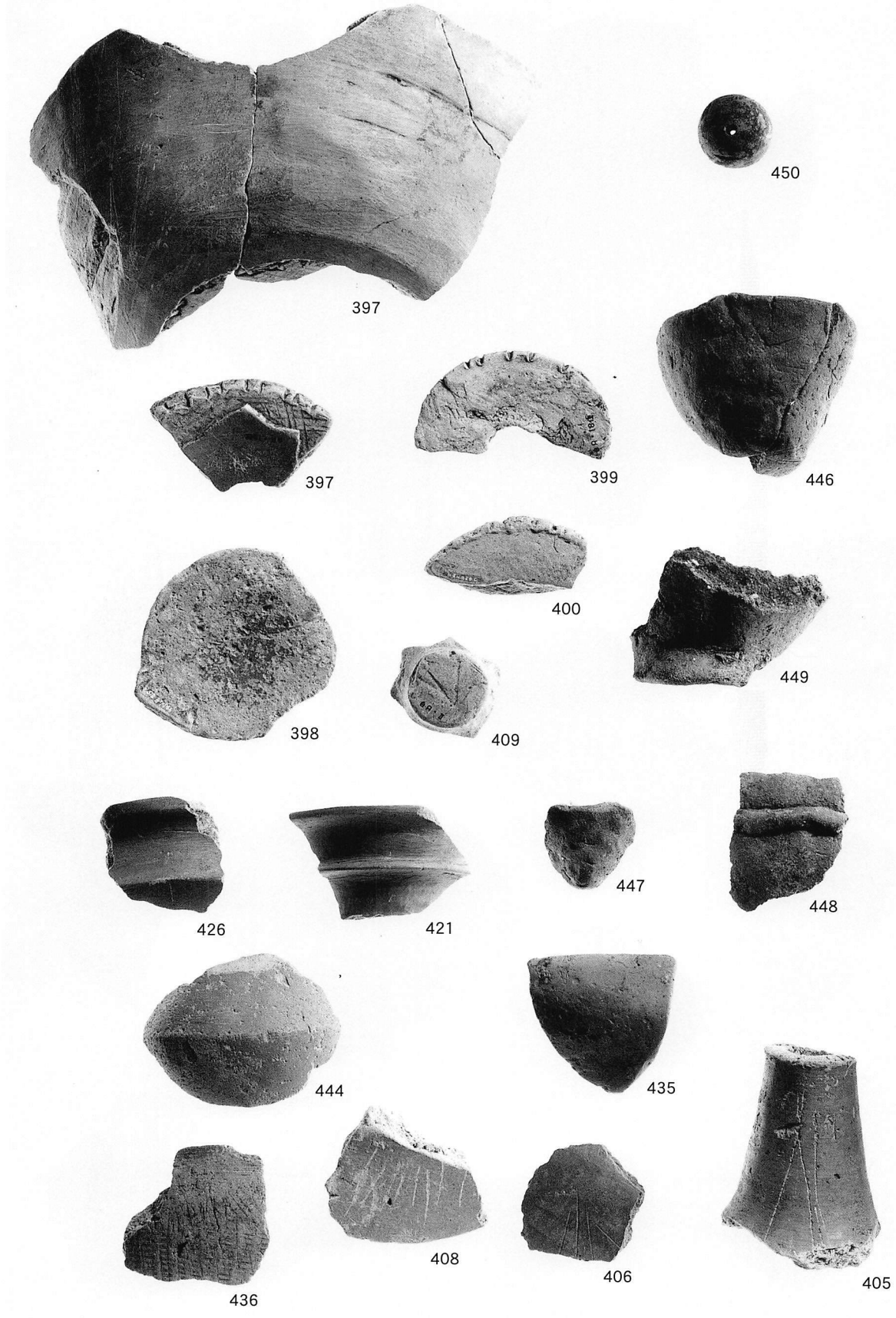
370

出土遺物（竪穴住居跡18号）

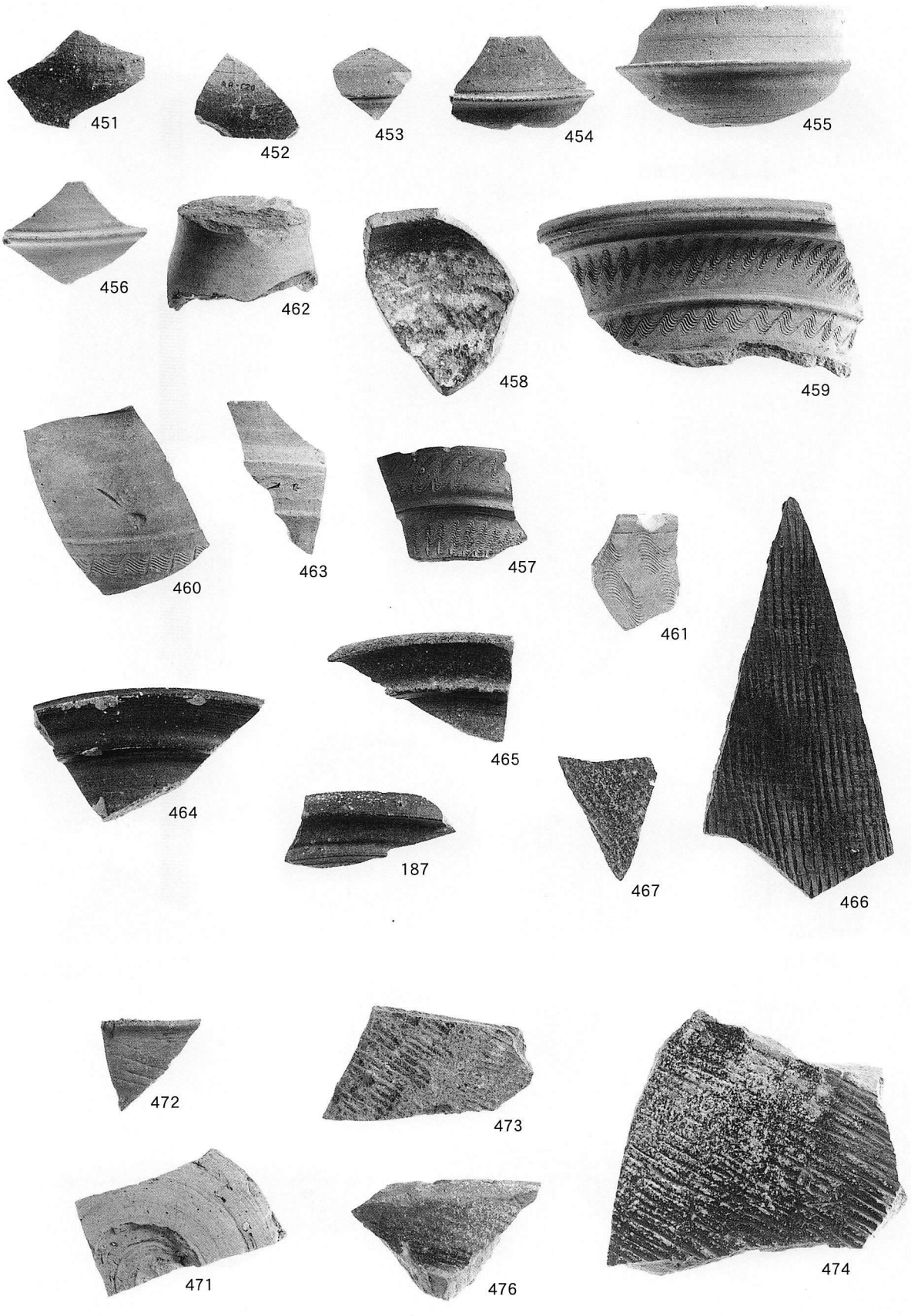


出土遺物（竪穴住居跡19号）

図版46



出土遺物（古墳時代）



出土遺物（須恵器，上：古墳時代，下：古代）

図版48

482
484
509
510
513
514
517
518
521
524
527
529
530
532
533
535
536
539
540
541
542

出土遺物（中世）

あ と が き

白糸原遺跡の報告書を作成するにあたっては，力量の不足を感じさせられた。しかしながら，遺跡から勉強させてもらったことに感謝したい。

夜光貝について玉稿をいただいた木下尚子先生には，貴重な時間を割いていただいき感謝しております。

そして，今回も執筆者の不勉強を正してくれた池畑耕一，中村耕治，宮田栄二，中村和美ほか諸先輩・同僚の方々に感謝したい。また，写場のスタッフには毎回感謝している。

最後に，整理作業をがんばってくれた中村ひろみ，辻田由美の両氏に感謝してあとがきとしたい。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（86）

白糸原遺跡

発行日　2005年3月25日

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）250－7033